淀藩士連中と芭蕉顕彰俳諧考

―畑吟風俳諧資料と京俳壇―

竹内千代子 編・著

淀藩士連中と芭蕉顕彰俳諧考

――畑吟風俳諧資料と京俳壇――

淀藩士連中と芭蕉顕彰俳諧考

――畑吟風俳諧資料と京俳壇――

目　次

はじめに　1

第一章　淀藩士連中の俳諧　3

第一節　淀藩士俳諧連中　3

第二節　淀藩士 畑 竹楼、吟風の俳諧　15

第三節　淀藩医 富原支雪の俳諧　21

第四節　淀藩士 田崎鳳水の俳諧　24

第五節　淀藩稲葉侯医員 竹岡雲峰の俳諧　25

第六節　淀藩士 堀 赤水の俳諧　26

第二章　淀藩士連中の俳諧興行　30

第一節　支雪点「六々行」歌仙一巻　30

―畑家蔵『俳諧伝書記聞』の位置―

第二節　「廻状」をめぐって　付、淀城周辺図　38

第三節　文政 八年 霜月俳諧之連歌　46

第四節　文政 一一年 竹楼追善俳諧之連歌　48

第五節　文政 一二年 於島崎御茶屋俳諧之連歌　53

第六節　安政 五年 芭蕉忌俳諧之連歌　55

付表Ⅰ　淀藩士連中の俳諧　58

第三章　淀藩士連中と京俳壇
—吟風俳諧交友録をめぐって—　59
第一節　寛政八年 吐鳳編『除元集』　61
第二節　俳仙堂 —西村定雅、北村朝陽—　64
第三節　芭蕉堂 —成田蒼虬、朝陽—　68
第四節　北村杜鷲　70
第五節　荒木万籟　71
資料一　京俳壇と一枚摺二種　74
資料二　吟風俳諧交友録 影印　76
資料三　吟風俳諧交友録 俳号索引　84
資料四　吟風俳諧交友録 地域別俳人一覧　90
資料五　吟風俳諧交友録 地域別俳人数一覧　96
付表Ⅱ　淀藩士連中と京俳壇　97
付表Ⅲ　吟風俳諧交友録と京俳壇　98
第四章　淀藩士連中と芭蕉顕彰俳諧　99
第一節　淀藩士連中の芭蕉顕彰　100
—芭蕉像の遷座—
第二節　蓑虫庵吟風と芭蕉顕彰俳諧　102
—田川鳳朗との対面—
付録　改訂 畑忠良家俳諧資料 分類目録　108
おわりに　133
図版出典一覧　134
付記

はじめに

近世後期の淀藩は、享保八（一七二三）年に稲葉正知が入封、明治四（一八七一）年退任の稲葉正邦まで、稲葉家の統治である。譜代大名、石高（表高）一〇二〇〇〇石。その中で七代の藩主正誼（まさよし）の頃、淀藩士の間では俳諧が盛んであった。その様相の一端については、畑忠良家俳諧資料（以下、畑家俳諧資料）から知られる。畑家俳諧資料には、俳諧に親しんだ畑竹楼、吟風親子の俳諧資料等があり、主として寛政期から安政期までのものを有する。特に、吟風（天明七年生、安政六年卒）を中心とした淀藩士、他国藩士、市井の俳諧師などから受け取った書簡類約三五〇点、連句、発句等を書き付けた一枚物約四〇〇点が俳諧資料の主なものである。俳諧冊子は版本、写本を含めて数十冊程度、俳諧短冊が約七〇枚ある。なお、吟風の嫡子忠篤の親しんだ和歌、その他漢詩文、散文、絵画などが一〇〇点ある。因みに、これらの資料は長岡京市教育委員会生涯学習課文化財係において、畑家文書を読む会編「畑家俳諧文書目録」（以下、畑家俳諧目録）と写真撮影資料とが閲覧できる。整理番号順目録と分類目録とがある。本冊では、付録に改訂版の分類目録を収録している。本冊中に引用する（　）付番号は、畑家俳諧目録の整理番号である。

また、畑家俳諧目録には、吟風の俳諧交友録を翻刻し、俳号索引、地域別俳人一覧を付しているが、本冊の第三章では、次のごとく収録している。

資料二　影印
資料三　俳号索引
資料四　地域別俳人一覧
資料五　地域別俳人数一覧

俳諧交友録は以下のとおりである。

一　俳諧交友録「雪」　（1–72–1）
二　俳諧交友録「月」　（1–72–2）
三　俳諧交友録「焦夢」他　（1–72–3）
四　俳諧交友録「舟柴」他　（1–72–4）
五　俳諧交友録「近在発句師」　（1–72–5）
六　俳諧交友録「花屋庵」他　（1–39–6）

さて、本冊では、畑家俳諧資料を中心として、次のように考察する。

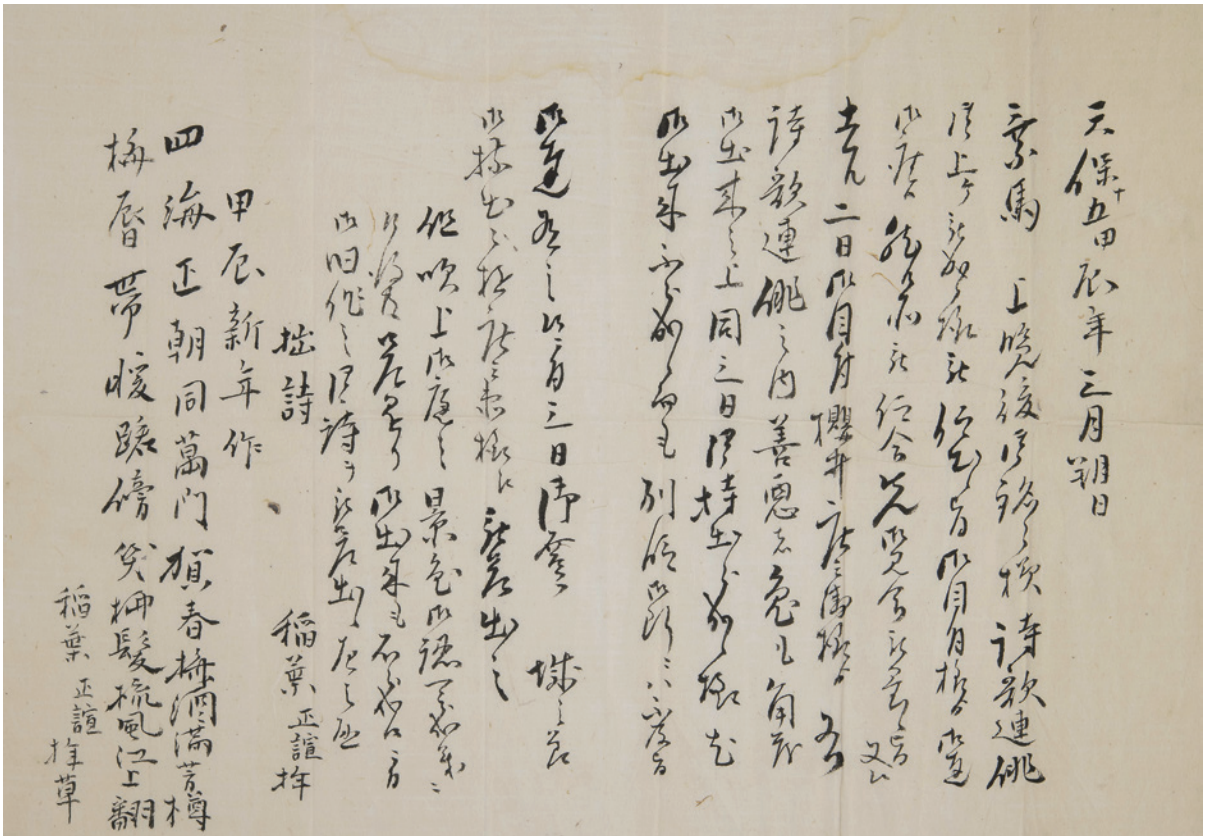
第一章　淀藩士俳諧連中の年譜事項など
第二章　淀藩士連中の俳諧活動の様相
　付表Ⅰ　淀藩士連中の俳諧
第三章　淀藩士連中と京俳壇との関わり
　付表Ⅱ　淀藩士連中と京俳壇
　付表Ⅲ　吟風俳諧交友録と京俳壇
第四章　淀藩士連中と芭蕉顕彰俳諧の様相

淀藩士連中は、松尾芭蕉を敬慕していた。近世後期の俳諧の多くが「芭蕉」を軸にして展開しているが、やはり同様な状況が見られる。この俳諧の総称を私に芭蕉顕彰俳諧と称する。「芭蕉」とは、実在した芭蕉および、その存在から派生した芭蕉に関わる総てを含めて言う。

ところで、畑家俳諧資料に、藩主の稲葉正誼の通知（吟風の写し）が一通ある。藩内の文化的な環境を知る資料である。藩主は、傍線部「詩歌連俳之内、善悪は兎も角も御出来の上、同三日御持出被成候」と、実作を促し、文芸を好む様子が知られる。春の雅会に、それぞれの作を持ち寄って披露するというものである。正誼は漢詩を記しているが、俳諧に親しんだ様子は見られない。また、正誼は文政一〇（一八二七）年生まれ、天保一三（一八四二）年に養子となり家督を継ぐが、天保十五（弘化元）年の時は一八歳である。次に示しておく。

なお、本冊の翻刻にあたって、漢字は現在通行の字体に改め、濁点・句読点は適宜施し、おどり字、改行は原則として原文に従うが適宜行う場合がある。

○天保十五（弘化元）年三月朔日付稲葉正誼書簡写し（1―13―20）
縦二五・〇糎、横三四・五糎。



天保十五甲辰年三月朔日

乗馬　上覧後御銘々様詩歌連俳

御上ゲ被成候様被仰出候旨、御目付様より御達

御座候。然ル所、被仰合先御見合被置候旨有。

去ル二日御目付櫻井庄兵衛様より各

詩歌連俳の内、善悪は兎も角も

御出来の上、同三日御持出被成候様、尤

御出来不被成候ても別段御断には不及旨。

御達有之候に付、三日御登城の節

御揃出被遊、庄兵衛様江被差出候也。

但、吹上御庭の景色御認可被成義に

候得共、差懸り御出来も不被成候に付

御旧作の御詩ヲ被差出候。左の通。

拙詩　　稲葉正誼拝

甲辰新年作

四海正朝同万門　賀春揃酒満芳樽

梅昏帯暖踞傍笑　柳髪梳風江上翻

稲葉正誼拝草

第一章　淀藩士連中の俳諧

第一節　淀藩士俳諧連中

俳諧活動が認められる淀藩士を一覧する。併せて第二章 付表Ⅰ 淀藩士連中の俳諧参照。連中の活動は、富原支雪、畑竹楼、畑吟風の三氏をめぐって、寛政期から安政期迄を次の三期に大別できる。

第一期　支雪と竹楼の時代　―寛政期から文政前期―

第二期　支雪と吟風の時代　―文政後期から天保初期―

第三期　吟風の時代　―天保前期から安政期―

支雪は、点印を持つ淀城内の藩士連中の宗匠格である。寛政期から天保初期に俳諧活動が認められる。京俳壇との繋がりでは、西村定雅の俳仙堂との交際が特筆される。なお、点印を用いた高点付句は、淡々の流を汲み京俳壇で隆盛であったそれの影響と考えられる。第二章第一節「六々行」歌仙一巻に後述。

竹楼は、支雪とともに淀藩の俳諧を牽引する。文政一一年には亡くなるので、淀藩士の俳諧活動の初期のみに名が見える。

吟風は、支雪に従い俳諧活動をすすめ、支雪卒後は淀藩士連中を牽引する。文政期から安政期に俳諧活動が認められる。京俳壇との繋がりでは、定雅以降の俳仙堂北村朝陽ら、芭蕉堂の成田蒼虬、朝陽らとの交際が特筆される。第三章 付表Ⅱ 淀藩士連中と京俳壇参照。また、各地の藩士や、市井の俳諧師との交際も広い。第三章の資料二～四 吟風の俳諧交友録、付表Ⅲ 吟風俳諧交友録と京俳壇参照。これらを一覧すると、俳諧師の社会的地位が化政期、天保期以降に急上昇し、俳諧を通じた交際は、身分制度にとらわれず、時代の要請に従って、一気に広がった結果であると推察される。また、各地域の藩士との交流が多いのも特徴である。

まず、寛政期から安政期の間に俳諧に親しんだ淀藩士連中について、菩提寺ごとに調査結果を記す。主な菩提寺には、淀の高福寺、東運寺、妙教寺がある。なお、それらの墓碑には、俳号を記したものがあり、俳諧隆盛の一端を知ることができる。

一　**高福寺**（浄土宗）　現、京都市伏見区淀新町六八〇

○畑　竹楼墓　○畑　吟風墓

二　**東運寺**（曹洞宗）　現、京都市伏見区淀新町六一八の一

○富原支雪墓　○田崎鳳水墓　○竹岡雲峰墓　○池田和六家

○稲葉赫水家　○石山大之家　○岡　鑑水家　○上月源良家

○上月剛池家　○富原方水家　○堀　赤水家　○稲葉三千丸家

○間島軽舟（桂舟とも）家　○今村兎哉（兎斎とも）家

三　**妙教寺**（法華宗）　現、京都市伏見区納所北城堀四九　（淀君が居住したとされる淀城の跡である）

○井上其友家　○石川掬水家　○上田雪川家　○藤枝魚仏（魚物とも）家

○山口柳江家　○田村亀卜家　○南窓家

なお、妙教寺内に芭蕉句碑があるが、石が割れて「艸の庵　はせを」と、下の句のみが残る。「蓑虫の音を聞きに来よ草の庵」句であろう。吟風の庵号は蓑虫庵であるが、嫡子である忠篤は妙教寺からの養子であり、吟風が建立したものであろうか。城南地域に芭蕉句碑は少ないが、吟風は洛東芭蕉堂主に親しく交際する。また、田川鳳朗との対面を契機として「芭蕉」俳諧に傾倒する。詳細は第四章第二節に後述する。

以下に、俳諧に親しんだ淀藩士連中について記す。4以下は五十音順である。なお、淀藩士連中には、淀藩士だけではなく、藩士に関係の深い人々もいる。また、定雅の年刊句集については、田辺菜穂子著「定雅の刊年句集」（連歌俳諧研究・一〇二号）の分類に従い、詳細は第三章第二節に後述。

1　竹楼　畑氏。名、忠敬。法名、忠敬院聞誉竹楼謙信居士。宝暦五年六月三日生、文政一一年六月六日卒、七四歳。二〇〇石。「高島五番町住」。高福寺。本章第二節一に後述。

2　吟風　畑氏。名、忠保。通称、数馬。法名、忠保院孝誉吟風慶義居士。天明七年七月二六日生、安政六年一二月一三日卒、七三歳。二五〇石。「高島五番町住」。高福寺。本章第二節二に後述。

3　支雪　富原氏。号は鴻臺、琢雲。宝暦一〇年六月三〇日生、天保九年三月二七日卒、七九歳。藩医、二二〇石（墓碑）。富原家は、「魚之市四軒屋住」。東運寺。本章第三節に後述。

あ

4　以十

○文化八年推定定雅編『春懐紙』　・毎日の霞含むや鳥烏　以十
○文化一〇年『真葛草紙』　・連句一入集。
○文化一一年『真葛草紙』　・大和路や垣さへあれば菫草　以十
・他に連句一入集。
○文化一三年『真葛草紙』　・三月やかるき草履にくたびれし　ヨド藩中　以十
○天保四年春興（1–39–14）　・下木〳〵ねんごろに散る桜かな　以十
（第二章第二節参照）

5　一坡

○文化一一年『真葛草紙』　・山吹やいつまで笹の雫する　淀藩中　一坡
○天保四年蒼虬編『花供養』　・小座敷へどつと持て来る桜かな　一坡
○天保五年呉明編『芳信集』　・古いのですますのもある切籠哉　一坡
○天保四年春興（1–39–14）　・買ふて来た馬にも蹈す汐干哉　一坡
（以下、第二章第二節参照）
○淀藩中夏興（1–39–20）　・蝙蝠や鼻つき合す鬼瓦　一坡

6　逸江

○寛政頃定雅編『初懐紙』A　・ひや〳〵と梅に吹れて端居哉　逸江
○文化六年桜井梅室編『四時行』　・つか〳〵と戸口出れば朝しぐれ　逸江
○文化一〇年『真葛草紙』　・連句二入集。
○文化一一年『真葛草紙』　・降れかしのふりもみえけり春の雁　逸江
○俳仙堂月並摺物（2–26）　・世の中は何□まふとふゆごもり　ヨド逸江
（第三章第二節参照）

7　一笑

○天保四年春興（1–39–14）　・塩竈の煙りも青し春の海　淀藩中　一笑
（第二章第二節参照）

8　筠圃（いん）（浦）

○寛政頃定雅編『初懐紙』B　・三ケ月は梅にかすみて流れけり　筠圃
○寛政頃定雅編『初懐紙』C　・春雨の雲遠山のうがちけり　筠圃
○文化六年梅室編『四時行』　・しづかなる夜は忘れし薬喰　ヨド筠圃
○文化八年推定定雅編『春懐紙』　・春の夜や松をはなれて風の吹　筠圃
○文化一〇年『真葛草紙』　・大藪の中よりひとつ螢哉　淀藩中　筠圃
・他に連句二入集。
○文化一一年『真葛草紙』　・約束の伊勢も延して桜哉　筠圃
・他に連句一入集。
○文化一三年『真葛草紙』　・水うみの水に酔けり花の人　ヨド藩中　筠圃

9　雲峰　竹岡氏。天明四年一一月一日生、天保一四年九月一八日卒、六〇歳。稲葉侯医員、三〇〇石。竹岡家は「口魚之市住」。東運寺。本章五節後述。

か

10　赫水　稲葉氏。藩主稲葉家の分家。東運寺。なお、藩主稲葉墓は、京都の妙心寺内麟祥院。

○天保四年春興（1-39-14）　・それ鞠に垣の山吹崩れけり　赫水

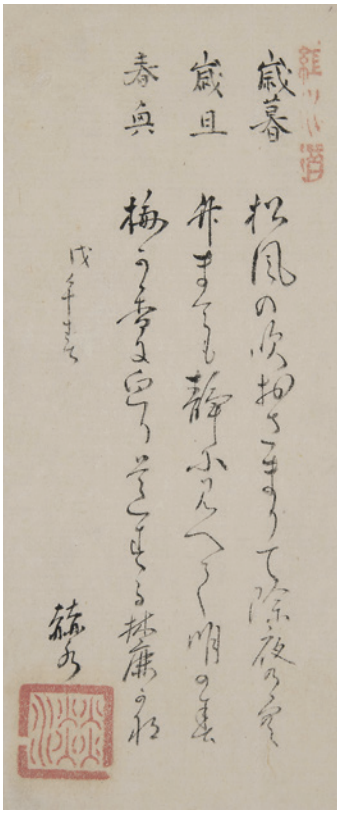
（第二章第二節参照）

○安政五年芭蕉忌俳諧之連歌一座（第二章第六節参照）

○戊午（安政五）春、赫水年始状（1-39-30）縦一七・〇糎、横七・〇糎。

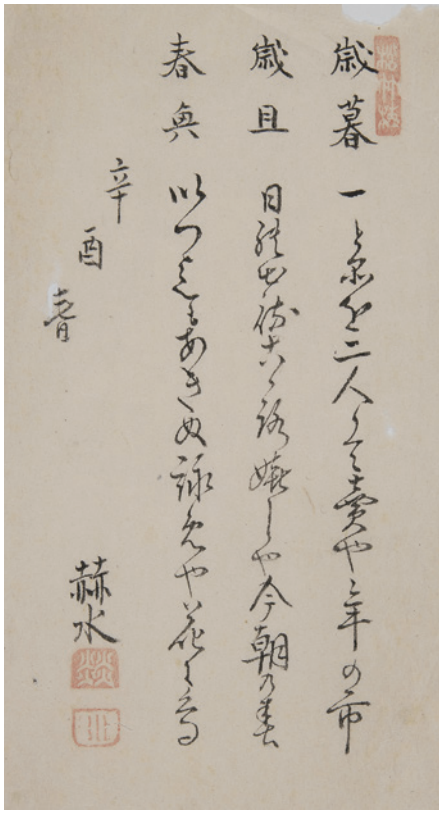
歳暮　松風の吹おさまりて除夜の空／　歳旦　竹までも静に見へて明の春

春興　梅が香に廻り道する麓かな／　戊午春　赫水 赫水



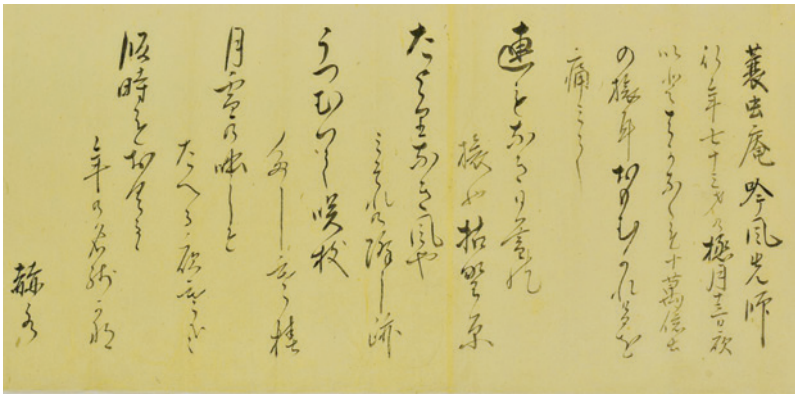
○辛酉（文久元）春、赫水年始状（1-39-31）縦一六・〇糎、横九・〇糎。

歳暮　一と品を二人りで売や年の市／　歳旦　日の出待こゝろ嬉しや今朝の春／　春興　いつ迄もあきぬ詠めや花に鳥／　辛酉春　赫水 赫 水



○安政六年一二月一三日以降、吟風追善赫水発句（1-39-2-6）

縦一六・七糎、横四〇・〇糎。



蓑虫庵吟風先師

行年七十三才の極月十三日夜

いとはかなくも十万億土

の旅におもむかれけるを

痛みて

連もなき日暮の旅や枯野原

たよりなき風やみぞれの降し跡

うつむいて咲枝多し寒椿

月雪の咄しもたへる夜寒哉

飯時をおくるゝ年の名残かな

赫水

11　荷風

○寛政頃定雅編『初懐紙』A　・夜は夜さへ春の姿ぞ水の月　荷風

○寛政頃定雅編『初懐紙』B　・鶯や枯木の露にぬれて啼　荷風

○寛政頃定雅編『初懐紙』C　・雨がふれば雨がふるとて春の人　荷風

○文化六年梅室編『四時行』　・へばりつくものが翠ぞ苔清水　ヨド荷風

○文化一〇年『真葛草紙』　・初秋や汐汲ひとりあちらむく　淀藩中荷風

・古郷がいくつも出来て今朝の雪　荷風　・他に連句一入集。

○文化一一年『真葛草紙』　・連句一入集。

○文化一三年『真葛草紙』　・花鳥の壁のやぶれをはるの月　ヨド藩中荷風

12　鑑水　岡氏。東運寺。

○松川龍椿画一枚摺（2-11-2）　・真夜中やふと出て朧月の梅　鑑水

○天保四年春興（1-39-14）　・道のりをきくや近江の春の月　鑑水

（以上、第二章第二節参照）

13　掬水　石川氏。九月一九日卒。参考、石川家の玄琳は、御医師、七人扶持、高島七番町住（文久三年分限録注1）。現在（令和三年）、妙教寺には、掬水の位牌が存し、石川家は絶縁。（妙教寺「洛南の鐘」第262号、松井遠妙稿）

(1)寛政頃定雅編『初懐紙』B　・春の雨心もぬるゝばかり也　掬水

(2)寛政頃定雅編『初懐紙』C　・摘荒す中に菫のひとつ哉　掬水

(3)文化六年梅室編『四時行』　・鶯を見て戻りけり衣がえ　ヨド掬水

(4)文化一〇年『真葛草紙』　・月と萩ある夜は静過にけり　掬水

(5)文化一一年『真葛草紙』　・春雨や松計能きものはなし　掬水

(6)文化一三年『真葛草紙』　・出替りて深草の夜のあわれ也　ヨド藩中掬水

(7)文政二年『真葛春懐紙』　・志賀のやま毎日ながら霞みけり　淀藩中掬水

(8)文政七年月々発句合（2-27）　・俎板になに置べしや秋のくれ　掬水

（(8)、(9)、(10)第二章第二節参照。(12)第三章 資料一参照。）

(9)天保四年春興（1-39-14）　・橋姫へ向へば吹や春の風　掬水

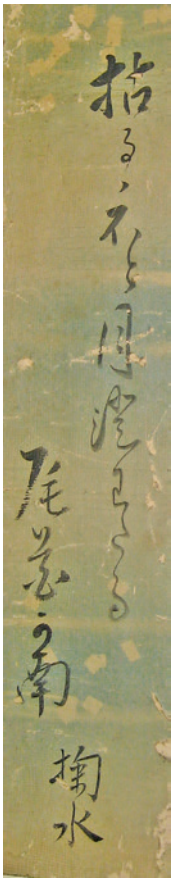
(10)淀藩中夏興（1-39-20）　・夏木立鵜の二番子も立にけり　掬水

(11)天保四年蒼虬編『花供養』　・菊桐の紋でふさげる桜哉　掬水

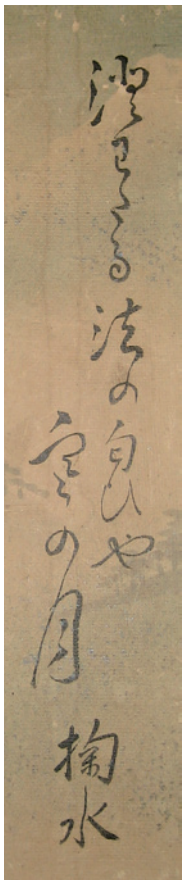
(12)横山清暉画一枚摺（2-12）　・おしわけた跡あり霜の芒原　掬水

(13)安政五年芭蕉忌俳諧之連歌一座　（第二章第六節参照）

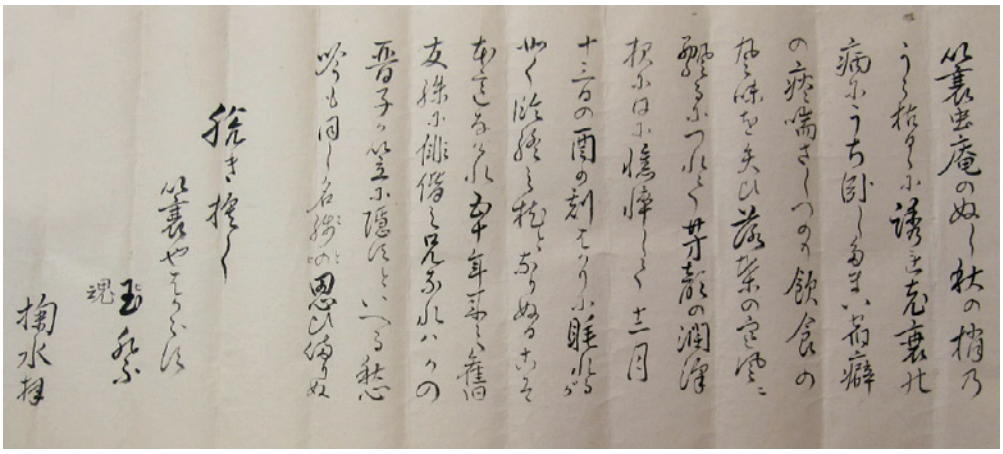
○短冊「枯るゝほど月澄わたる尾花かな　掬水」（畑家蔵貼り交ぜ屏風）。



○短冊「澄わたる法の匂ひや寒の月　掬水」（畑家蔵貼り交ぜ屏風）。



○安政六年一二月一三日以降、吟風追悼掬水弔文（1-39-2-7）



縦二四・五糎、横六一・〇糎。

蓑虫庵のぬし、秋の梢のうら枯るゝに誘れ、老衰の病にうち臥したまい、宿癖の痰喘さしつのり、飲食の風味を失ひ、落葉の寒風に飄るにつれて、芳顔の潤沢夜に日に憔悴して十二月十三日の酉の刻ばかりに睡れるが如く臨終の枕となりぬるこそ本意なけれ。五十年来の旧友、殊に俳諧の兄なればかの晋子が笠に隠すといへる愁吟も同じ名残の思ひ侍りぬ

脱ぎ捨し
蓑やはからず
玉祭（魂）

掬水拝

14　季水　田中氏。

○天保四年春興（1–39–14）　・村境隣さかいや梅の花　淀藩中　季水

○淀藩中夏興（1–39–20）　・川骨や舟くゞり抜〳〵　季水

（以上、第二章第二節参照）

15　亀卜　田村氏。妙教寺。

○天保四年春興（1–39–14）　・若草や馬のそばえる鈴鹿山　淀藩中　亀卜

（第二章第二節参照）

16　其友　井上氏。妙教寺。

○天保四年春興（1–39–14）　・霞む日や鼻の先なる用もなし　其友

○淀藩中夏興（1–39–20）　・あつがりの癖に忘るゝ扇かな　淀藩中　其友

○文政七年月々発句合（2–27）　・人程の小松も見へて秋のくれ　其友

○松川龍椿画一枚摺（2–11–2）　・山の井の錠さびついて梅の花　其友

（以上、第二章第二節参照）

○天保四年蒼虬編『花供養』　・今も降空に灯を増す桜哉　其友

○天保五年呉明編『芳信集』　・今すこし手先とゞかぬ清水哉　其友

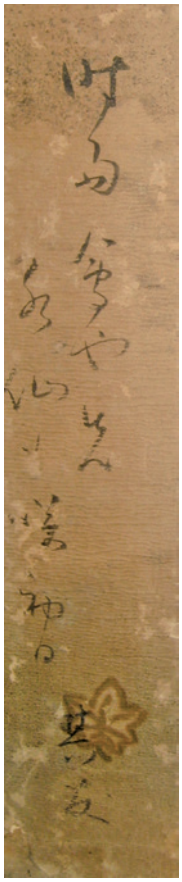
○俳仙堂月並摺物（2–26）　・茶の華にちいさき鳥のね音かな　ヨド　其友

（第三章第二節参照）

○横山清暉画一枚摺（2–12）　・苦葺けば舟へも来るやみそさゞい　其友

（第三章　資料一参照）

○短冊「時雨会や先水仙の咲初日　其友」（畑家蔵貼り交ぜ屏風）。



17　魚仏（物）　藤枝氏。妙教寺。

○天保四年春興（1–39–14）　・黒谷の小口を出れば啼雲雀　魚仏

○淀藩中夏興（1–39–20）　・鐘撞くや平気な顔で居る水鶏　魚物

（以上、第二章第二節参照）

○天保四年蒼虬編『花供養』　・粉炭まで焚仕舞たる弥生哉　魚物

○天保五年蒼虬編『花供養』　・海棠や其場で直に眠う成　ヨド　魚物

○天保五年呉明編『芳信集』　・花のとき何処でくらすぞ閑子鳥　魚物

18　琴浦

○寛政八年吐鳳編『除元集』二丁裏入集。（第三章第一節参照）

・新年　のんどりと海の面や明の春　琴浦

・歳末　横へ行抜道はなし年の蟹　仝

・早春離宮八幡に詣て　瑞籬や梅に手を打細男　仝

○支雪点「六々行」歌仙一巻入句。（第二章第一節参照）

19　軽舟　間島氏。別号、一弛斎、養璞（百梅集）。文化一〇年、定雅の春興に「淀藩中　桂舟」とあり、初号と推定。間島家は、御医師、一二〇石、高島六番町住（文久三年分限禄注1）。「御匕医」（慶応四年分限帳注2）。東運寺。

(1)寛政頃定雅編『初懐紙』B　・あれのある間を梅の盛かな　淀藩　軽舟

(2)寛政頃定雅編『初懐紙』C　・青柳の宵の侭なる雫かな　淀藩　桂舟

(3)文化八年推定定雅編『春懐紙』・薮かげや心覚のんめの花　桂舟

(4)文化一〇年『真葛草紙』　・一朝は水曇りして蓮の花　淀藩中　桂舟

・他に連句二入集。

(5)文化一一年『真葛草紙』　・一朝や風より先に春の水　桂舟

・他に連句一入集。

(6)文化一三年『真葛草紙』　・やまざとや薮入ひとり暮て行　ヨド藩中　桂舟

(7)文政二年『真葛春懐紙』　・牛馬の足本軽し春の風　淀藩中　軽舟

(8) 文政七年月々発句合（2—27）　・かり初に御輿のすわる花野哉　軽舟

（(8)(9)(10)(11) 第二章第二節参照）

(9) 天保四年春興（1—39—14）　・押合ふて若菜そゝぐやかゝり舟　軽舟

(10) 淀藩中夏興（1—39—20）　・突込んで松明しめす清水哉　軽舟

(11) 松川龍椿画一枚摺（2—11—2）　・梅の香に朝から酔て春の月　軽舟

(12) 天保四年蒼虬編『花供養』　・明行やみな日帰りの春の山　軽舟

(13) 天保五年呉明編『芳信集』　・突込て松明しめす清水哉　軽舟

(14) 横山清暉画一枚摺（2—12）　・笛買ふて絵紙巻こむしぐれかな　軽舟

（第三章 資料一参照）

(15) 天保一一年万籟編『逐々集』　・ゆづり葉の藍も赤らむ時雨哉　ヨド軽舟

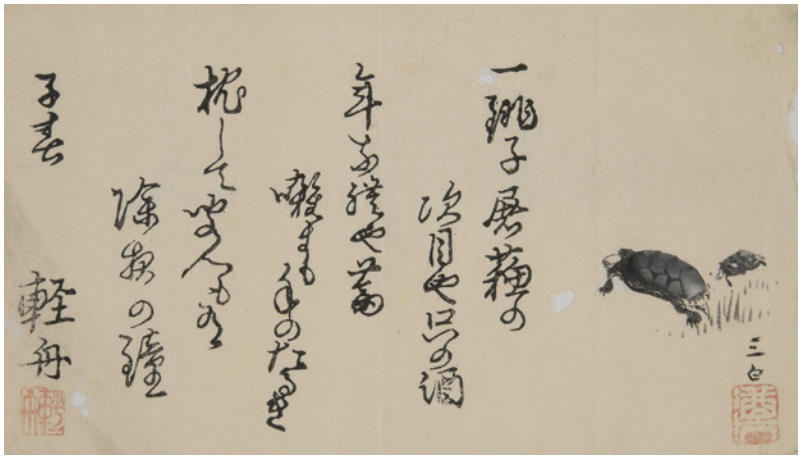
(16) 『百梅集』（天保一一年成立、同一二年閏一月奉納）

「城南淀藩医　間島養璞　正月がふたつひとつはうめのはな　一弛斎軽舟」

(17) 弘化元年九起編『花供養』　・みちがへる山の青みや五月晴　淀軽舟

(18) 弘化三年九起編『花供養』　・着汚すも早し袷の袖だゝみ　軽舟

○三白画軽舟「子春」年始摺物（2—17—22）縦九・五糎、横一八・〇糎。



一銚子屠蘇の
次目や只の酒

年なれや薺
囃すも手のだるき

枕して聞人も有
除夜の鐘

子春　軽舟 軽舟

20 源良　上月氏。東運寺。

○天保四年蒼虬編『花供養』　・ふところへしづ〳〵ふりこむ柳哉　源良

○淀藩中夏興（1—39—20）　・庵の灯の消て近寄る水鶏哉　源良

（第二章第二節参照）

21 鴻池（地）

○天保一一年万籟編『逐々集』　・灯の往来ばかりや除夜の門　ヨド鴻池

○横山清暉画一枚摺（2—12）　・風含むちからも増すや枯尾花　鴻地

（第三章 資料一参照）

○安政五年芭蕉忌俳諧之連歌一座　（第二章第六節参照）

22　剛池（地）　上月氏。東運寺。

○寛政頃定雅編『初懐紙』A　・鶯や巣のこぼれより二日月　剛地
○寛政頃定雅編『初懐紙』B　・魚はねて春又春と思ひけり　在東都剛池
○寛政頃定雅編『初懐紙』C　・水のある所へ出たり春の山　剛池
○文化六年梅室編『四時行』　・宵言をいふても見ばや河豚汁　ヨド剛池
○文政二年『真葛春懐紙』　・草餅に水ふみこぼす雀かな　淀藩中剛池
○松川龍椿画一枚摺（2–11–2）　・浦しまの釣所も見まく梅の花　剛池
（第二章第二節参照）
○天保四年春興（1–39–14）　・炭焼し山のこなたを帰る雁　剛池
（第二章第二節参照）
○横山清暉画一枚摺（2–12）　・空也忌や踊崩れも親子づれ　剛地
（第三章　資料一参照）

さ

23　芝園

○寛政頃定雅編『初懐紙』B　・よき雨を梅におしみて寝ぬ夜哉　女芝園
○寛政頃定雅編『初懐紙』C　・鳥でさへとまつて居ぬよ春の山　芝薗
○文化一〇年『真葛草紙』　・へら鷺のせゝり出しけり芦の角　ヨド藩中女芝園

24　巵言　別号、玄々居。

○寛政八年吐鳳編『除元集』七丁裏絵入入集。（第三章第一節参照）
復新　皇都に春を迎ふ
・御所に余る影いたゞかん初日の出
立春在臘　京師防火の役にまかるとて
・年の坂青柳の鞭試ん　玄々居巵言
○支雪点「六々行」歌仙一巻入集。（第二章第一節参照）

25　士常

○寛政頃定雅編『初懐紙』B　・青柳の夕ぐれ細う成にけり　士常
○寛政頃定雅編『初懐紙』C　・鳥かげも見えぬ真昼や山桜　士常
○文化六年梅室編『四時行』　・三日月のしづかに入し尾花かな　ヨド士常
○文政二年『真葛春懐紙』　・ゆく所の年〳〵ふくるさくらかな　淀藩中士常
○松川龍椿画一枚摺（2–11–2）　・世ごゝろはさらにわするゝ桜哉　士常
（第二章第二節参照）
○俳仙堂月並摺物（2–26）　・朔日もわすれてねたり冬籠　ヨド士常
（第三章第二節参照）

26　舎南

○寛政頃定雅編『初懐紙』A　・うか〳〵と戸口によりぬ梅の宿　舎南
○寛政頃定雅編『初懐紙』B　・鶯のつい来てかへる小庭かな　舎南
○寛政頃定雅編『初懐紙』C　・若竹に小船よするや春の人　舎南
○文化六年梅室編『四時行』　・三日月の窓からもどる燕かな　ヨド舎南
○文化八年推定定雅編『春懐紙』　・青柳やどちらを見ても亀の道　舎南
○文化一〇年『真葛草紙』　・連句一入集。

27　之由

○文化一〇年『真葛草紙』　・更てから声の定るちどり哉　ヨド藩中之由

28　春来

○天保四年蒼虬編『花供養』　・五六日犬もはなれぬさくらかな　春来
○淀藩中夏興（1–39–20）　・咲つゞき散つゞきけり芥子の花　淀藩中春来
（第二章第二節参照）

29　如遊（徐幽）

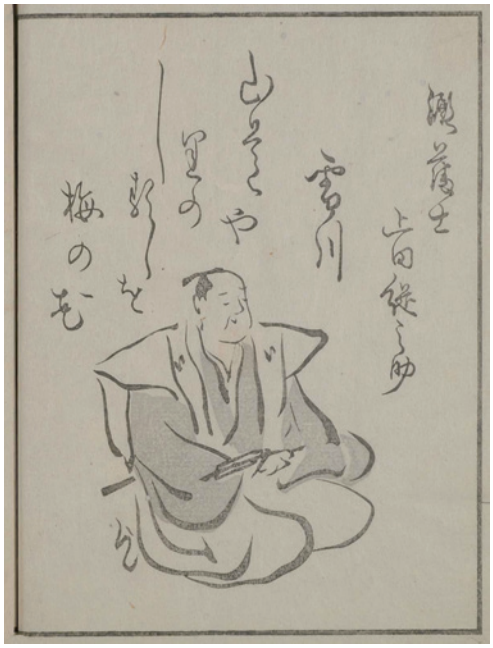
○寛政頃定雅編『初懐紙』C　・友だちの来ぬよになれば春の雨　如遊
○文化一〇年『真葛草紙』　・起臥やこゝろふたつに秋の風　ヨド藩中徐遊
・他に連句一入集。

○文化一一年『真葛草紙』　・おもしろや淋しき程に啼蛙　徐幽
・他に連句一入集。
○文化一三年『真葛草紙』　・雨ばれの姿やさしき柳かな　ヨド藩中徐幽

30　赤水　堀氏。玄珠か。天明七年生、安政四年に七一歳か。堀家は「富田町住」。東運寺。本章六節後述。

31　拙翁
○淀藩中夏興（1–39–20）　・戴す不細工なりの艾原哉　淀藩中拙翁
（第二章第二節参照）

32　雪川　上田氏。名、従之介（百梅集）。上田家は「口魚之市住」、二五〇石（文久三年分限録注1）。妙教寺。
○『百梅集』（天保一一年成立、同一二年閏一月奉納）
「澱藩士　上田従之介　雪川　山道や里のしるしを梅の花」



○天保四年蒼虬編『花供養』　・うち越る山のとぎれやうめの花　雪川
○天保五年呉明編『芳信集』　・翌の空見る出頃やほとゝぎす　雪川
○天保四年春興（1–39–14）　・汲さして姿直すや春の水　雪川
（第二章第二節参照）

○淀藩中夏興（1–39–20）　・小商ひするや峠の夏木立　雪川
（第二章第二節参照）
○横山清暉画一枚摺（2–12）　・雁啼やはれやか過て田の曇り　江戸雪川
（第三章資料一参照）

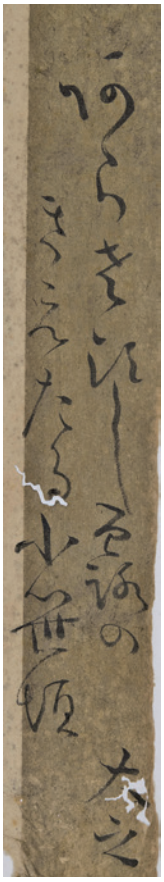
33　素琴　小長谷氏。
○天保四年蒼虬編『花供養』　・啼ひばり笹一枚にかくれけり　素琴
○天保五年呉明編『芳信集』　・かた炭のころりと消て春の空　素琴
○天保四年春興（1–39–14）　・鶯やけさよりふとる大井川　淀藩中素琴
（第二章第二節参照）
○淀藩中夏興（1–39–20）　・松の木のやにの流るゝ暑かな　素琴
（第二章第二節参照）
○横山清暉画一枚摺（2–12）　・こがらしや水花ちらすさくら谷　素琴
（第三章 資料一参照）
○天保一三年九起編『花供養』　・眼に一つかゝればふたつ鳴ひばり　素琴

た

34　碓乎
○寛政頃定雅編『初懐紙』A　・きぬ〴〵にうれしき梅の扉かな　女碓乎
○寛政頃定雅編『初懐紙』B　・梅の雪おきまどはせぬ匂ひかな　女碓乎
○文化八年推定定雅編『春懐紙』　・手枕やひと夜にあかぬ菫草　女碓乎
○文化一一年『真葛草紙』　・風薄し雀のたまる花の庭　碓乎
・他に連句一入集。
○文政二年『真葛春懐紙』　・けふもまた霞呼出す朝ざくら　淀藩中碓乎

35　大之　石山氏。参考、石山要中は、御医師、一六〇石、富田町住（文久三年分限録注1）。東運寺。

○短冊「あらさびし色ろ(ママ)のきえたる小笹垣　大之」（2-23-8-9）。



○文化八年推定定雅編『春懐紙』
・ものいへば知つた顔なり花の家　大之　・他に連句一入集。
○文化一〇年『真葛草紙』　・雛棚の上にもあるや花の風　大之
・昼顔の涼しがらるゝ深山哉　大之　・小一時男の介るきぬた哉　大之
・枯□に水鳥ところ〴〵かな　大之　・他に連句二入集。
○文化一一年『真葛草紙』　・鳩なくや降ぬ先から春の雨　大之
・他に連句一入集。
○文化一三年『真葛草紙』　・遣羽子の日南に似たりはつ桜　ヨド藩中大之
○文政二年『真葛春懐紙』　・三声づゝ啼かで雉子の静か也　淀藩中大之
○天保四年蒼虬編『花供養』　・花の主見てゐる隙はなかりけり　大之
○文政七年月々発句合（2-27）　・これらにも塵の名ありや桐一葉　大之
（以下、第二章第二節参照）
○松川龍椿画一枚摺（2-11-2）　・しころ曳く手にもつまるゝ菫哉　大之
○天保四年春興（1-39-14）　・恋猫や大僧正を出しぬいて　大之
○淀藩中夏興（1-39-20）　・脇ざしを脱で近寄る牡丹哉　大之

36　秩草

○天保四年蒼虬編『花供養』　・鹿聞に又行筈や花の山　淀秩草

37　兎哉（斎）　今村氏。

○文化一三年『真葛草紙』　・浅沢や月夜に並ぶ蛙の背　ヨド藩中兎哉
○天保四年蒼虬『花供養』　・鳥はみな晴きる声や春の山　兎斎
○淀藩中夏興（1-39-20）　・時鳥おさえた百足逃しけり　兎斎
（第二章第二節参照）
〔参考〕今村銓之介は、御馬廻り御目付、一五〇石、魚之市与力町住（文久三年分限禄注1）。東運寺。

38　鈍々

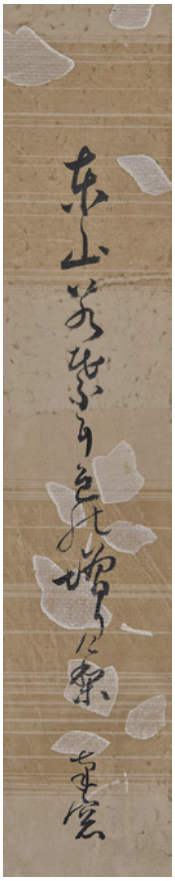
○天保四年春興（1-39-14）　・入相も中にありけり松の花　淀藩中鈍々
（第二章第二節参照）

な

39　南窓　現在（令和三年）、妙教寺には南窓の位牌が存し、南窓家は絶縁。

○寛政頃定雅編『初懐紙』A　・雪解にあゆむ女の風情かな　南窓
○寛政頃定雅編『初懐紙』B　・梅活て春の心のうごきけり　南窓
○寛政頃定雅編『初懐紙』C　・した道の草は沈みてはるの水　南窓
○文化六年梅室編『四時行』　・下道の草にあまるや春の水　ヨド南窓
○文化八年推定定雅編『春懐紙』　・連翹は手頃にのびて折られけり　南窓
○文化一〇年『真葛草紙』　・月の門させば水鶏のたゝきけり　南窓
○文化一一年『真葛草紙』　・花盛其日〳〵の人の声　南窓
・他に連句一入集。
○文化一三年『真葛草紙』　・うぐひすの鳴ぬ日もなく成にけり　ヨド藩中南窓
○短冊「一雫硯にすりて春の水　南窓」（2-23-8-17）

○短冊「東山若葉に色の増りけり 南窓」（2-23-8-18）



40 南溟　別号、一藁席。

○寛政八年吐鳳編『除元集』四丁裏絵入入集。（第三章第一節参照）

・新正　妻や子を客に大福先たてん　一藁席南溟

・臘日　元結の霜や解なんとし忘　仝

・柔風　陽炎や出茶屋に休むうるま人　仝

○支雪点「六々行」歌仙一巻入句。（第二章第一節参照）

は

41 梅洌

○天保四年春興（1-39-14）

・長閑さや直して見たき庭の松　淀藩中梅洌

（第二章第二節参照）

○淀藩中夏興（1-39-20）

・月の出るかたへ片寄る涼ミ哉　梅洌

（第二章第二節参照）

○安政五年芭蕉忌俳諧之連歌一座　（第二章第六節参照）

42 百川

○淀藩中夏興（1-39-20）

・宿り木の急に延けり五月雨　淀藩中百川

（第二章第二節参照）

43 諷々

○文化八年推定定雅編『春懐紙』

・柳かな草鞋の湿りかへる迄　諷々

○文化一一年『真葛草紙』

・行春の中にもおしき柳かな　諷々子（立句）

・水入の水にせわしき桜かな　諷々（立句）

○文政二年『真葛春懐紙』

・そは〳〵と柳の歩行く日和かな　淀藩中諷々

44 負米

○文化八年推定定雅編『春懐紙』

・菜の花の□の際まで咲にけり　負米

○文化一〇年『真葛草紙』

・朝ごとや露に咲かつ花木槿　ヨド藩中負米

○文化一一年『真葛草紙』

・おもしろの春のわかれや志賀の松　負米

・他に連句一入集。

○文化一三年『真葛草紙』

・おもしろの春のわかれや志賀の松　ヨド藩中負米

45 蓬室

○寛政頃定雅編『初懐紙』A

・山かげやもやと見るまで梅の花　蓬室

○寛政頃定雅編『初懐紙』B

・鶯に傘さしかけよ小雨ふる　蓬室

○文化六年梅室編『四時行』

・さびしさの庭を吹なり枯尾花　ヨド蓬室

○文化八年推定定雅編『春懐紙』

・松の風唯吹なきて春の月　蓬室

○文化一〇年『真葛草紙』

・ほと、ぎす啼やさくらの忘れ時　淀藩中蓬室

46 鳳水　田崎氏。天明三年一一月二六日生、弘化元年一二月一六日卒、六二歳。嫡子雄策は、二〇〇石、口魚之市住。東運寺。本章四節後述。

47 方水　富原氏。東運寺。

○天保四年春興（1-39-14）

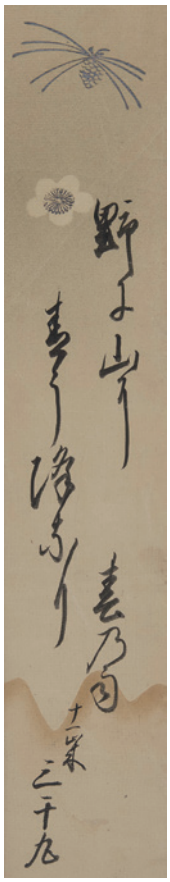
・温泉煙りの草木にからむ余寒哉　淀藩中方水

（第二章第二節参照）

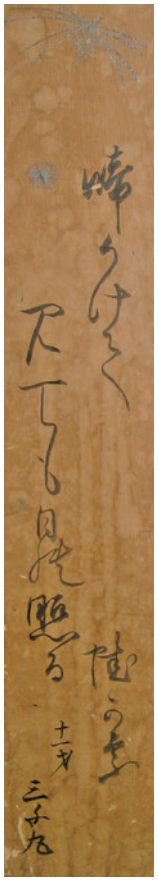
ま

48 三千丸　稲葉氏。藩主稲葉家の分家。東運寺。藩主菩提は妙心寺麟祥院。

○短冊「野に山に青う降なり春の雨　十一歳三千丸」（2-23-8-8）。



○短冊「啼かけて見ても日の照る蛙かな　十一才三千丸」（畑家蔵貼り交ぜ屏風）



○横山清暉画一枚摺（2-12）
（第三章 資料一参照）
○天保四年蒼虬編『花供養』
○天保五年呉明編『芳信集』
○天保四年春興（1-39-14）
（以下、第二章第二節参照）
○淀藩中夏興（1-39-20）
○松川龍椿画一枚摺（2-11-2）

・山ふたつ見えてうしろは時雨けり　三千丸
・竹の根もゆるぎそうなり雉子の声　三千丸
・水かえて声ばかり上つところてん　三千丸
・菜の花にすくんで居るや閻魔堂　三千丸
・夕立や横に漕出す渡し舟　三千丸
・鶴一羽見付出したる霞かな　三千丸

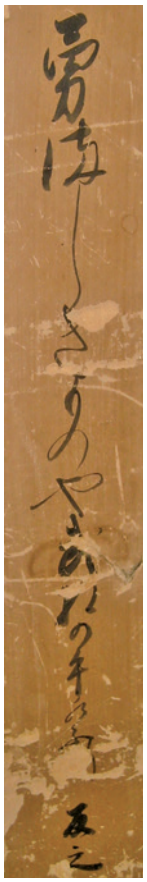
や

49 友之　林氏。

○天保四年蒼虬編『花供養』
○天保四年春興（1-39-14）
（第二章第二節参照）
○淀藩中夏興（1-39-20）
（第二章第二節参照）
○天保五年呉明編『芳信集』
○横山清暉画一枚摺（2-12）
（第三章 資料一参照）

・寺とさへ言へば先づ有さくらかな　友之
・走り帆におりへられてや磯の雉子　友之
・七五三縄をくゞつて出る清水哉　友之
・七五三縄を潜て出る清水哉　友之
・汐しみて来たとは見へぬ鴉かな　友之

○短冊「勇ましきものや□□の午のふり　友之」（畑家蔵貼り交ぜ屏風）。



50 鷹巣

○文化一〇年『真葛草紙』
○文化一一年『真葛草紙』
○横山清暉画一枚摺（2-12）
（第三章 資料一参照）

・突流す草の中より蛙かな　淀藩中鷹巣
・山賤や休む所も椿原　鷹巣
・荅から見た年もなし帰り花　鷹巣

ら

51 柳江　山口氏。医師。妙教寺。山口家は絶縁。

○寛政頃定雅編『初懐紙』A
○寛政頃定雅編『初懐紙』B
○寛政頃定雅編『初懐紙』C
○文化六年梅室編『四時行』
○文化八年推定定雅編『春懐紙』
○文化一〇年『真葛草紙』
○文化一一年『真葛草紙』
○文化一三年『真葛草紙』
○松川龍椿画一枚摺（2-11-2）
（以下、第二章第二節参照）
○天保四年春興（1-39-14）

・白梅の花より月のこぼれけり　柳江
・春の月松をはなれて長閑なり　柳江
・雉啼や澱野の船の朝朗　柳江
・鉢扣その声古き風情なり　ヨド柳江
・長閑さはねぶけ覚して眠りけり　柳江
・夏の月古郷の夜の似たる哉　柳江
・連句一入集。
・鶯やだまつてゐても鳥は鳥　ヨド藩中柳江
・鶯に鳴子惜しとおもひけり　柳江
・日の上るかたへ広がる柳かな　柳江

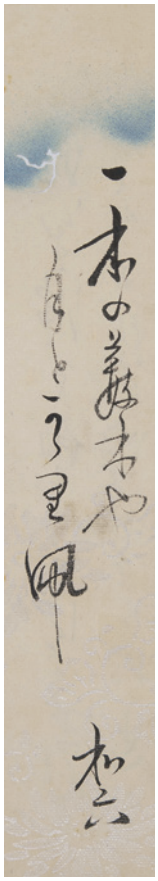
〔参考〕山口柳慶は、御医師、住人扶持、高島六番町住（文久三年分限録注1）。

わ

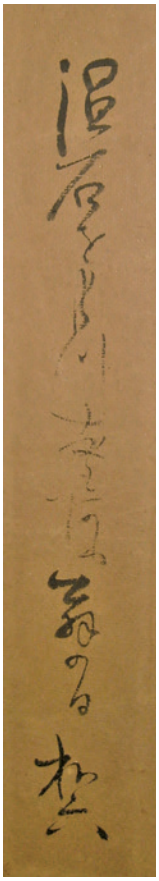
52　和六　池田氏。吟風の義父。東運寺。

○短冊「船引の道はし広しかれ尾花　和六」（2–23–8–11）。

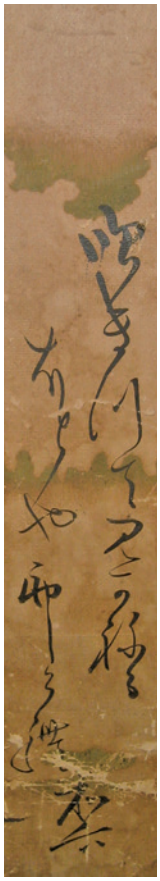
○短冊「一本の薮木や月とかゝり凧　和六」（2–23–8–12a）。



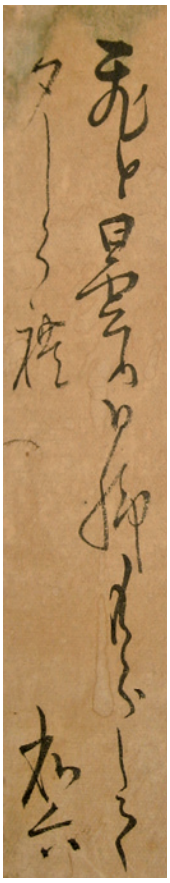
○短冊「温石をもつ友もあり翁の日　和六」（畑家蔵貼り交ぜ屏風）



○短冊「吹きつて見かねるほどや初しぐれ　和六」（畑家蔵貼り交ぜ屏風）



○短冊「ひと曇り日脚もらして夕しぐれ　和六」（畑家蔵貼り交ぜ屏風）



○横山清暉画一枚摺（2–12）・こがらしに移る間もなし雁の影　和六

（第三章 資料一参照）

第二節　淀藩士 畑 竹楼、吟風の俳諧

淀藩士畑竹楼・吟風親子の菩提寺は、淀の通称三軒寺（現、伏見区淀新町）の一つである浄土宗高福寺である。竹楼墓は、建立当時に準えて建て替えてある。ただし、正面上部の梵字は建て替えた時に十字架から変わっている。吟風墓は、明治二年に息子の忠篤によって建てられたままのもので、正面には十字架が刻印され、キリスト教徒であったことが知られる。なお、令和三年現在の後裔は浄土宗で、京都府長岡京市に移転している。

この度、畑忠良氏の高配を得て、畑家の「家譜」を閲覧することができた。「家譜」は、嘉永三年一月に吟風によって記されたものである。これによれば、畑家の中で俳諧に傾倒したのは、竹楼・吟風の親子二人であることが知られる。左に竹楼、吟風の墓碑、年譜事項、俳諧活動を記す。

一

竹楼は、宝暦五（一七五五）年六月三日生、文政一一（一八二八）年六月六日卒。享年七四。字は忠敬。法名は、忠敬院聞誉竹楼謙信。別号、蓬蒿園。高島五番町住（畑家蔵弘化二年書き留め地図）。石高、二〇〇石（享和二年）。

竹楼墓碑は次のとおりである。なお、改行は／で示した。

〔正　面〕忠敬院聞誉竹楼謙信居士／観妙院想誉浄室貞厳大姉

〔正面右〕文政十一戊子年六月六日卒　畑七郎左衛門　源忠敬／寛政十戊午年七月十六日卒　妻ハナ

竹楼の俳諧は、次のものが知られる。

○支雪点「六々行」歌仙一巻の最高点者。淀藩士連中のみの俳諧活動である。第二章第一節参照。

・（応と云答もさすが御所めきし）／浮世絵師の器量見にやる

○吐鳳編、寛政八年刊『除元集』に支雪と並んで絵入りの半丁（四丁表）が入集。他に連句一入集。第三章第一節参照。

・三陽　千代をひく代のいさをしや弓はじめ　蓬蒿園竹楼

春興　姉の名の恥しぶりや未開紅　仝

冬唸　寒声や鴉に塵なし月凄し　仝

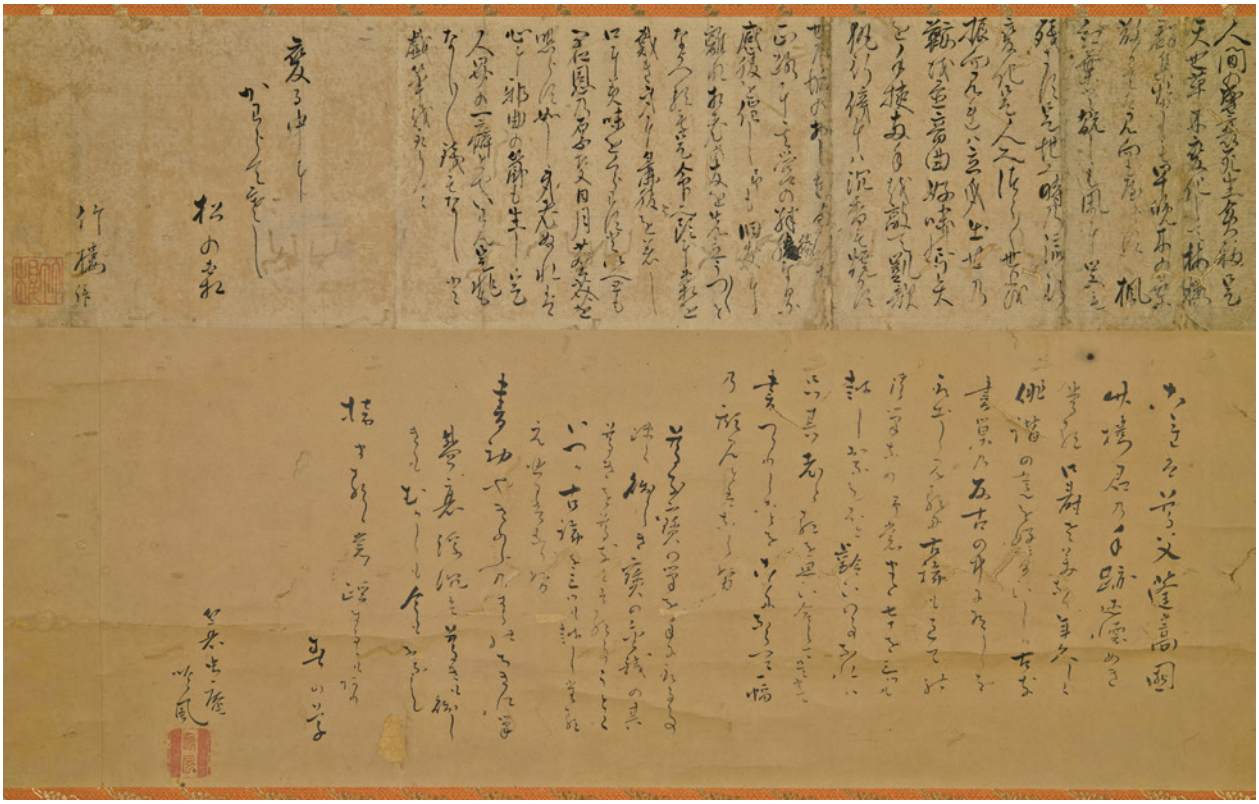
○寛政頃定雅編『初懐紙』A　・鶯に見付られけりかゝし妻　竹楼

○文政一一年竹楼追善俳諧（第二章第四節参照）

・こぼれんとして咲にけり女郎花　亡人竹楼（立句）

右の俳諧からは、五歳年下の支雪とともに淀藩中の俳諧を牽引していたことが知られる。ただ、定雅の俳書に、支雪が寛政期から文政二年頃まで積極的に入集するのに対して、竹楼は寛政期の一冊に入集するのみである。文化四年に家督を譲るが、俳諧を最晩年（文政一一年卒）まで続ける体力に恵まれなかったのであろうか。

○安政六年元旦　竹楼・吟風一幅　縦三九・五糎、横六四・三糎（紙面）。



人間の盛衰、生死、貧福、是／天也。草木変化して梅桜／群集勢しも、早晩木の葉／散りては見向もやらず。楓、／紅葉と翫しも、凩に器も／残さず。是地也、時の流行／変化、是人也。つら〳〵世上を／振向見れば立身出世の／鞍を置、音曲好味の弓矢／を手挟、両手を敲て凱歌／執行、傍には沈香も焼かず／世の垢のあしき匂ひ□□／正路に其営の殊勝なるに／感服を催し、予も、旧友に／離れ相老の友を先立、うつ〳〵と／ならへるも是命也。頭に霜を／戴き身に麁服を着し／口に美味をくらわずといへども／君恩の厚事、日月塵芥を／照らす如し。身老ぬれば／心に邪曲の箴も生じ、是／人界の一癖とやいわん。是非も／なし、〳〵、銭もなしと／戯筆を取りて、

変る中にかわらで寒し松の霜　　竹楼拝 竹楼

これは尊父蓬蒿園／竹楼君の手跡、述懐めき／たる口ずさみなり。年久しく／俳諧の道を好み給ひしが古き／書巣の反古の中に有しを／取出し見るに古稀も過ての／御筆なり。予もまた七十を三ツも／越しおなじ心と齢ひの事なれば、／只其老たるを思ひ合して、是まで／書つゞりしことをこゝにならべて一幅／の形見とはなしぬ。

尊き宝の筆を手に取る事／疎く、賤しき宝の金銭の其／尊きを尊きとする事うとく／いつか古稀を三つも越したる／元旦にぞなりぬ

書初やきのふのまゝのちぎれ筆

盛衰浮沈は尊きも賤し／きもむかしも今もおなじ

摘まるゝも蹈まるゝもあり春の草　　蓑虫庵吟風 吟風

二

吟風は、天明七（一七八七）年七月二六日生、安政六（一八五九）年一二月一三日卒。享年七三。名は数馬、字は忠保。法名は、忠保院孝誉吟風慶義。別号、蓑虫庵。高島五番町住（畑家蔵弘化二年書き留め地図）。石高、二五〇石（嘉永七年）。

吟風墓碑は次のとおりである。なお、改行は／で示した。

〔正　面〕忠保院孝誉吟風慶義居士／禮養院信誉松風智音大姉

〔正面右〕畑数馬源忠保之墓

〔正面左〕忠安政六己未歳十二月十三日卒／明治二己巳歳十二月九日／畑健ノ丞源忠篤建立

吟風の俳諧活動は、父竹楼の影響によるものと推察されるが、揃って活動した形跡は少ない。吟風の俳諧活動の初出は、

文化一〇年『真葛草紙』　・夕顔や親子二人の住侘て　淀藩中吟風

である。しかし、本格的に俳諧活動を始めるのは、文政八年以降の三九歳のことであり、淀藩士連中の支雪に従う。さらに、天保五年頃からは、淀藩士連中の中心的な存在となり、藩内だけでなく、京俳壇をはじめ大坂などの近隣並びに地方までも俳諧の交際を広げる。吟風の俳諧交友録にその一端がみられる。第三章資料二～五、付表Ⅱ、Ⅲ参照。

天保五年頃までは、支雪の俳諧活動に従って、淀藩士連中間の活動が中心である。天保五年頃以降は、支雪が退き、吟風が淀藩士連中を牽引する。次のものは、淀藩士連中間の活動である。

○文政七年月々発句合（2–27）　・へら鷺のかく筋々の落し水　吟風

○天保四年春興（1–39–14）　・大仏へ摘〳〵這入る菫かな　吟風

○淀藩中夏興（1–39–20）　・朝の間を植〳〵登る山田哉　吟風

○松川龍椿画一枚摺（2–11–2）　・雲きれやかた〴〵のひる江の柳　吟風

○「廻状」（1–39–23）

（以上、第二章第二節参照）

○文政　八年 霜月俳諧之連歌　（第二章第三節参照）

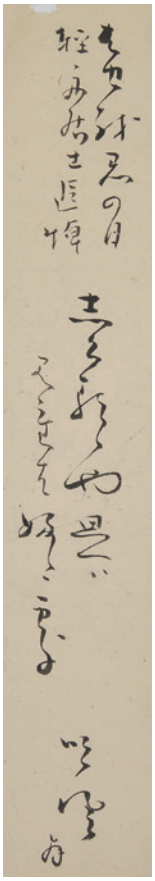
○文政一一年 竹楼追善俳諧之連歌　（第二章第四節参照）

○文政一二年 於島崎御茶屋俳諧之連歌　（第二章第五節参照）

○安政　五年 芭蕉忌俳諧之連歌　（第二章第六節参照）

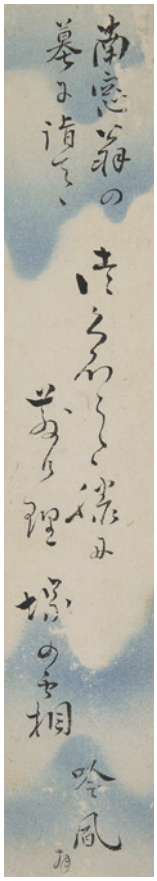
○芭蕉忌軽舟追悼短冊（2–23–8–2）

はせを忌の日　軽舟居士追悼　しぐるゝや思へば見ればふた処　吟風拝



○南窓翁墓参吟風短冊（2–22–4）

南窓翁の墓に詣で、　つくぼうた膝に散けり塚の霜　吟風拝



次は、各地の俳諧師との交流が盛んになる中での京俳壇との交流である。

一、俳仙堂朝陽（第三章第二節参照）

○天保六年俳仙堂月並（2-17-19）　・外並に陽炎たつや牛の角　ヨド吟風

・蝶〳〵の踏や建場の膳と椀　吟風　・花すみれ孕雀がこかしけり　吟風

○俳仙堂月並摺物（2-26）　・冬籠あたらにたらぬまどみかな　淀吟風

二、天保、弘化期の芭蕉堂蒼虬、朝陽（第三章第三節参照）

○天保　四年蒼虬編『花供養』・ひと安堵するや桜へ小半道　吟風

○天保　五年蒼虬編『花供養』・棟上のあふぎの側のおぼろ月　ヨド吟風

○天保一〇年朝陽編『花供養』・摘分て両手ふさがる若菜哉　ヨド吟風

三、天保期の北村杜鵞（第三章第四節参照）

○天保　七年『年毎集』　・つまるゝも踏るゝもありはるの草　ヨド吟風

○天保　八年『年毎集』　・薮にすれ屑家にすれて梅の花　ヨド吟風

四、天保、弘化期の荒木万籟（第三章第五節参照）

○万籟編『百梅集』（天保一一年成立、同一二年閏一月奉納）

「城南澱藩士　畑数馬　吟風　名ざゝるゝ梅逞しき老樹かな」

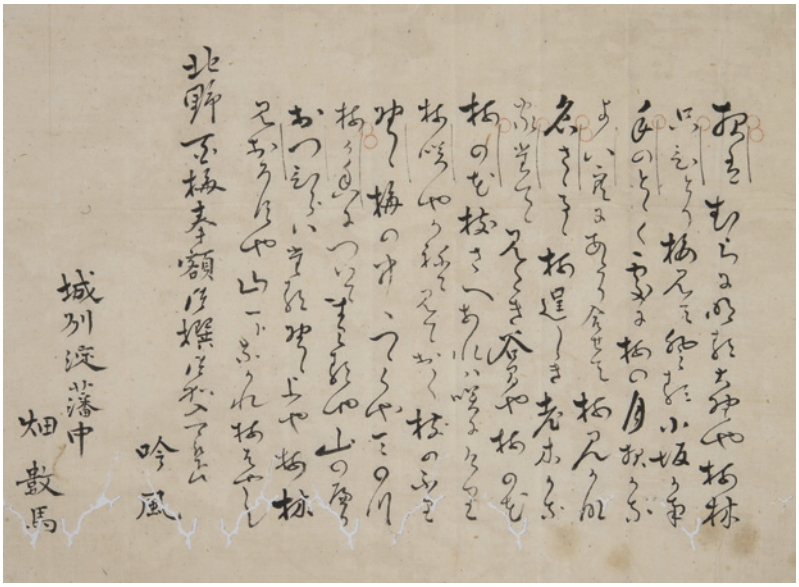
因みに、吟風は『百梅集』の入集にあたって入集句の選を依頼している。左の吟風往復書簡である。選者は『百梅集』編者の万籟である。しかし、万籟書簡にこのように肩書と実名を使用するものは知らないので、この時が初めてのことであろう。『百梅集』の奉納を知らせる（天保一二年）閏正月廿三日付吟風宛万籟書簡（1-137-10）に、万籟の春興配布に関して、「貴地はじめて被仰下候」とあることからも知られる。第三章第五節に書簡掲載。

吟風は、高点句と推察される丸が二つ付けてある三句の中から

名ざゝるゝ梅逞しき老木かな

を入集している。

○吟風万籟往復書簡（1-12-56）縦二五・〇糎、横三三・八糎。



○夜はむらに明る大野や梅林
○只ひとり梅見て登る小坂かな
○手のとゞく処に梅の月夜かな
よい空にあたり合せて梅見かな
○名ざゝるゝ梅逞しき老木かな
○家たてゝ見たき谷間や梅の花
○梅の花枝さへあれば咲にけり
梅咲やかねて見ておく枝のふり
野の梅の中へつゞくや天の川
○梅が香についてまわるや山のへり
おつぴらいたる野の上や梅林
見おろすや山一ト ながれ梅ばやし

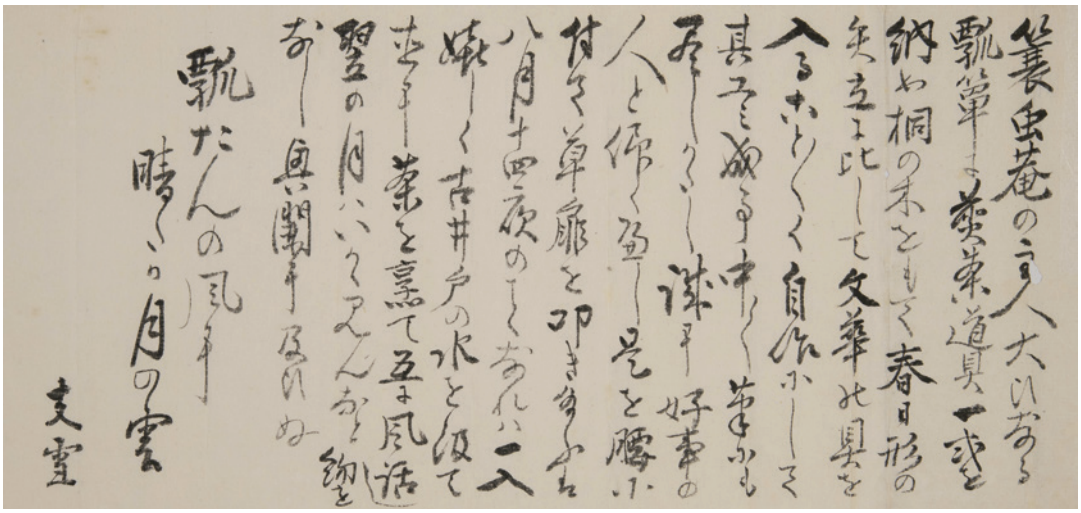
北野百梅奉額御撰御加入可被下候　吟風
城州淀藩中　畑数馬

その他に、次のものがある。

○天保五年呉明編『芳信集』　・水鳥の腹に押るゝあくたかな　吟風
○天保八年梅園編『としごもり』　・隣のとひつゝく雨の若葉かな　ヨド吟風
○弘化元年岱年編『はなふゞき』　・薮際や無疵に青き青の草　城南吟風
○蟻園（岳鳳）編『時雨帖』　・水仙や折葉に花の一もつれ　ヨド吟風
・他に連句一入集。
○横山清暉画一枚摺（2-12）　・広がつて来るや時雨の幾在所　吟風
（以下、第三章資料一参照）
○狗追う画一枚摺（2-11-1）　・半分は枯野へ出たる厠かな　吟風

また、吟風は手先が器用でいろいろなものを作成している。年始状、俳諧一枚摺、茶道具、矢立、芭蕉像、俳号印「吟風」「蓑虫庵」「竹楼」など。次に一例をあげる。淀藩士連中の支雪が、吟風自作の瓢箪茶道具などの礼を述べている書簡と、自摺の春興である。

○蓑虫庵吟風宛支雪書簡（1-39-1-1）縦一五・七糎、横三七・〇糎。

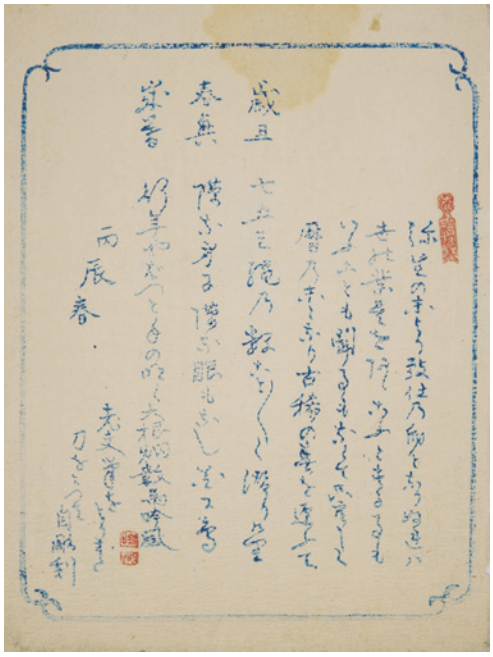


蓑虫庵の主人大ひなる
瓢箪に煎茶道具一式を
納め桐の木をもて春日形の
矢立に比して文華の具を
入る。ことゞく自作にして
其工み成事中〳〵筆にも
尽しがたし。誠に好事の
人と仰ぐべし。是を腰に
付て草扉を叩き給ふは
八月十四日夜のことなれば一入
嬉しく、古井戸の水を汲て
直に茶を烹て互に風話し、
翌の月はいかゞ見んなど約を
なし、興闌に及びぬ。

瓢たんの風に
晴たか月の雲

支雪

○ 吟風自摺の安政丙辰三年春興（2–17–34–1）縦一七・〇糎、横一三・〇糎。



弥生の末より致仕の身となりぬれば／世の業是をあゝこふと遣る事も／いふことも聞事もなくて只空しく／暦の末となり古稀の春を迎ふて

歳旦　七五三縄の数ことゞく潜りけり

春興　隙な身に隙な眼もなし花に鳥

歳暮　行年やばつと手の明く大根畑数馬吟風 吟風

丙辰春　老夫筆をとりまた／刀をとつて自彫刻

ところで、吟風には同僚の俳諧についての「鼻の高い立派なお下手」の評がある。「淀俳人之像」（1–39–12）である。縦二五・〇糎、横三四・〇糎。

淀俳人之像　鼻の高い立派なお下手

俳諧の事

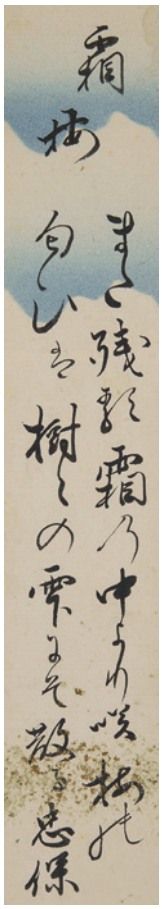
一　まけおしみがつよく／一　しらぬといふが心外／一　習ふ事はきらい／一　ついに俳諧した事なく／一　一廉しつた気で／一　我流で一句も役たゝず／一　なんにもしらず口をきゝ／一　一生涯しらず仕廻／一つぶて発句計りして／一　天狗に直に成鼻を臨〳〵高くし／一　昔よりの上手の腹もさぐらず／一　風流の道に疎く／一　俳諧の事はちよつともしらず／一　証文の出しそゝくれ今更／習ふ事はづかしく

多くの俳友に恵まれたが、時に一人で市井の俳書に入集することもあった。こんな気持ちであったろうか。

参考として吟風の和歌短冊をあげる。当時、和歌は必須の教養である。

○ 忠保（吟風）「霜梅」和歌短冊（2–22–1）

霜梅　まだ残る霜の中より咲梅の匂ひは樹々の雫にぞ散る　忠保



第三節　淀藩医 富原支雪の俳諧

富原支雪は、淀藩医であり、俳諧は淀藩士連中の第一期の活動を竹楼とともに牽引した。菩提寺は、淀の三軒寺（現、伏見区淀新町）と俗称されている寺の一つである曹洞宗の東運寺である。ここに支雪墓が現存する。墓碑は次のとおりである。なお、闕字は一字空きにした。

〔正　面〕　鴻臺富原君墓

〔正面左〕　君諱胤璋字伯峨称周伯号鴻臺平姓富原氏考胤敬妣大木氏／生五男君其長也少入和田東郭氏門研精於医術造其奥又従／池田錦橋氏学痘科頗得其訣而唱古医法於　澱藩君為嚆矢／以故得　公家寵用乞治者亦満門云性無他嗜常遊戯点茶俳／諧為家世以医仕　本藩至君歴事　寛量葆光俊徳及今公四／君始賜禄百石漸増後至二百廿石並賜月俸五口致仕猶曾月／俸以養老号支雪即　寛量公所命也娶明石藩林氏生四男三／

〔裏　面〕　女侍不肖胤美外皆夭君宝暦十年庚辰六月廿日生天保九年／戊戌三月廿七日卒享年七十有九私謚琢雲葬干城州澱邑東／運禅寺先塋傍

〔正面右〕　不肖胤美建

正面左側と裏面とを書き下し文に改める。

〔正面左〕　君、諱は胤璋、字は伯峨、称は周伯、号は鴻臺。平姓、富原氏。考は胤敬、妣は大木氏、五男生れ、君は其の長也。少くして和田東郭氏の門に入りて、医術に研精し、其の奥をなす。又、池田錦橋氏に従ひて、痘科を学ぶ。頗る其の訣を得て、古医法を唱ふ。澱藩、君嚆矢と為す。以って故に公家の寵用を得。治を乞ふ者亦た門に満つと云ふ。性は無他、常に遊戯、点茶、俳諧を嗜む。家を為し世に医を以って本藩に仕える。君に至りて寛量、葆光、俊徳及び今公の四君に歴事する。始め禄百石を賜ふ。漸に増して後に二百二十石に至り、並に月俸五口を賜ふ。致仕して猶ほ月俸を曾ねて、以って老を養ひ、支雪と号す。即ち、寛量公の命ぜらる也。明石藩の林氏を娶り、四男三

〔裏　面〕　女生る。不肖胤美侍して外、皆夭す。君、宝暦十年庚辰六月三十日生、天保九年戊戌三月二十七日卒す。享年七十有九。私に謚して琢雲、城州澱邑東運禅寺の先塋の傍に葬る。

この碑面によれば、諱は胤璋、字は伯峨、称は周伯、号は鴻臺。姓は平、氏は富原。謚は琢雲であるが、号としても用いる。若くして中国式治痘の医術を学び、淀藩の嚆矢となる。また、琴棋書画、点茶、俳諧を好み、致仕して支雪と号す。宝暦一〇（一七六〇）年六月三〇日生、天保九（一八三八）年三月二七日卒、享年七九。建碑者は、碑の右側面によって息子の富原胤美。

富原家は「魚之市四軒屋」住（文久三年分限録注1）。

さて、支雪は、藩医であったことから、以下の同藩の医師、

・石川掬水（文久三年分限録注1に「御医師」。菩提寺、妙教寺。）、
・山口柳江（同。同前。）
・石山大之（同。菩提寺、東運寺。）、
・間島軽舟（同。同前。）

とともに俳諧活動を行い、彼らの中心的な存在であった。また、他の淀藩士連中の俳諧をも牽引していたのであるが、支雪の十種類に及ぶ点印を押した「六々行」歌仙一巻は特筆に値する。第二章第一節に影印収載。淀藩医が点印を有し、淀藩士俳壇を形成していたのである。支雪の俳諧活動は、墓碑によれば藩医を致仕してのことであるというが、既に三七歳の時、寛政八年刊の吐鳳編『除元集』に入集している。半丁分に霊芝の絵とともに三句をゆったりと配す（第三章第一節の吐鳳編『除元集』三丁裏）。

木徳　　琢雲居支雪
先梅に気も調ふや日のはじめ
韶光　　仝
葩と見しは胡蝶の番ひ哉
大呂　　白鷗閑有似我と云ふ事のあれば
鶺鴒の浮世に似たり年の尻　　仝

同じく淀藩士である竹楼も猿曳きの絵とともに三句を載せ（四丁表）、当時の淀藩士連中の俳諧は、この二人が牽引していたと推察される。竹楼は、支雪より五歳年長である。

また、淀藩士連中が京俳壇の連中と交際している俳諧に、次のものが知られる。西村定雅社中の俳書『初懐紙』『春懐紙』『真葛草紙』『真葛春懐紙』に入集し、「おはら木社中」とするものが充実している。定雅の俳仙堂は、文化八年以降、文政九年没年頃迄であるが、支雪らの入集は、寛政期から文政二年頃迄で、支雪が五〇歳代の頃である。なお、定雅の刊年句集については、田辺菜穂子著「定雅の刊年句集」の分類に従う（第三章第二節参照）。また、桜井梅室編『四時行』、洛東芭蕉堂蒼虬編『花供養』や呉明編『芳信集』にも入集している。天保四年には、稲葉侯医員の竹岡雲峰が加わり、医業の連中が健在である。なお、医を業とする淀藩士連中に傍線を付す。

(1)寛政頃定雅編『初懐紙』A　・影うつる山みどりなり春の水　支雪
・「おはら木社中」蓬室、剛池、舎南、荷風、柳江、竹楼、逸江他
(2)寛政頃定雅編『初懐紙』B　・内に寝る夜もおもしろや春の雨　支雪
・「おはら木社中」掬水、鳳水、軽舟、柳江他
(3)寛政頃定雅編『初懐紙』C　・春の草野は水色と成にけり　支雪
・淀藩社中　芝薗、舎南、筠圃、鳳水、士常、剛池、南窓、柳江、掬水、荷風、如遊、淀藩桂舟（軽舟）
(4)文化六年梅室編『四時行』　・夜は水も寝て流るゝか春の川　ヨド支雪
・今朝の雪水の流るゝばかりなり　ヨド支雪　・他に連句一入集。
・他に南窓、掬水、荷風、士常、鳳水、柳江、剛池、筠圃
(5)文化八年推定定雅編『春懐紙』・雨二日野山を春にしたりけり　淀藩社中支雪
・春の夜と申も十日あまりかな　支雪
・淀藩社中　大之、鳳水、桂舟（軽舟）、柳江他
(6)文化一〇年『真葛草紙』　・何処やらにあがることもあり春の雨　支雪
・粟津野は寒い所ぞ五月雨　支雪　・何しても我にもどるや秋の暮　支雪
・人ざとを便りに飛ぬぬくめ鳥　支雪　・他に連句二入集。
・淀藩中　吟風、掬水、大之、赤水、桂舟（軽舟）、柳江他
(7)文化一一年『真葛草紙』　・我家の小さくなりし柳かな　支雪（立句）
・淀於上池楼興行　諷々、定雅、支雪、柳江、南窓、筠圃、琴所、赤水、碓乎、徐遊、大之、桂舟（軽舟）、負米、以十、荷風
・他に掬水
(8)文化一三年『真葛草紙』　・入相をおしむな花に月が出る　支雪（立句）
・掬水、剛池、大之、兎哉、桂舟（軽舟）、柳江他
(9)文政二年『真葛春懐紙』　・気遣ひのなきひより也朝霞　淀藩中支雪
・他に掬水、大之、剛池、軽舟、碓乎、諷々

⑽天保四年蒼虬編『花供養』　・庭ざくら家に勝しと指さゝれ　支雪
・秩草、雲峰、源良、其友、友之、吟風、三千丸、春来、雪川、兎斎、掬水、大之、軽舟、一坡、魚物、赤水、素琴

⑾天保五年呉明編『芳信集』　・三枝ほど鳩より上に雨かはず　支雪
・秩草、雲峰、其友、友之、魚物、三千丸、吟風、雪川、軽舟、赤水、素琴

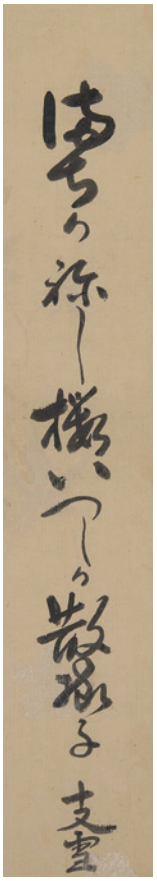
その他、京俳壇との交流を知るものがある。

○文政元年梅室編　『四時行』　・もきとうに咲て愛たし桃の花　山シロ支雪
○俳仙堂月並摺物　（2–26）　・美しや二人が剃て冬ごもり　ヨド支雪
（第三章第二節参照）
○狗追う画一枚摺（2–11–1）　・夕日うけよ所のしぐれの雲間より　支雪
（第三章 資料一 参照）

また、淀藩士連中間の俳諧としては次のものがある。

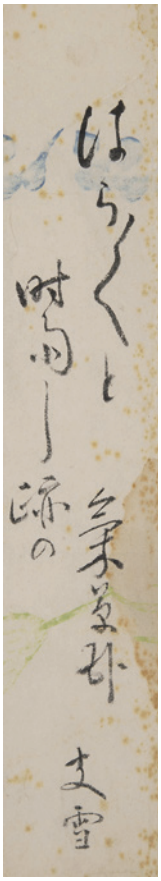
○文政七年月々発句合（2–27）　・名月や住めば都といふ処　支雪
○天保四年春興（1–39–14）　・陽炎やこゝろにかゝる二日酔　支雪
○淀藩中夏興　（1–39–20）　・鮓くゝる柱はもたぬ小家哉　支雪
○松川龍椿画一枚摺（2–11–2）　・春なんぬ朝の寝ごゝろ起心　支雪
（以上、第二章第二節参照）
○文政　八年 霜月俳諧之連歌に同座
○文政 一一年 竹楼追善俳諧之連歌に同座
○文政 一二年 於島崎御茶屋俳諧之連歌に同座、発句
・天も花を養ふとてか薄雲る　支雪（立句）
（以上、第二章第三、四、五節参照）

○短冊「まちかねし桜いつしか散様子　支雪」（2–23–8–6）



○短冊「日は日とて雨は雨迎蛙哉　支雪」（畑家蔵貼り交ぜ屏風）。

○短冊「はら〳〵と時雨し跡の気草臥　支雪」（2–23–8–7）



右のように、支雪は、同業の淀藩士及び、その他の連中を牽引していったが、天保五年以降の活動は少なくなり、同九年には卒去する。拙稿「淀藩医富原支雪の俳諧」（京都俳文学研究会会誌「俳文学研究」59号）参照。

第四節　淀藩士 田崎鳳水の俳諧

田崎鳳水の菩提寺は、淀の三軒寺（現、伏見区淀新町）と俗称されている寺の一つ、曹洞宗の東運寺である。現在（令和三年）は、田崎家の墓はあるが、調査時にあった鳳水墓はない。墓碑は次のとおりであった。

〔正　面〕鳳水田崎君墓

〔正面右〕君、諱忠順、字君保、一曰鳳水、紀姓、田崎氏、通称／覚左衛門。致仕号冥々亭遊鴻、法名顕徳院／義翁宗節。天明三年癸卯十一月廿六日生、弘化／元年甲辰十二月十六日卒、六十有二。

〔正面左〕孝子　田崎雄策忠和建

この碑面によれば、鳳水は、姓は紀、氏は田崎。諱は忠順、字は君保、また鳳水。通称は、覚左衛門。致仕して冥々亭遊鴻と号す。法名は顕徳院義翁宗節。天明三（一七八三）年一一月二六日生、弘化元（一八四四）年一二月一六日卒、享年六二。

建碑者は、碑面によって田崎雄策忠和。鳳水の嫡子である。雄策は、墓碑によれば「南江」と号したが、俳諧活動は知らない。また、「御者頭兼勘定奉行」、「口魚之市」住（文久三年分限録[注1]による）。

さて、鳳水の俳諧は次のものが知られる。

(1)寛政頃定雅編『初懐紙』B　・柴の戸を押ば明なり梅の花　鳳水

(2)寛政頃定雅編『初懐紙』C　・若竹によごれし雪の雫かな　鳳水

(3)文化六年梅室編『四時行』　・梢から秋のわかるるもみぢかな　ヨド鳳水

(4)文化八年推定定雅編『春懐紙』に、一座連句一巻と発句一入集。

・興行連中は、淀藩社中　支雪（発句）、鳳水（脇）、荷風、把菊、木阿、負米、筠圃、桂舟、舎南、以十、柳江、大之、如遊、吐鳳。

・足音になれて九条の蛙かな　鳳水

(5)文政八年、淀藩連中霜月俳諧之連歌に一座。

・成田蒼虬（洛東芭蕉堂主）発句、畑吟風脇他一二吟。

(6)文政一一年九月、竹楼追善百韻興行に一座。

・故淀藩士畑竹楼発句、吟風脇他一五吟。

(7)文政一二年三月、於島崎淀藩連中俳諧之連歌に一座。

・支雪発句、他一〇吟。(5)、(6)、(7)は第二章第三、四、五節参照）

(8)天保四年、淀藩連中春興　・老松の枝のたわみや朧月　鳳水

右春興は、淀藩連中二七名と、蒼虬・榛堂（朝陽）・呉明（九起）・とせの四名の句を記す。洛東芭蕉堂主たちとの春興である。天保三年閏一一月二〇日付、淀藩連中「廻状」があり、淀藩連中に振り当てられた題を知らせる。鳳水は「朧」が当たっている。第二章第二節参照。

(9)年次未詳、松川龍椿画一枚摺（第二章第二節参照）

・薮入やきのふの雨にけふのあめ　鳳水

(10)年次未詳、横山清暉画一枚摺（第三章 資料一参照）

・湖黒し辛崎ばかり松の雪　ヨド鳳水

右の俳諧から、凡そ文化期から天保期に活動をしたものと推察される。句は穏やかで、品格がある。同藩士連中の吟風（四歳年下）と共に支雪（二三歳年上）を中心とした淀藩の俳諧を支えた。なお、拙稿「淀藩士田崎鳳水の俳諧」（京都俳文学研究会会誌「俳文学研究」57号）参照。

第五節　淀藩稲葉侯医員 竹岡雲峰の俳諧

竹岡雲峰の菩提寺は、淀の三軒寺（現、伏見区淀新町）と俗称されている寺の曹洞宗の東運寺である。ここに雲峰墓が現存する。墓碑は次のとおりである。なお、闕字は一字空きにした。

〔正　面〕雲峰竹岡君墓

〔正面左〕君、諱友諒、字子益、竹岡氏、通称玄浩、号雲峰也。／為　稲葉侯医員、祖父玄浩君娶真鍋氏、三男／及四女。君、幼喪父母為、祖母鷺谷氏所養。少学／医術于京師和田東郭先生、又従賀川蘭斎先／生学産科。文化九年壬申、娶加藤氏、生二男四／女。次男早夭、二女亦歿。二女適人。君初仕　寛／

〔裏　面〕量公、賜月俸十五口。尋歴事　葆光　俊徳及／老侯　今侯四公、更有加　恩迨。　老侯時、賜／禄三百石、亦辱列留守班。生于天明四年甲辰／十一月朔、卒于天保十四年癸卯九月十八日。／享年六十。法号曰恵岳院際通義秀。葬于城南／東運禅寺塋域／

〔正面右〕天保十五年甲辰中元日　孝子友賢建

これによれば雲峰は、諱は友諒、字は子益、氏は竹岡、通称は玄浩、号は雲峰。法名は恵岳院際通義秀。淀藩稲葉侯付きの医者であったことが知られる。天明四（一七八四）年一一月一日生、天保一四（一八四三）年九月一八日卒。享年六〇。禄高は三〇〇石。竹岡家は、四代に渡る藩主に仕え、初代の玄量が小田原城主稲葉侯の侍医、二代目の玄仙から稲葉侯に従って淀藩に移り、六代目が雲峰こと友諒となる。なお、後裔の七代目竹岡友仙は医学に精通、その次男友三に『医家人名辞典』（昭和六年刊）がある。師事した和田東郭は、古方および後世の折衷派の大家。また、賀川蘭斎は、産科京都賀川家の二代目。雲峰は、文化四年三月、二四歳で賀川に入門している（『賀川門籍』）。内科（瘍科）と産科を修め、稲葉侯およびその家族の医療に従事したのである。

建碑者は、碑面によって、息子の竹岡友賢。

竹岡家は「口魚之市住」（文久三年分限録注1）。

雲峰の俳諧は、次のものが知られる。

○天保四年蒼虬編『花供養』

・先づ吉野向ひて歩行や春の旅　　雲峰

○天保五年推定　淀藩中夏興　（第二章第二節参照）

・夕立や片山それて分登る　　雲峰

○天保五年呉明編『芳信集』

・鶴下りて一声はづむ田植かな　　雲峰

天保の初め頃、吟風ら淀藩士連中と共に俳諧に遊んだことが知られる。淀藩士連中の俳諧では、寛政期から文政期には既に、同藩医の支雪をはじめとした医者を中心とした連中がいたが、この頃、雲峰は俳諧に積極的ではなく、天保期に少しく俳諧に遊んだものと推察される。句は、端正である。なお、拙稿「淀藩医員竹岡雲峰の俳諧」（京都俳文学研究会会誌「俳文学研究」60号）参照。

第六節　淀藩士 堀 赤水の俳諧

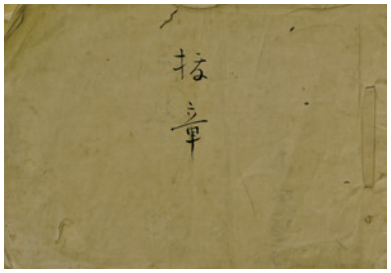
赤水は、堀氏。不確定ながら、堀玄珠とすれば、天明七（一七八七）年生、安政四（一八五七）年に　七一歳（安政四年年齢覚帳注3）で、吟風と同年である。堀家は「富田町住」（文久三年分限禄注1）。菩提寺は東運寺。

畑家俳諧資料に赤水撰の秀吟集「抜章」がある。本節資料Aである。淀藩士連中では支雪の点帖「六々行」歌仙一巻が知られ、赤水も撰をする指導的な役割があったものと推察されるが、点印は知らない。「抜章」には支雪も入集しており、点を付す者と付される者との関係は時々によって流動的であったと推察される。

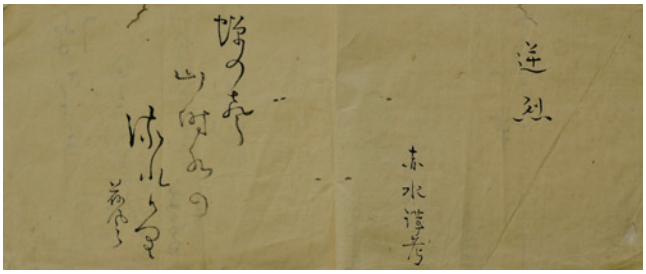
また、本節資料Bの吟風、赤水宛蒼虬書簡は、芭蕉堂の普請費用を援助した礼状であり、赤水も吟風とともに淀藩内外の俳諧活動が知られる。資料Eの短冊からは、芭蕉を敬慕して、芭蕉像を遷座していた様子が知られる。

次に、赤水関連の資料を影印、翻刻する。

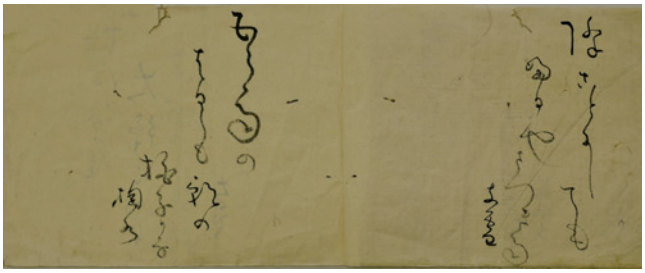
資料A　赤水撰秀吟集抜粋　（2–7）
縦一五・八糎、横二二・六糎。



抜章　（表紙）

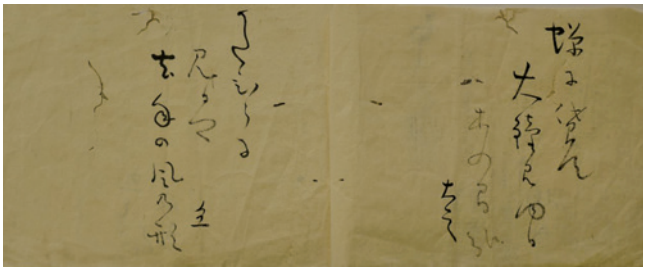


逆烈
赤水謹考
（表紙見返し）



降ことにしても
ふる也
さつき雨
支雪（一ウ）

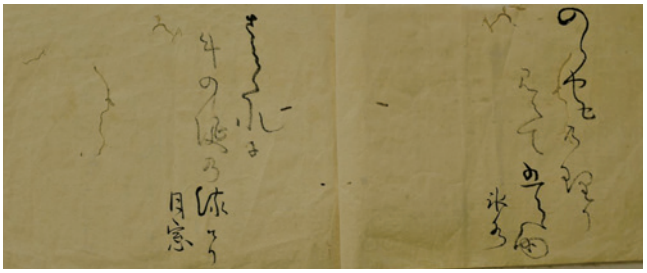
五月雨の
はるゝも朝の
様子かな
掬水（二オ）



蟬の声
山時水の
流れけり
荷風（一オ）

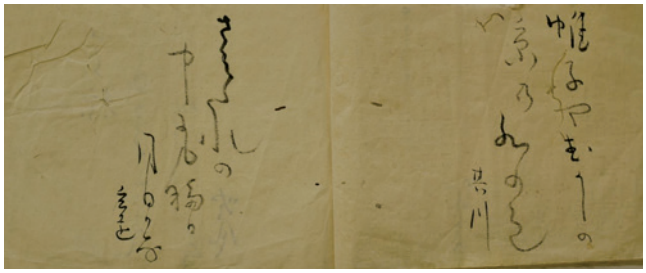
蟬に貸す
大鐘見ゆる
木の間哉
大之（二ウ）

かたびらに
見るや
去年の風の形
仝（三オ）



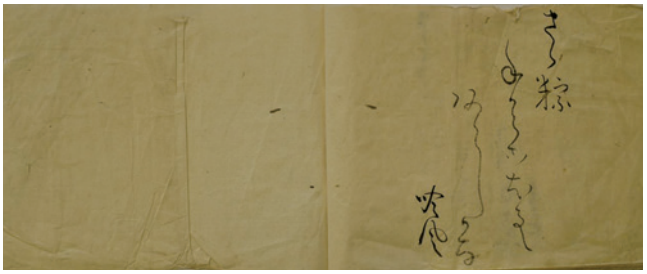
の丶空の理り
見えて五月雨
氷水（三ウ）

さみだれに
牛の涎の流けり
月窓（四オ）



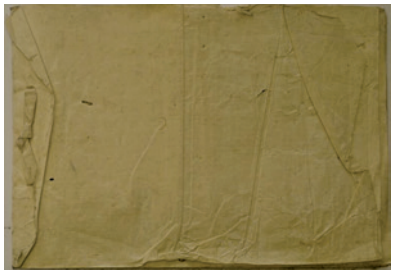
帷子やむかしの
京の水の色
其川（四ウ）

さみだれの
中にも移る
月日かな
玄遠（五オ）



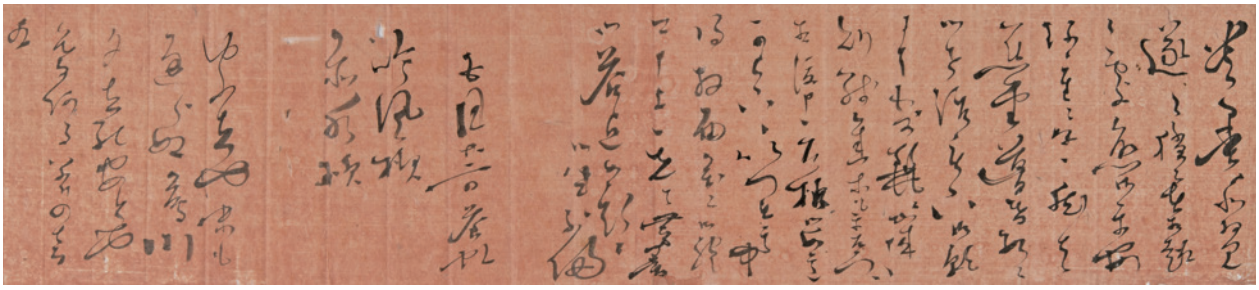
さ丶粽
手からこぼる丶
あらしかな
吟風（五ウ）

（裏表紙見返し）



（裏表紙）

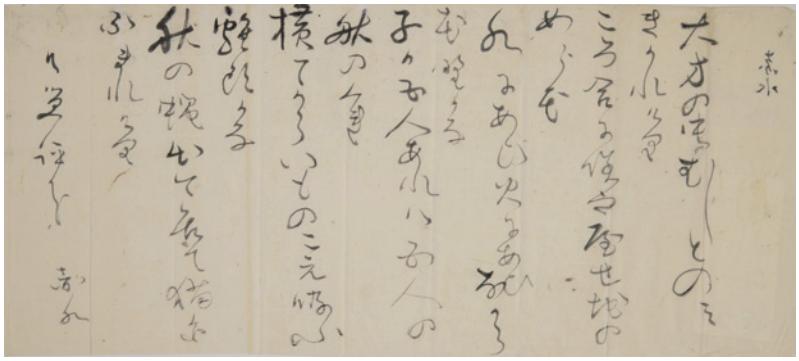
資料B　吟風・赤水宛蒼虬書簡　（1―5―8）　縦一六・四糎、横七五・五糎。



貴墨忝拝見。
遂々猛暑相趣
候処、愈御平安
珍重に存候。然ば
蕉堂普請数々
御世話被下、如願
にて奇麗に出来申候。
則残金等も楽左衛門へ
相渡申候。左様御安意
可被下候。いづれ其中
得拝面重々御礼
可申上候。先は芳書
御答迄。如斯に
御坐候。不備
五月廿二日　　蒼虬
吟風様
赤水様

ゆふ立や末も通らぬ鳶川
夕立のあとや響ある斧の音
拝

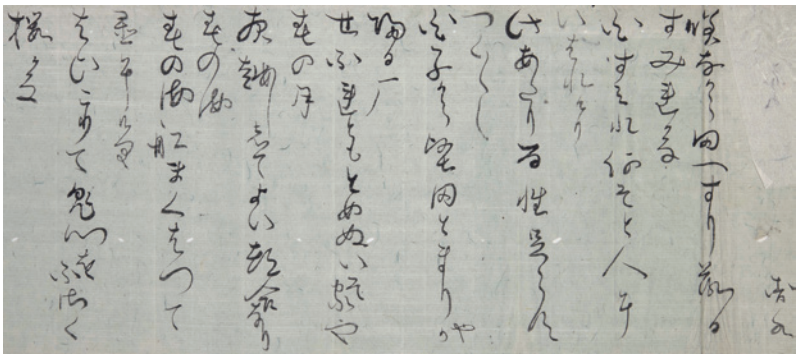
資料C　赤水発句書簡　（1―39―10）
縦一六・〇糎、横三五・〇糎。



赤水　（裏）

大方の虫むしとのみきかれけり
ころ合に咲ややせ地の女郎花
水にあひ火にあひながら花野かな
子の五人あれば五人の秋のくれ
横てからいものこえ吸ふ鶏頭かな
秋の蠅出て居て猫にふまれけり
御笑評可被下候　　赤水

資料D　赤水発句書簡　（1―39―11）
縦一五・五糎、横三四・〇糎。

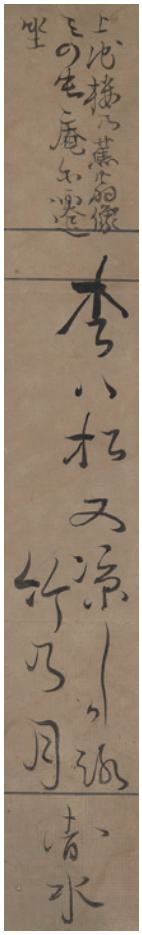


咲ながら田へずり落るすみれかな　赤水
白すみれ何ぞと人にいはれけり
此あたり百性足らずつく〳〵し
白子から堅田どまりの帰る雁
せぶれどもとめぬいそ家や春の月
夜越ししてよい都合なり春の海
春の海船まくはつて置にけり
はびこりて鬼門をふさぐ桜かな

資料E　赤水短冊（2–23–8–5）

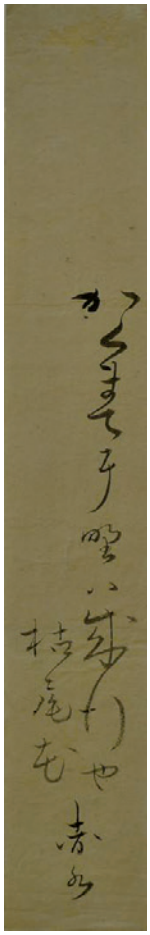
上池楼の蕉翁像 みの虫庵に遷坐

松は松又涼しかろ竹の月　赤水



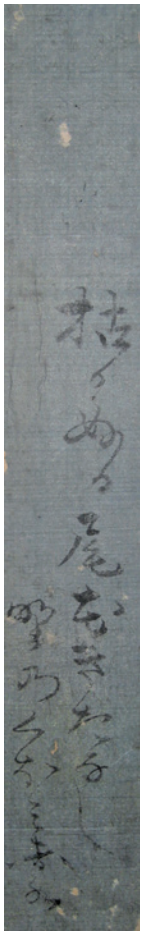
資料F　赤水短冊（2–23–8–51）

かくまでに野は成行や枯尾花　赤水



資料G　赤水短冊（畑家蔵貼り交ぜ屏風）。

枯かぬる尾花きたなし野のくぼみ　赤水



その他の俳諧

(1)文化一〇年『真葛草紙』・連句二入集。

(2)文化一一年『真葛草紙』・連句一入集。

(3)文政七年月々発句合(2–27)　・門させば背戸へ廻るや秋の風　赤水

(3)(4)(5)(6)は第二章第二節参照)

(4)松川龍椿画一枚摺（2–11–2）　・はなやかに入相撞くや春の暮　赤水

(5)天保四年春興（1–39–14）　・螺ふくやかぎりのしれぬ花の奥　赤水

(6)淀藩中夏興（1–39–20）　・御手水の間に遣ふ扇かな　赤水

(7)天保四年蒼虬編『花供養』　・今下りる野をかられけり鳴雲雀　赤水

(8)天保五年呉明編『芳信集』　・切た際ふさげる雨やかきつばた　赤水

(9)横山清暉画一枚摺（2–12）　・枯かぬる芒きたなし野の窪み　赤水

（第三章 資料一参照）

〔注記〕

注1　文久三年分限禄は、和地永常筆の「文久三年度調査　淀藩士分限禄」（表紙は「稲葉家御歴代日記」）。畑忠良氏教示。

注2　慶応四年分限帳は、「慶応四戊辰年　正邦公御代分限帳　五月下旬改之　堀吉（花押）」。畑忠良氏教示。

注3　安政四年年齢覚帳は、「安政四丁巳年三月中旬此書付致置候事依之他見他言堅無用」（表紙は「年齢覚帳」）。畑忠良氏教示。

第二章　淀藩士連中の俳諧興行

本章では、淀藩士がどのようにして俳諧を楽しんでいたのかを考察する。

第一節の支雪点「六々行」歌仙一巻（資料Ⅰ）は、入集の連中が竹楼をはじめとして淀藩士連中であると推察されるが、その後の俳諧活動にあまり登場しなくなることから、支雪、竹楼を中心とした第一期の淀藩士連中の活動に分類される。点印を用いた批点の様子から、淀藩士連中による俳壇の形成が認められる。なお、この高点付句は、享保期に京俳壇において隆盛であった半時庵淡々流の高点付句の影響があると推察される。

第二節の「廻状」（資料Ⅱ）をめぐっては、竹楼が退き、支雪と吟風が中心となっている様子から、支雪、吟風を中心とした第二期の活動であると知られる。「廻状」は「閏霜降月廿日」とあり、天保三年の成立。新年の一枚摺春興（資料Ⅲ）を成すために「廻状」を廻し、句を集めていく手順がわかる。この春興には「癸巳」とあり、天保四年の成立。なお、これと同様の夏興（資料Ⅳ）と、「廻状」を回した淀城周辺の地図参照。また、次の三興行からは、月並、追善などの俳諧興行が日常的に行われている様子が伺える。

第三節　文政　八年　霜月俳諧之連歌

第四節　文政一一年　竹楼追善俳諧之連歌

第五節　文政一二年　於島崎御茶屋俳諧之連歌

なお、文政七年月々発句合奉額写し（資料Ⅴ）と、松川龍椿画一枚摺（資料Ⅵ）は、文政頃のもので、参考資料として付す。

第六節の「安政五年　芭蕉忌俳諧之連歌」は、支雪卒後のことで、吟風を中心とした第三期の活動である。秀句採点表（資料Ⅶ）の連中と一致するものが多い。この時雨忌興行は、「芭蕉」を軸とした芭蕉顕彰俳諧の一端である。

以上の淀藩士連中の俳諧を一覧して「付表Ⅰ　淀藩士連中の俳諧」を付す。

第一節　支雪点「六々行」歌仙一巻

―畑家蔵『俳諧伝書記聞』の位置―

「六々行」歌仙一巻（2–18）は、富原支雪の批点である。資料Ⅰ。巻末の琢雲居は別号である。縦一六・五糎、横二五六・〇糎。次の点印が押されている。淀藩士連中で点印をもつのは、管見の限りでは支雪のみである。点印は、医を以て伺候し漢詩文に親しむところから、古典に因む格調の高いものである。

(1)

(2)

並点印

(3)

四十点印

(4)

(5)

(6)

(7)

(8)

最高点印

(9)　参考

(10)　参考

右のうち(1)から(8)迄が点印である。総ての句に印が押されている。巻末に、(2)の印を押して「除之」とあり、並（最低）点と推察される。また、句上に「四拾点　筆」とあり、執筆は一句のみで、押されている(3)の印は、四〇点と推察される。最高点は(8)の印で、前句（長句）「応と言答もさすが御所めきし」を小さく添えて、大ぶりな字の「浮世絵師の器量見にやる」（短句）に押されているが、点数は未詳。なお、当該句には「画人」から「絵師」への添削がある。淀藩士連中の初期俳諧は、支雪の俳諧力量に負うところが大きい。

句上によって連中と合計点が知られるが、選後に記されることが多い各句への俳号などの追記はない。最高点の竹楼に褒美として与えられ、畑家に蔵されたものであろう。

点印の高低は未詳ながら、高点と推察される例をあげる。(6)(7)の二箇の印がある一句は、

（縄手を過て荷の軽き馬）

・関札に植たる芝も秋の色

である。前句の軽い馬荷から、街道筋の芝に秋の色を見出し、景色をみるゆとりのある気分に転じたもの。また、同じく(5)の印がある二句は、次のものである。

（誉られている勝負事の顔）

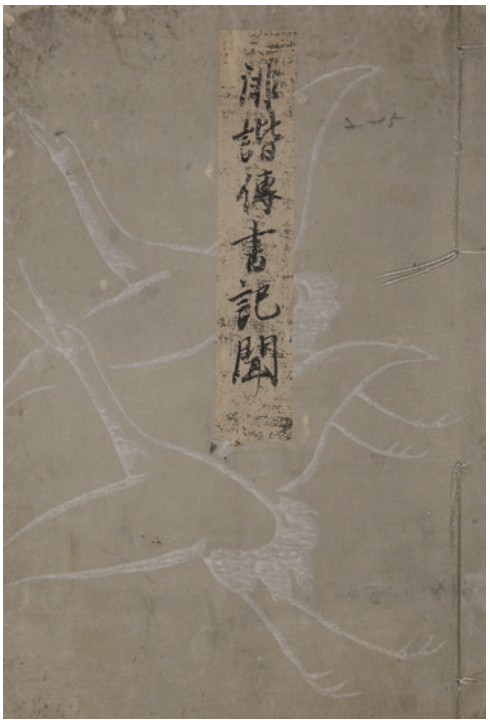
・ぼろ〳〵になつて名高き星兜

（霧深く〳〵と毛脂（胴か）乱下ゲ）

・負た相撲月に隠れて通りけり

ところで、このような点印は他の淀藩士連中には認められない。連中のうち、点を付ける宗匠格としては、後に吟風と赤水がいる。吟風には多くの自作印が残されているが、点印と認められるものはない。また、赤水の点帖「抜章」については、第一章第六節にあげたが、点印は押されていない。また、支雪の点印が受け継がれた形跡も管見の限りでは認められない。これは、点印が用いられた俳諧が支雪、竹楼を中心とした時期、藩士連中の活動の第一期にあたる時期の特徴であると推察される。高点を付して俳諧を楽しむ俳諧は、京俳壇では享保頃に流行していた。その流れの一端を示す資料として畑家俳諧資料に『俳諧伝書記聞』がある。

『俳諧伝書記聞』（2-15／以下、『記聞』と略称）は、縦二三・〇糎、一五・〇糎。写本一冊。墨付一九丁、遊紙一枚。奥書「文化九年壬申春写　養和堂蔵書」。養和については未詳。同書は、俳諧の作り様を記した伝書の聞き書きである。丁寧な仕立ての装丁からは、俳諧の寄る辺としていた可能性を感じさせ、実作に役立てたものと推察される。



『俳諧伝書記聞』（表紙）

また、本書は、俳諧伝書の抜粋であり、伝授を受けたというものではない。近世後期の俳諧伝書は、伝授の細かな手続きを踏むものが存続している一方で、伝書の一部は刊行されたり、読み物のようになっているものなど様々で、容易に伝授物をみることができる状況にあった。本書は後者である。

本書の内容は、芭蕉の説が随所に用いられ、概ね芭蕉を軸としているが、半時庵淡々の言説が入っているところに特徴がある。つまり、本書は淡々系の伝書の系統を引くものである。淡々は其角の門人で、芭蕉の孫弟子である。淡々が重要視した俳諧の系譜、「芭蕉―其角―淡々」の系譜であり、芭蕉の言説が多いのは当然のことである。尤も、近世後期の俳諧の多くは「芭蕉」を軸にしているが、『記聞』もまた同様で、「芭蕉」を軸とした芭蕉顕彰俳諧の一つである。淡々は晩年、京、大坂を拠点に俳諧活動を展開し、両俳壇に大きな影響力があり、若い時の江戸での俳諧が良い方に影響していたといわれる。

ここで、『記聞』の内容をみておく。

巻頭（一丁表）は、「はせを翁」の言説から筆を起こす。

むかし花のもとにおゐて、神代八雲の和歌の姿を調べ、其風体を分てより此俳体は定れり。されど俳諧は余の歌とかはりて、表に談笑の姿をあらはし、裏に閑情のこゝろを含める句法なり。いふがごとくに綴ると言を金言となして虚虚なり。実を実につゞるを是となし、実を実と言顕すも俳諧の道にあらず。正風は実虚の間に遊んでしかも実虚に止らず。　はせを翁

俳諧を「神代八雲の和歌」から書き起こす。そして、「正風は実虚の間に遊んでしかも実虚に止らず」と総論を述べる。俳諧における虚実の論は、各務支考の『俳諧十論』が、享保四（一七一九）年に刊行されている。芭蕉に俳論書はないが、聞き書きのいくつかが後世に残されており、『俳諧十論』もその一つである。もとより聞き書きした人及び、それを読んだ後世の人によって、様々な解釈の相違点が生じるものであるが、ここに伝書の性格が反映される。

一丁裏は、「俳　誹」の説である。「俳　誹」の説は、諸書に登場する周知の論である。これを「はせをの説」として記す。

俳　誹　同意不可論

貫之誤りて言葉の誹諧の俳の字をつゞり出す。人皆好事とおもへり。然れ共勅諚を以て編る書なれば、これを古実の例としてともに俳の字を亜用する也。他門に対して不可論。　はせを翁の説

芭蕉説、貫之の故事については、もはや真偽の問題ではないし、議論するものでもない。伝授事として形骸化しているが、押さえるべきことであったと知られる。

九丁裏、一〇丁表には、「不易流行」を言う。

不易　古池やかはず飛こむ水の音

流行　景清もはな見の座には七兵衛

古池は千載不易也。晋子が所へ山吹やと備へしならんと話せり。雲段のちがひ有。山吹やと置ば流行の句なりし。山吹やの五文字晋子ならでは得がたき事也。

不易、流行の何れも芭蕉句を引用して説く。「不易流行」については、服部土芳の『三冊子』（高桑闌更によって安永五年に刊行）と、向井去来の『去来抄』（加藤曉台によって安永四年に刊行）にある。刊行された両書は、裾野の広がる俳諧人口の増加に合わせて流布し、芭蕉の俳諧理念として享受された。「晋子」（其角）の「山吹や」の故事は、支考の『葛の松原』に出る（元禄五年刊、天保八年再版）。これらは直接、間接的に影響しているのである。

蛙の句に山吹を配すのは、和歌以来の伝統を踏まえた句作りである。当時の俳諧の多くがめざしていた句作りである。ここに其角の手柄がある。しかし、芭蕉は敢えてこれを取らなかったと考えている。眼前の景に徹したところが新しみである。且、和歌（古典）の見残した佳境であるところに俳諧が成立する。『古今和歌集』にいう「蛙の声聞く」だけではなく、蛙の飛び込む水の音もまた、春の息吹を感じさせるのである。また、長期にわたり静かに清水を湛えて動かない「千載不易」の古池に蛙が飛び込めば、清水が動いて時は流れ、現在に至る詩となるのである。現代俳句の私的経験による眼前とは、古典を踏まえない点が異なると考えられる。

二丁裏・三丁表「縦の句　横の句」をみる。

縦の句　五月雨をあつめてはやし最上川

伝に曰、口中に曲を含む事なかれ、心中に曲を捨る事なかれ。自然に意味あらはるゝ所談笑なり。曲流は一句の中にかゝえて表に顕はさず、五儀備るもの也。祝儀佳節其外表をたつる時みな縦の句也。

まかなくに何をたねとてうき草のなみのうね〳〵おひしげるらん

横の句　煤はきや又此茶屋も不挨拶

句体横に作る時は、上の五文字に其句の趣を顕はし、心持にて流を含み序に曲の心を包扁にして押へ綴る也。

うき草の何を種とてまかなくにおひしげるらん浪のうね〳〵

縦の句は、言葉に表さず、心を内に秘めているのである。このため心の「はやし」は先に提示しない。横の句はまず眼目となる「煤はき」を先に提示し、それからその心を抑えてゆるりと出していくのである。萍の例歌も、縦の句は「うきくさ」「おひしげるらん」を後に、横の句は先に提示するのである。ただし、句を縦横に考える根拠は示されていない。

因みに、縦横の題については其角編『句兄弟』（元禄七年序）の上「縦の題には古詩・古歌の本意をとり、連歌の式例を守りて、文章の力をかり、私の詞なく、一句の風流を専一にすべし」とある。横の題については、俳諧にのみ用いられる題をいう。また、「正風芭蕉奥儀伝（秘蘊集とも）」（享保九年奥）などに言及がある。

五丁表の「本式表十句」については、淡々と芭蕉の二つの言説がある。

本式表十句

神祇　釈教は発句　月　雪　花　郭公　名所　寝覚　恋は不入、十句の表に裏二句古法、此二句に恋を入べし。今首尾の吟とて表六句裏六句する也。自然古法の表裏の数に叶ひたる事道の天地也と

半時庵言

表十句は十百員の大数にして表に世のあらゆる事を覧はす。たゞし、神祇の発句に神祇の脇、釈教 述懐 恋等の発句も右に同じかるべし。常の発句には第三に神祇、月に恋、花に釈教等を時の宜きに見合綴るべしと。

はせを翁説

淡々の言説は、句の数に重きを置いて俳諧を捉える。このように数値化すれば、安定した句作りが可能となり、指導方法として有効である。淡々が広く受け入られる理由の一つであろう。一方の芭蕉は、具体的な題を例示しながら、「宜きに見合」付けていくことを説く。芭蕉の指導は、個々人に合わせて説くため、様々な解釈を生むところであるが、この含みが人を惹きつけるのであろう。

ところで、この淡々の言説は、宝暦九年一月に大坂の書林から発刊された芭蕉伝書の『俳諧之秘記』（『俳諧三部書』のうちの一書）の記述に近似している。傍線部参照。

本式表　恋は不入　神祇　釈教は発句　月　雪　花　ほとゝぎす　名所　寝覚　如此

世に表十句は、知る人多し、裏の詮議無沙汰なり。うらは古法二句也。秘也。此二句に恋を入べし。今首尾の吟とて表六句裏六句するなり。自然古法の表裏の数にかなひたる事道の天然なり。

とある。『俳諧之秘記』はかなり流布したと言われている。因みに、淡々の説とする記述は他に二か所あるが、ここと同様に『俳諧之秘記』と近似している。さらには、『記聞』の三割程度の記述も『俳諧之秘記』と近似している。

『記聞』中に淡々の言説として明示されている遠因は、『俳諧之秘記』が、「芭蕉―其角―淡々（元禄一四年）―竿秋（宝暦六年）」と伝授された経緯を示す写本があるからであろう（富田志津子氏教示による個人蔵「俳諧秘記」）。宝暦九年刊行の『俳諧之秘記』は、「俳諧秘記」の伝授の経緯を記さず、総てが芭蕉の言説として収録されている。このため、淡々の末流の間では、『俳諧之秘記』が淡々の言説と認識されることがあったのであろう。

大坂では、近世後期にあって、八千坊一統が健在である。京俳壇でも、淡々が大坂に移った後も依然として影響力があった。京俳壇の点者を記す『俳諧家譜』（宝暦元年刊）には、次の系譜が知られる。

○松木淡々
- 松木竿秋
  - 中井千径
  - 田河来川
- 山口羅人
  - 中嶋貞至
  - 中嶋五始
  - 河畑慶山
  - 正木風状
  - 片岡馬乳
  - 林　波光

その後の『俳諧家譜拾遺』（明和七年在京現存点者）には、次の如くある。

○松木淡々
- 松木竿秋
  - 中井仙径
  - 早川来之
- 宮木修古
- 横田几山

○山口羅人
- 中嶋五始
- 山口波光
- 中井羅院

また、『俳諧家譜後拾遺』（寛政九年夏刊）では、次の如くある。

○松木竿秋――早川来之

○中井仙径――堀木柳坡
- 中井仙雅
- 中林文虎

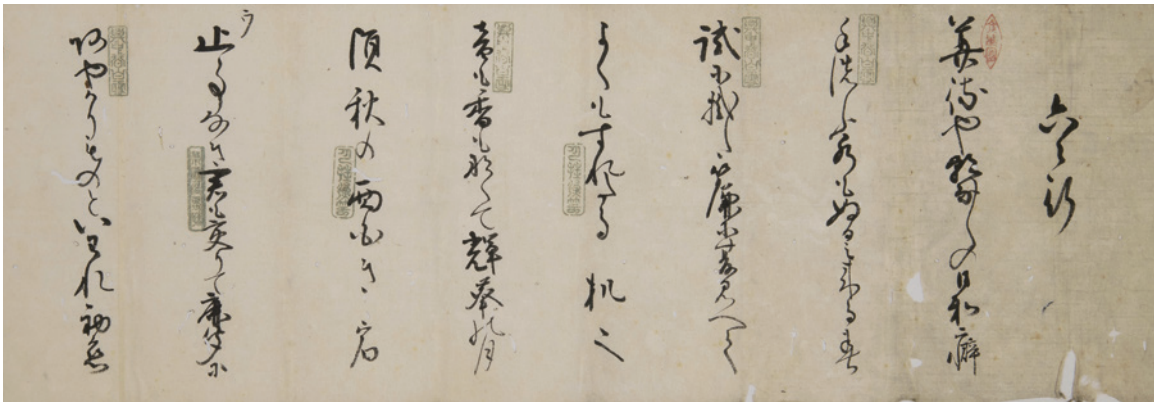
さらに、『京羽二重大全』（文化八年版）では、「俳諧師点者」が二五名載るが、そのうちの文虎が淡々の末流であると推察される。淡々門の高点付句の系譜は継承されているといえる。因みに、同書には「俳諧素人」六名が載るが、彼らは後の京俳壇を支える芭蕉堂蒼虬、一無庵丈左、椿花亭定雅、狼狽窟土卵、五升庵瓦全、梅室雪雄である。丈左は貞門の系譜であるが、彼らが近世後期の京俳壇を蕉風に染めていくのである。文政五年以降の『平安人物志』では、俳諧師が「文雅」に括られ、「点者」の存在感は薄れていく。なお、雑俳の点者とは異なる。

右のように、淀藩士連中は、京俳壇において高点付句が大勢を占める中にあって、淡々流の高点付句の俳諧に親しんでいたのであろう。淡々が得意であった高点付句の俤は、支雪が点印をふんだんに押した「六々行」歌仙一巻にみられる。その入集状況からすれば、『記聞』は竹楼の所持であったろう。

淀藩士連中は、京俳壇が俳諧点者の隆盛から蕉門へと動く中にあって、これと連動しているのである。支雪、竹楼の高点付句の第一期から支雪、吟風の蕉風の第二期へと推移していくのである。蕉風に移るにあたって、支雪らが注目したのが、俳仙堂を開いた定雅であった。これについては、第三章第二節に後述する。

○資料Ⅰ　「六々行」歌仙一巻（2–18）　縦一六・五糎、横二五六・〇糎。
(2)の並点を除いて(1)から(8)の点印番号を付す。

(1)　(3)　(3)　(4)

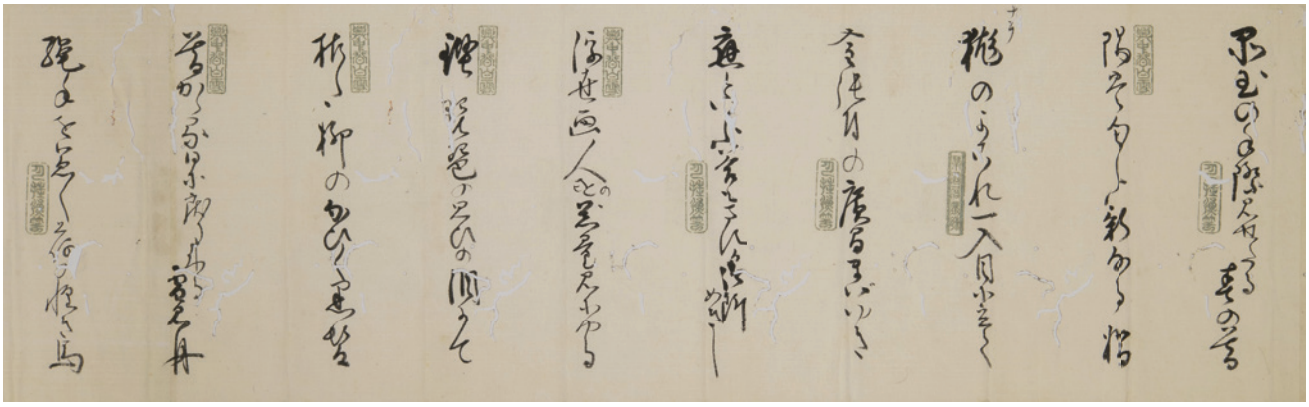


六々行
華待や朝な〳〵の日和癖
手洗ふ水もぬるみ来る春
試に掛た簾に藤見へて
よくもすれたる机也
音も香もなくて輝蔡の月
頃秋の面白き宕
ウ止事なき君も交りて鹿聞に
あやかりものといわれ初恋

(1)　(5)　(3)　(3)　(3)　(3)　(3)

願ふ神願わぬ迚も如才なし
誉られている勝公事の顔
ぼろ〳〵（潤ママ）になつて名高き星兜
須磨のあたりで鳴郭公
夏月の風をもて来る磯の浪
早く泊つて足洗ひける
禅僧の唐薬のよいも憎らしき
下になる蝶上になる花
品玉の手際見せたる春の暮

(3)　(3)　(3)　(4)



陽炎匂ふ新なる燭

ナヲ
牠のよごれ一入目に立て

金張付の広間まばゆき（潤ママ）

応といふ答もさすが御所めきし

浮世画人を器量見にやる（の ヒ）

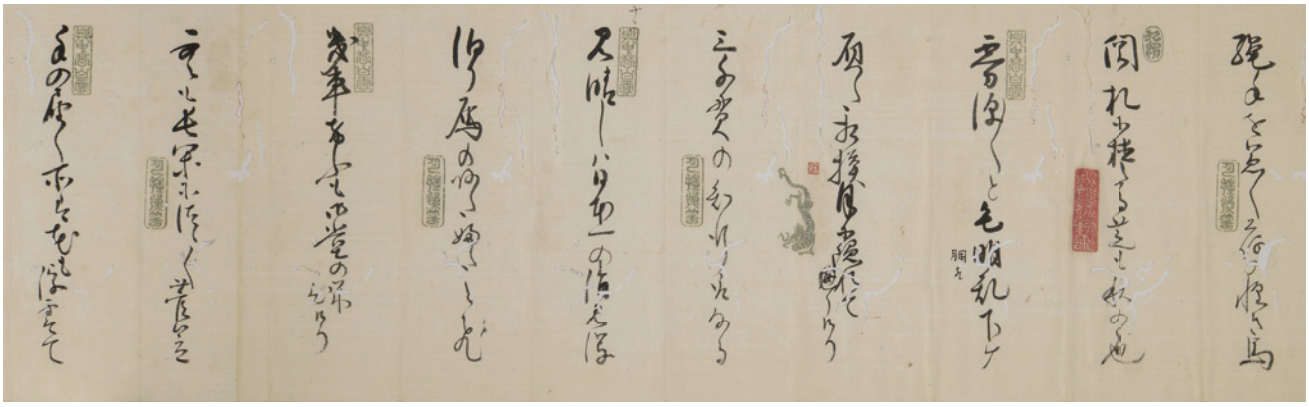
鏗琵琶の思ひの泪にて

枯た柳のなびく黒髪

暮かゝる日に戻り来る雪見舟

縄手を急ぐ荷の軽き馬

(3)　(3)　(3)　(5)　(7)　(6)



関札に植たる芝も秋の色

霧深〳〵と毛明乱下（胴か）ゲ

負た相撲月に隠れて通りけり

三千貫の知行取なる

ナウ
見晴しは日本一の海見潟

泊り烏のあたふたと飛

幾車けふも御堂の栄ひけり

空も長閑につゞく菅笠

手の届く所は花も浮雲で

(3)

隠れ里迄藤近き色

印 考

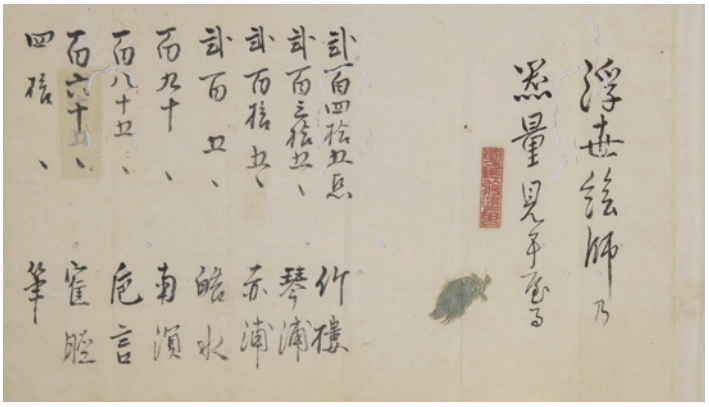
琢雲居 印

(8)

印 除之

応と言答も
さすが御所めきし

浮世絵師の
器量見にやる 印 印



二百四十五点 竹楼
二百三十五、 琴浦
二百 十五、 赤浦
二百 五、 皓水
百 九十 、 南溟
百 八十五、 巵言
百 六十 、 鶴脛
四十 、 筆

第二節　「廻状」をめぐって

資料Ⅱ「廻状」は、淀藩士連中が兼題によって発句を集め、資料Ⅲ「癸巳（天保四年）春興」、（以下、「春興」）を仕立て上げる様子がたどれるものである。

第一に、締め切りなどの日程を決め、連中毎に兼題を振り当てて回覧状を作成する。これが資料Ⅱ「廻状」である。

第二に、この「廻状」を回覧板の如くに回していく。連中は、淀城の周辺に居住しているので、容易く回覧することが可能である。淀城周辺図参照。

第三に、集まった句を清記する。資料Ⅲ「春興」である。そして、摺物にして配るのであるが、この摺物は管見に入らない。なお、同様な別の夏季の一枚があり、摺物に仕立てた可能性があるものの管見に入らない。資料Ⅳ「淀藩中夏興」、（以下、「夏興」）である。

左に資料Ⅱ「廻状」をみる。

初春の摺物相催度／思召候。御方々御出吟／臘[a]月三日、四日頃までに／御出し被成間敷候哉。尤／年玉[b]配の積。上池楼にて／題振[c]鬮、左の如に候へ共、／御つ合御差替は御勝手／次第。料[d]は一朱づゝ出し／銀高に摺物の数申付候。[e]

閏霜降月廿日　　藤枝　魚仏

冨原　支雪

畑　吟風

次第不同御免可被下候。　（中略）

早々御廻し奉届候。／且、[f]五日限。延し不申候。

右によると、傍線ａ一二月三、四日頃の締め切りで、傍線ｂ年玉配りの積りの初春の摺物のために句を集める。そのために傍線ｃ振り鬮で題を当てたが、傍線ｄ変更は勝手次第である。いつもの気の置けない間柄なのである。傍線ｅ料金は一人一朱。摺物の数は、集金の額によって決める。摺物に仕立てる代金を見込んでいるのである。傍線ｆ最終五日の締め切りで念を押す。

「廻状」の作成、責任者は、魚仏、支雪、吟風の三人で、この文書が畑家に残っていることから吟風の手になるものであろう。「春興」の筆記も同様である。振り鬮に際しては、先の三氏に以十が加わっている。なお、畑家に振り鬮に使用したと推察される駒のような札がある。凡そ縦四・〇糎、横一・五糎の竹製で、新年、春などの季題が記されている。これは、当座の席題、また月並などの兼題の振り当てにも利用できただろう。左にあげる。

振り鬮札

「廻状」の成立は、日付「閏霜降月廿日」から、天保三年閏一一月二〇日のことと知られる。「春興」の成立は、「癸巳」とあることから、天保四年のことである。「廻状」を受けて「春興」が成立したのである。

振り鬮をした上池楼は、淀藩士連中が芭蕉像を遷座していた場所である（第一章第六節 赤水「松は松」短冊前書参照）。島崎の御茶屋などと共に常の俳諧会場であったらしい（第二章第五節 島崎御茶屋俳諧興行参照）。なお、吟風に「島崎御露地の記」（畑忠良氏教示）があり、「其むかし永井侯作らせ給ふとかや」といい、風流に仕立てた亭と庭、花畑などがある。

次に、書き上がった「廻状」を回覧するのであるが、その連中の住所をみておく。第一章参照。

支雪　魚之市四軒屋住
鳳水　口魚之市住
雪川　口魚之市住
兎哉　魚之市与力町住
吟風　高島五番町住
柳江　高島六番町住
軽舟　高島六番町住
掬水　高島七番町住
大之　富田町住
赤水　富田町住

これらの住まいは、時々に移り確定できないが、淀城の周辺であることに変わりはない。淀城周辺図参照。

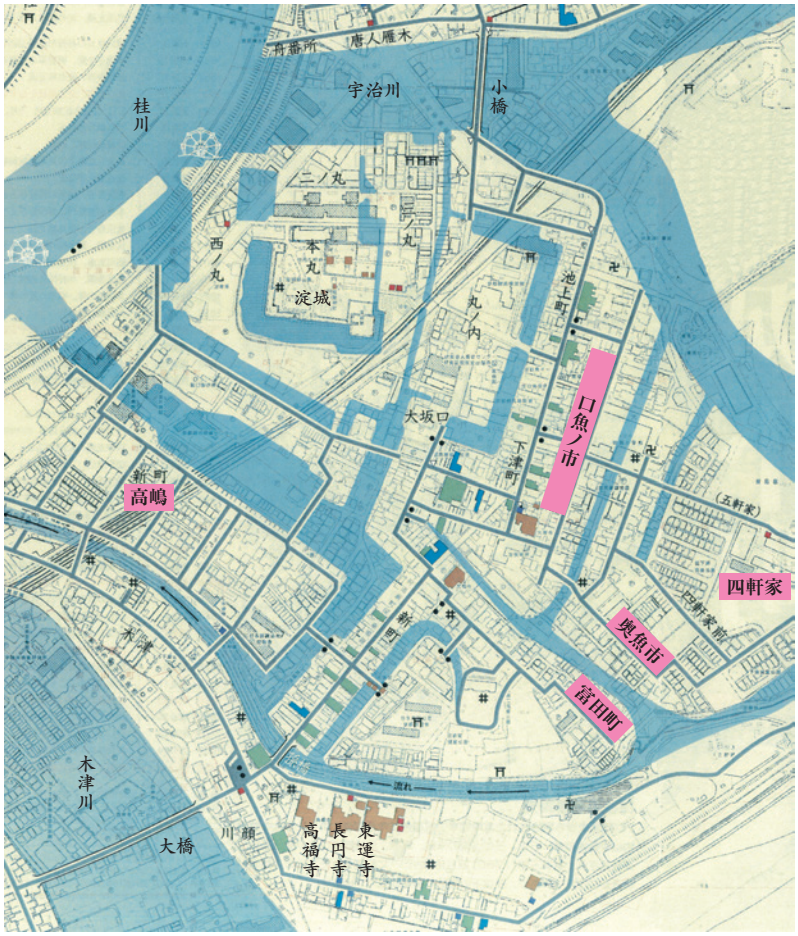
最後に、「廻状」中の季題と「春興」の句とを検討する。「廻状」の振り鬮題が割り当てられたのは二三名。なお「田辺」は別扱い。「春興」掲載句は二七。一致する入集者は二二名で、回覧があったうちの一名、源良は入集していない。そして、回覧がない五名が入集している。これには気の置けない俳諧環境があったことが推察される。具体的に見ると、「廻状」に名があり「春興」に載る者二二名のうち、振り当てられた季題どおりの句は一八、差し替えは次の四句。

軽舟「畑打」（廻状）→「若菜」（春興）
方水「雉子」　→「余寒」
友之「春雨」　→「雉子」
赫水「蛙」　→「山吹」

また、「廻状」にはないが「春興」にあるのが次の五名。梅洌「長閑」、鈍々「松の花」、一笑「春の海」、菊町「藤」の四名は、季題も人も新たなものである。ただし、残る一坡の句は、「廻状」で源良（「春興」に入句なし）にあてられた「汐干」である。

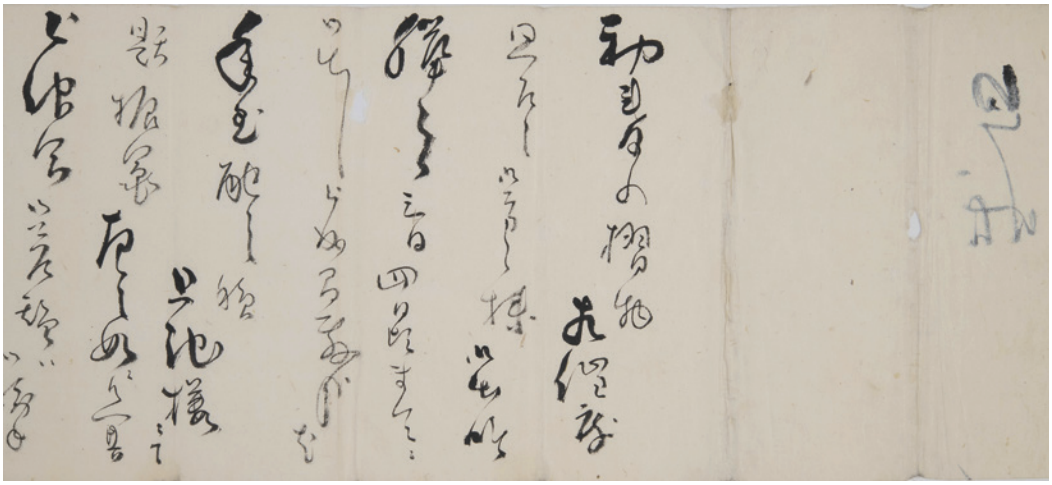
ところで、「春興」には、淀藩士連中とは別に洛東芭蕉堂主の蒼虬、呉明、とせ、榛堂（天保一〇年に芭蕉堂主となる朝陽の前号）が入集している。また、資料Ⅲ「夏興」の成立については、「春興」と様式や入集者の状況が似ており、友之の句が天保五年の『芳信集』にあることなどから、天保五年と推察されるが、やはり蒼虬と呉明、大坂の井眉が入集している。この様な市井の俳諧師との共同は折々に認められ、淀藩士連中の俳諧活動として注目される。

淀城周辺図

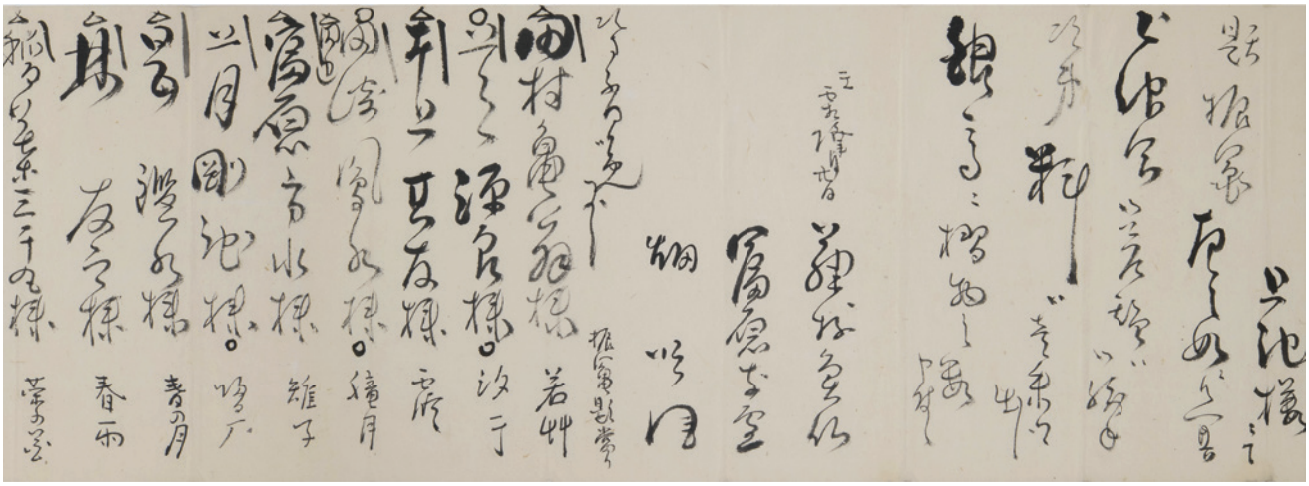


○資料Ⅱ「廻状」（1―39―23）縦一六・五糎、横一〇六・〇糎。

廻状　（裏）



初春の摺物相催度
思召候。御方々様御出吟
臘月三日、四日頃までに
御出し被成間敷候哉。尤
年玉配の積。上池楼にて
題振鬮、左の如に候へ共



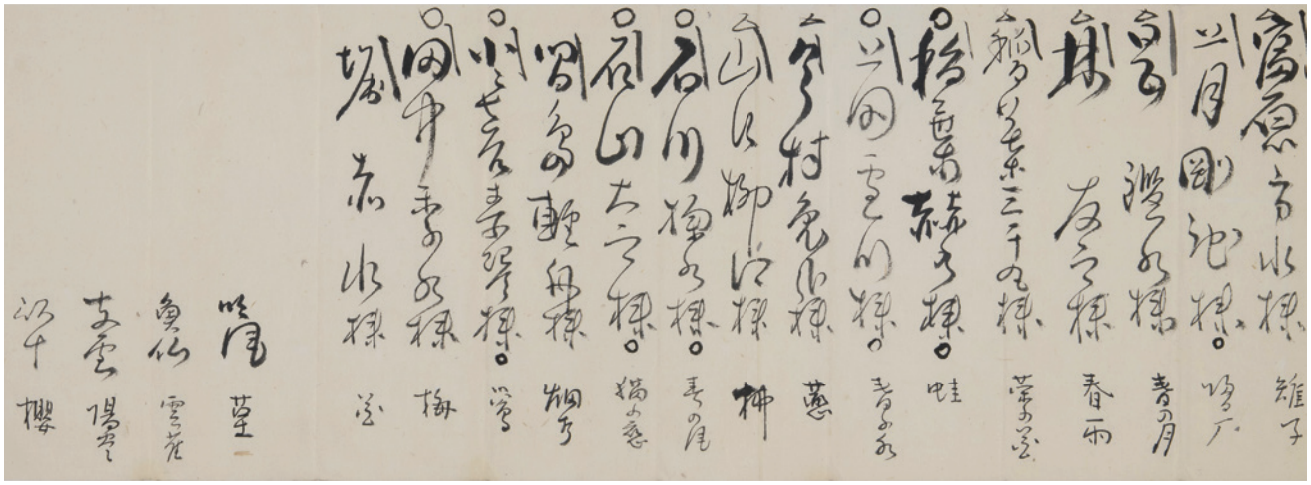
御つ合御差替は御勝手
次第。料は一朱づゝ出し
銀高に摺物の数申付候。

閏霜降月廿日　藤枝　魚仏
冨原　支雪
畑　吟風

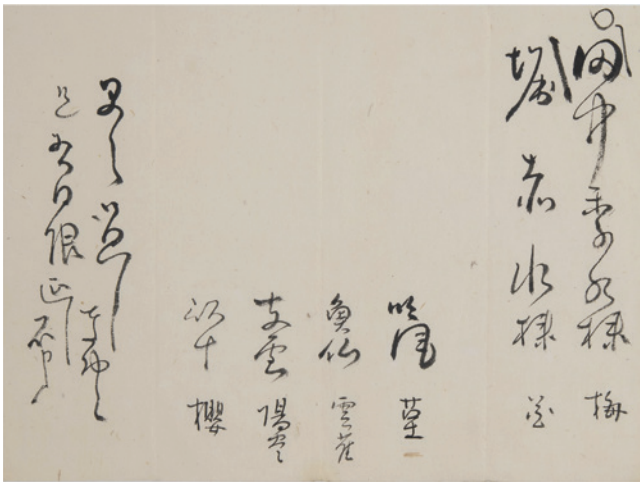
次第不同御免可被下候。

振鬮題当り

田村　亀翁様　若竹
上月　源良様　汐干
井上　其友様　霞
田崎　鳳水様　朧月
田辺
富原　方水様　雉子
上月　剛池様　帰る雁
岡　鑑水様　春の月
林　友之様　春雨



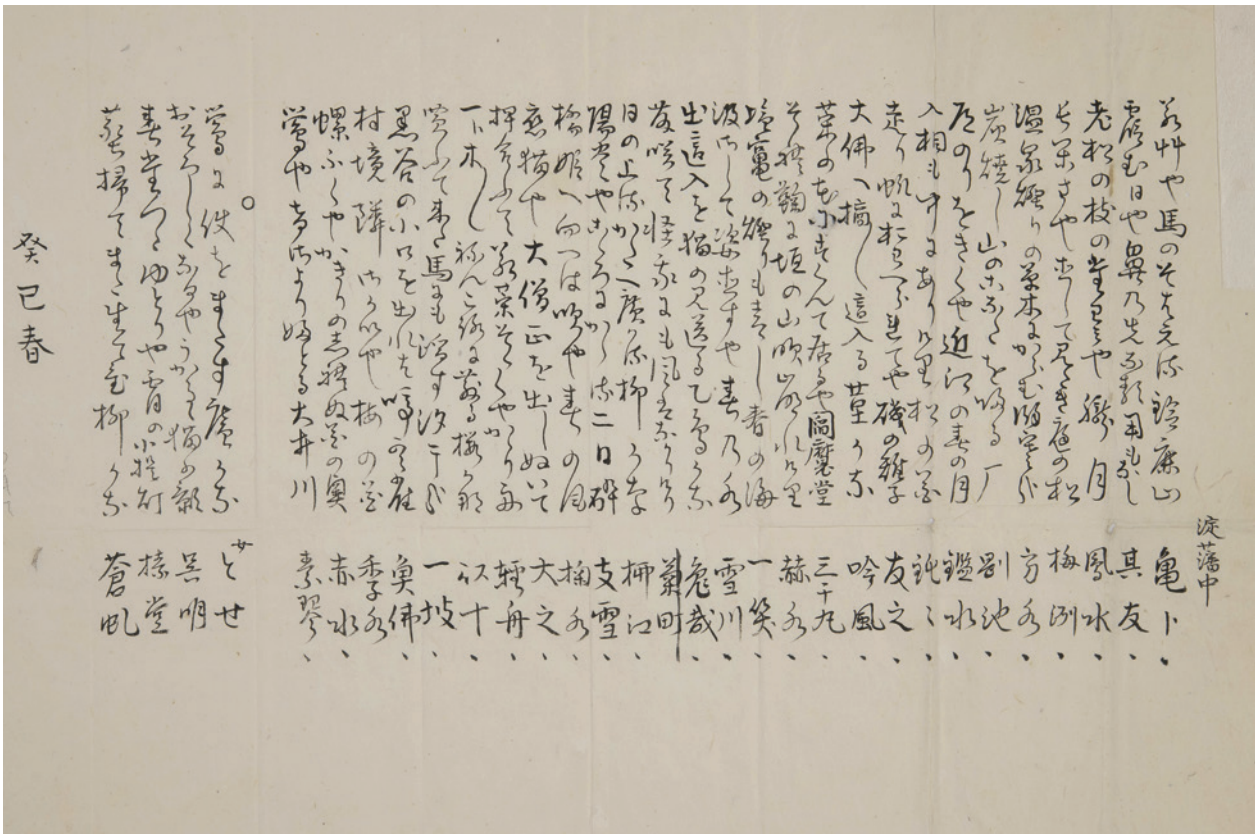
稲葉三千丸様　菜の花
稲葉　赫水様　蛙
上田　雪川様　春の水
今村　兎哉様　燕
山口　柳江様　柳
石川　掬水様　春の風
石山　大之様　猫の恋
間島　軽舟様　畑打
小長谷素琴様　鶯
田中　季水様　梅
堀　赤水様　花



吟風　菫
魚仏　雲雀
支雪　陽炎
以十　桜

早々御廻し奉届候。
且、五日限。延し不申候。

注　傍線、記号等は省略した



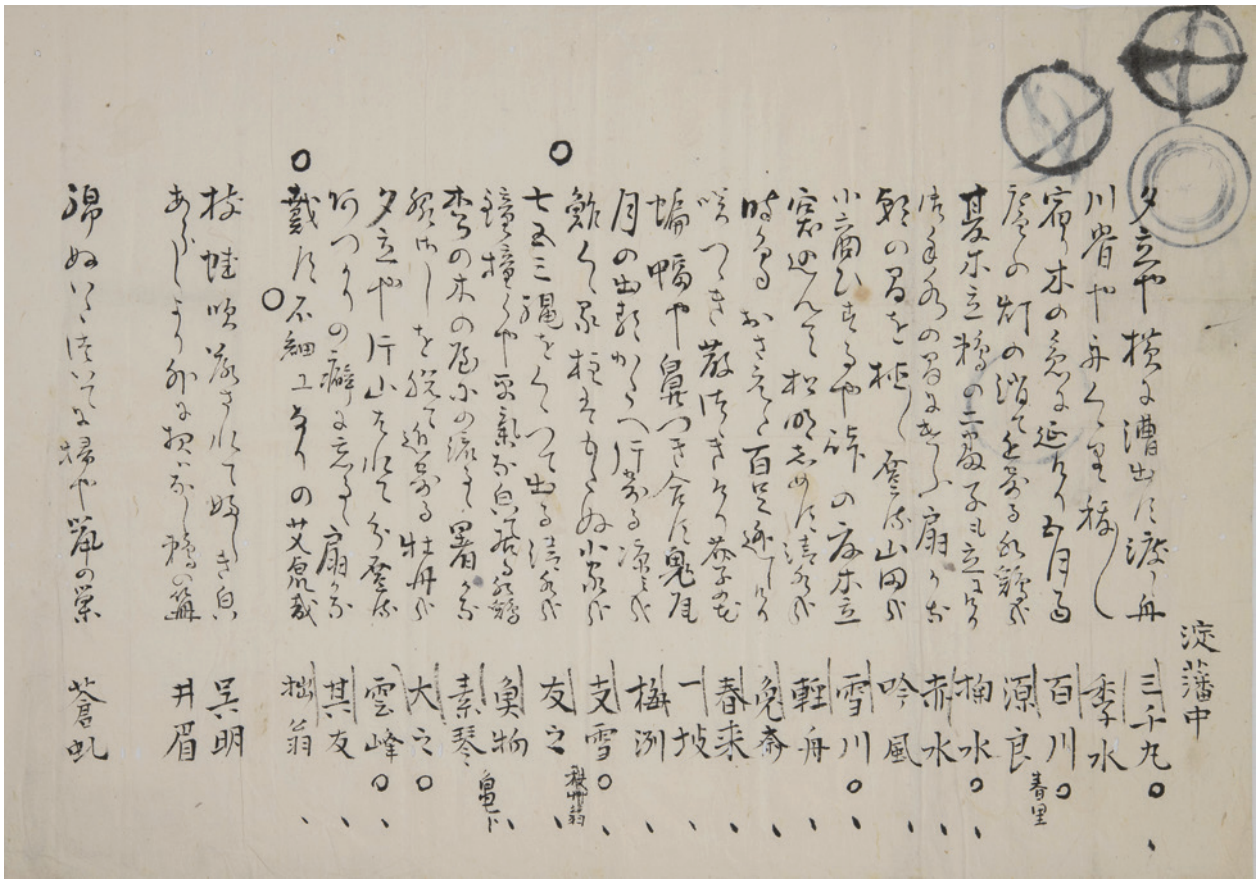
若草や馬のそばえる鈴鹿山　淀藩中
霞む日や鼻の先なる用もなし　亀卜
老松のえだのたわみや朧月　其友
長閑さや直して見たき庭の松　鳳水
温泉煙りの草木にからむ余寒哉　梅洌
炭焼し山のこなたを帰る雁　方水
道のりをきくや近江の春の月　剛池
入相も中にありけり松の花　鑑水
走り帆におわへられてや磯の雉子　鈍々
大仏へ摘〳〵這入る菫かな　友之
菜の花にすくんで居るや閻魔堂　吟風
それ鞠に垣の山吹崩れけり　三千丸
塩竈の煙りも青し春の海　赫水
汲さして姿直すや春の水　一笑
出這入を猫の見送る乙鳥かな　雪川
藤咲て怪我にも風はなかりけり　兎哉
日の上るかたへ広がる柳かな　菊町
陽炎やこゝろにかゝる二日酔　柳江
橋姫へ向へば吹や春の風　支雪
恋猫や大僧正を出しぬいて　掬水
押合ふて若菜そゝぐやかゝり舟　大之
一ト木〳〵ねんごろに散る桜かな　軽舟
買ふて来た馬にも蹈す汐干哉　以十
黒谷の小口を出れば啼雲雀　一坡
村境隣ざかいや梅の花　魚仏
螺ふくやかぎりのしれぬ花の奥　季水
鶯やけさよりふとる大井川　赤水
　　素琴

○

鶯に使をまたす庵かな　女とせ
おそろしくなるやうかるゝ猫の影　呉明
春たつたゆとりや宵の小提灯　榛堂
塵掃てまた生てむ柳かな　蒼虬

癸巳春

○資料Ⅳ　天保五年推定 淀藩中 夏興（1―39―20）縦二七・〇糎、横四二・〇糎。



淀藩中

夕立や横に漕出す渡し舟
川骨や舟くゞり抜〳〵
宿り木の急に延けり五月雨
庵の灯の消て近寄る水鶏哉
夏木立鵜の二番子も立にけり
御手水の間に遣ふ扇かな
朝の間を植〳〵登る山田哉
小商ひするや峠の夏木立
突込んで松明しめす清水哉
時鳥おさえた百足逃しけり
咲つゞき散つゞきけり芥子の花
蝙蝠や鼻つき合す鬼瓦
月の出るかたへ片寄る涼み哉
鮓くゝる柱はもたぬ小家哉
七五三縄をくゞつて出る清水哉
鐘撞くや平気な貌で居る水鶏
松の木のやにの流るゝ暑かな
脇ざしを脱で近寄る牡丹哉
夕立や片山はれて分登る
あつがりの癖に忘るゝ扇哉
戴す不細工なりの艾虎哉

○

枝蛙吹落されてふしぎ貌
あらしより外に夜はなし鵜の簗
綿ぬいたついでに掃や鼠の巣

淀藩中

三千丸
季水
百川
源良　春里
掬水
赤水
吟風
雪川
軽舟
兎斎
春来
一坡
梅洌
支雪
友之　秩草翁
魚物
素琴　亀卜
大之
雲峰
其友
拙翁

呉明
井眉
蒼虬

注　傍線、記号等は省略した

ここで資料Ⅴ、Ⅵによって支雪、吟風を中心の第二期淀藩士連中の俳諧活動を補足する。

資料Ⅴは、文政七年八月の月並の様子が知られる奉額の下図である。連中は、其友、吟風、支雪、大之、軽舟、掬水、赤水と、総じて淀藩士連中であり、藩士のみによる月並の一形態である。額は白木で、縦二尺計、横三尺五、六寸、中の縁は黒塗り。但し、金物等にするのもお好み次第という。短冊板は白木で、額の横から差し込むように作られている。そして、「短冊板掛替ニテ月々懸直ス」と、短冊板は月々に掛け変えられるのである。吟風の作と推察される。

資料Ⅵは、龍椿の雛画を添えて、漢詩、和歌と俳諧の合作の華やかな一枚摺である。淀藩士の文芸の広がりが知られる貴重な一枚である。俳諧は、鳳水、其友、剛池、鑑水、吟風、三千丸、柳江、大之、軽舟、士常、赫赤水、支雪が淀藩士で、文政頃に句作が認められる常連である。その他の湖月、幸柳（以上、南山城八幡）、光山（深草）、秩草（淀）などは淀近隣の人々である。他に芹渚、双烏、螺舟、唐洌、まき女、普石、蝶城がいる。淀藩士連中にかかわる人々であろう。

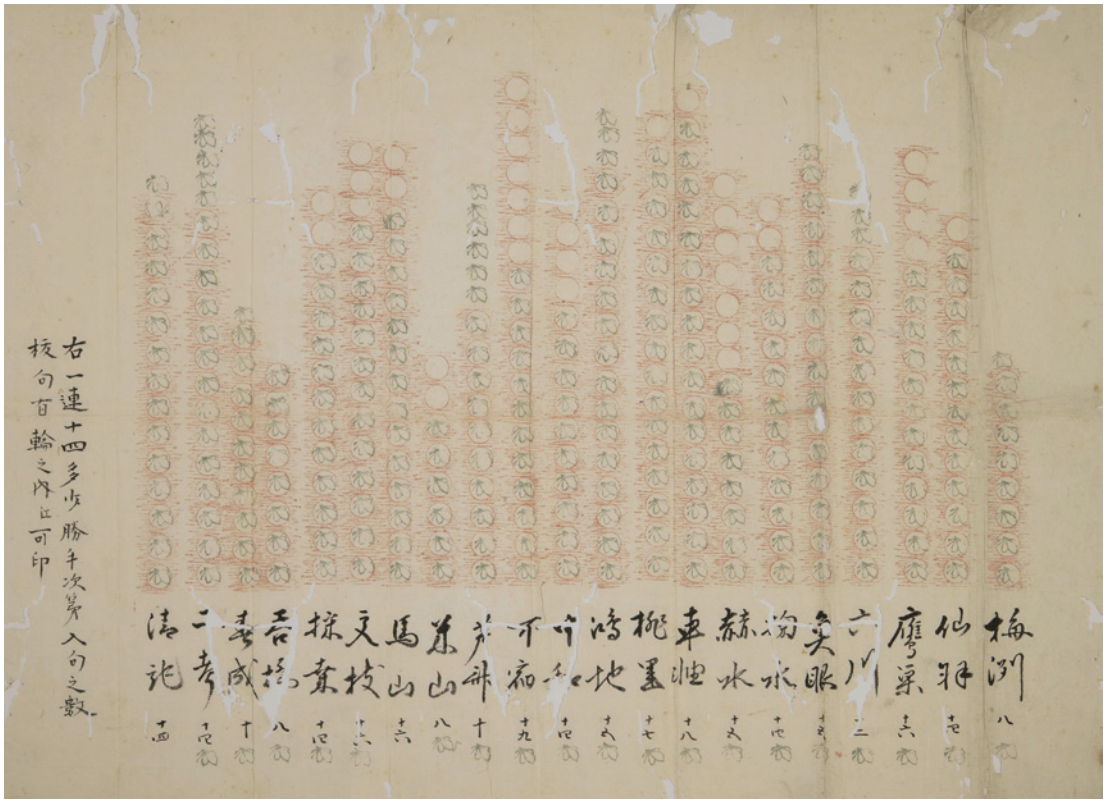
また、吟風を中心とする第三期淀藩士連中の俳諧活動を補足する。

資料Ⅶは、秀句採点表である。以前からの常連は掬水、鷹巣、梅洌、赫水、であるが、多くは若手の連中である。吟風が若手の連中を俳諧へ誘い、自らは指導者的立場であったと推察される。本章第六節の「芭蕉忌俳諧之連歌」の連中と重なり、併せて考察すべき資料である。

○資料Ⅴ　文政七年月々発句合奉額写（2―27）縦二四・〇糎、横四九・〇糎。

○資料Ⅵ　松川龍椿画一枚摺（2-11-2）縦三八・〇糎、横五一・五糎。

○資料Ⅶ　秀句採点表（2-29）縦三六・〇糎、横四九・〇糎。



第三節　文政八年 霜月俳諧之連歌

本懐紙（2–16–3）は、文政八年一一月の歌仙興行。端作り「文政八丙年霜月興行」。縦一八・三糎、横四二・五糎。

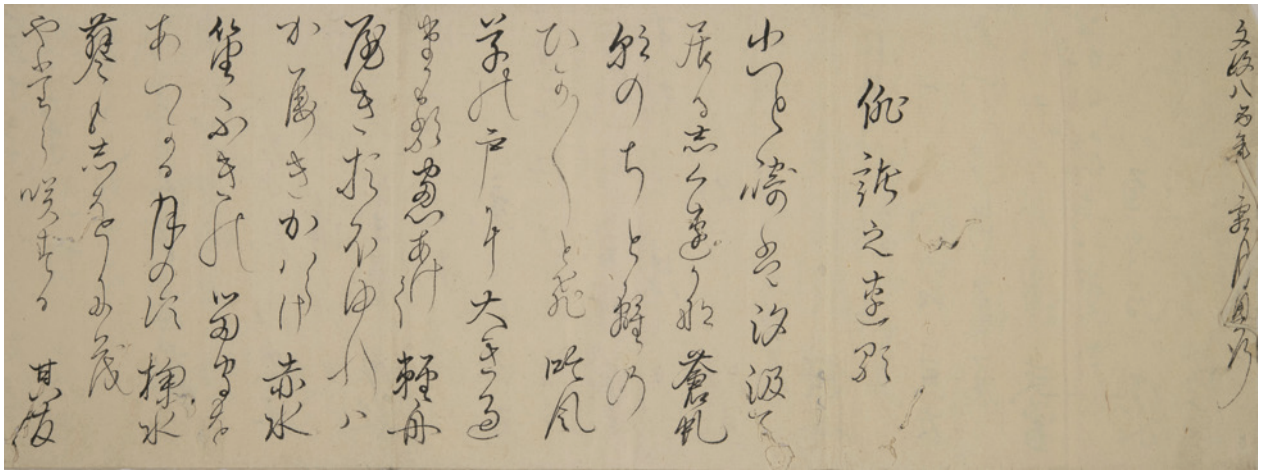
連中は、蒼虬（三句）、吟風（四句）、軽舟（四句）、赤水（四句）、掬水（三句）、其友（三句）、支雪（三句）、蘇山（三句）、鶯斎（二句）、鳳水（三句）、光山（三句、ただし鶯斎二句、蒼虬による代作）。

発句は蒼虬で主客の扱い。脇は吟風で、本懐紙が畑家に蔵されていることから、亭主と推察される。次のごとく、発句は霜月興行なので「しぐれ」を詠み込み、眼前の景で挨拶をする。脇は、千鳥が飛ぶ景で受け、「ぴか〳〵」に亭主の心弾みを示す。

出と崎は汐汲て居るしぐれかな　蒼虬
朝のちどりのぴか〳〵と飛　吟風

淀藩士連中は、軽舟、赤水、掬水、其友、支雪、鳳水の常連である。蒼虬、蘇山、鶯斎、光山（深草の人、龍椿画一枚摺より）は市井の俳諧師。「霜月興行」というところから、淀藩士連中の月並であると知られるが、市井の俳諧師を交える興行は珍しくない。

ところで、蒼虬が芭蕉堂主になるのは寛政一一年であるが、文政年間以降は芭蕉堂の『花供養』の刊行などが怠りがちである。それは、二条家俳諧宗匠や地方俳諧の指導、援助に携わっていたからであると推察される。淀藩士連中の俳諧に参与するのもその一端であろう。



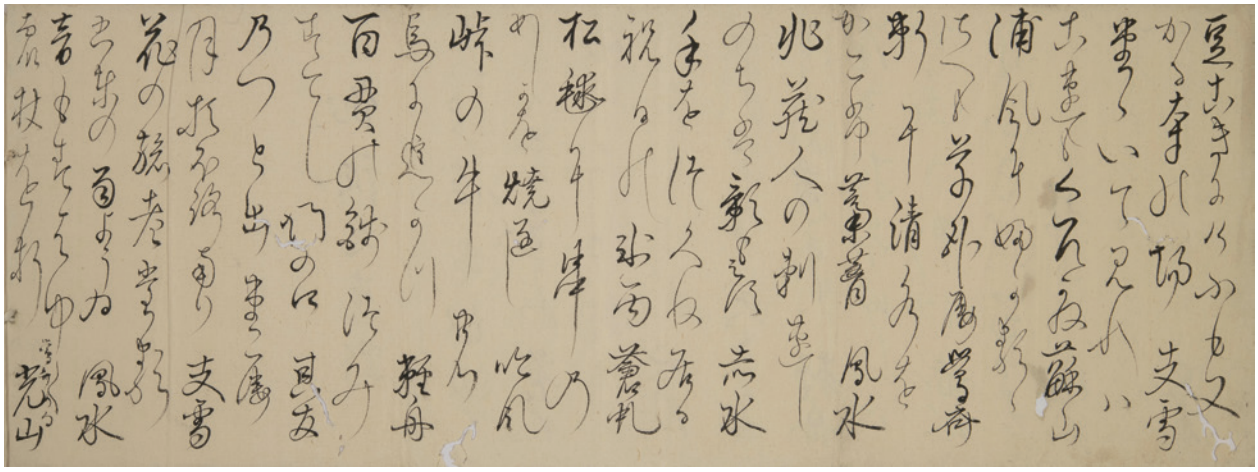
（一表）

文政八丙年　霜月興行

俳諧之連歌

出と崎は汐汲て　蒼虬
居るしぐれかな
朝のちどりの　吟風
ぴか〳〵と飛
草の戸に大き過　軽舟
たる窓あけて
やきおぼゆれば　赤水
かるきかはらけ
笛ふきの留守を　掬水
あづかる月の頃
蓼もしをにも　其友
やたら咲する

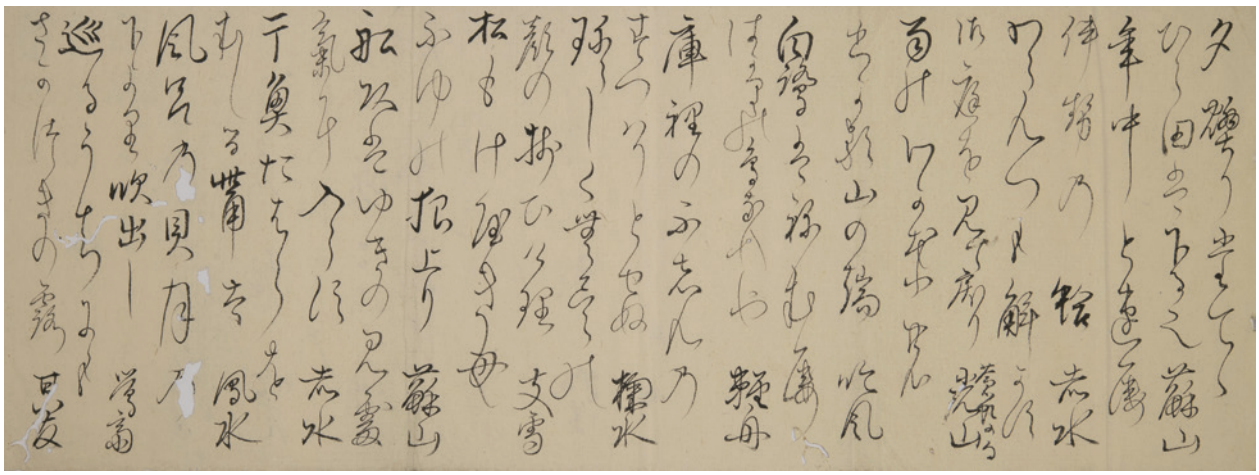
（一裏）



豆こきにけふも又　支雪
かる寺の場　蘇山
たゝいて見れば　赤水
これもくろがね　鳳水
浦風にふかるゝ　鶯斉
さへも草臥る　吟風
軒に清水を　蒼虹
かこふ藁葺　吟風
非蔵人の刺れし　軽舟
のちは影もみず　其友
手をつくね居る　支雪
祝日の氷雨　鳳水
松毬に串の　光山（鶯斎の句）
めじかを焼返し　
峠の牛の　
馬に追かつ　
百貫の銭つみ　
すてし門の口　
のつと出たる　
月おぼろなり　
花の旅老たる　
ひとの雨ようゐ　
音もすはゆく　
虎杖を折　

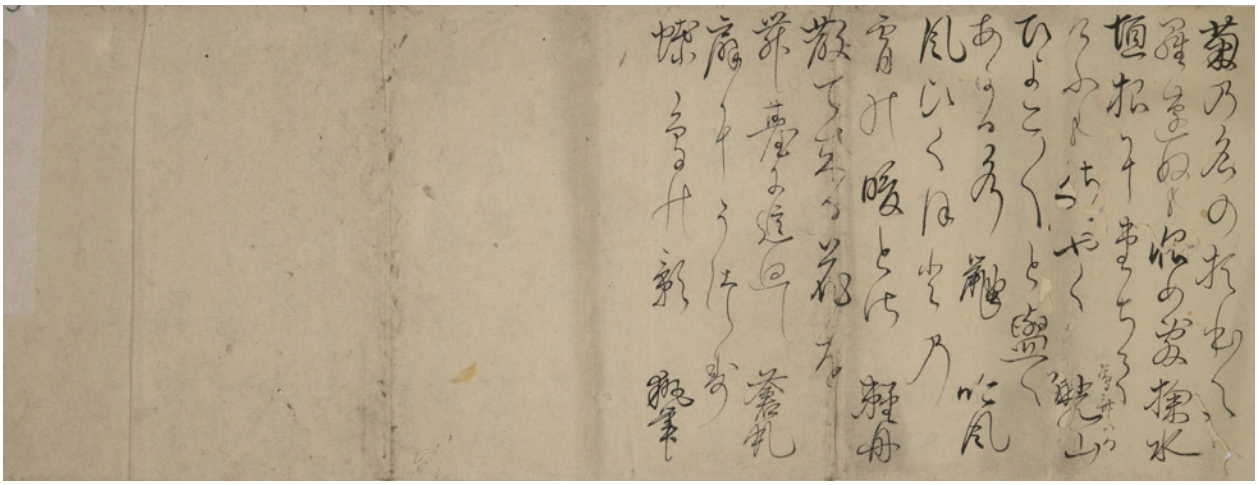
光山」一ウ

（二表）



夕煙りたてゝ　蘇山
ひら田は下る也　赤水
年中とれる　鳳水
伊勢の蛤　光山（蒼虹の句）
わらんづも解かず　吟風
御庭を見て戻り　軽舟
雨のわか葉の　掬水
ひかる山の端　支雪
白鷺はねむる　蘇山
ばかりの鳥なれや　赤水
庫裡のふしんの　鳳水
すつぱりとせぬ　鶯斎
弥らしく無尽の　其友
顔の揃ひけり
松もけやきも
ふゆの根上り
船頭はゆきの見処
気に入らず
干魚だはらを
むしる背太
風呂の貝月の
下より吹出し
巡るうちにも
さかづきの露

其友」二オ



（二裏）

菊の名のおぼえ
られぬも恨め敷　掬水
垣根にたちて
けふもさゝやく　光山（鶯斎の句）
ひよこ〳〵と盥へ
あがる水鼬　吟風
風ひくほどの
宵の暖とさ　軽舟
散て来る花を
舞台に追廻し　蒼虬
扇にうつす
蝶鳥の影　執筆」二ウ

第四節　文政一一年 竹楼追善俳諧之連歌

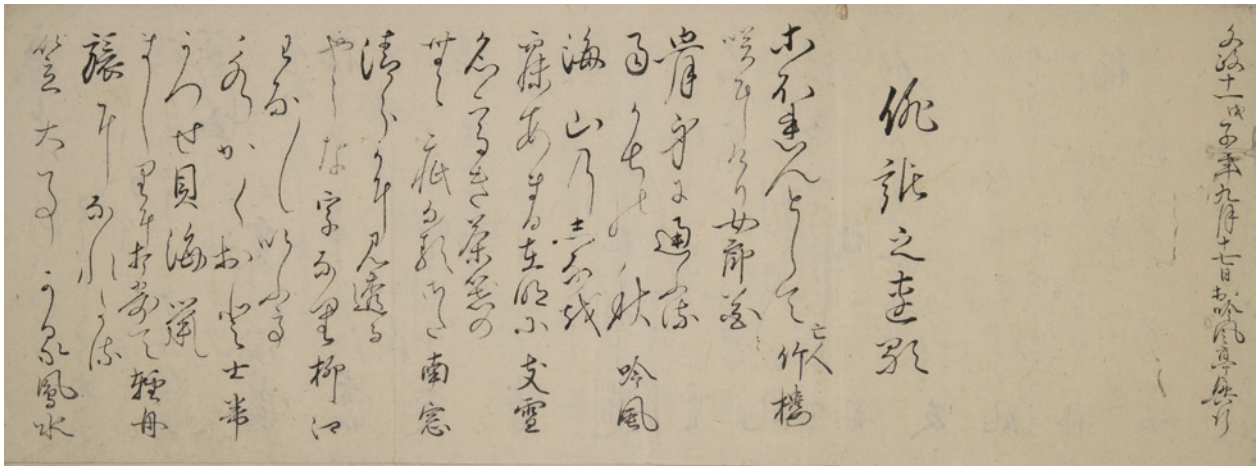
本百韻（2-16-2）は、文政一一年九月一七日、吟風亭においての父竹楼の追善百韻興行である。竹楼は文政一一年六月六日卒。端作り「文政十一戊子年九月十七日 於吟風亭興行」。縦一八・五糎、横五〇・一糎。

連中は、吟風（一三句）、支雪（一〇句）、南窓（三句）、柳江（六句）、士常（六句）、軽舟（一三句）、鳳水（五句）、大之（四句）、掬水（七句）、芹渚（三句）、赤水（七句）、其友（一二句）、筠圃（五句）、剛池（四句）。竹楼と旧知の淀藩士連中である。なお、芹渚は、龍椿画一枚摺では、淀藩士連中の並びにいる。

竹楼の句は、「こぼれんとして咲にけり女郎花」。追善の当季にあわせて秋の句が発句に選ばれている。女郎花は嫋やかで、女性に準えられることが多い。「ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花　芭蕉」（更科紀行）や、「女郎花秋の野風にうち靡き心ひとつをたれに寄すらむ　藤原時平」（古今和歌集 二三〇）など和歌にも多い。竹楼句の、ゆらゆらと揺れている様子を「こぼれんと」と捉え、花びらがこぼれれば死を喚起し、追善句にふさわしい。

吟風の挨拶句の後は、それぞれが自在に句を詠み継ぎ、最後の匂いの花の句は士常で、穏やかに追善の場の花は匂い、挙句で竹楼の魂は西方浄土へと導かれていったと結ぶ。

おだやかな空に御法の花かほる　常
くれおそき日も西へ入りけり　筆

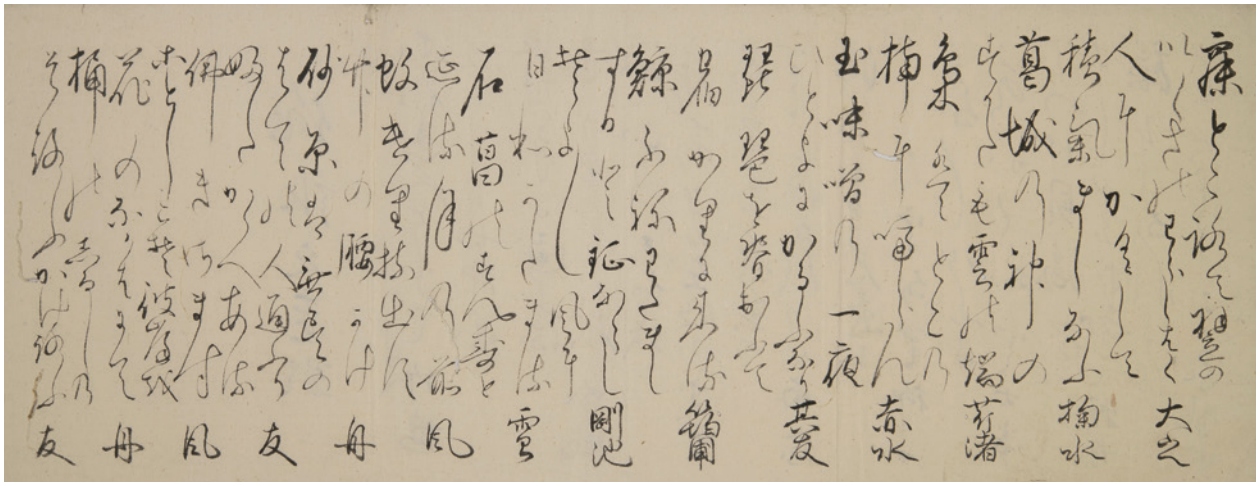


（一表）

文政十一戊子年九月十七日
於吟風亭興行

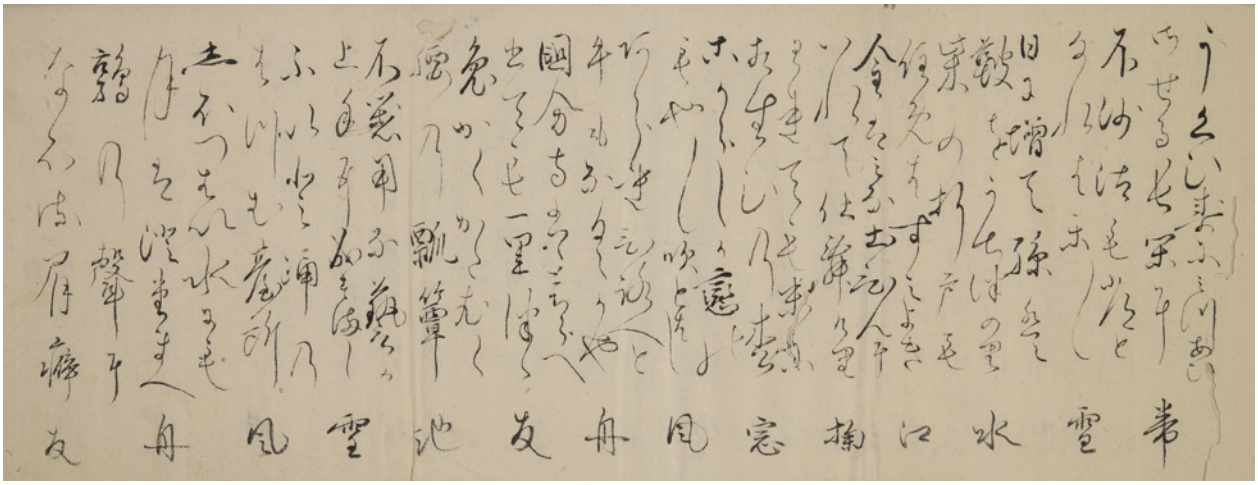
俳諧之連歌

こぼれんとして　亡人竹楼
咲にけり女郎花
骨身に通ふる　吟風
雨がちの秋
海山のしなを　支雪
寝あまる在明に
名高き茶器の　南窓
無疵なるさた
清らかに見透る　柳江
やうな字なり
わな〳〵いふて　士常
氷かくおと
うつせ貝海鼠　軽舟
まじりに打寄て
旅になれたる　鳳水」一オ
笠大事がる



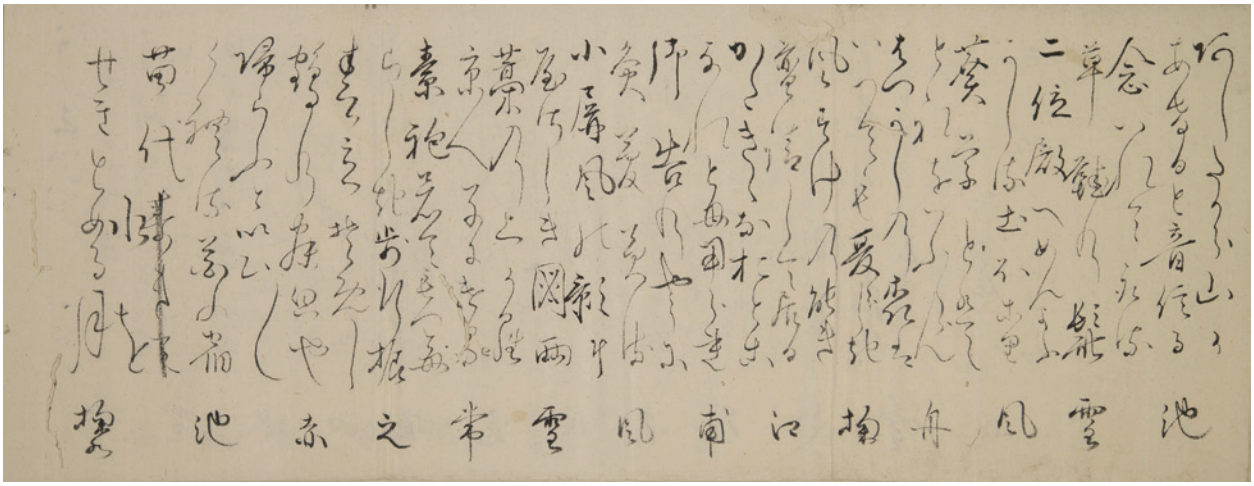
（一裏）

寝どころで翌の　大之
いくさのわらじはく
人にかくして　掬水
積気まじなふ
葛城の神の　芹渚
すがたも雲の端
梟はどこの　赤水
楠に啼らん
玉味噌の一夜　其友
ひとよにかるふなり
琵琶を背おふて　筠圃
宿かりに来る
鯨ぶねわたまし　剛池
すると鉦ならし
そよ〳〵風に　雪
日和かたまる
石菖のずんずと　風
延る月の前
蚊遣り揃出す　舟
竹の腰かけ
砂原は無尽の　友
はての人通ふ
ふたかゝへある　風
仏きざます
ことしこそ彼岸を　舟
花のなかばにて
桶のしるしの　友」一ウ
そろふかげろふ



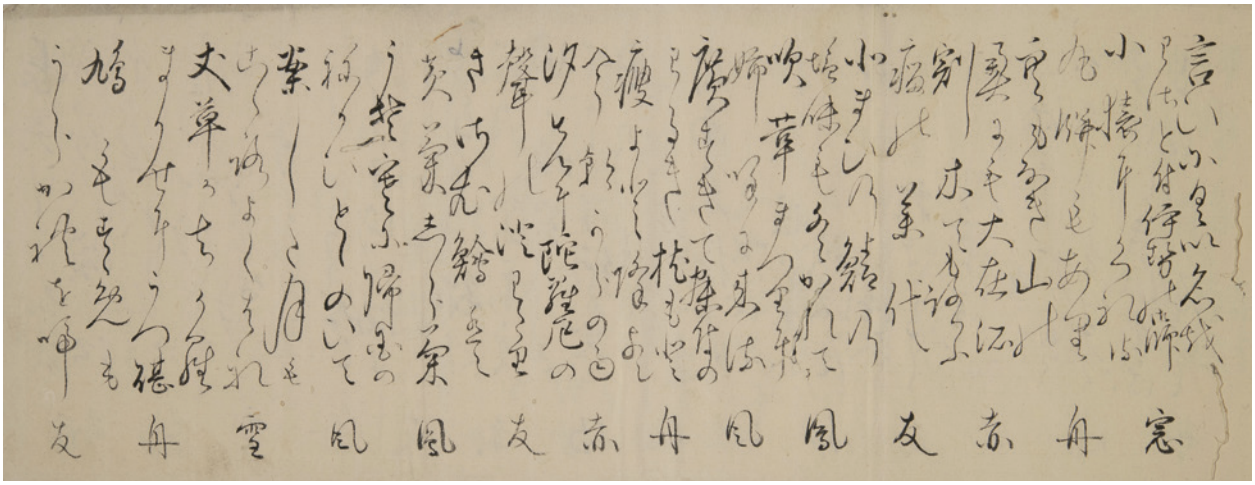
（二表）

うぐひすにみづあび　常
させる長閑に　常
不沙汰も常と　常
なれば楽〳〵　雪
日に増て孫は　雪
鞁をうちつのり　水
柴の折戸も　水
住めばすみよき　江
金はみな土びんに　江
いれて仕舞けり　掬
われても末に　掬
相生ひの松　窓
こがらしの恋の　窓
もや〳〵吹とばし　風
あられひろへと　風
牛もなくかや　舟
国分寺はどちらへ　舟
出ても一里づゝ　友
兎かくかたむく　友
腰の瓢簞　池
不器用な芸が　池
上手に成すまし　雪
ふいと踊の　雪
はづむ台所　風
しほつぱい水にも　風
月は澄たまへ　舟
鶉の声に　舟
なほる肩癖　友」二オ



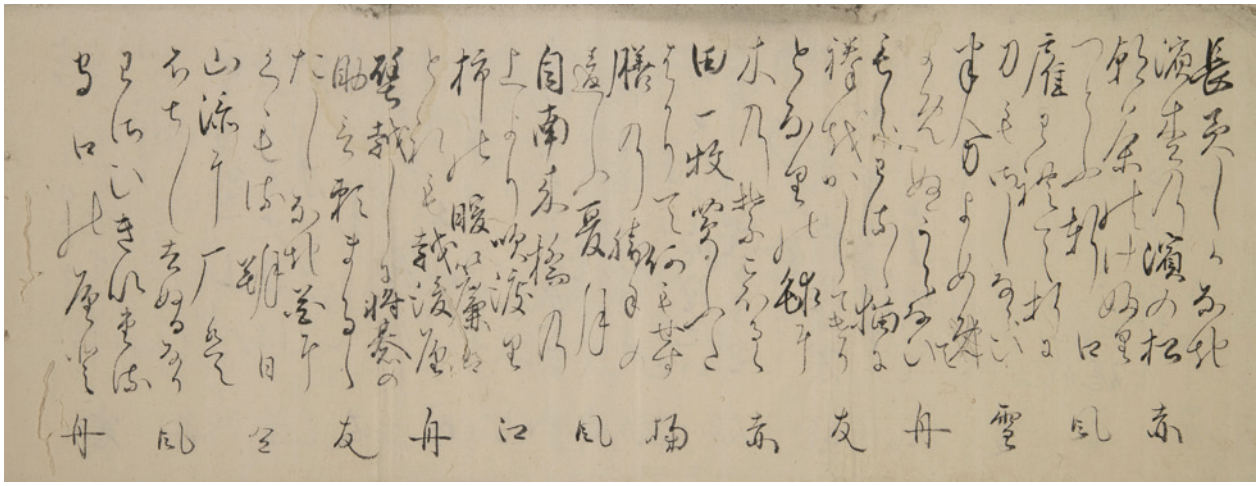
（二裏）

あしたから山が　池
あけると音信る　池
念いれて取る　雪
草鞋の髭　雪
二位殿へめんよふ　風
がらる土ぼこり　風
葵草とは　舟
どれをいふらん　舟
はづかしの森は　掬
いつでも夏らしき　掬
風すけの能き　江
普請して居る　江
かたぎゝなおとこ　甫
なれども用られ　甫
御告のやうに　風
灸夢みる　風
小屏風の影に　雪
やさしき魍魎　雪
藁の上から　常
京へ子に遣る　常
素袍着てもつとも　之
らしき歩行振　之
春立そめし　赤
鶴の寝貌や　赤
帰らふといひ〳〵　池
くれる花の宿　池
苗代すまて（水を）　掬水」二ウ
せきとめる月



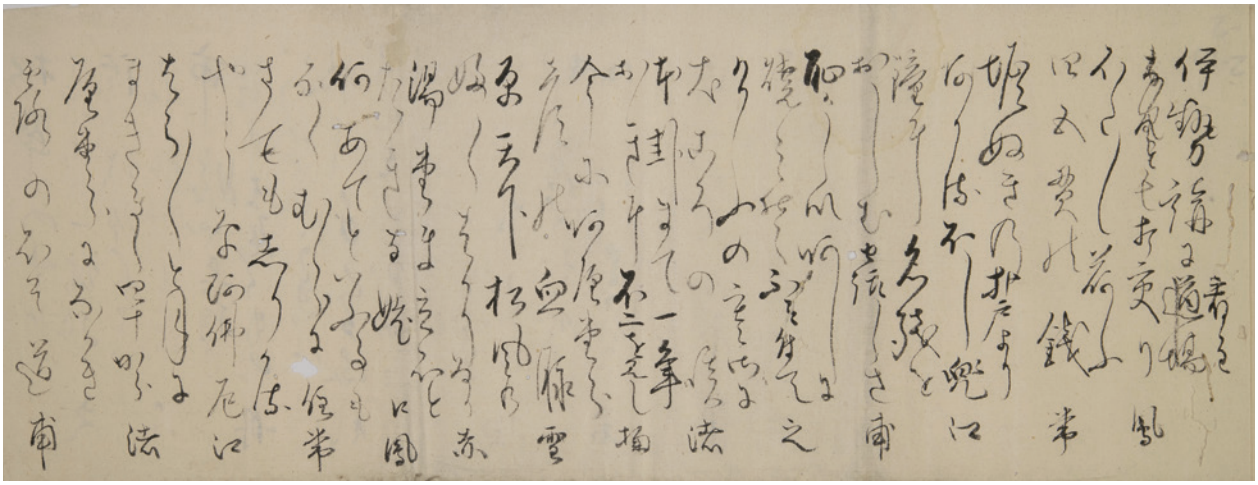
言ひにくい名を　窓
わざと付伊勢の御師　舟
小猿にくれる　赤
丸餅もあり　友
空もなき山の　風
奥にも大在所　鳳
割木でもろふ　舟
瘤の薬代　赤
北まひの鯖の　友
塩味も冬がれて　風
吹革まつりに　鳳
姉呼に来る　舟
広すぎて寝付の　赤
わるき枕もと　雪
痩よと降か　風
今朝からの雨　友
汐先に陀羅尼の　舟
声の澄わたり　雪
きざむ鱠は　風
黄菊しら菊　舟
うそ寒に帰国の　友
ねがひとゝのひて
案じた月も
こゝろよくはれ
丈草がちから
まかせにうつ碪
鳩もすゞめも
うらがれを啼

（三表）



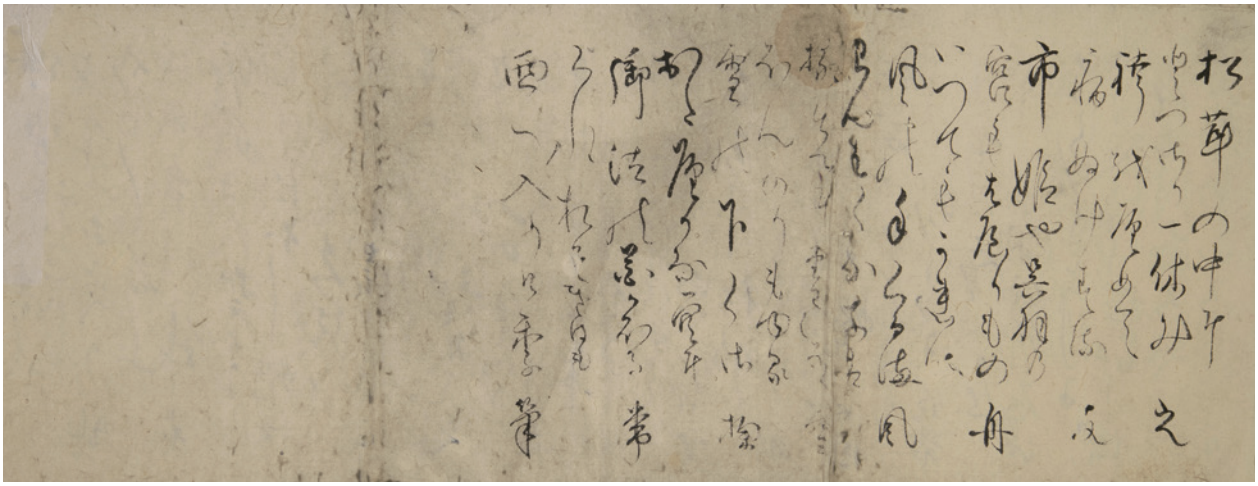
長みじかなき　赤
浜松の浜の松　風
朝茶のけぶり　雪
つどふ軒口　舟
雇われて折に　赤
刀もさしならひ　風
半分よめぬ　鳳
のめぬうらなひ　舟
もらわるゝ猫に　友
襷をかして遣り　赤
となりの毬に　掬
木の葉こぼるゝ　風
田一枚買ふた　江
ばかりで何もせず　舟
膳の勝手の　友
違ふ夏月　風
自南来橋の　仝
上より吹渡り　風
柿の暖簾は
どれも越渡り
壁越しに将碁の
助言頼まるゝ
たしなき花に
くもる朔日
山添に雁は
ぼち〳〵去ぬるなり
わさびきいたる
守口のりと

（三裏）



（四表）

伊勢講に道場（看主）
もゆ（なん）ども打交り
ほた〳〵荷ふ　鳳
四五貫の銭　常
堀ぬきの井戸より
あがるほし兜　江
鐘に名残を
おしむ世話しさ　甫
恥かしいあしに
焼みそふみ付て
けふの寒さに　之
犬ころの咳　渚
本卦まで一年
おきに不二を見し　掬
今にありたら
彦の血脈　雪
原天下松風の
ふくばかりなり　赤
湯だま立ほど
たぎる姥口　鳳
何あてといふ事も
なくむらに住　常
さてもしりがる
やうな阿仏尼　江
はら〳〵と月に
まぎるゝ四十から　渚
やたらになながき
露のほそ道　甫」四オ



（四裏）

松茸の中に
どつさり一休み　之
袴をやめて
病ぬけする　友
市姫や呉羽の
宮もはやりもの　舟
いつでもかれ□
風の手ぐるま　風
わんぱくな子は
椽先にたわ□□□　雪
ほんのりもゆる
雪の下くさ　掬
おだやかな空に
御法の花かほる　常
くれおそき日も
西へ入りけり　筆」四ウ

第五節　文政一二年 於島崎御茶屋俳諧之連歌

本懐紙（2–16–1）は、文政一二年三月一九日、島崎の御茶屋においての歌仙興行である。端作りは「于時文政十二丑年三月十九日於島崎御茶屋興行」。縦一八・五糎、横五〇・〇糎。

島崎の御茶屋は、吟風による「島崎御露地の記」（畑忠良氏教示）によれば、「其むかし永井侯作らせ給ふとかや」といい、風流に仕立てた亭と庭、泉水や花畑などがある。連中の多くが居住する新町の西側に隣接する。淀城の南西、淀川と木津川とが合流する辺り、淀川に面し、淀の下流側の水車の下手である。連中は、支雪（四句）、柳江（五句）、剛池（四句）、赤水（四句）、吟風（四句）、鳳水（四句）、其友（三句）、掬水（四句）、大之（三句）の常連の藩士連中である。しばしばこのような俳諧を楽しんでいたのであろうが、市井の俳諧師を交えないのは珍しい。

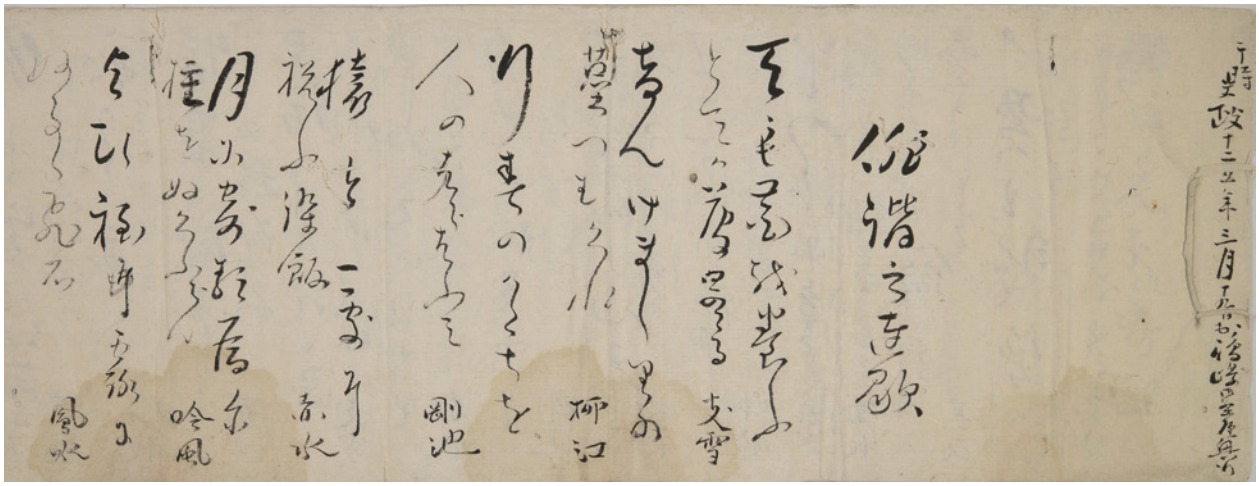
発句は、「天も花を養ふとてか薄曇る　支雪」。三月興行なので当季を詠む習慣から、初裏の花を引き上げている。自在である。また、二丁表九、十句目、

柿袴はかぬ昔のなつかしき　　其友
竹を自由に細工するなり　　支雪

これらの句からは、袴を付けて忙しい人物が、昔に思いを馳せ、竹細工を気儘にやる様子が浮かんでくる。柿袴は、町人が着用するもので、

いそがしき春を雀のかきばかま　　洒堂（炭俵）

の句がある。支雪はふと、吟風の器用な細工物に思いが及んだのかもしれない。



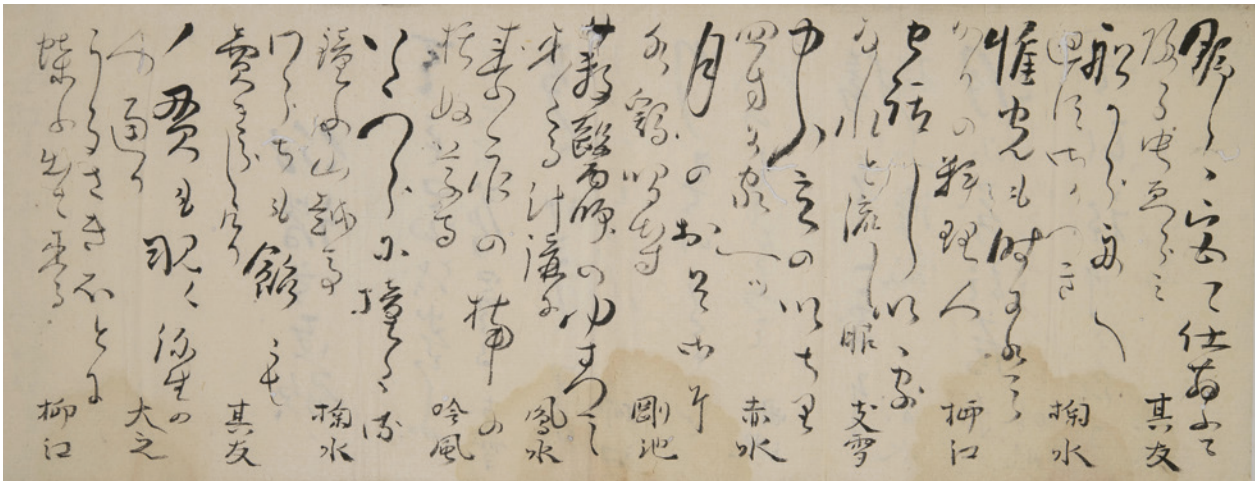
（一表）

于時文政十二丑年三月十九日
於島崎御茶屋興行

俳諧之連歌

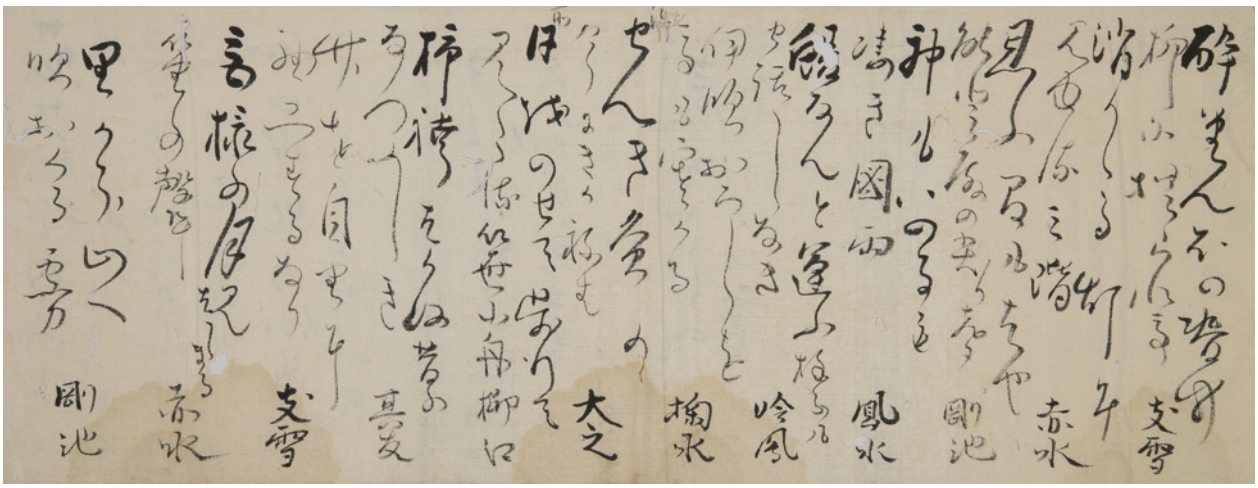
天も花を養ふ　支雪
とてか薄曇る
げんげまじりの　柳江
菫つむくれ
行春のかたちを　剛池
人のはらばふて
猿を一処に　赤水
祝ふ染飯
月に寄る烏に　吟風
柱をぬぐふらん
よひ程は露に
ぬる、飛石　鳳水」一ォ

（一裏）

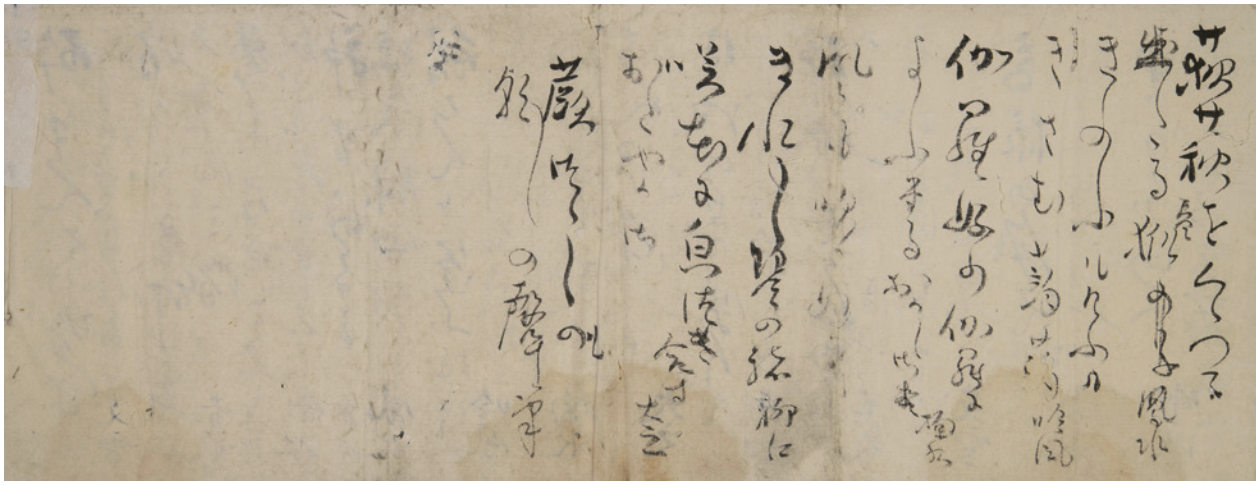


野々宮で仕舞ふて　其友
帰る虫ゑらみ　掬水
船から舟へ　柳江
廻すさかづき　支雪
惟光も時には　赤水
かりの料理人　剛池
世話しい処　鳳水
なれど流し眼　吟風
ゆふ立のいちり　掬水
四方に家一ッ　其友
月のおそさに　大之
水鶏鳴出す　柳江」一ウ
藪医師のゆすつて
来たる汁溝に
寿永の楠の
朽ぬ草寺
いたづらに撞たる
鐘の山越て
わらぢも飴も
売きらしけり
一貫も覗く弥生の
人通り
うるさきほどに
蝶の出て来る

（二表）



酔たんぽの背中　支雪
柳に撫られて　赤水
消かゝる灯に　剛池
見ゆる三階　鳳水
忍ぶ間もはや　吟風
能登殿の尖り声　掬水
神もいのるも　其友
凄き魑魅　大之
鰻なんど運ぶ様子も　柳江
世話しなき　剛池」二オ
伊吹おろしを
馬も寒がる
後せんき灸の
今にきかねば
前日をのせて歩行て
みたる笹小舟
柿袴はかぬ昔の
なつかしき
竹を自由に
細工するなり
宮様の月見はじまる
笛の声
里から山へ
吹おくる霧



（二裏）

荻萩をくゞつて　鳳水
来たる狐の子（出）
きのふもけふも　吟風
きざむ蒟蒻
伽羅好の伽羅に　掬水
よふたるおかしさよ
風も吹かぬに　柳江
きれし琴の緒
咲花に顔つき合す　大之
おだやかさ
蕨つゝじの（も）
朝〳〵の声　筆」二ウ

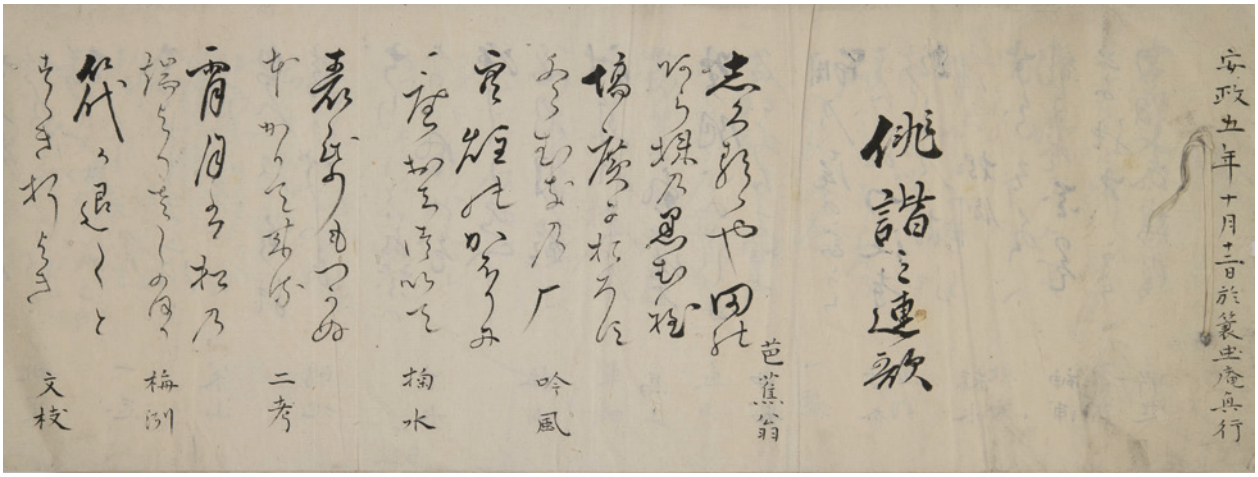
第六節　安政五年 芭蕉忌俳諧之連歌

本懐紙（2–16–4）は、安政五年一〇月一二日、蓑虫庵においての芭蕉追善の時雨忌興行である。端作り「安政五年十月十二日於蓑虫庵興行」。芭蕉発句の脇起し歌仙一巻。縦一七・〇糎、横四六・〇糎。

蓑虫庵は、吟風の庵号であり、吟風邸であろう。芭蕉句は、一〇月、時雨の候とて、「しぐゝや田のあら株の黒む程」。元禄三年の作で、前書に「旧里の道すがら」とある。淀の田園風景に通うものがあったのだろうか。「芭蕉」に傾倒する淀藩士連中の俳諧で、すでに支雪は卒後であり、吟風を中心とした第三期にあたる。芭蕉追善の時雨忌の俳諧興行は、芭蕉顕彰俳諧の一つである。

連中は、吟風（脇）、掬水（第三）、二考、梅洌、文枝、桃里、一志、米山、鴻地（池）、淇水、梅山、馬山、中和、芦斎、赫水、袖浦、野遊、春遊、採桑、魚洋、一瓢、魚眼、車軸。以上、二四句までの一順。以下、挙句までは吟風の独吟。一順で時間切れになったか。

連中のうち淀藩士と確認できるのは、掬水、梅洌、鴻地（池）、赫水であるが、その他は若手の連中であろう。本章第二節（45頁）にあげた資料Ⅶの秀吟採点表の連中の多くが入っており、「右一連十四多少勝手次第入句数／抜句有輪之内江可印」とある。「抜句」とは、秀吟のことである。なお、そこに吟風の名がないのは、多くが若手であったからであり、吟風が指導的立場であったからであろう。文政期の連中とは様変わりしている。吟風が没するのは翌年のことであり、淀藩士連中の俳諧は転換期にあったと推察される。

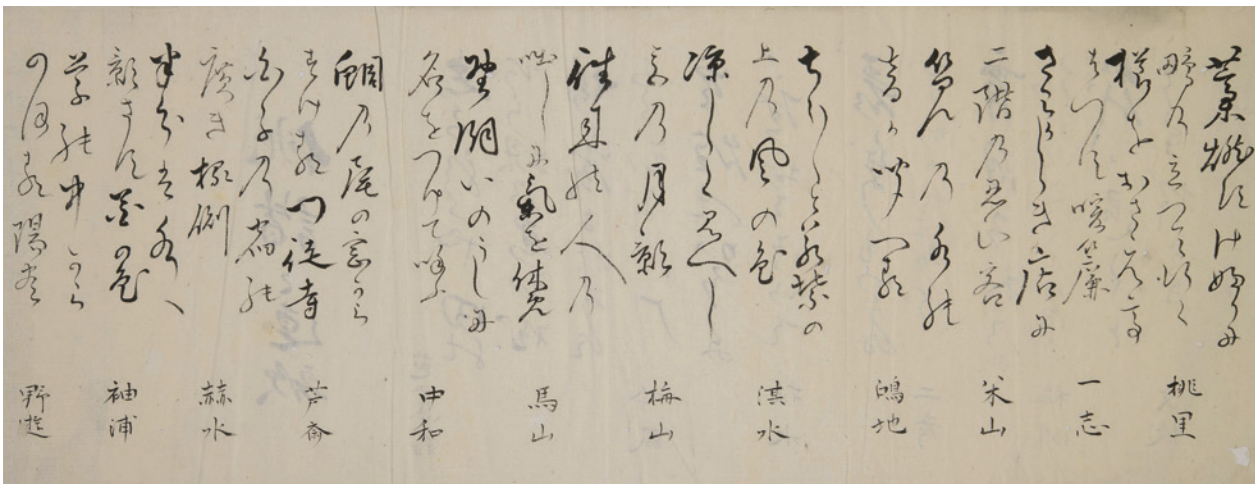


（一表）

安政五年十月十二日於蓑虫庵興行

俳諧之連歌

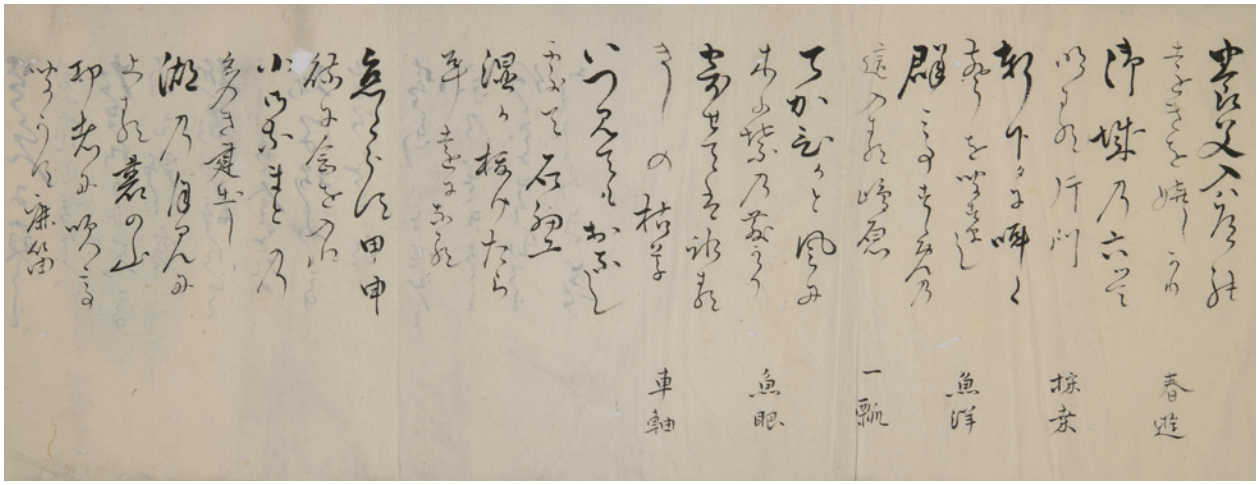
しぐるゝや田の　芭蕉翁
あら株の黒む程　吟風
塙広におろす　掬水
冬むきの雁　二考
空炷のかほりに　梅洌
一座おちついて　文枝
表紙もつかぬ
本かりて来る
宵月は松の
端よりさしのぼり
筏が退くと
すゝき折よき」一オ



（一裏）

藁燃すけぶりに　桃里
鳴の立つて行く　一志
櫛をおさえて　米山
はづす暖簾　鴻地
さわがしき店に　淇水
二階の忍び客　梅山
筧の水の　馬山
音が聞へる　中和
ちら〳〵と若葉の　芦斎
上の風の色　赫水
涼しく見へし　袖浦
宮の月影　野遊
往来の人の
咄しに気を休め
野飼いのうしに
名をつけて呼ぶ
蜩の尾の窓から
すける門徒寺
白子の宿の
広き椽側
半分は水へ
影さす花の色
草の中から
のぼる陽炎」一ウ

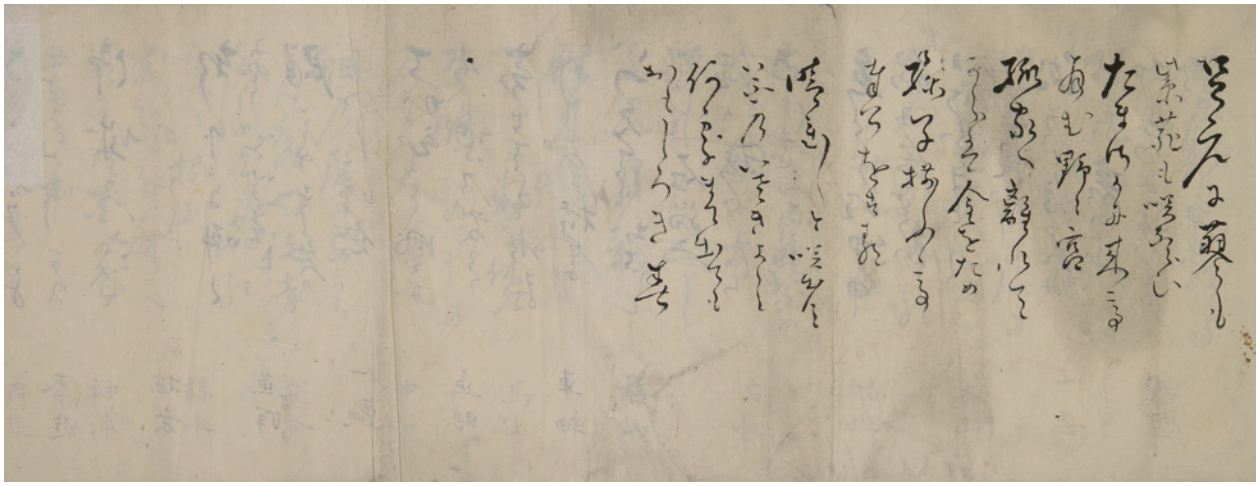
（二表）



養父入は道の　春遊
遠きを嬉しがり
御城の六ッで
明る片門　採桑
軒下ヶに囁く
声を聞すまし　魚洋
群てすゞめの
這入る島原　一瓢
てかひかと風に
木の葉の散かゝり　魚眼
寄せては氷る
きしの枯草　車軸
いつ見てもおなじ
処で石細工
湿が抜けたら
耳遠になる
怠たらず甲申
待に念を入れ
小さなまどの
多き建出し
湖の月見に
上る裏の山
功者に吹て
聞かす鹿笛

」二オ

（二裏）



足元に蓼も
紫苑も咲ならひ
たまさかに来て
拝む野々宮
孤家へ離れて
からは金をため
孫子揃ふて
奉公をする
晴れ〴〵と咲出す
花のいさぎよし
何処まで出ても
おもしろき春

」二ウ

	淀藩士	墓所	支雪点「六々行」	文政7年月々発句合	文政8年霜月興行	文政11年9月17日竹楼追善興行	文政12年3月19日島崎御茶屋興行	松川龍椿画一枚摺	天保3年閏11月20日淀藩廻状	天保4年淀藩中春興	淀藩中夏興「夕立」	安政5年10月12日蓑虫庵興行	秀句採点表	備考
1	支雪	東運寺	○	○	○	○	○	○	○	○	○			富原氏。宝暦10・6・30生、天保9・5・27卒。医師。魚之市四軒屋住。
2	竹楼	高福寺	○			○亡人								畑氏。宝暦5・6・3生、文政11・6・6卒。高島五番町住。
3	吟風	高福寺		○	○	○	○	○	○	○	○	○		畑氏。天明7・7・26生、安政6・12・13卒。高島五番町住。
4	琴浦		○											「六々行」入。
5	巵言		○											玄々居
6	南濱		○											一藁席
7	赤浦		○											「六々行」入。
8	皓水		○											「六々行」入。
9	鶴脛		○											「六々行」入。
10	筠圃（浦）					○								淀藩中（文化10）
11	鷹巣												○	淀藩中（文化10）
12	一坡											○		淀藩中（文化11）
13	以十	妙教寺							○	○				淀藩中（文化13）
14	南窓	妙教寺				○	○							淀藩中（文化13）
15	柳江	妙教寺				○	○	○	○	○				山口氏。医師。高島六番町住。
16	掬水	妙教寺			○	○	○		○	○	○		○	石川氏。医師。9月19日卒。高島七番町住。
17	剛地（池）	東運寺				○	○	○	○	○				上月氏。
18	鳳水	東運寺				○	○	○	○	○				田崎氏。天明3・11・26生、弘化1・12・16卒。口魚之市住。
19	士常						○	○						淀藩中（文政2）
20	軽（桂）舟	東運寺			○	○	○	○	○	○	○			間島氏。養璞（百梅集）。医師。高島六番町住。
21	大之	東運寺			○	○	○	○	○	○	○			石山氏。医師。富田町住。
22	赤水	東運寺			○	○	○	○	○	○	○			堀氏。堀玄珠か、安政4年71歳、吟風と同年か。富田町住。
23	其友	妙教寺			○	○	○	○	○	○	○			井上氏。
24	三千丸	東運寺						○	○	○	○			稲葉氏。
25	鑑水	東運寺						○	○	○	○			岡氏。
26	兎哉（斎）	東運寺							○	○	○			今村氏。魚之市与力町住。
27	雪川	妙教寺							○	○	○			上田従之介（百梅集）。口魚之市住。
28	源良	東運寺							○		○			上月氏。
29	素琴								○	○	○			小長谷氏。
30	雲峰	東運寺									○			竹岡氏。天明4・11・1生、天保14・9・18卒。稲葉候医員。口魚之市住。
31	友之								○	○	○			林氏。
32	魚仏（物）	妙教寺							○	○	○			藤枝氏。
33	亀下	妙教寺							○	○				田村氏。
34	季水	妙教寺							○	○	○			田中氏。
35	方水	東運寺							○	○	○			富原氏。
36	赫水	東運寺							○	○		○	○	稲葉氏。
37	梅洲	東運寺								○	○	○	○	
38	和六													池田氏。吟風義父
39	鴻池（地）											○	○	
40	二考											○	○	
41	文枝											○	○	
42	桃里											○	○	
43	米山											○	○	
44	馬山											○	○	
45	中和											○	○	
46	芦斎											○	○	
47	採桑											○	○	
48	魚眼											○	○	
49	車軸											○	○	

注　蒼虬入

注　蒼虬、榛堂入

注　蒼虬、井眉入

第三章　淀藩士連中と京俳壇

―吟風俳諧交友録をめぐって―

本章では、淀藩士連中と市井の俳諧師との関係を見ていく。特に、京俳壇との交流を考察する。淀藩士連中の俳諧活動は、次の三期に分類できる。

○第一期は、支雪、竹楼を中心として、寛政期から文政前期である。主な俳諧として、京俳壇との関連では、寛政八年刊　吐鳳編『除元集』（本章第一節参照）、俳仙堂西村定雅の年刊集句（本章第二節参照）、その他支雪点の「六々行」歌仙一巻（第二章第一節参照）などがある。

○第二期は、支雪、吟風を中心として、文政後期から天保初期である。主な俳諧として、京俳壇との関連では、定雅以降の俳仙堂（本章第二節参照）、芭蕉堂の俳諧（本章第三節参照）。その他「廻状」（第二章第二節参照）、文政八、一一、一二年の俳諧興行（第二章第三、四、五節参照）などがある。

○第三期は、吟風を中心として、天保前期から安政期である。主な俳諧として、京俳壇との関連では、北村朝陽以降の俳仙堂（本章第二節参照）、芭蕉堂（本章第三節参照）、北村杜鵞（本章第四節参照）、荒木万籟の俳諧（本章第五節参照）。その他安政五年の俳諧興行（第二章第六節参照）などがある。

なお、参考資料として本章「資料一　京俳壇と一枚摺二種」を付し、検証に供する。

また、畑家俳諧資料の中に吟風の俳諧交友録があり、京俳壇および諸国の俳人との交流が具体的に知られるが、これについては、本章資料二　影印、三　俳号索引、四　地域別俳人一覧、五　地域別俳人数一覧を併せて参照されたい。京俳壇との交流については、本章付表Ⅱ「淀藩士連中と京俳壇」、Ⅲ「吟風俳諧交友録と京俳壇」にまとめている。

畑家俳諧資料は、次のように分類されるが、本稿では京俳壇を中心に考察する。

(1)　諸国藩士―近江仁正寺藩、泉州伯多藩、丹波亀山藩、丹波篠山藩、丹波福知山藩、播州明石藩、因幡鳥取藩、伊予小松藩、伊予松山藩、讃岐高松藩、肥前大村藩、豊前小倉藩、豊後杵築藩、下総左原（旧稲葉氏藩領）。

(2)　淀地域の俳諧師―伏見吐鳳、蟻園岳鳳（安政三年玉骨改号）、三宅鶯語等。

(3)　京俳壇―

a　俳仙堂―定雅、朝陽（天保九年以前）、三津川蔦雨（天保一〇・一一年頃）。中尾岱美（天保一二以降か）。天保頃、執事に西村春躬（はるみ）。

b　芭蕉堂―二世蒼虬、四世朝陽、五世北村九起、勝錦。

c　杜鵞―大坂から京に移り、年刊句集『年毎集』を刊行。

d　万籟―蒼虬門。天保の初め頃、宮津から京に移り、立机。『百梅集』『逐々集』を刊行。

e　五獅子―二条家俳諧宗匠仏朔。

(4)　大坂俳壇―

a　花屋庵鼎左、五春荘井眉、八千房一肖、比良城林曹等。

b　櫻井梅室―初号、雪雄。後、京に住み『四時行』刊行。

(5)　近江　義仲寺

(6)　その他の地域の市井の俳諧師

a　江戸の田川鳳朗

b　丹波連中―軽森野楊、西尾武陵など。

c　伊勢の御師睡翁等

ところで、市井の俳諧師との交際の背景には、俳諧師の社会的地位の向上がある。これを近世京都の人名録である『平安人物志』を通覧することによって考察する。同書は次のものが知られるが、順次俳諧に関する項目を列挙する。

①　明和　五年版―a「俳人部」とあるが人名なし。与謝蕪村は「画家」。望月武然は「篆刻」。

②　安永　四年版―「俳諧者」とあるが人名なし。蕪村、松村月渓は「画家」。武然は「書家、篆刻」。

③　天明　二年版―三宅嘯山は「学者」。武然は「書家、篆刻」。望月文誰は「篆刻」。蕪村、紀梅亭は「画家」。

④　文化一〇年版―双林寺月峰は「画」。

⑤　文政　五年版―月峰は「文人画」。五升庵瓦全、江森月居、定雅、蒼虬が「文雅　俳」[b]。

⑥　文政一三年版―月峰は「文人画　山水」。蒼虬、浦井有国が「文雅」。野楊、武陵は「風流」[c]。

⑦　天保　九年版―月峰は「文人画」。有国、砂川柳糸、中川金菜、蒼虬、簗瀬千崖、笹山呑舟、朝陽、喜多川梅價、万籟が「文雅」。野楊、武陵は「俳」。

⑧　嘉永　五年版―梅室、花守岱年、沢有節、九起、杜鷲、中村鸞岱、北川祭魚、種山芹舎、鶯語、新居也然、大八木丈翠、寺島杜蓼、堤梅通、木村黙池、下村梅巌、田中琴斎、岳鳳、河村掬海が「文雅」。高木太計彦、松林松巣は「俳」。

⑨　慶応　三年版―芹舎、有節、九起、河村公成、櫻井淡節、祭魚、中嶋黙池、三糧庵波同、三好赤甫、村上碩水、鶯語、熊井文海、熊井鳥岳、津田茗雅、蕉風舎梅因、北脇百禄が「文雅」。

右の状況からは、俳諧師の社会的地位の向上が文政頃から始まり、特に天保以降に著しいことが知られる。明和五年では、傍線部a「俳人部」の項目はあるが、名は記されていない。その後しばらくは同様な状況であるが、文政五年に至って、傍線部b「文雅　俳」として瓦全、月居、定雅、蒼虬の名が記されている。その後の俳諧師は、「文雅」「俳」傍線部c「風流」に分類されるが、「文雅」には、より社会的地位の高さが感じられる。「俳」「風流」は、京近隣地域の俳人である。いずれにしても、多くが蕉門の人々であることが特徴である。京俳壇にあっても「芭蕉」の存在感は絶大である。ただし、貞門の人々はここにはみえないが、京俳壇にあってその存在は留意しなければならない。

右のような状況は、淀藩士連中の俳諧活動と時を一にしている。彼らが独自の俳諧活動を展開する力量を持ちながら、「芭蕉」に傾倒していく一因は、『平安人物志』にみられるような社会的情勢が背景にある。

因みに、京俳壇にも影響の大きい大坂の状況を同様に見ておく。

⑩　安永四年『浪華郷友録』―俳諧師なし

⑪　寛政二年『浪華郷友録』―俳諧師なし

⑫　文政六年序『続浪華郷友録』―「俳諧」[d]西尾夢長、林夜来、仁木五彩、西尾巣居、小森汲古、西村句星庵、中村耒耜（らいし）、岡呂月。「檀林」[e]村川棲鳳堂。

⑬　文政六年跋『浪華金襴集』―「俳諧」[f]前田呂十、葛井知久亭、福島寛長、夜来、五彩、汲古、「俳」[g]些庵月居。

⑭　文政七年『新刻浪華人物誌』―「俳」月居、八日庵万和、八千房屋烏、放雀園長斎、芦丸（あしの）屋貞璵、大黒庵奇淵。

⑮　天保八年『続浪華郷友録』―「俳人」[h]井眉、貞璵、慶五庵貞瑳、一肖、馬田江公路、馬田江春帋、茶飯堂蟻兄、其日庵秋水、鼎左、林曹、松声庵連風。

⑯　嘉永元年『浪花当時人名録』―「俳家」[i]不二庵二柳、一肖、反古庵天来、無外軒貞蘿、林曹、鼎左、樗庵残夢、白后斎貞珉、蟻兄、芙蓉庵井左、二畳庵桃室。

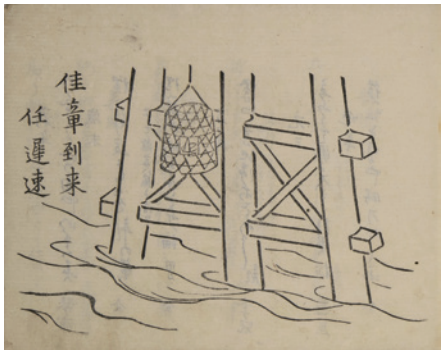
⑰　弘化二年序跋『新撰浪華名流記』―「俳諧部」[j]二柳、春帋。

大坂でも京と同様の傾向であるが、「俳諧師」の呼称を用い、文芸の中での俳諧の位置を意識している。文政六年の傍線部d・fに「俳諧」が記されている。傍線部e「檀林」が同様に記され、これは大坂俳壇の特徴である。文政六年以降にみえる傍線部g「俳」、天保八年の傍線部h「俳人」、嘉永元年の傍線部i「俳家」の呼称は、蕉門の人々を指しており、「俳諧」とは区別されている。しかし、弘化二年には傍線部j「俳諧部」に吸収される。これは蕉門の隆盛によるものであろう。

第一節　寛政八年吐鳳編『除元集』

寛政八年吐鳳編『除元集』（2–2）は、初期の淀藩士連中が入集する市井の俳諧集である。縦一七・〇糎、横二三・〇糎、横本一冊。墨付一九丁。二丁表に、淀小橋の行灯の図があり、淀地域の俳書であることを示す。編者の吐鳳は、南山城淀の人（文化七年竹斎編『名月帖』）である。また、淀藩士連中が多く入集する定雅の『初懐紙』『春懐紙』に入集、俳諧興行にも同座する。後述。

淀藩士連中は、琢雲居支雪、蓬蒿園竹楼、一藁席南溟、白雪窓蓬室、玄々居巵言、琴浦が入集する。多くが支雪点の「六々行」歌仙一巻に入っている人々である。第二章第一節参照。琴浦（三句入集）を除いた他は、絵入で半丁ずつ入集する。次に淀小橋行灯図、絵入の者と吐鳳を発句として淀藩士連中らが加わる歌仙の一部を示す。



淀小橋行灯図

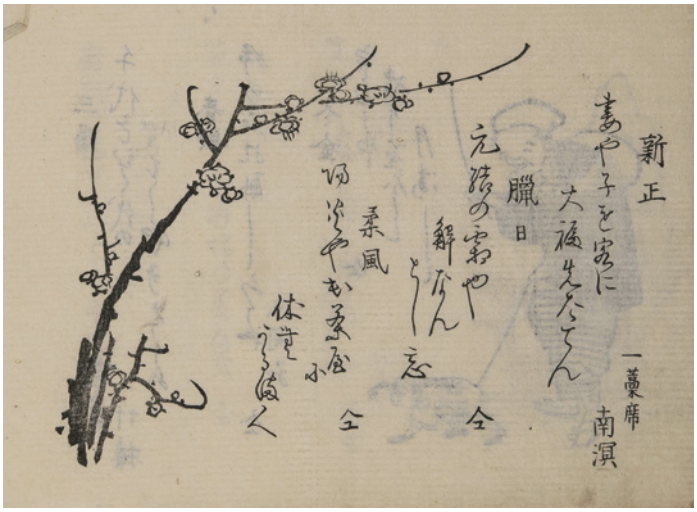
○琢雲居支雪　（三ウ）

木徳
先梅に気も調ふや日のはじめ　琢雲居支雪
韶光
葩と見しは胡蝶の番ひ哉　仝
大呂
白鷗閑有似我と云ふ事のあなれば
鶺鴒の浮世に似たり年の尻　仝

○蓬蒿園竹楼　（四オ）

三陽
千代をひく代のいさをしや弓はじめ　蓬蒿園竹楼
春興
姉の名の恥しぶりや未開紅　仝
冬唫
寒声や鳥に塵なし月凄し　仝

○一藁席南溟　（四ウ）



新正

妻や子を客に大福先たてん　一藁席南溟

臘日

元結の霜や解なんとし忘　仝

柔風

陽炎や出茶屋に休むうるま人　仝

○白雪窓蓬室　（七オ）

山行

梅いづこ筧より香のほとばしる　白雪窓蓬室

また、五丁裏に次の二句がある。

太皞

来るや春浮田の御注連水に動く　蓬室

別歳

ゆとりあるとしのもふけや竹台子　仝

○玄々居巵言　（七ウ）

復新

皇都に春を迎ふ

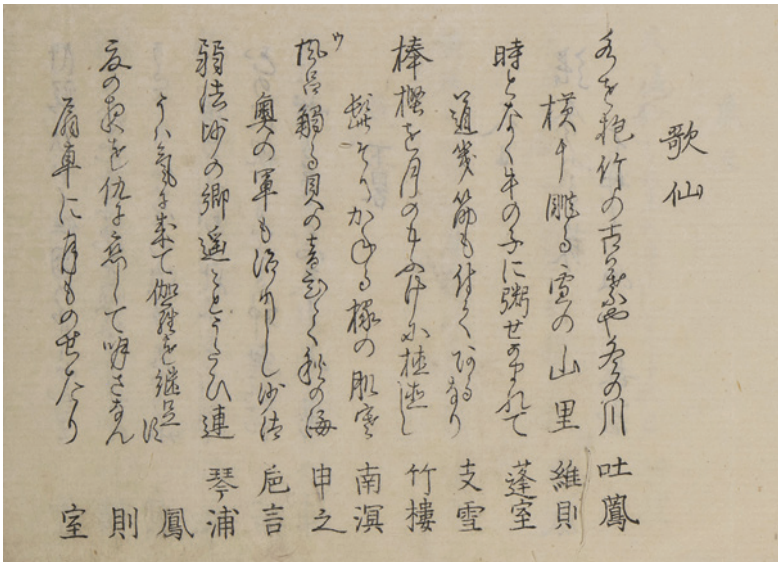
御所に余る影いたゞかん初日の出　玄々居巵言

立春在臘

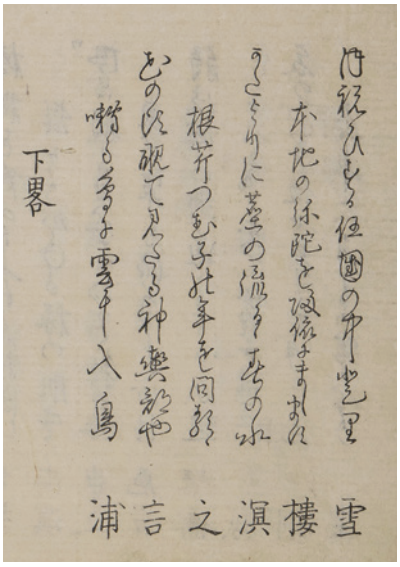
京師防火の役にまかるとて

年の坂青柳の鞭試ん　仝

○歌仙



（八オ・ウ）



（略）

歌仙

水を抱竹の古葉や冬の川　吐鳳
横に眺る雪の山里　維則
時となく牛の子に粥せがまれて　蓬室
道幾筋も付てあるなり　支雪
棒樫を月のもふけに植直し　竹楼
髭そりかねる椽の肌寒　南溟
ウ風呂触る貝の音ひく秋の海　申之
奥の軍も治りし沙汰　巵言
弱法師の郷遥々とうたひ連　琴浦
うは気に成て伽羅を継足す　鳳
夏の夜を仇に恋して明さなん　則
扇車に月ものせたり　室「八オ
内祝ひする任国の中登り
本地の弥陀を帰依にまします
かたよりに塵の流るゝ春の水　雪
芹つむ子の年を問るゝ　楼
花の頃覗て見たる神輿部や　溟
囀る鳥に雲に入鳥　之
下略　言
浦

（略）

以上の入集状況からは、すでに淀藩士連中の然るべき位置が得られていると考えられる。編者の吐鳳は、定雅の寛政期の『初懐紙』に入集がみられ、淀藩士連中との接点が示唆されるところである。

淀藩士連中は、第二章で考察したような点印を持って高点付句を独自に興行したり、藩士連中を中心に俳諧興行をしたり、ここでみたような市井の俳諧師の活動に参入したりと活動的である。これらを牽引したのは、支雪、竹楼である。連中の活動期の第一期にあたるが、ここにみる多くの連中は寛政後期までの活動で、以後は見られない。

京俳壇が高点付句から「芭蕉」俳諧へと移行していく中で、支雪は俳仙堂の俳諧へと展開していく。これにあたっては、「淀藩中」「おはら木社」という活動基盤ができ、新しい連中が加わるのである。

第二節　俳仙堂

京東山真葛原の俳仙堂は、定雅が石川丈山の詩仙堂、木下長嘯子の歌仙堂に倣って設けたものである。文化八年頃（文化八年『春懐紙』刊）から没する文政九年頃迄営まれた。それ以前からも年毎に摺物を催し、

(1)『初懐紙』　（天明頃～寛政三年、A～C）、
(2)『秋懐紙』　（寛政四年～文化七年頃、D～H）、
(3)『春懐紙』　（俳仙堂設立頃・文化八年か、I～J）、
(4)『真葛草紙』　（俳仙堂設立後～文化一三年、K～N）、
(5)『真葛春懐紙』（文化一四年以降、O～U）

などとして刊行している。本稿では、田辺菜穂子著「定雅の刊年句集」（連歌俳諧研究・一〇二号）の分類に従う。

淀藩士連中は、文化八年以前から文政二年迄のいくつかに支雪を中心として筠圃、荷風、碓乎、如遊（徐幽）、南窓、諷々、負米、柳江、以十、士常、桂舟（軽舟）、大之、掬水、竹楼、吟風らが入集している。淀藩士連中俳諧の第一、二期の人々である。ただし、竹楼、吟風はほとんど入集していない。竹楼は、文化四年に隠居し、俳諧から遠ざかる。また、吟風はいまだ若く、俳諧に積極的になるのは、後の文政後期以降だからである。

次に淀藩士連中の入集状況を概観しておく。なお、淀藩士と特定できる者に傍線を付す。ただし、同集の重複は連句を優先し、発句の重複はとらない。また、連句の連中は一順総てを記し、淀藩士ではない者、重複も含む。本章付表Ⅱ「淀藩士連中と京俳壇」参照。

○寛政頃の『初懐紙』A

・淀おはら木社中（歌仙）　蓬室、定雅、支雪、剛池（地）、霞標、舎南、普石、荷風、吐鳳（淀）、鳳尾、柳江、磨州、楚剛、水巴（淀真砂社中）、花雪、素朴

・淀社中（発句）　杉雨、女碓乎、竹楼、霞標、紫山、左長、逸江、狸舟、中峰、南窓、

○寛政頃の『初懐紙』B

・淀藩おはら木社中（歌仙）　蓬室、支雪、荷風、柳江、筆把菊（淀真砂社中）

・淀藩社中（発句）　女碓乎、林亭、女芝園、霞標、舎南、筠圃、鳳水、士常、在東都剛池、南窓、青葱、掬水、女三千香、淀藩軽舟　〔参考〕吐鳳入集

○寛政頃の『初懐紙』C

・淀藩社中（発句）　女玉浦、女不老、女梅車、林亭、芝薗、霞標、舎南、筠圃、鳳水、士常、剛池、二鳥、南窓、柳江、掬水、氷窓、荷風、青葱、如遊、霞碩、支雪、淀藩桂舟　〔参考〕吐鳳入集

○文化八年か『春懐紙』I

・淀藩社中（歌仙）　支雪、鳳水、荷風、把菊、木阿（納所）、負米、筠圃、桂舟、舎南、以十、柳江、大之、如遊、吐鳳

・淀藩社中（発句）　抱琴堂、諷々、蓬室、女碓乎、五松、霞標、南窓、掬水、夏風、五巣

○文化一〇年『真葛草紙』K

・淀藩中（歌仙）　支雪、行脚帰鳥、琴所、桂舟、大之、筠圃、赤水、逸江、舎南、

・連句　帰鳥、荷風、支雪、桂舟、逸江、大之、筠圃、赤水、如遊、琴所、以十

・ヨド藩中（発句）　女芝園、鷹巣、淀藩中蓬室、吟風、南窓、柳江、掬水、負米、ヨド藩中之由

○文化一一年『真葛草紙』L

・淀於上池楼興行　諷々、定雅、支雪、柳江、南窓、筠圃、琴所、赤水、碓乎、如遊、大之、桂舟、負米、以十、荷風

・発句　得女、不老、梅車、子朝、淇郷、鷹巣、逸江、掬水、淀藩中一坡

○文化一三年『真葛草紙』N

・ヨド藩中（発句）　筠圃、兎哉、南窓、桂舟、柳江、大之、掬水、以十、如幽、荷風、負米、支雪

○文政二年『真葛春懐紙』Q

・淀藩中（発句）　諷々、碓乎、剛池、士常、軽舟、大之、掬水、支雪

右の状況からは、支雪を中心にした俳諧活動と知られる。吟風が俳仙堂と親しく交流をもつのは、定雅以降の朝陽の頃からである。

ここで、俳仙堂の系譜を記しておく。

(1)　定雅―文化八年から没年の文政九年頃迄。

(2)　灌園蕪骨　兼宥―俳仙堂月並摺物（2―26）による。入集の支雪が天保九年に没しているので、これ以前。本章に後述。

(3)　朝陽―芭蕉堂主となる天保九年以前。前号、榛堂。本章第三節の朝陽の芭蕉堂相続の披露案内（1―87）参照。知事は西村春躬（1―74―2）。

(4)　三津川蔦雨―朝陽の跡を継ぎ、天保一〇・一一年。蔦雨は、「江州坂本三津川弥右衛門」（1―72―3）である。本章第三節の芭蕉堂相続の披露案内により俳仙堂継承が知られる。また、吟風宛蔦雨書簡（出吟依頼1―9―2、「俳仙堂主」1―10―1．2．5）参照。

(5)　中尾岱美―　岱美は、「中尾卯平衛。寺町通薮下上ル」（1―72―3）である。「俳仙堂岱美　馬町高辻上ルいせ町隠居」（1―136―3）の句稿書簡に、天保一二年から芭蕉堂主となる九起の名が見えるので、蔦雨以降か。ただし、岱美は定雅の年刊句集にしばしば入集している。

左に、灌園蕪骨の俳仙堂の摺物をみる。

○俳仙堂月並摺物（2―26）縦三四・〇糎、横一六・五糎。拙稿、俳文学研究会会誌「俳文学研究」55号参照。

皇都東山真葛原俳仙堂月並／発句合十内□句一軸にて堂上に掛／秀一盃に認箱入句主え呈上／抜句追□小冊に仕立呈上／灌園蕪骨 兼宥

句　きのふのまゝの　瓶川

深雪の夜吹あれな□□静也　ソノベ　如巴

美しや二人が剃て冬ごもり　ヨド　支雪

転び合て行も風情や雪の人　ソノベ　拍舟

冬籠きのふのまゝの□□ろかな　瓶川

冬籠あたらにたらぬまどみかな　淀　吟鳳（ママ）

世の中は何□まふとふゆごもり　ヨド　逸口（ママ）

茶の華に鳴ぬ鶯と□□けり　宇一亭

雪の家誰人住て朝けむり　ソノベ　眠月

朔日もわすれてねたり冬籠　ヨド　士常

茶の華にちいさき鳥のね音かな　ヨド　其友

この一枚摺は、東山の真葛原の俳仙堂における月並例会の選句結果を摺物にして報せるものである。発句合せの秀句一〇句を軸にし、俳仙堂に掲げる。そのうちの最優秀句は、盃に認め箱に入れて進呈する。当該月並は瓶川の句が秀逸である。また、追って秀句抜粋の小冊を刊行すると報せる。主催は灌園蕪骨兼宥とするが、詳細は未詳。月並兼題は、雪、冬ごもり、茶の花。

淀藩士連中は、次の五人である。

・支雪―寛政期から天保五年頃没まで俳諧活動、天保九年没。
・吟風―「鳳」は誤刻。文化末頃から安政六年没まで俳諧活動。
・逸江―「口」は誤刻。寛政期から文化末期に俳諧活動。
・士常―寛政期から文政末期に俳諧活動。
・其友―井上氏。文政末期から天保五年頃に俳諧活動。

これらは、支雪を中心とした連中である。定雅は文政九年に没するが、主催時は文政期か。右の淀藩士連中の入集は、彼らが定雅の句帖に入集していることからの延長線上にあろう。定雅編の句帖への淀藩士連中の入集状況を記す。

・寛政頃　『初懐紙』A　支雪・逸江・士常入集
・文化八年　『春懐紙』　支雪入集
・文化一〇年頃　『春懐紙』　支雪・吟風・逸江入集
・文化一一年頃　『真葛草紙』　支雪・逸江入集
・文政二年　『真葛春懐紙』　支雪・士常入集

右に其友の入集はないが、俳諧は文政七年の淀藩士連中の俳諧頃からである。また、逸江の俳諧活動は文化期以降は確認できない。しかし、彼らの俳諧活動を追ってみると、およそ文政期に成立した摺物と考えられる。

ところで、藩士という身分からは俳諧活動の制約があると推察されるが、秀句の半数が淀藩士であることからは、俳仙堂や俳諧の社会的評価を知る上で重要である。『平安人物志』を通覧すれば、俳諧師の社会的評価が向上するのは、文政期以降である。摺物の成立がこの頃であることと関係していよう。

次に、天保六年の朝陽の俳仙堂月並をみる。成立は同年二月であるが、同年一月との合併号である。「天保六未年正月二月並　俳仙堂宗匠代評蔦雨」とし、この時期の俳仙堂主は朝陽であるが、蔦雨の代評であるとする。当時の俳仙堂の月並は、「毎月十日迄に御出草可被下候」とある。兼題は、新年と春の季題が合併号のため、混雑している。評は、秀逸と軸である。なお、朝陽は天保一〇年に芭蕉堂主となり、蔦雨に俳仙堂主を譲るが、これについては、次の第三節に述べる。蔦雨にあっては、俳仙堂継承後は二年程で、郷里の近江坂本に移る。

ところで、蔦雨は、近江国坂本の人、寛政八（一七九六）年生、名を弥右衛門。三津川氏は、父于当、子木鶏、孫有年と代々にわたる俳家である。天保六年一月二日、四〇歳で採緑庵を開き、後、俳仙堂主となる。俳仙堂主として吟風に当てた書簡（1-10-5）がある。この二月三日付書簡は、「俳仙堂方初会も無滞」催したと知らせ、「ちと当仙へも御寸暇御座候ば御出かけ」と来所を願い、社中への伝声を頼む。

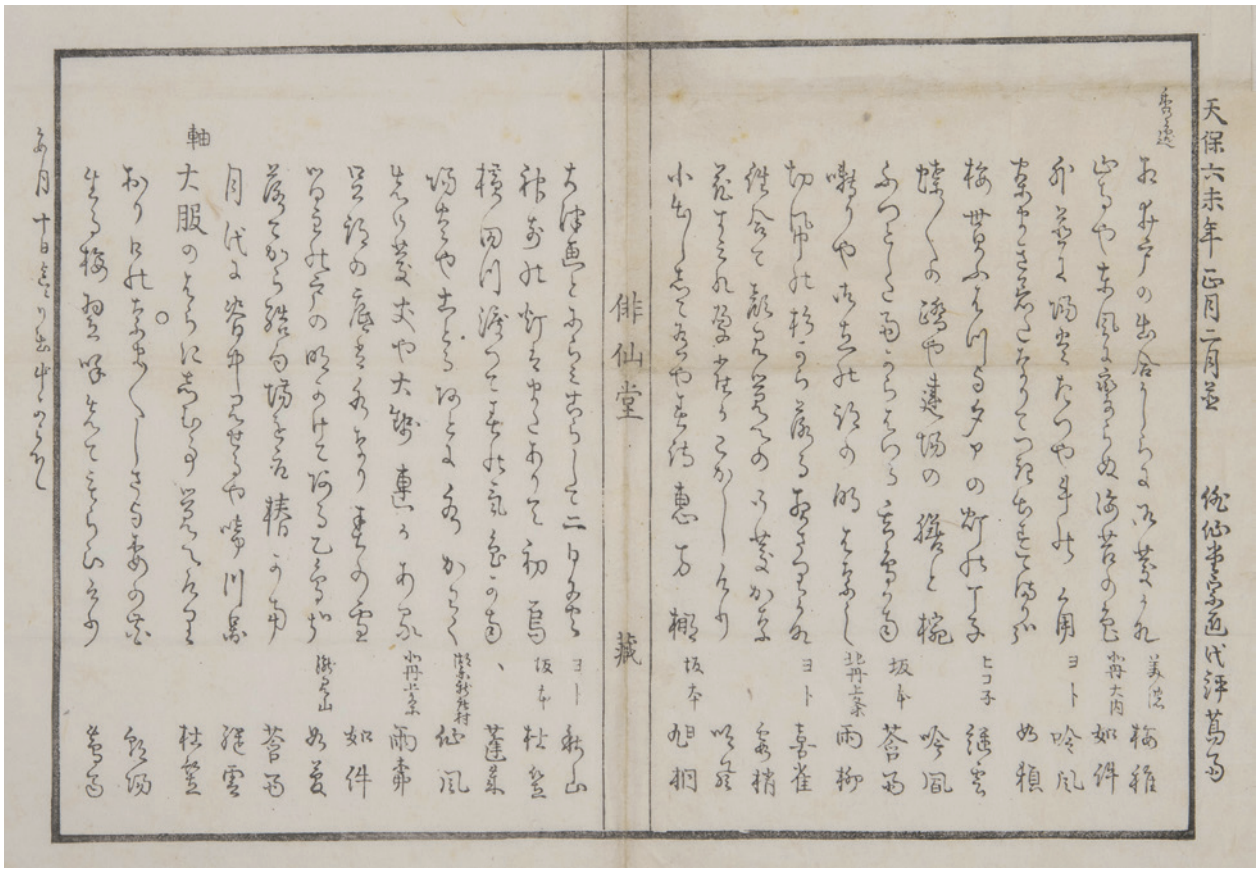
二分咲けばもう花がちや岨の梅
雨らしう見せて出かけてはるの月
川音やうぐゐすきくに跡しさり

の句を付し吟風の「高評」を乞う。

さて、吟風は月並に三句入集しているが、いずれも端正な秀句である。他に淀藩士連中はいないが、淀の人では、喜雀、秋山がいる。淀藩士連中が市井の俳諧活動へ参加するのは、天保五年以降は、吟風に比して限定的である。

吟風と朝陽は親しく書簡のやりとりを行ない、朝陽が芭蕉堂主となってからも変わらず親交があった。しかし、朝陽は天保一一年に没し、より多くの交流は望めなかったのである。

○天保六年俳仙堂月並（2-17-19）縦二四・五糎、横三四・五糎。



天保六未年正月二月並　俳仙堂宗匠代評蔦雨

秀逸　相井戸の出合がしらに御慶かな　美濃　梅雅
山寺や東風に変らぬ海苔の色　北丹大内　如件
外並に陽炎たつや牛の角　ヨド　吟風
寝まき着たなりでつき出すてまり哉　如頼
梅貫ふはつよ夕べの灯の丁子　ヒコネ　継雲
蝶〳〵の踏や建場の膳と椀　吟風
ふつとした雨からはいる玄鳥かな　坂本　莟雨
囀りや御立の跡の明はなし　北丹上条　雨柳
切凧の杉から落る夜さりかな　ヨド　喜雀
往合て顔見覚えの御慶かな　霞梢
花すみれ孕雀がこかしけり　吟風
小出しして有や春待恵方棚　坂本　旭桐

俳仙堂　蔵

大津画とにらみこらして二日灸　ヨド　秋山
神前の灯はまだありて初烏　坂本　杜笠
横田川渡つて春の気色かな　、　蓬莱
陽炎や土とるあとに水かわく　湖東新庄村　仙風
先御慶丈や大勢連がある　北丹上条　雨柳
足跡の底は水なり春の雪　如件
留主の戸の明かけてある乙鳥哉　瀧見山　如夢
落てから結句場を取椿かな　莟雨
月代に背中見せるや啼かはづ　継雲
大服のはらにしむ事覚えけり　杜笠

軸

○
おり口のなま〳〵しさよ梅の花　朝陽
生る梅翌呼先でもらひけり　蔦雨

毎月十日迄に御出草可被下候

第三節　芭蕉堂

芭蕉堂は、京東山の地に天明六年、高桑闌更によって開堂された。闌更が寛政一〇年に没し、門弟の蒼虬に継承される。蒼虬は天保五年の花供養会迄を務めるが、天保元年から同九年迄は三世の簗瀬千崖が堂主となる。その後、天保九年から同一一年迄は朝陽が四世となる。なお、五世は朝陽息の北村九起へと継承される。拙稿「芭蕉堂門人録―影印と翻刻―」（私家版）参照。本節では、淀藩士連中との関りから二世蒼虬と四世朝陽とをみる。

淀連中と朝陽とは、彼が俳仙堂主であった頃からの交流がある。その朝陽の芭蕉堂相続の披露案内を示す。

○朝陽書簡「口演」（1―87）。縦一六・二糎、横七〇・〇糎。

成立は、天保九年一〇月三日。

口演

時分柄寒空に相成候処、／愈御平安珍重に奉存候。／a然ば拙老此度芭蕉堂／相続仕候に付、来る九日、／双林寺閑阿弥にて、披露／相勤申候。御光来の程、／呉々御頼申上候。野衲／御招に罷出候筈、何分に／取込中、御高免可被下候。／書余尊面万々　頓首

十月三日　　朝陽

吟風様／其友様／軽舟様／赤水様／凌雨様

其外御社中様　　次第不問

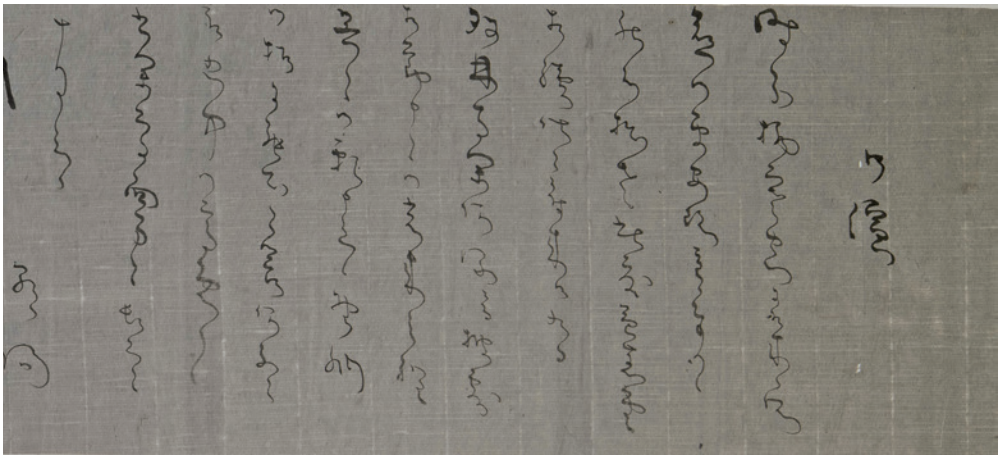
b尚々俳仙相続、門人蔦雨へ／申付候間、逐日御披露申上候。

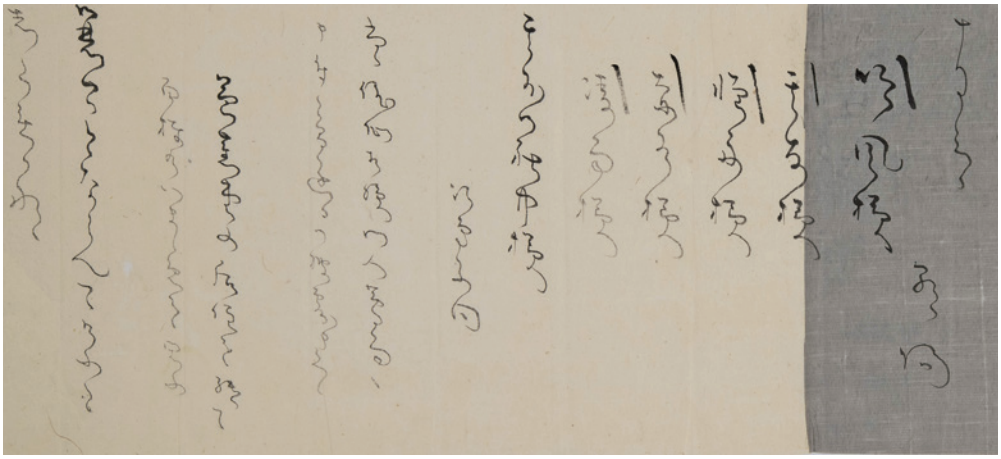
芭蕉堂の后住を継て／百棒のいましめを思ふ

蓑一つとならんでけふもしぐれかな

傍線部aのごとく、「来る九日」に芭蕉堂を「双林寺閑阿弥にて」相続すると報せ、「御光来」を頼む。三世千崖の後を受けての相続である。例年三月刊の『花供養』が、朝陽主催は天保一〇、一一年であるところから、同案内は天保九年一〇月三日、披露は同九日のことと知られる。なお、朝陽は天保一一年九月九日に没する。三年間の短い在庵であった。拙稿『近世後期京都の芭蕉顕彰俳諧資料　芭蕉堂歴世の俳諧と花供養』（私家版）参照。

また、追伸では、傍線部b「俳仙相続、門人蔦雨へ申付候」とあり、俳仙堂を蔦雨が相続することを報せている。なお、この頃の淀藩士連中は、吟風を中心として活動をしている。支雪は天保四年頃から俳諧活動が減少する。

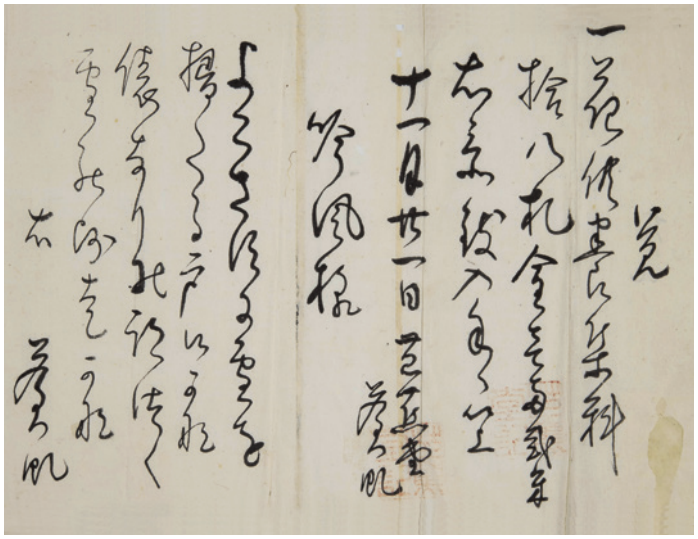




朝陽と吟風の交流は、俳仙堂から芭蕉堂へと引き継がれる。それに伴って、淀藩士連中も参加するのであるが、芭蕉堂に限って言えば、二世堂主の蒼虬との交際が最も長く、親しい。ただし、蒼虬は芭蕉堂のみの活動におさまらず、文政期以降、天保一三年に没する迄、芭蕉堂主としての活動は甚だ消極的である。その中にあって、次の「覚」は蒼虬の主催のもと、吟風が淀藩士連中をまとめて天保四年の『花供養』に入集するものである。

○吟風宛蒼虬書簡「覚」一通（1-5-12）。縦一六・六糎、横二四・五糎。

成立は、天保四年の『花供養』により、同年一一月二一日。



覚

一　花供養集料

拾八札金一両二朱印

右忝致入手候。以上

十一月廿一日

芭蕉堂　蒼虬印

吟風様

よごさずに雪を
掃たる戸口かな
俵なりの跡つく
雪の師走かな

右　蒼虬

この覚書は、『花供養』一八冊分の代金金一両二朱の受取り状である。淀藩士連中一八名が『花供養』に入集しているのは天保四年である。また、糸井文庫に推定天保四年の『花供養』入句募集ちらし（請求番号十三-15）があり、これによれば一冊あたりの入花料は金一朱である。一八冊では金一両二朱となり、符合する。よってこの「覚書」は天保四年のものであることが知られる。

淀藩士連中は、次の一八名である。吟風が中心となって入集、集金及び配本をしたのであろう。淀藩士連中の俳諧活動が盛んな頃の一状況である。

鹿聞に又行筈や花の山　淀　秩草
先づ吉野向ひて歩行や春の旅　雲峰
ふところへしづ〳〵ふりこむ柳哉　源良
今も降空に灯を増す桜哉　其友
寺とさへ言へば先づ有さくらかな　友之
ひと安堵するや桜へ小半道　吟風
竹の根もゆるぎそうなり雉子の声　三千丸
五六日犬もはなれぬさくらかな　春来
うち越る山のとぎれやうめの花　雪川
鳥はみな晴きる声や春の山　兎斎
庭ざくら家に勝しと指さゝれ　支雪
菊桐の紋でふさげる桜哉　掬水
花の主見てゐる隙はなかりけり　大之
明行やみな日帰りの春の山　軽舟
小座敷へどつと持て来る桜かな　一坡
粉炭まで焚仕舞たる弥生哉　魚物
今下りる野をかられけり鳴雲雀　赤水
啼ひばり笹一枚にかくれけり　素琴

なお、蒼虬以後の『花供養』への入集は、四世朝陽、五世九起のそれへと継続されるが、はなはだ限定的である。天保一〇年（朝陽主催）に、吟風、凌雨、天保一三年（以下、九起主催）に素琴、弘化元年に軽舟、弘化三年に吟風が入集するが、その他の多くの連中は市井の京俳壇との交流そのものが激減する。天保初期に活発であった連中が、支雪の退場と連動しているような印象である。

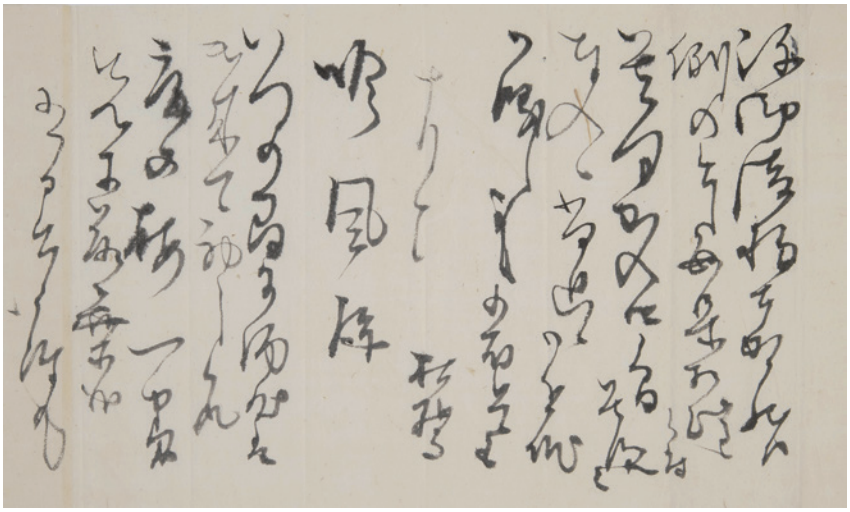
第四節　北村杜鵞

杜鵞は北村氏。大坂堂島米商の北国卯兵衛の長男であるが、京に移り住んで北村庵を結ぶ。天明元（一七八一）年生、嘉永五（一八五二）年没、享年七二。年刊集『年毎集』を編む。現時点で確認できる書冊は、天保三、六（浮葉集）、七～一四年、弘化元～三年、嘉永元年のそれぞれである。

次の書簡は、吟風が『年毎集』に入集、その書冊の送り状である。

○書簡A　吟風宛杜鵞書簡（1-53-8）。縦一六・四糎、横一九・〇糎。

成立は天保八年の一〇月一〇日と推察。



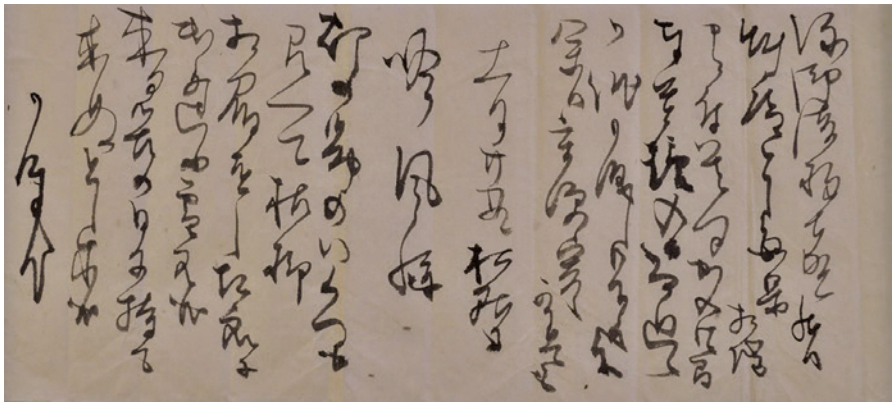
弥御清福奉賀候。然ば
例のとし毎集相催候付
貴句加入仕候間、貴覧に
奉入候。尚追々御近作
御洩し可被下希上候。以上
十月十日　　杜鵞
吟風様
いつの間に酒屋は
出来て初しぐれ
庵の梅一番
先に落葉哉
右句二、御評可被下候。

さて、傍線部にいう吟風が入集している『年毎集』は、天保七、八の両年である。当該書簡は、どちらともに可能性があるが、傍線部「例のとし毎集」という表現から八年と推察する。それは、『年毎集』入集、配本書簡はもう一通、左の一一月二五日付書簡があるからで、吟風はいずれも春の句を寄せている。

天保七年―つまるゝも踏るゝもありはるの草　ヨド吟風
天保八年―薮にすれ屑家にすれて梅の花　ヨド吟風

○書簡B　吟風宛杜鵞書簡（1-53-9）。縦一六・五糎、横三九・〇糎。

成立は天保七年の一一月二五日と推察。



天保七、八年の『年毎集』の成立は、巻頭の俳諧興行が北村庵に於いての一〇月八日の時雨会であり、それを受けて以降のことであるから、杜鵞は凡そ一年をかけて年刊句集を編んでいるのである。

『年毎集』は、芭蕉追善の時雨忌を一〇月八日に催し、その追善俳諧を巻頭に置く。これは、芭蕉顕彰俳諧を担う様式の一つである。

天保七、八年の集に淀藩士連中はいないが、吟風の交友録に載っている京の俳諧師には、蒼虬、並隆、南渓、丈翠、岳鳳、芹舎、金彩など多くが入集している。これらは、吟風の俳諧環境が、継続的に市井の俳諧師に繋がっている証左と言える。本章の付表Ⅲ「吟風の俳諧交友録と京俳壇」参照。

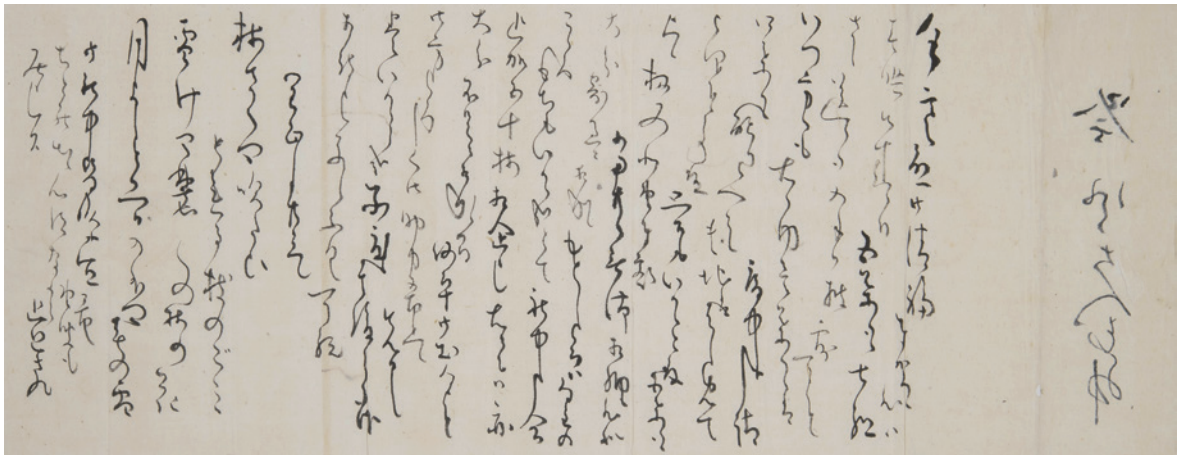
第五節　荒木万籟

万籟は荒木氏。安永七（一七七八）年生、天保一三（一七四二）年没、享年六五。別号、花神窓。宮津の人。文化六年、宮津藩から掛屋職を拝命。後の天保の初めに京へ移り、天保五年から同一一年に年刊句集『逐々集』を刊行。また、淀藩士連中が入集している『百梅集』を天保一一年に刊行、同一二年閏一月二〇日に北野へ奉納する。

『百梅集』は、北野天満宮の奉額に因む記念集である。半丁毎に入集者の肖像画と梅の句を百葉配す。武士・僧侶・神官などの上級階層の入集が特徴である。吟風の入句に関しては、選句の往復書簡がある。第一章第二節（18頁）参照。同集は、本節書簡A「閏一月二三日付吟風宛花神（万籟）書簡」に傍線a「北野奉額、当廿日無滞相納候」とあり、閏一月は天保一二年なので同年のこととなる。しかし、同集の出版に関連した別の二通、本節にあげる書簡B、Cは、八月二四日の同日に出されたものであるが、書簡Cの北鵠書簡点線部に「百梅集是九月末迄ニ出来為致度」とあり、九月の完成を目指していたことが知られ、成立は天保一一年と推察される。

万籟と淀藩士連中との交際は、『百梅集』の奉納を契機としていると推察される。選句にあたっての吟風の署名は、俳号に加えて「城州淀藩中　畑数馬」と、本名を記すことは他の書簡では認められない。数通の万籟書簡から、『百梅集』の入集者には異動があったことが知られるが、鴻池の入集はなく、吟風、軽舟、雪川の三名である。また、『逐々集』への入集は、天保一三年のものに軽舟、鴻池、嘯窓が載る。その他の万籟句集への入集は吟風、軽舟、鴻池のものがある。いずれにしても『百梅集』成立の天保一一年頃から万籟が没する同一三年迄の三年ほどの交際であるが、淀藩士と京俳壇との関わりを考えるうえでは意義があった。

○書簡A　閏一月二三日付吟風宛花神（万籟）書簡（1-137-10）をみる。
縦一六・〇糎、横四〇・〇糎。成立は、天保一一年、同一二年閏一月二〇日奉納。



吟風大人　　花神　　（裏）

余寒愈御清福奉賀候。然ば、
春興出来候付、五葉づゝ七組
さし送候。御入手御披露可被下候。
いづ方へも右の内一葉づゝは庵中へ申請、
四葉も配り候へども、貴地ははじめて
被仰下候事故、二百もいかゞと存五葉づゝ
上候。扨、又a北野奉額、
当廿日無滞相納候。然処
大分寄過と相成候。もどし候ては句主の
こゝろもちもいかゞ哉とて、社中申合
追加五十梅相企申候。右にては亦
大分不足に相成候間、何卒御出句可被下候。
御方よろしく御助力希上候。先日の
巻いかゞ候哉、承度候。其後の御作
相待申候。　草々不具　　可祝

閏正月廿三日

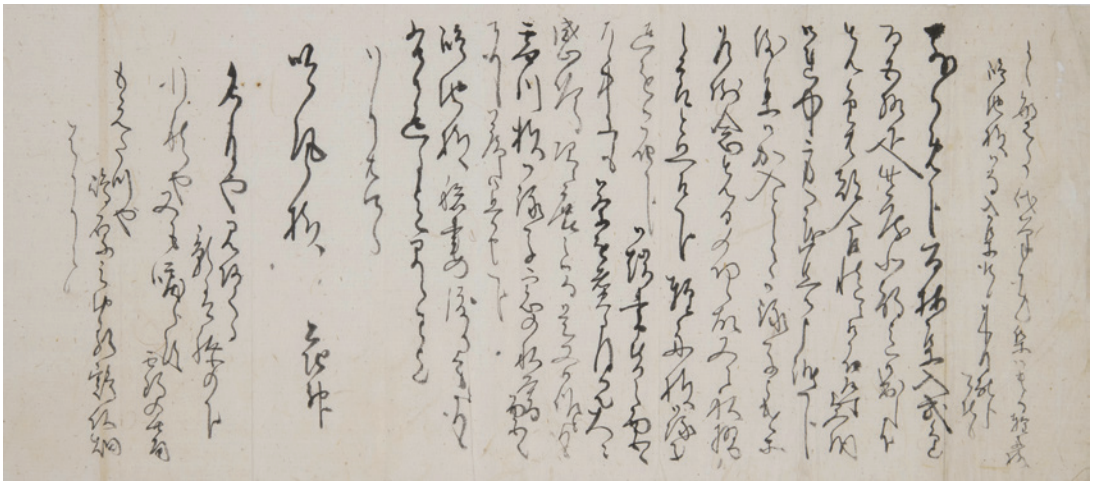
梅さくや吹たびとれる枝のごみ
雪汁や麓〳〵の梅の花
月よしと二日の盃春の雪

御社中皆様へ宜希候。野叟も
ちと罷出候心得ながら追廻され
居申候。以上

次に、万籟句集への入集についてみる。

○書簡B　八月二四日付吟風宛花神（万籟）書簡（1―139―2）

ただし、北鵠の代筆。縦一五・五糎、横三五・〇糎。



b 尚〳〵繁事代筆。c 御入集は貴句、軽舟様／鴻池様御句入集仕候。来月配分可仕候。

前御免可被下候。d 百梅集入式金百五拾疋、此度北鵠迄御出し被下候。先金共都合慥に御届、辱受納。御連中方へも宜御申渡可被下候。儀集御加入として御詠草被遣候処乍残念先日〆切候故、又の秋摺の節と思召可被下候。軽舟様御詠草返進御届可被下候。御端書皆々面白く存候。中にも、茶を煮る月見、大に感吟。次に鹿の御句、是又御作と存候。雪川様御詠草、窓の秋暮面白く可存候。御序宜御申可被下候。鴻池様へ稲妻渡り宜と可存候。右御返事迄。早々不乙。

八月廿四日　花神

吟風様

名月や見あぐる影は膝の下

行秋や又も涙らず鶴の背

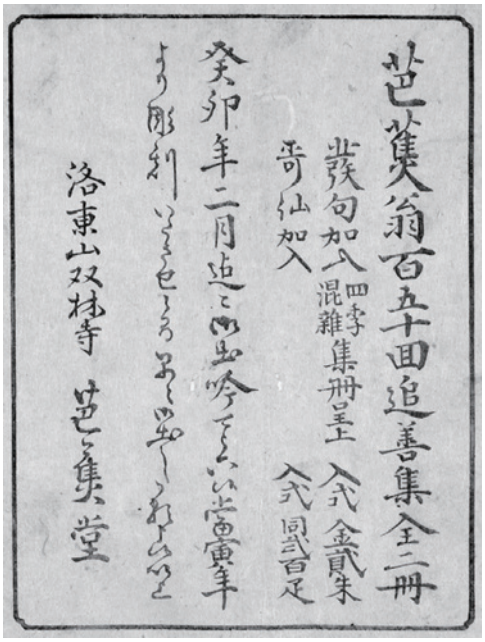
もえたつや島原みゆる鶏頭畑

ばかりに申候。

書簡Bは、傍線部bにあるごとく北鵠の代筆である。北鵠は丹波国山国（後、京都府北桑田郡山国村。現、廃村。）の人で、万籟とは行動を共にすることも多く、寝食の労を扶けた。傍線部cの摺物の入集者は、吟風、軽舟、鴻池である。九月五日付吟風宛万籟書簡（1―63―5）に、「例年冬の小催し」ながら、此度は秋冬の摺物となり、三氏が入集するとある。親しい交流が知られる。

また、傍線部d「百梅集入式金百五十疋」は、北鵠へ送付済みである。この入句料は、三人分（一丁半）の価で、一人五〇疋である。「先金」は不明である。当時の入句料を参考にすると、左の天保一四年『花供養』ちらしでは、歌仙加入料が「金二百疋」である。同書の歌仙は、半丁九行取りで二丁を要するので、半丁分が五〇疋の計算となる。金一両を一〇万円として試算すると、約一万三千円である。また、集冊付一句の入句料は、「金二朱」とあり、やはり五〇疋になる。歌仙加入者の多くは、発句も入集するので、五〇疋を越える。万籟は芭蕉堂に深く関係していたので、この試算は参考になろう。

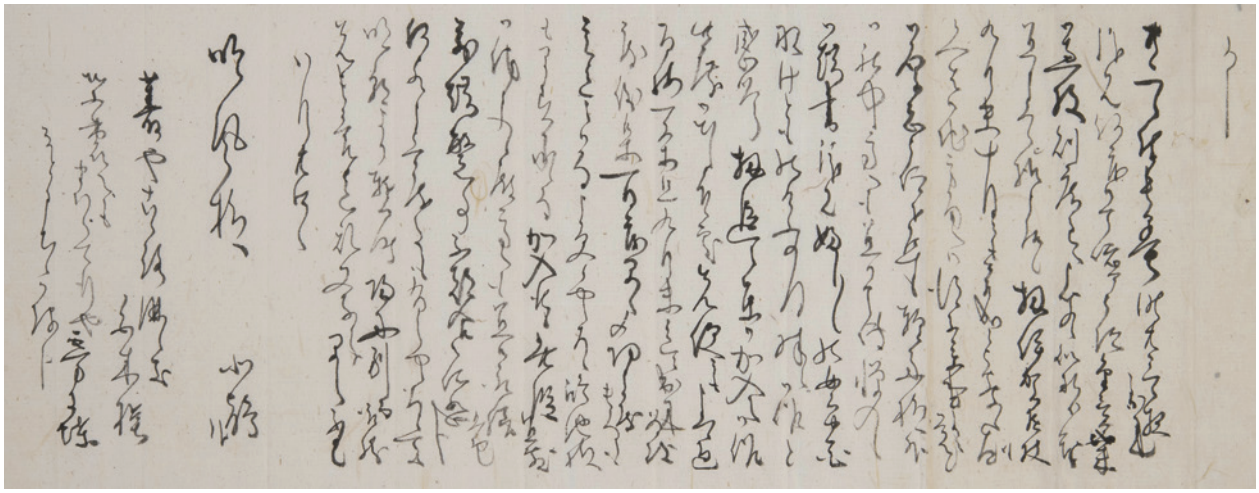
〔参考〕天保一四年『花供養』ちらし（糸井文庫　十三―15）



また、『逐々集』の入集については、書簡C「八月二四日付吟風宛北鵠書簡」がある。

○書簡C　八月二四日付吟風宛北鵠書簡（1―38―27）

縦一五・五糎、横四一・五糎。



▲

書簡Cは、北鵠筆である。北鵠は、書簡Bも代筆している。

上の書簡の一一行目▲印部の『逐々集』は、京で立机した万籟の年刊句集で、俳諧と四季の発句を収める。現在確認できるものは、天保五年から同一一年までの七冊である。多くが万籟に所縁のある京、丹後、丹波、但馬の連中である。伏見、淀の連中は少なく、淀藩士では、天保一一年（冬奥書き）のものに軽舟、鴻池、嘯窓の三名の入集がみられる。

・ゆづり葉の藍も赤らむ時雨哉　ヨド軽舟

・灯の往来ばかりや除夜の門　ヨド鴻池

・咲て居る鶏頭たねを盈しけり　ヨド嘯窓

また、『逐々集』に関して、▲印部から記すと、

扨追々集御加入の御作／此度御出し被下候処、先便にも申上候通、／百梅集是九月末迄に出来為致／度儀集一日も早く〆切候義、貴句も／是迄の御句申受候やう存候。鴻池様／も早春承候句加入仕候。（略）

とあり、『逐々集』の締め切りを繰り上げたため、吟風の入集は間に合わなかった旨が記されている。吟風に出句を勧めながら、管見の限りでは入集が認められないのは、ここに言う締め切り日の関係であったろう。また、鴻池の句は早春の作を加入したことが知られる。なお、『百梅集』の成立に関しては、先述の書簡Aでは、天保一二年閏一月二〇日に北野へ奉納したことが知られたが、成立は右の点線部「百梅集是九月末迄に出来為致度」から、天保一一年のことと推察される。

以上に考察したごとく書簡B、Cの成立は、『百梅集』奉納の天保一二年閏一月二〇日以前の同一一年のことといえる。淀藩士連中と万籟との交際は、『百梅集』加入を契機としていると推察されるが、天保一三年には万籟が没し、多くの交際は望めなかったのである。

資料一　京俳壇と一枚摺二種

淀藩士連中と京俳壇連中とが入集する一枚摺二点を示す。

〔A〕　年次未詳　狗追う画一枚摺（2-11-1）。縦四〇・〇糎、横五二・五糎。

・京俳壇　蒼虬、朝陽、春躬、杜鷲、梅價、鶯語他　・淀藩士連中　▼吟風、支雪

〔B〕 年次未詳　横山清暉画一枚摺（2―12）。縦四二・七糎、横五六・五糎。

・京俳壇　岳鳳、杜蓼、梅通、九起、岱年、梅室、鶯語、山城老波、半山他

・淀藩士連中▲　江戸雪川、鳳水、剛地、三千丸、魚眼、和六、鴻地、素琴、赤水、掬水、友之、其友、軽舟、吟風、嘯窓（祖翁の塚に香を捻る）

▲　▲▲▲▲▲▲▲　▲▲　▲　▲　▲　▲　▲

資料二　吟風俳諧交友録　影印

吟風俳諧交友録は、以下のとおりである。

Ⅰ　俳諧交友録　雪　（1-72-1）
縦一二・〇糎、横三二・〇糎。

Ⅱ　俳諧交友録　月　（1-72-2）
縦二四・〇糎、横三二・八糎。※

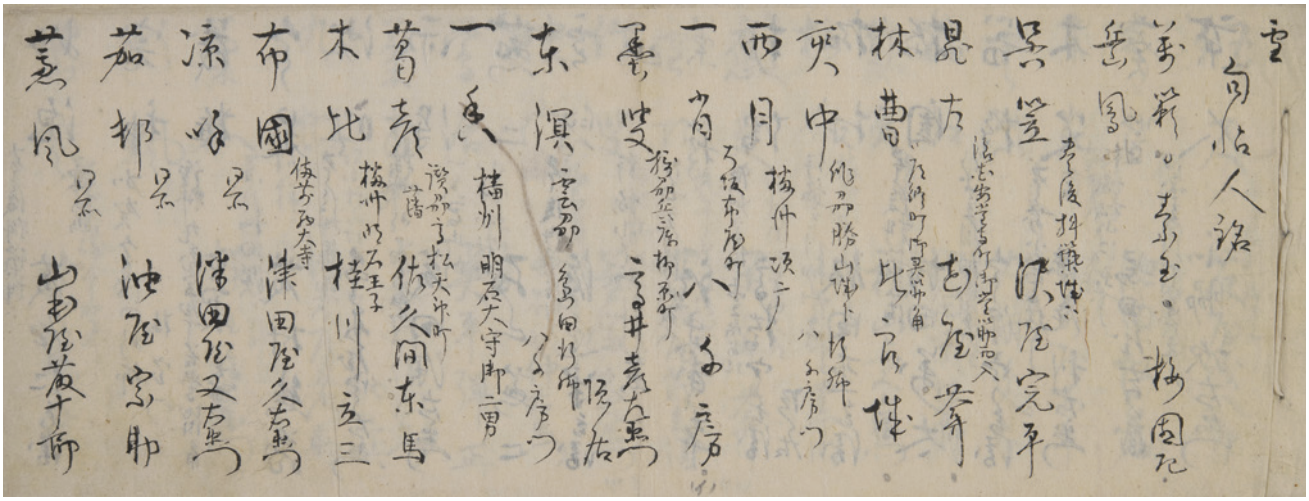
Ⅲ　俳諧交友録　焦夢他　（1-72-3）
縦一二・〇糎、横三四・〇糎。

Ⅳ　俳諧交友録　舟柴他　（1-72-4）
縦二四・〇糎、横三四・〇糎。※

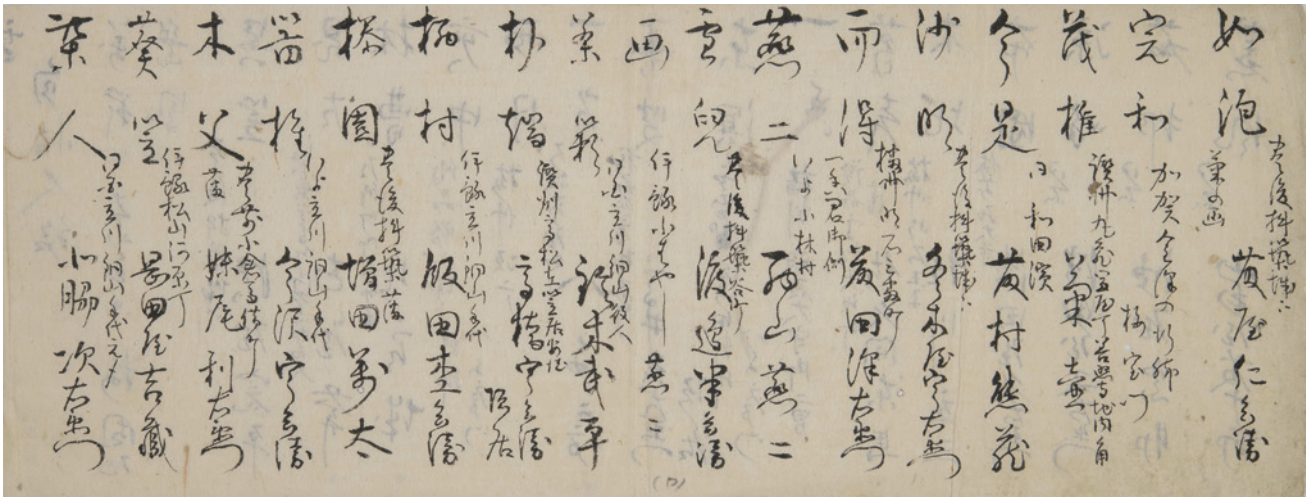
Ⅴ　俳諧交友録　近在発句師　（1-72-5）
縦二四・〇糎、横三九・九糎。※

Ⅵ　俳諧交友録　花屋庵他　（1-39-6）
縦一六・〇糎、横二五・〇糎。

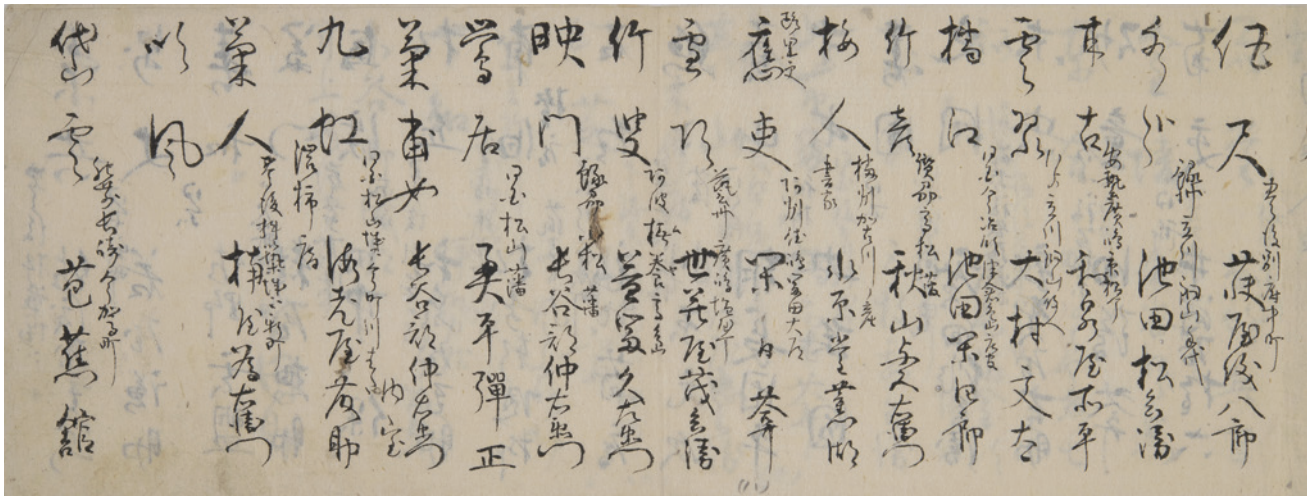
※一枚を半分に折って用いるが、便宜上、表、裏の扱いとする。
※白紙は除く。



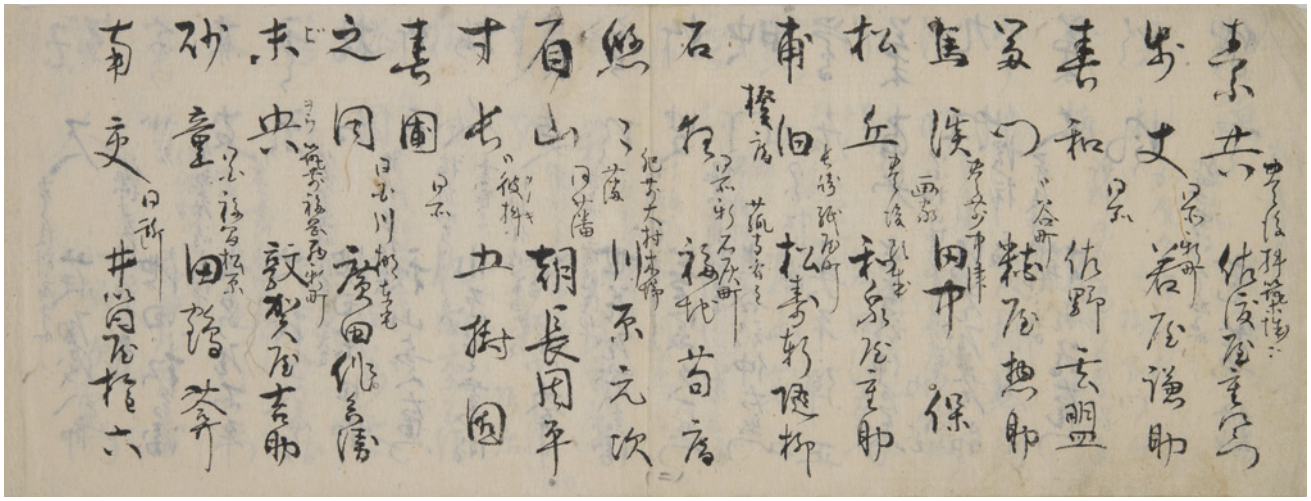
（1-72-1-1 オ）　Ⅰ



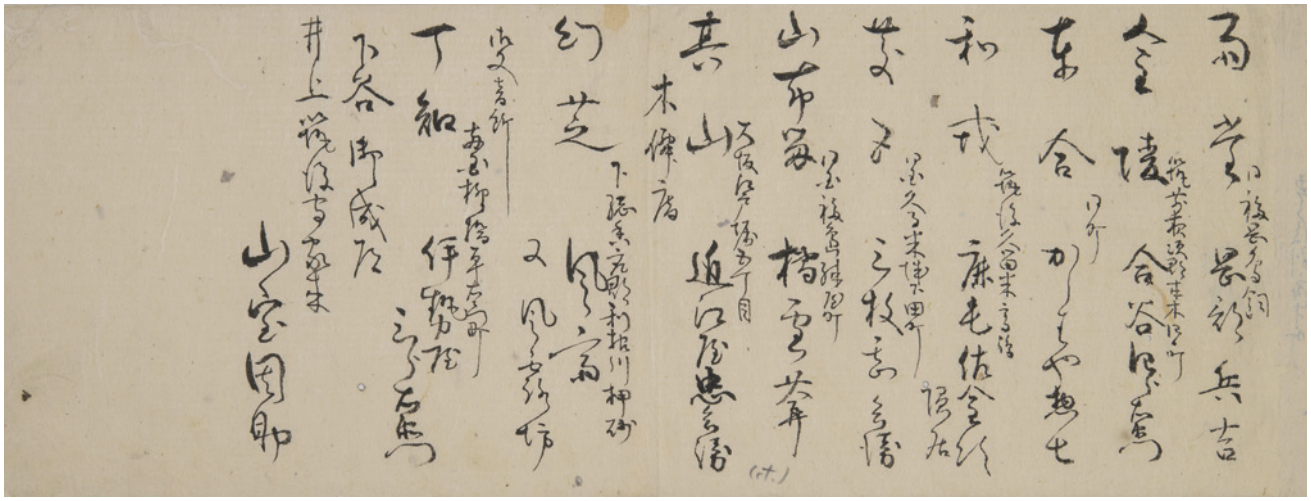
（1-72-1-1 ウ）　Ⅰ



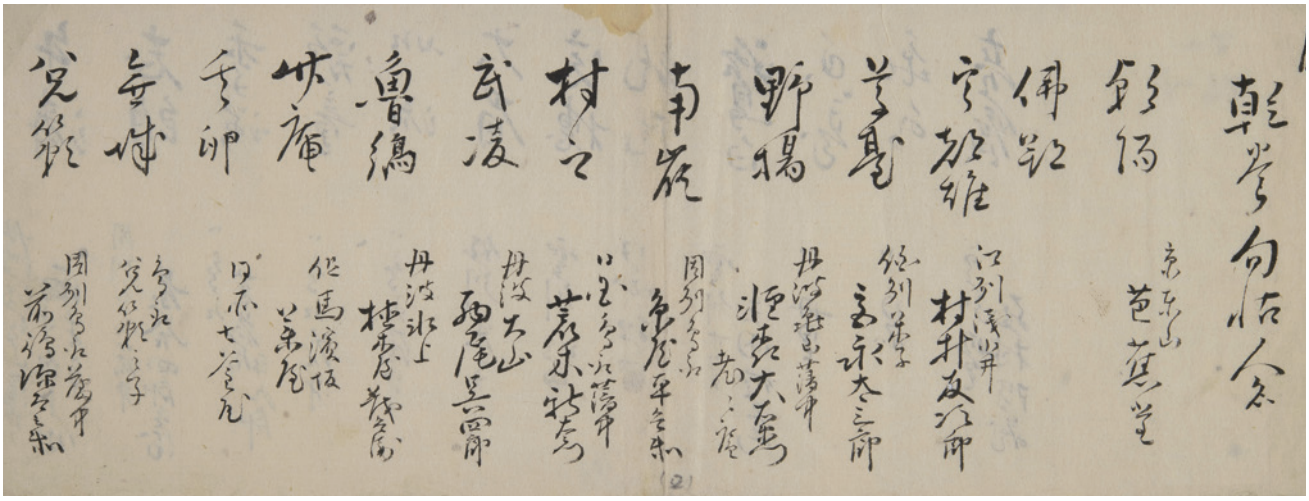
（1-72-1-2 オ）　I



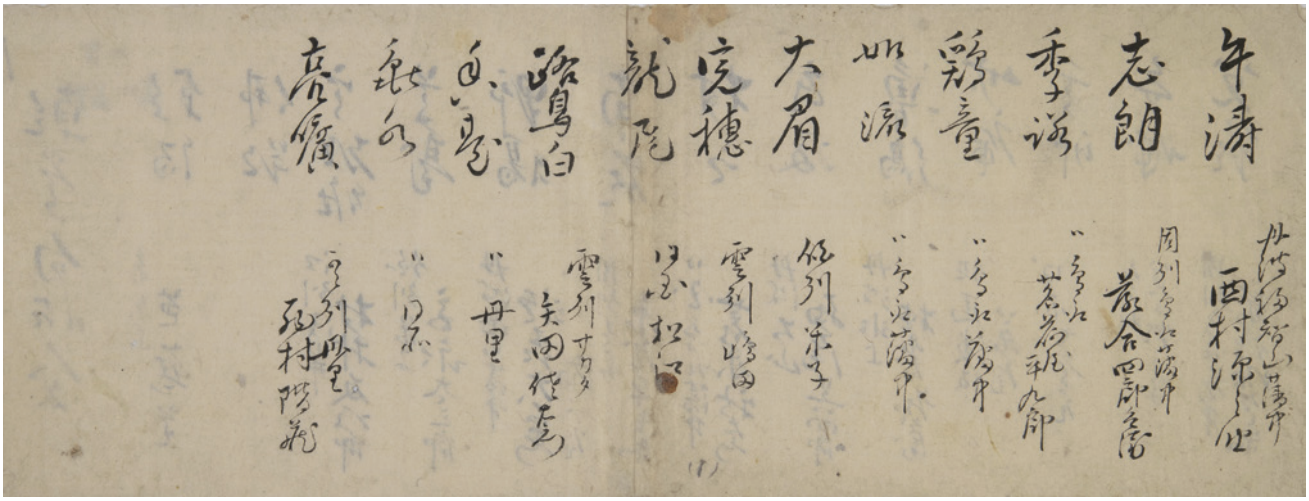
（1-72-1-2 ウ）　I



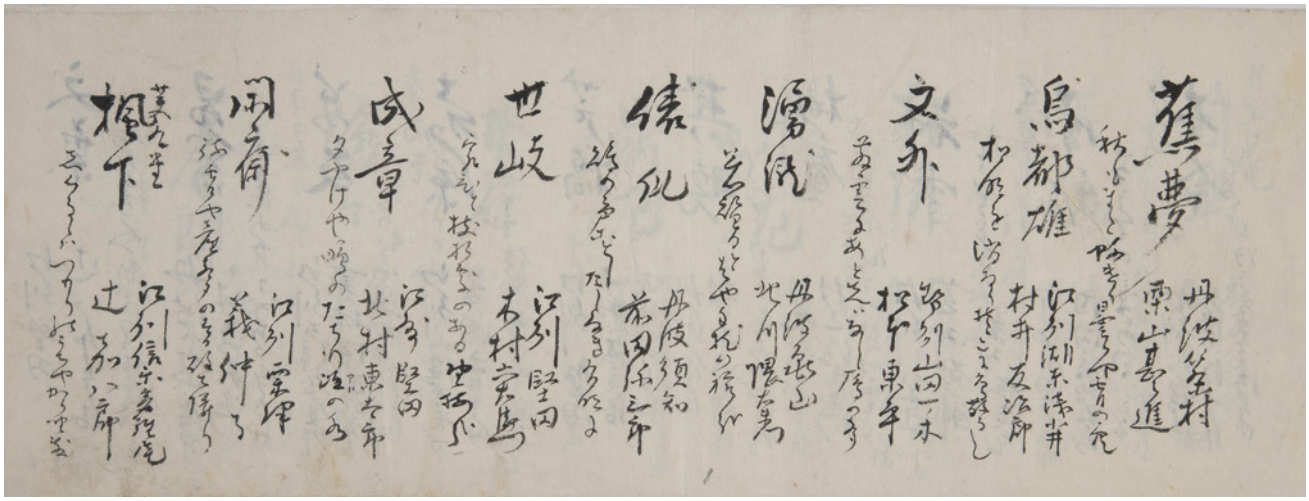
（1-72-1-3 オ）　I



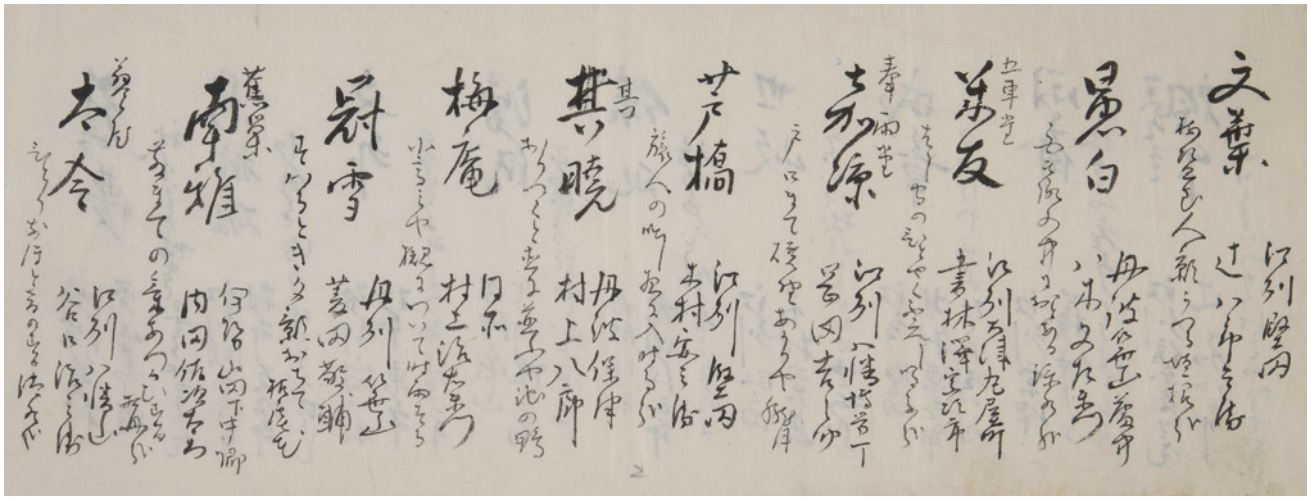
（1-72-2-1 オ）　Ⅱ



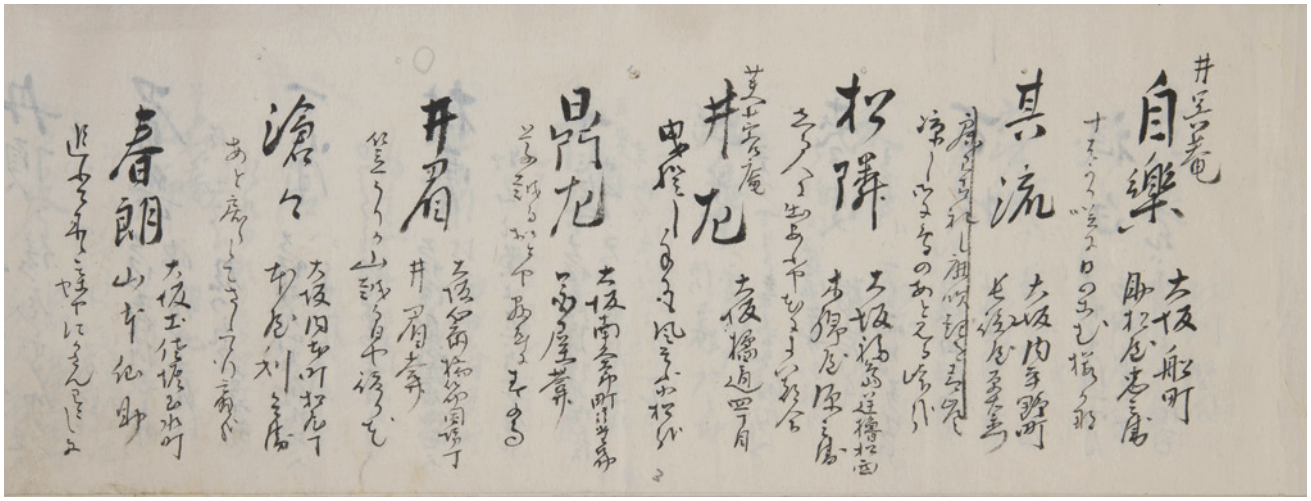
（1-72-2-1 ウ）　Ⅱ



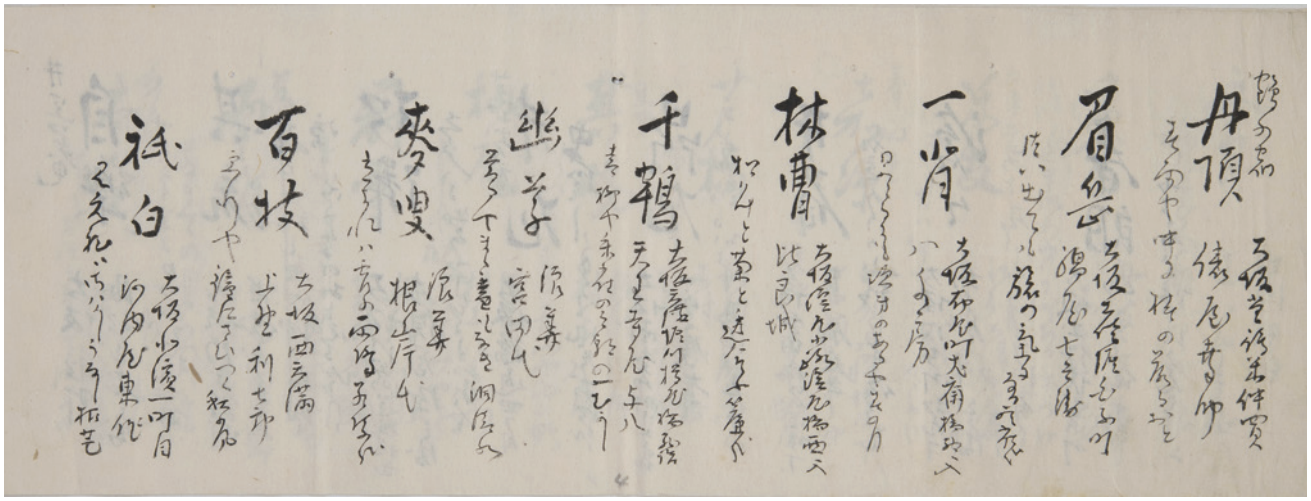
（1-72-3-1 オ）　Ⅲ



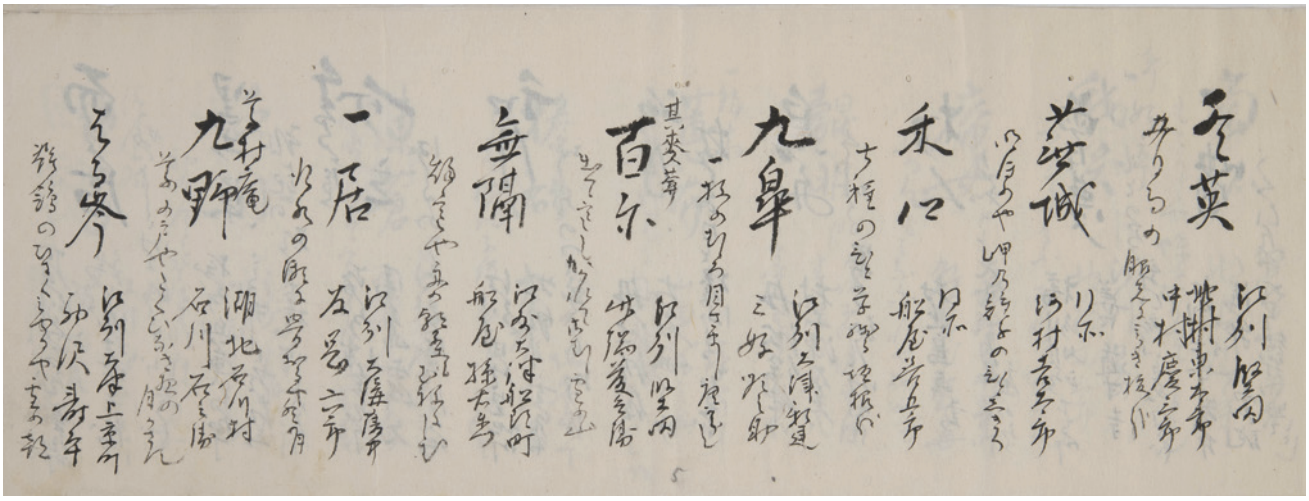
（1-72-3-1 ウ）　Ⅲ



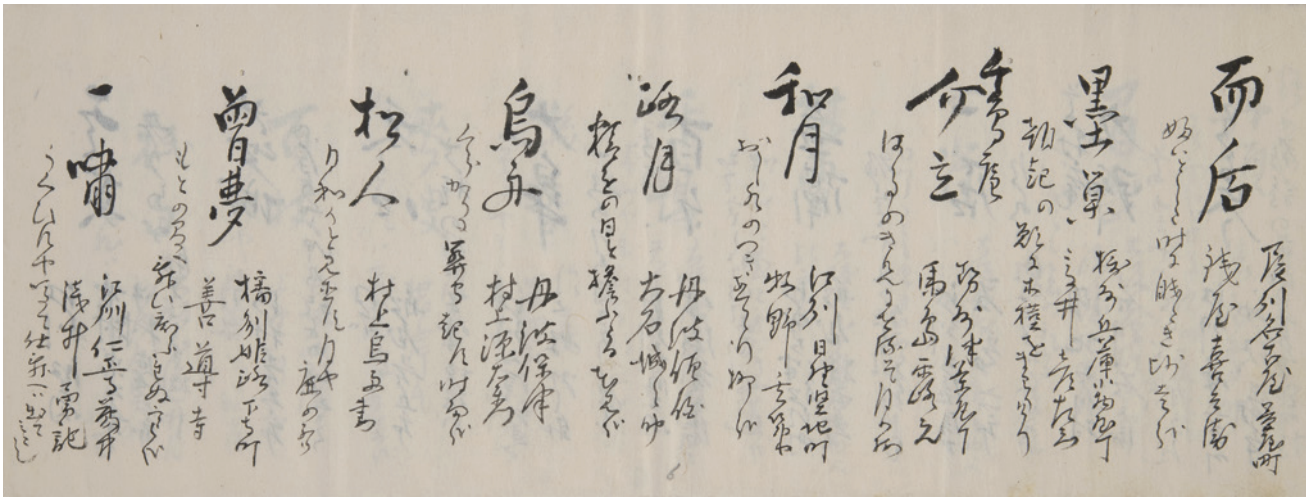
（1-72-3-2 オ）　Ⅲ



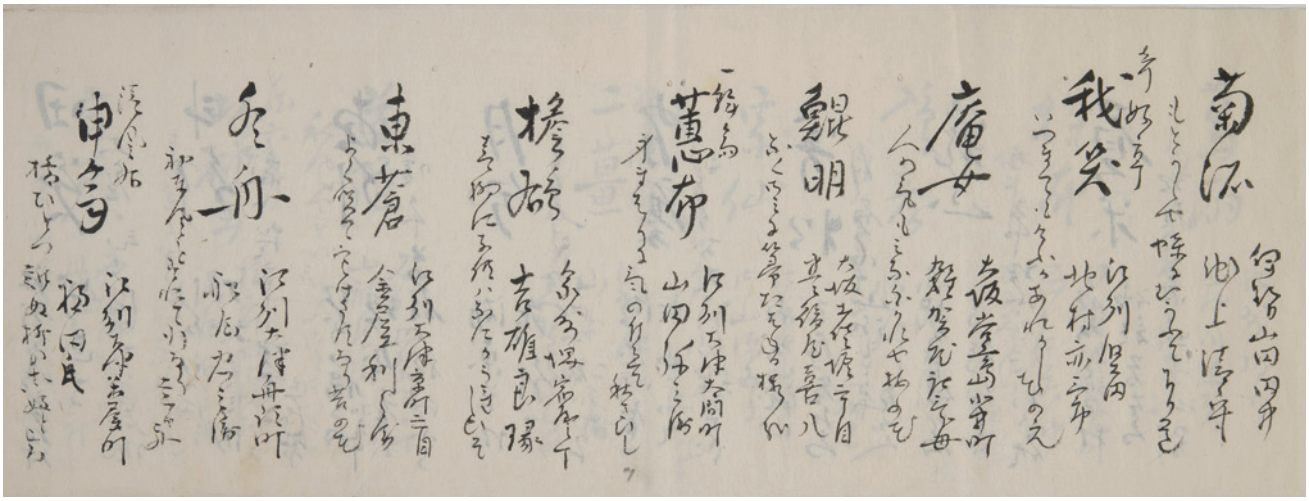
（1-72-3-2 ウ）　Ⅲ



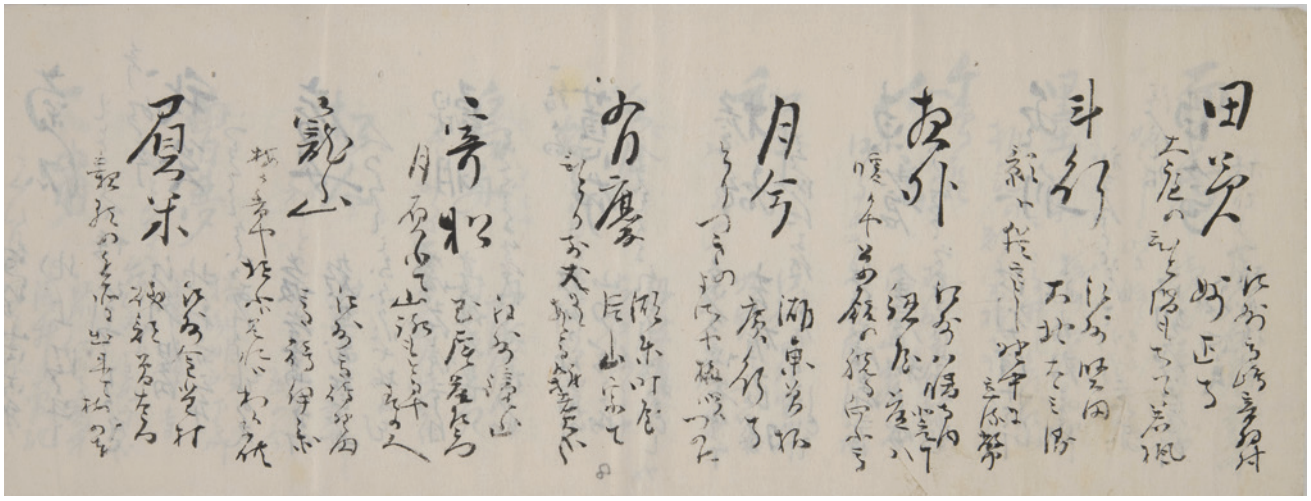
（1-72-3-3 オ）　Ⅲ



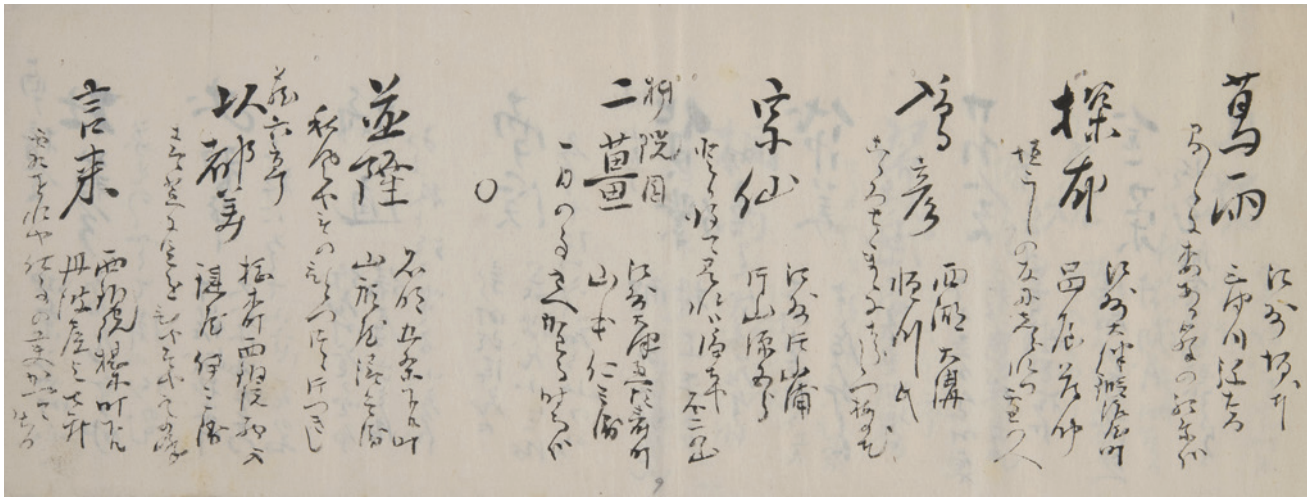
（1-72-3-3 ウ）　Ⅲ



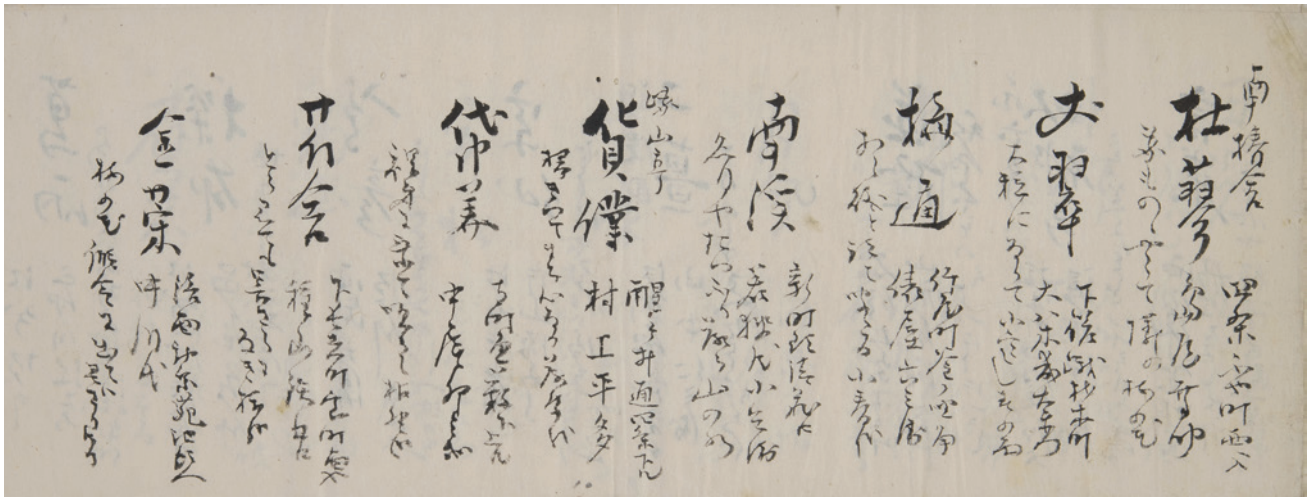
（1-72-3-4 オ）　Ⅲ



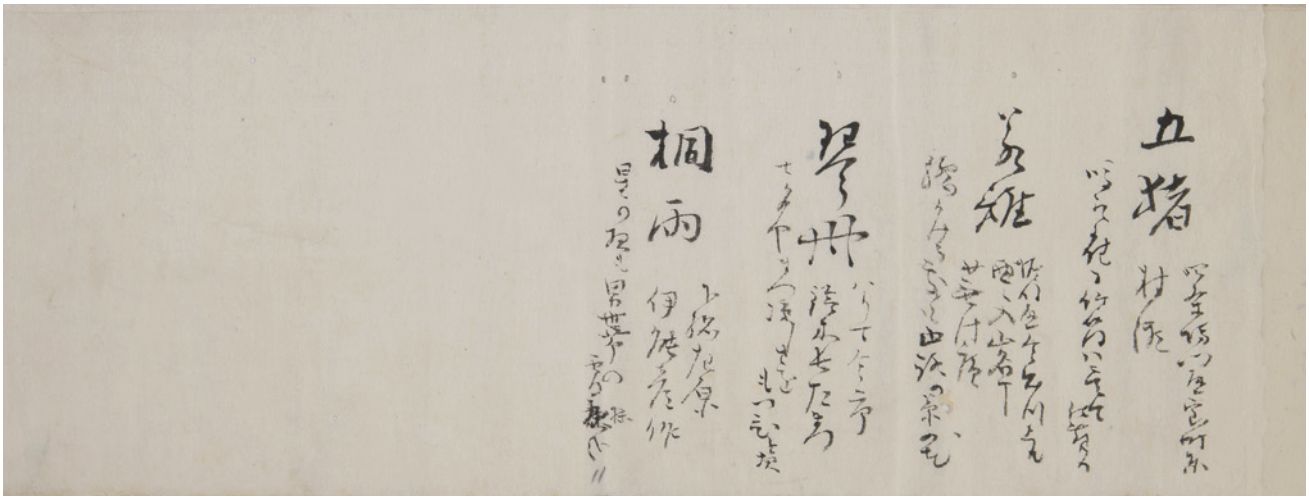
（1-72-3-4 ウ）　Ⅲ



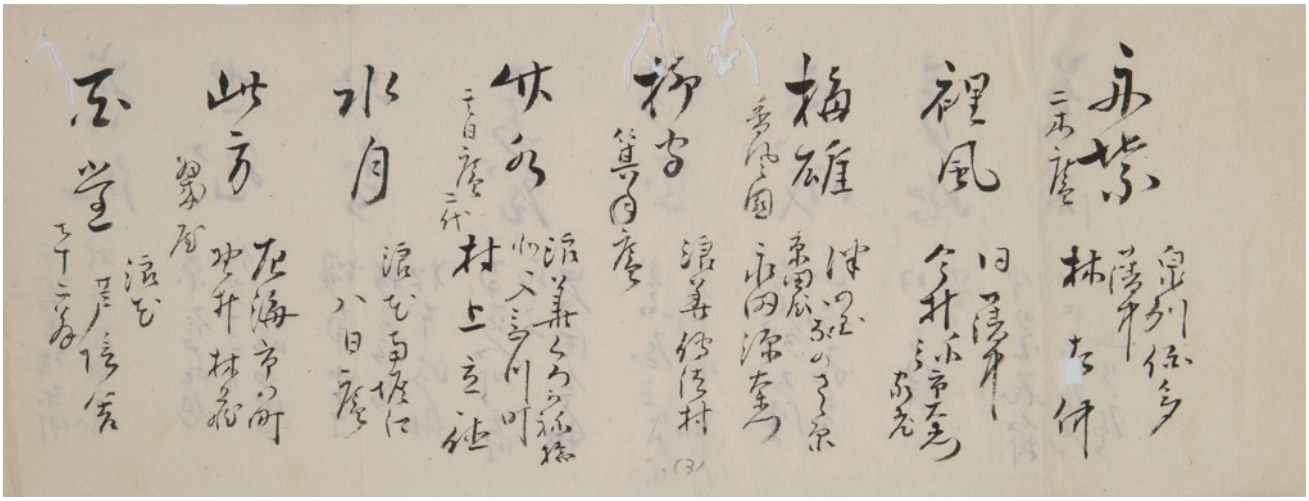
（1-72-3-5 オ）　Ⅲ



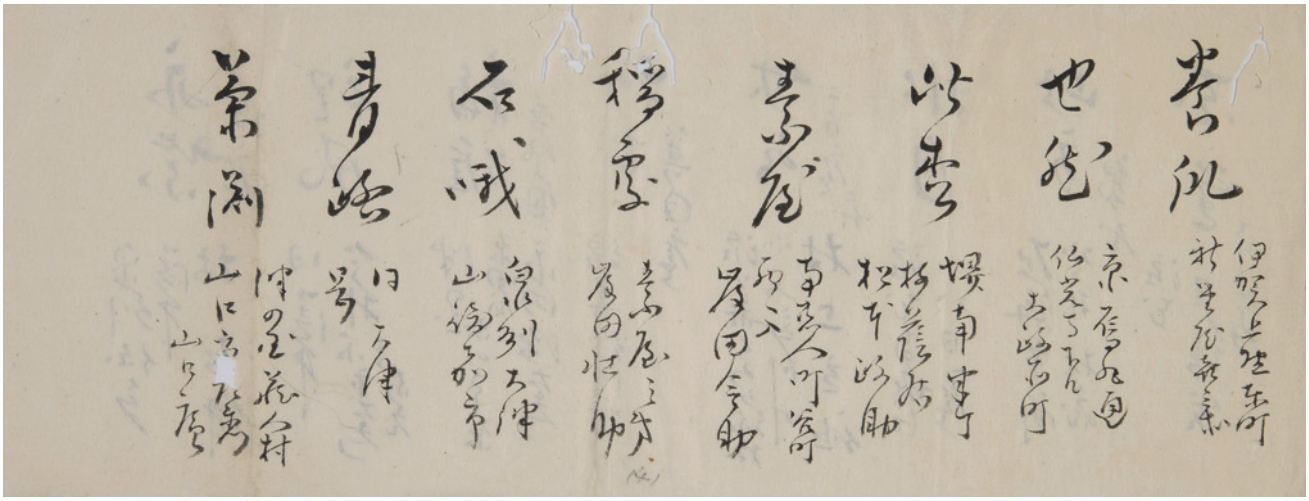
（1-72-3-5 ウ）　Ⅲ



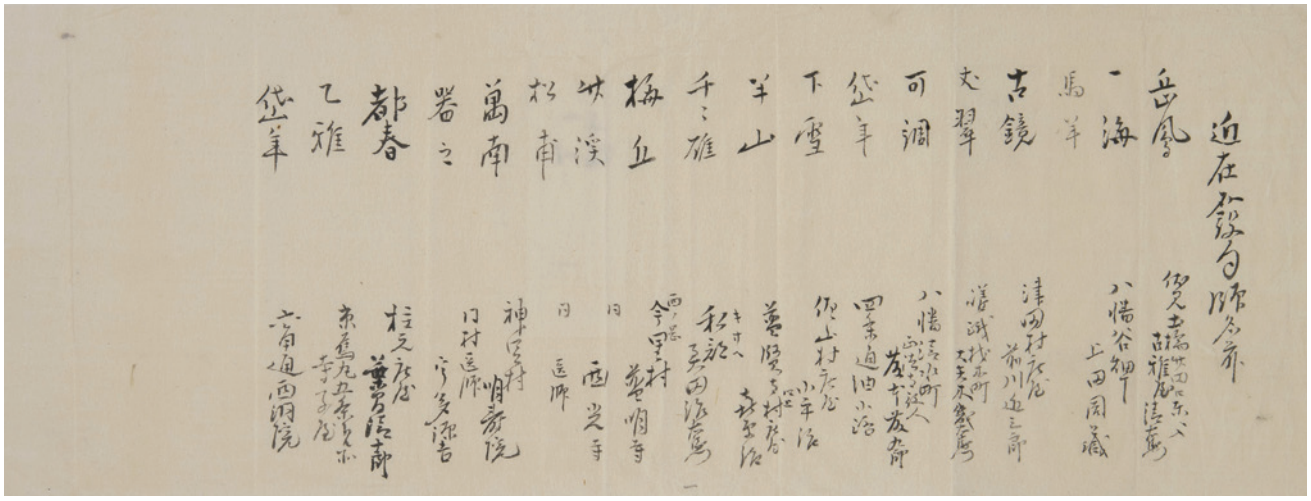
（1-72-3-6 オ）　Ⅲ



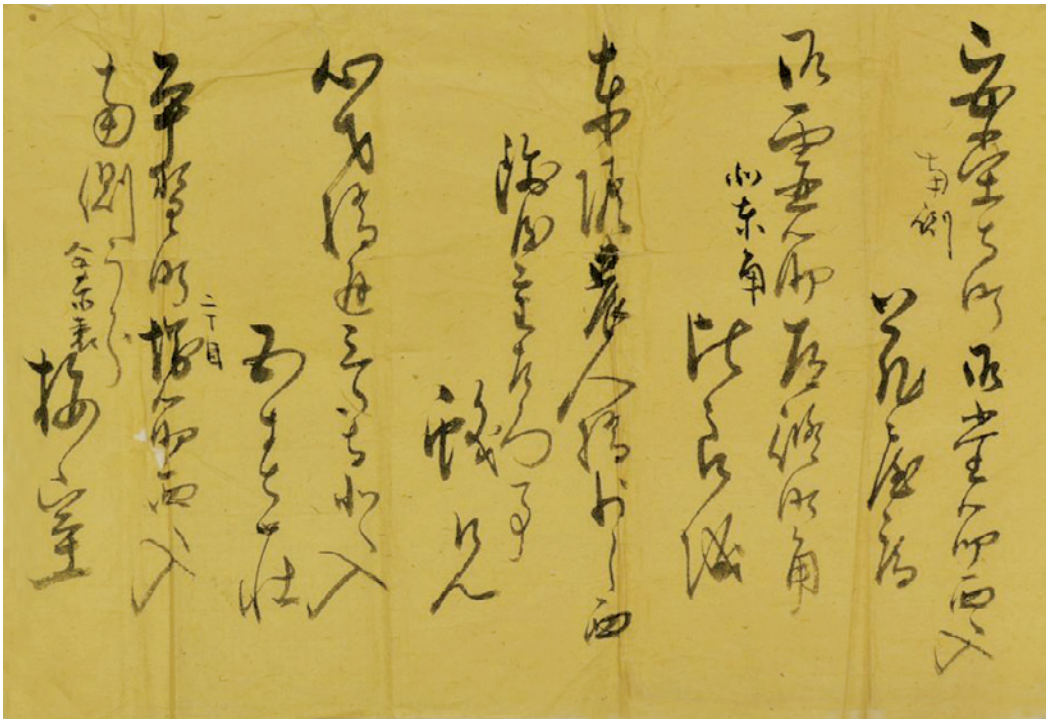
（1-72-4-1 オ）　Ⅳ



（1-72-4-1 ウ）　Ⅳ



（1-72-5-1 オ）　V



（1-39-6-1 オ）　Ⅵ

資料三　吟風俳諧交友録　俳号索引

凡例

一　本索引は、本章資料二吟風俳諧交友録影印の俳号索引である。

一　俳号の配列は、原則として現代仮名遣いによる音読みの五十音順とする。ただし、習慣によって読んだものもある。

一　資料番号は、畑家俳諧資料目録の番号、丁数、オ（表）・ウ（裏）、記載行数の順に記す。

一　重複するものは総て列記する。ただし、俳号と庵号などが重複するものは、俳号にまとめて配列し、庵号などは捨て見出しとする。

一　（　）は私に補ったものである。

一　交友録「雪」（1–72–1）は、「名家句集」（2–8）の人名録となっている。

〔俳号〕	〔記載事項〕	〔資料番号〕
あ		
庵女	大坂堂島北中町　雑賀屋庄三郎　母	1–72–3–4オ3
一香	播州　明石大守　御二男	1–72–1–1オ11
一居	江州大溝藩中　友岡六郎	1–72–3–3オ7
一海	八幡谷畑町　上田周蔵	1–72–5–1オ2
一肖	大坂布屋町　八千房	1–72–1–1オ8
一肖	大坂布屋町心斎橋西へ入　八千房	1–72–3–2ウ3
一嘯	江州仁正寺藩中　浅井勇記	1–72–3–3ウ9
以都美	椹木町西洞院西へ入　鍵屋伊兵衛　蔵六亭	1–72–3–5オ7
稲処	素屋之弟　岸田壮助	1–72–4–1ウ5
烏舟	丹波保津　村上源右衛門	1–72–3–3ウ–6
宇都雄	江州浅小井　村井友次郎	1–72–2–1オ3
烏都雄	江州湖東浅小井　村井友治郎	1–72–3–1オ2
雨堂	同（筑前）福岡鳥飼　岡部兵吉	1–72–1–3オ1
雲翠	いよ　立川銅山　役人　大村文太	1–72–1–2オ4
映門	伊州　小松藩　長谷部仲右衛門	1–72–1–2オ11
檐鵰	泉州堺宿屋之町　吉雄良瑑	1–72–3–4オ6
燕二	いよ　小林村　西山燕二	1–72–1–1ウ7
燕二	画　伊予　小はやし　燕二	1–72–1–1ウ9
鶯居	同（伊予）国　松山藩　奥平弾正	1–72–1–2オ12
応吏	阿州徳島富田大道　閑日庵　鴎里更応吏	1–72–1–2オ8
乙雅	京烏丸五条下ル所　寺子屋	1–72–5–1オ17
か		
亥中	作州勝山城下　行脚　八千房門	1–72–1–1オ6
介立	勢州津茶屋町　馬島露元　千鳥庵	1–72–3–3ウ3
岳鳳		1–72–1–1オ2
岳鳳	伏見土橋竹田口東へ入　古雅屋清右衛門	1–72–5–1オ1
禾郷	同所（江州堅田）船屋善五郎	1–72–3–3オ3
我笑	江州堅田　北村亦三郎　奇好亭	1–72–3–4オ2
下雪	佐山村　庄屋　小平治	1–72–5–1オ8
茄邨	同所（備前西大寺）油屋宗助	1–72–1–1オ16
可調	八幡清水町正法寺　役人　藤本藤九郎	1–72–5–1オ6
葛彦	讃州高松天神町　藩　佐久間東馬	1–72–1–1オ12
貨僕	醒ヶ井通四条下ル　村上平多　峨山亭	1–72–3–5ウ5

嘉涼 江州八幡博労町　岡田吉之助　奉雨堂　1-72-3-1ウ4
甘古 安芸広島京松町　和泉屋所平　1-72-1-2オ3
閑斎 江州粟津　義仲寺　1-72-3-1オ8
完穂 雲州島田　1-72-2-1ウ7
冠雪 丹州笹山　菱田敬輔　1-72-3-1ウ8
完和 加賀金沢の行脚　梅室門　1-72-1-1ウ2
其暁 丹波保津　村上八郎　1-72-3-1ウ6
菊所 伊勢山田田中　池上清守　1-72-3-4オ1
菊人 豊後杵築城下新町　楠屋為右衛門　1-72-1-2オ15
菊渕 津の国蔵人村　山口□左衛門　山口庵　1-72-4-1ウ8
菊甫女 （伊予）　長谷部仲右衛門　内室　1-72-1-2オ13
蟻兄 東堀農人橋少し西　銭屋重左衛門事　1-39-6-1オ3
器権 いよ立川銅山　手代　今沢宇兵衛　1-72-1-1ウ14
其山 大坂江戸堀五丁目　木僊庵　近江屋忠兵衛　1-72-1-3オ7
器之 同（神足）村医師　宇多源吉　1-72-5-1オ15
寄松 江州鏡山　玉屋藤左衛門　1-72-3-4ウ6
亀水 同（雲州）同所（母里）　1-72-2-1ウ11
季諾 同（因州）鳥取　茗荷屋平九郎　1-72-2-1ウ3
橘江 同（伊予）国今治領津倉島　庄官　池田閑四郎　1-72-1-2オ5
祇白 大坂北浜一町目　河内屋東作　1-72-3-2ウ9
九虹 同（伊予）国　松山城下今町川ばた
九皐 渋柿庵　海老屋藤助　1-72-1-2オ14
九野 江州大津新建　三好順之助　1-72-3-3オ4
其卵 湖北石川村　石川石兵衛　草村庵　1-72-3-3オ8
葵笠 同所（但馬浜坂）　七釜屋　1-72-2-1オ11
伊予松山河原町　岡田屋吉蔵　1-72-1-1ウ16

其流 大坂内平野町　長崎屋原右衛門　1-72-3-2オ2
金菜 洛西神泉苑池改人　中川氏　1-72-3-5ウ8
芹舎 下長者町室町西へ入　種山鉄吾　1-72-3-5ウ7
琴州 ハリマ今市　鈴木長左衛門　1-72-3-6オ3
吟風 筑前夜須郡甘木四日町　合谷四郎右衛門　1-72-1-2オ16
金陵 丹波笹山藩中　八木又左衛門　1-72-1-3オ2
愚白 同（筑後）国久留米城下田町　三枝甚兵衛　1-72-3-1ウ2
慶五 同（因州）鳥取藩中　1-72-1-3オ5
鶏童 江州大津太間町　山田弥兵衛　一幹斎　1-72-2-1ウ4
蕙布 湖東曽根　広行寺　1-72-3-4オ5
月兮 下総香取郡利根川押砂　風斎又風露坊　1-72-3-4ウ4
幻芝 御文音所　両国柳橋平右衛門町
伊勢屋三郎右衛門
香台 同（雲州）母里　1-72-1-3オ8
古鏡 津田村庄屋　前川近三郎　1-72-2-1ウ10
伍尺 豊後別府中町　藤屋儀八郎　1-72-5-1オ4
五春荘→井眉　1-72-1-2オ1
五猪 四条坊門通室町東　村瀬　1-72-3-6オ1
午濤 丹波福知山藩中　西村源之助　1-72-2-1ウ1
呉笠 豊後杵築城下　沢屋完平　1-72-1-1オ3
今是 同（讃州）和田浜　藤村熊蔵　1-72-1-1ウ4
鯤明 大坂土佐堀二丁目　豊後屋喜八　1-72-3-4オ4
言来 西洞院椹木町下ル　丹波屋与七郎　1-72-3-5オ8

さ

柴人 同（伊予）国立川銅山　手代元〆　1-72-1-1ウ17
北脇次右衛門　1-72-1-2ウ15
砂童 同（筑前）国福間松原　田鶴庵　1-72-1-1ウ5
沙明 豊後杵築城下　冬木屋宇右衛門　1-72-1-1ウ10
茶籟 同（伊予）国立川銅山　役人　鈴木武平　1-72-1-2ウ13
之同 同（肥前）国川棚在宅　広田作兵衛　1-72-3-3ウ1
而后 尾州名古屋益屋町　銭屋喜兵衛　1-72-4-1ウ3
此松 堺南半町　梅蔭居　松本政助　1-72-1-1ウ6
而得 播州明石三番町　一香君御側　藤田沢右衛門　1-72-4-1オ7
此方 左海市の町　翠屋　野井林蔵　1-72-3-6オ2
若雅 堀川通今出川上ル西へ入山名町　蕪什庵　1-72-4-1オ1
舟柴 泉州伯多藩中　二木庵　林太仲　1-72-1-2ウ12
春圃 同所（肥前彼杵）　1-72-3-2オ8
春朗 大坂土佐堀玉水町　山本仙助　1-72-1-2ウ3
春和 同所（豊後杵築）　佐野玄盟　1-72-1-2ウ6
松丘 豊後頭成　和泉屋重助　1-72-3-3ウ7
松人 （丹波保津）　村上烏舟　妻　1-72-3-5ウ2
丈翠 下嵯峨材木町　大八木幾右衛門　1-72-5-1オ5
丈翠 嵯峨材木町　大矢木幾右衛門　1-72-5-1オ13
松甫 同（西ノ岡今里村）　医師　1-72-3-1オ1
蕉夢 丹波篠村　栗山甚之進　1-72-3-2オ3
松隣 大坂福島逆櫓松西　木綿屋源兵衛　1-72-1-1ウ1
如泡 豊後杵築城下　藤屋仁兵衛　1-72-2-1ウ5
如流 同（因州）鳥取藩中　1-72-3-2オ1
自樂 大坂船町　助松屋忠兵衛　井呉庵　1-72-2-1ウ2
志朗 因州鳥取藩中　落合四郎兵衛　1-72-1-1ウ13
榛園 豊後杵築藩　増田万太　1-72-3-4オ9
申斎 江州大津米屋町　福田氏　清風居　1-72-4-1オ6
水月 浪花南堀江　八日庵　1-72-1-2オ2
水哉 予州立川銅山　手代　池田松兵衛　1-72-1-2ウ11
寸長 同（肥前）彼杵　五樹園　1-72-1-1オ7
西月 播州須磨　1-72-3-2オ4
井左 大坂橘通四丁目　芙蓉庵　1-72-3-1オ7
成章 江州堅田　北村東太郎　1-72-1-1ウ12
栖村 伊予立川銅山　手代　飯田杢兵衛　1-72-3-2オ6
井眉 大坂心斎橋筋周防町　井眉庵　1-39-6-1オ4
井眉 心才橋通三ツ寺北へ入　五春荘　1-72-3-1オ6
世岐 江州堅田　木村六右衛門　1-72-4-1ウ7
青路 同（泉州）大津　岡　1-72-4-1ウ6
石哦 泉州大津　山崎嘉市　1-72-1-2ウ8
石狂 同所（長崎）新石灰町　福地苟庵　1-72-1-1ウ8
雪児 豊後杵築谷町　渡辺半兵衛　1-72-1-2オ9
雪頂 芸州広島塩屋町　世并屋茂兵衛　1-72-3-2ウ5
千鶴 大坂天満堀川樽屋橋西詰　天王寺屋与八　1-72-3-5オ4
宗仙 江州片山浦　片山源五郎　1-72-3-2オ7
滄々 大坂内本町松屋町　本屋利兵衛　1-72-2-1オ4
草台 伯州米子　宮永太三郎　1-72-3-3ウ8
曽夢 播州姫路下寺町　善導寺　1-72-4-1ウ4
素屋 南農人町谷町西へ入　岸田令助　1-72-1-2ウ1
素共 豊後杵築城下　佐渡屋重左衛門　1-72-1-1オ1
素玉

村之　同国（因州）鳥取藩中　荒木新右衛門　1-72-2-1オ7

た

岱雲　肥前長崎今駕町　芭蕉館　1-72-1-2オ17
岱年　四条通油小路　1-72-5-1オ7
岱年　六角通西洞院　1-72-5-1オ18
大眉　伯州米子　1-72-2-1ウ6
岱美　寺町通藪下上ル　中尾卯兵衛　1-72-3-5ウ6
太令　江州八幡山　谷口治兵衛　蓼屋　1-72-3-1ウ10
竹彦　讃州高松藩　秋山与五右衛門　1-72-1-2オ6
兌籟　因州鳥取藩中　前島源太兵衛　1-72-2-1オ13
丹頂　大坂堂島米仲買　俵屋幸助　鶴の宿　1-72-3-2ウ1
探布　江州大津鍛冶屋町　品屋茂助　1-72-3-5オ2
竹庵　但馬浜坂　薬屋　1-72-2-1オ10
竹水　浪華くろがね橋北へ入宮川町　其日庵二代　村上立徳　1-72-4-1オ5
竹叟　阿波撫養（ムヤ）高島　益富久左衛門　1-72-1-2オ10
千々雄　私部（キサベ）　奥田治右衛門　1-72-5-1オ10
竹渓　同（西ノ岡今里村）　西光寺　1-72-5-1オ12
蔦雨　江州坂本　三津川弥右衛門　1-72-3-5オ1
寵山　江州高島野田　高島伊兵衛　1-72-3-4ウ7
丁知　下谷御成道　井上筑後守家来　山室周助　1-72-1-3オ9
朝陽　京東山　芭蕉堂　1-72-2-1オ1
鼎左　浪花安堂寺町御堂筋西へ入　花屋庵　1-72-1-1オ4
鼎左　大坂南久太郎町御堂筋　花屋庵　1-72-3-2オ5
鼎左　安堂寺町御堂筋西入南側　花屋庵　1-39-6-1オ1

田美　江州高島音羽村　妙正寺　1-72-3-4ウ1
桐雨　下総左原　伊能彦作　1-72-3-6オ4
冬英　江州堅田　中村慶三郎　1-72-3-3オ1
東合　同（筑前夜須郡甘木四日）町　かしはや惣七　1-72-1-3オ3
冬舟　江州大津船頭町　船屋忠兵衛　1-72-3-4オ8
東蒼　江州大津京町二丁目　金屋利兵衛　1-72-3-4オ7
東溟　雲州島田　行脚　八千房門　1-72-1-1オ10
斗行　江州堅田　大北太兵衛　1-72-3-4ウ2
都春　柱元庄屋　葉間清十郎　1-72-5-1オ16
杜蓼　四条ふや町西へ入　島屋幸助　南椿舎　1-72-3-5ウ1

な

南雅　伊勢山田下中ノ郷　内田佐次右衛門　蕉巣　1-72-3-1ウ9
南渓　新町頭清蔵口　若狭屋小兵衛　1-72-3-5ウ4
南更　同所（筑前福間松原）　井筒屋権六　1-72-1-2ウ16
南嶺　因州鳥取　糸屋平兵衛　1-72-2-1オ6
鳰彦　西湖大溝　恒川氏　1-72-3-5オ3
二薑　江州大津恵比寿町　山本仁兵衛　柿院園　1-72-3-5オ5

は

梅庵　同所（丹波保津）　村上治右衛門　1-72-3-1ウ7
梅園尼　1-72-1-1オ1
梅丘　西ノ岡今里村　普明寺　1-72-5-1オ11
梅室　平野町二丁目堺筋西へ入南側うら　仝東表　1-39-6-1オ5
梅人　播州加古川ノ産　書家　水原堂薫湖　1-72-1-2オ7
梅通　竹屋町釜座角　俵屋六兵衛　1-72-3-5ウ3

梅雄　津の国いなのさゝ原　原田屋　1-72-4-1オ3
香風園　永田源右衛門　1-72-3-5オ6
麦叟　浪華　根岸氏　1-72-1-1オ9
馬渓　豊前中津　画家　田中保　1-72-3-3ウ2
花屋庵→鼎左
馬羊　1-72-1-2ウ2
はる岑　江州大津上京町　西沢寿平　1-72-1-1ウ11
半山　（南山城）普賢寺村庄屋　喜平治　1-72-1-2ウ7
万南　神足村　明寿院　1-72-3-3オ6
万籟　1-72-5-1オ3
未央（ビヲウ）　筑前福岡西新町　敦賀屋吉助　1-72-3-3オ9
眉岳　大坂土佐堀白子町　綿屋七兵衛　1-72-5-1オ9
眉山　同（肥前大村）藩　朝長周平　1-72-5-1オ14
百枝　大坂西天満　上野利七郎　1-72-1-1オ1
百尓　江州堅田　竹端藤兵衛　其麦庵　1-72-1-2ウ14
百堂　浪花　芦陰舎　七十二翁　1-72-3-2ウ2
俵瓜　丹波須知　前田弥三郎　1-72-1-2ウ10
比良城→林曹　1-72-3-2ウ8
楓下　江州信楽多羅尾　辻嘉八郎　芙九堂　1-72-3-3オ5
布國　備前西大寺　津田屋久右衛門　1-72-4-1オ8
蕪城　同所（江州堅田）河村吉太郎　1-72-3-1オ5
佛朔　1-72-3-1オ9
負米　江州金堂村　磯部曽左衛門　1-72-1-1オ14
富門　同所（豊後杵築）谷町　糀屋惣助　1-72-3-3オ2
武陵　丹波大山　西尾呉四郎　1-72-2-1オ2
文外　勢州山田一ノ木　松本東平　1-72-3-4ウ8
文葉　江州堅田　辻八郎兵衛　1-72-1-2ウ4
並隆　石部五条下ル町　山形屋清兵衛　1-72-2-1オ8
墨叟　摂州兵庫柳原町　高井彦左衛門　隠居　1-72-3-1オ9
墨巣　摂州兵庫小物屋町　高井彦左衛門　1-72-1-3オ6
朴端　讃州高松在笠居安徳　高橋宇兵衛　隠居　1-72-4-1ウ2
歩丈　同所（豊後杵築）新町　若屋謙助　1-72-4-1ウ1
甫伯　長崎紙屋町　橙庵　菰守宥主　松寿軒随柳　1-72-3-1ウ3

ま

無隔　江州大津船頭町　船屋孫右衛門　1-72-3-4ウ3
無城　鳥取（藩中）（前島）兌籟之子　1-72-4-1ウ1
木比　播州明石王子　桂川立三　1-72-3-1オ4
木父　豊前小倉馬借町　藩　妹尾利右衛門　1-72-3-2ウ6
茂椎　讃州丸亀富屋町善照寺地内角　菊壺　1-72-3-4ウ5

や

夜外　江州八幡寺内北元町　綛屋藤八　1-72-2-1オ5
也然　京烏丸通仏光寺下ル大政所町　1-72-3-4ウ9
山布留　同（筑後）国福島紺屋町　橘雪庵　1-72-1-1ウ15
野楊　丹波亀山藩中　軽森大右衛門　老々庵　1-72-1-1ウ3
有慶　湖東町屋　片山宗七　1-72-1-1オ13
幽草　浪華　宮田氏　1-72-3-2ウ7
悠々　肥前大村木端　藩　川原元次　1-72-1-2ウ2
湧瀧　丹波亀山　北川隈右衛門　1-72-3-1オ9
養瓜　伊賀上野東町　新堂屋喜兵衛　1-72-4-1ウ4
米友　江州大津丸屋町　書林　沢宗次郎　五車堂　1-72-3-1ウ3

ら

裡風	同（泉州伯多）藩中　今井弥市右衛門　家老	1-72-4-1オ2
柳守	浪華伝法村　箕年庵	1-72-4-1オ4
龍尾	同国（雲州）松江	1-72-2-1ウ8
涼呼	同所（備前西大寺）津田屋又右衛門	1-72-1-1オ15
亮曠	雲州母里　西村階蔵	1-72-2-1ウ12
蘆風	同所（備前西大寺）山本屋藤十郎	1-72-1-1オ17
林曹	（浪花）道修町御霊筋角　比良城	1-72-1-1オ5
林曹	大坂淀屋小路淀屋橋西へ入　比良城	1-72-3-2ウ4
林曹	御霊筋道修町角北東角　比良城	1-39-6-1オ2
芦橋	江州堅田　木村安兵衛	1-72-3-1ウ5
路月	丹波佐伯　大石城之助	1-72-3-3ウ5
魯鴻	丹波氷上　植木屋茂兵衛	1-72-2-1オ9
鷺白	雲州サカタ　矢田佐右衛門	1-72-2-1ウ9

わ

和月	江州日野堅地町　牧野玄策	1-72-3-3ウ4
和戎	筑後久留米高島　鹿毛佐金次　隠居	1-72-1-3オ4

資料四　吟風俳諧交友録 地域別俳人一覧

凡例

一　本索引は、本章資料二吟風俳諧交友録影印の地域別俳人一覧である。

一　士分の項目は、○が士分、△が名字等の記載から士分の可能性のあるものである。

一　資料番号は、畑家俳諧資料目録の番号、丁数、オ（表）・ウ（裏）、記載行数の順に記す。

一　重複するものは総て列記する。ただし、俳号と庵号などが重複するものは、俳号にまとめて配列する。

一　（　）は私に補ったものである。

〔地域〕	〔俳号〕	〔士分〕	〔記載事項〕	〔資料番号〕
京	万籟			1-72-1-1オ1
	梅園尼			1-72-1-1オ1
	朝陽		京東山　芭蕉堂	1-72-2-1オ1
	並隆		石部五条下ル町　山形屋清兵衛	1-72-3-5オ6
	以都美		椹木町西洞院西へ入 鍵屋伊兵衛	
			蔵六亭	1-72-3-5オ7
	言来		西洞院椹木町下ル 丹波屋与七郎	1-72-3-5オ8
	杜蓼		四条ふや町西へ入 島屋幸助	
			南椿舎	1-72-3-5ウ1
	梅通		竹屋町釜座角　俵屋六兵衛	1-72-3-5ウ3
	南渓		新町頭清蔵口　若狭屋小兵衛	1-72-3-5ウ4
	貨僕	△	醒ヶ井通四条下ル　村上平多	
			峨山亭	1-72-3-5ウ5
	岱美	△	寺町通藪下上ル　中尾卯兵衛	1-72-3-5ウ6
	芹舎	△	下長者町室町西へ入　種山鉄吾	1-72-3-5ウ7
	金菜	△	洛西神泉苑池改人　中川氏	1-72-3-5ウ8
	五猪	△	四条坊門通室町東　村瀬	1-72-3-6オ1
	若雅		堀川通今出川上ル西へ入山名町	
			蕪什庵	1-72-3-6オ2
	也然		京烏丸通仏光寺下ル大政所町	1-72-4-1ウ2
	岱年		四条通油小路	1-72-5-1オ7
	岱年		六角通西洞院	1-72-5-1オ18
	乙雅		京烏丸五条下ル所　寺子屋	1-72-5-1オ17
南山城	岳鳳		伏見土橋竹田口東へ入	1-72-1-1オ2
	岳鳳		古雅屋清右衛門	1-72-5-1オ1
	吟風	○		1-72-1-2オ16
	一海	△	八幡谷畑町　上田周蔵	1-72-5-1オ2
	馬羊			1-72-5-1オ3
	丈翠		嵯峨材木町　大矢木幾右衛門	1-72-5-1オ5
	丈翠		下嵯峨材木町　大八木幾右衛門	1-72-3-5ウ2
	可調	△	八幡清水町 正法寺役人	
			藤本藤九郎	1-72-5-1オ6
	下雪		佐山村　庄屋　小平治	1-72-5-1オ8
	半山		普賢寺村　庄屋　喜平治	1-72-5-1オ9

近江

梅丘		西ノ岡今里村　普明寺	1-72-5-1オ11
竹渓		同（西ノ岡今里村）　西光寺	1-72-5-1オ12
松甫		同（西ノ岡今里村）　医師	1-72-5-1オ13
万南		神足村　明寿院	1-72-5-1オ14
器之		同（神足）村医師　宇多源吉	1-72-5-1オ15
宇都雄	△	江州浅小井　村井友次郎	1-72-2-1オ3
烏都雄	△	江州湖東浅小井　村井友治郎	1-72-3-1オ2
世岐	△	江州堅田　木村六右衛門	1-72-3-1オ6
成章	△	江州堅田　北村東太郎	1-72-3-1オ7
閑斎		江州粟津　義仲寺	1-72-3-1オ8
嘉涼	△	江州八幡博労町　岡田吉之助	
		奉雨堂	1-72-3-1ウ4
楓下	△	江州信楽多羅尾	
		辻嘉八郎　芙九堂	1-72-3-1オ9
文葉	△	江州堅田　辻八郎兵衛	1-72-3-1ウ1
米友		江州大津丸屋町　書林沢宗次郎	
		五車堂	1-72-3-1ウ3
芦橋	△	江州堅田　木村安兵衛	1-72-3-1ウ5
太令		江州八幡山　谷口治兵衛　蓼屋	1-72-3-1ウ10
冬英	△	江州堅田　中村慶三郎	1-72-3-3オ1
蕪城	△	同所（江州堅田）　河村吉太郎	1-72-3-3オ2
禾郷		同所（江州堅田）船屋善五郎	1-72-3-3オ3
九皐	△	江州大津新建　三好順之助	1-72-3-3オ4
百尓	△	江州堅田　竹端藤兵衛　其麦庵	1-72-3-3オ5
無隔		江州大津船頭町　船屋孫右衛門	1-72-3-3オ6

一居	○	江州大溝藩中　友岡六郎	1-72-3-3オ7
九野	△	湖北石川村　石川石兵衛	
		草村庵	1-72-3-3オ8
はる岑	△	江州大津上京町　西沢寿平	1-72-3-3オ9
和月	△	江州日野堅地町　牧野玄策	1-72-3-3ウ4
一嘯	○	江州仁正寺藩中　浅井勇記	1-72-3-3ウ9
我笑	△	江州堅田　北村亀三郎　奇好亭	1-72-3-4オ2
蕙布	△	江州大津太間町　山田弥兵衛	
		一幹斎	1-72-3-4オ5
東蒼		江州大津京町二丁目	
		金屋利兵衛	1-72-3-4オ7
冬舟		江州大津船頭町　船屋忠兵衛	1-72-3-4オ8
申斎	△	江州大津米屋町　福田氏	
		清風居	1-72-3-4オ9
田美		江州高島音羽村　妙正寺	1-72-3-4ウ1
斗行	△	江州堅田　大北太兵衛	1-72-3-4ウ2
夜外		江州八幡寺内北元町　綛屋藤八	1-72-3-4ウ3
月兮		湖東曽根　広行寺	1-72-3-4ウ4
有慶	△	湖東町屋　片山宗七	1-72-3-4ウ5
寄松		江州鏡山　玉屋藤左衛門	1-72-3-4ウ6
寵山	△	江州高島野田　高島伊兵衛	1-72-3-4ウ7
負米	△	江州金堂村　磯部曽左衛門	1-72-3-4ウ8
蔦雨	△	江州坂本　三津川弥右衛門	1-72-3-5オ1
探布		江州大津鍛冶屋町　品屋茂助	1-72-3-5オ2
鳴彦	△	西湖大溝　恒川氏	1-72-3-5オ3
宗仙	△	江州片山浦　片山源五郎	1-72-3-5オ4

大坂

二薑　△　江州大津恵比寿町　山本仁兵衛

鼎左　柿院園　1-72-3-5オ5

浪花安堂寺町御堂筋西へ入

花屋庵　1-72-1-1オ4

鼎左　大坂南久太郎町御堂筋　花屋庵　1-72-3-2オ5

鼎左　安堂寺町御堂筋西へ入南側

花屋庵　1-39-6-1オ1

林曹　同（浪花）道修町御霊筋角

比良城　1-72-1-1オ5

林曹　大坂淀屋小路淀屋橋西へ入

比良城　1-72-3-2ウ4

林曹　御霊筋道修町角北東角　比良城　1-39-6-1オ2

一肖　大坂布屋町　八千房　1-72-1-1オ8

一肖　大坂布屋町心斎橋西へ入

八千房　1-72-3-2ウ3

其山　大坂江戸堀五丁目　木僊庵

近江屋忠兵衛　1-72-1-3オ7

自樂　大坂船町　助松屋忠兵衛

井呉庵　1-72-3-2オ1

其流　大坂内平野町　長崎屋原右衛

大坂福島逆櫓松西　1-72-3-2オ2

松隣　木綿屋源兵衛　1-72-3-2オ3

井左　大坂橋通四丁目　芙蓉庵　1-72-3-2オ4

井眉　大坂心斎橋筋周防町　井眉庵　1-72-3-2オ6

井眉　心才橋通三ツ寺北へ入　五春荘　1-39-6-1オ4

滄々　大坂内本町松屋町　本屋利兵衛　1-72-3-2オ7

春朗　△　大坂土佐堀玉水町　山本仙助　1-72-3-2オ8

丹頂　大坂堂島米仲買　俵屋幸助

鶴の宿　1-72-3-2ウ1

眉岳　大坂土佐堀白子町　綿屋七兵衛

大坂天満堀川樽屋橋西詰　1-72-3-2ウ2

千鶴　天王寺屋与八　1-72-3-2ウ5

幽草　△　浪華　宮田氏　1-72-3-2ウ6

麦叟　△　浪華　根岸氏　1-72-3-2ウ7

百枝　△　大坂西天満　上野利七郎　1-72-3-2ウ8

祇白　大坂北浜一丁目　河内屋東作　1-72-3-2ウ9

庵女　大坂堂島北中町

雑賀屋庄三郎母　1-72-3-4オ3

鯤明　大坂土佐堀二丁目　豊後屋喜八　1-72-3-4オ4

柳守　浪華傳法村　箕年庵　1-72-4-1オ4

竹水　△　浪華くろがね橋北へ入宮川町

其日庵二代　村上立徳　1-72-4-1オ5

水月　浪花南堀江　八日庵　1-72-4-1オ6

此方　左海市の町　翠屋　野井林蔵　1-72-4-1オ7

百堂　浪花　芦陰舎　七十二翁　1-72-4-1オ8

素屋　△　南農人町谷町西へ入　岸田令助　1-72-4-1ウ4

稲處　△　素屋之弟　岸田壮助　1-72-4-1ウ5

蟻兄　東堀農人橋少し西

銭屋重左衛門事　1-39-6-1オ3

梅室　平野町二丁目堺筋西へ入南側うら

仝東表　1-39-6-1オ5

摂津

墨叟	△	摂州兵庫柳原町　高井彦左衛門	1-72-1-オ9
墨巣	△	摂州兵庫小物屋町	
梅雄		高井彦左衛門	1-72-3-ウ2
菊渕	△	津の国いなのさゝ原　原田屋	
都春		香風園　永田源右衛門	1-72-4-オ3
		津の国蔵人村　山口□左衛門	
		山口庵	1-72-4-ウ8
		柱元庄屋　葉間清十郎	1-72-5-オ16

和泉

檐鵲	△	泉州堺宿屋之町　吉雄良瑑	1-72-3-オ6
舟柴	○	泉州伯多藩中　二木庵　林太仲	1-72-4-オ1
裡風	○	同（泉州伯多）藩中	
		今井弥市右衛門　家老	1-72-4-オ2
此松	△	堺南半町　梅蔭居　松本政助	1-72-4-ウ3
石哦	△	泉州大津　山崎嘉市	1-72-4-ウ6
青路	△	同（泉州）大津　岡	1-72-4-ウ7

河内

千々雄	△	私部（キサベ）　奥田治右衛門	1-72-5-オ10
古鏡		津田村庄屋　前川近三郎	1-72-5-オ4

加賀

完和		加賀金沢の行脚　梅室門	1-72-1-ウ2

越後

素玉			1-72-1-オ1

但馬

竹庵		但馬浜坂　薬屋	1-72-2-オ10
其卵		同所（但馬浜坂）　七釜屋	1-72-2-オ11

丹波

野楊	○	丹波亀山藩中　軽森大右衛門	
		老々庵	1-72-2-オ5
武陵		丹波大山　西尾呉四郎	1-72-2-オ8
魯鴻		丹波氷上　植木屋茂兵衛	1-72-2-オ9
午濤	○	丹波福知山藩中　西村源之助	1-72-2-ウ1
蕉夢	△	丹波篠村　栗山甚之進	1-72-3-オ1
湧瀧	○	丹波亀山　北川隈右衛門	1-72-3-オ4
俵瓜	△	丹波須知　前田弥三郎	1-72-3-オ5
愚白	○	丹波笹山藩中　八木又左衛門	1-72-3-ウ2
其暁	△	丹波保津　村上八郎	1-72-3-ウ6
梅庵	△	同所（丹波保津）村上治右衛門	1-72-3-ウ7
冠雪	△	丹州笹山　菱田敬輔	1-72-3-ウ8
路月	△	丹波佐伯　大石城之助	1-72-3-ウ5
烏舟	△	丹波保津　村上源右衛門	1-72-3-ウ6
松人	△	（丹波保津）村上烏舟　妻	1-72-3-ウ7

播磨

西月		播州須磨	1-72-1-オ7
一香	○	播州　明石大守　御二男	1-72-1-オ11
木比	△	播州　明石王子　桂川立三	1-72-1-オ13
而得	○	播州明石三番町　一香君御側	
		藤田沢右衛門	1-72-1-ウ6
梅人		播州加古川ノ産　書家	
		水原堂薫湖	1-72-1-オ7
曽夢		播州姫路下寺町　善導寺	1-72-3-ウ8

琴州　△　ハリマ今市　鈴木長左衛門　1-72-3-6オ3

備前

布国　備前西大寺　津田屋久右衛門　1-72-1-1オ14
涼呼　同所（備前西大寺）　津田屋又右衛門　1-72-1-1オ15
茄邨　同所（備前西大寺）　油屋宗助　1-72-1-1オ16
蘆風　同所（備前西大寺）　山本屋藤十郎　1-72-1-1オ17

美作

亥中　作州勝山城下　行脚　八千房門　1-72-1-1オ6

安芸

雪頂　芸州広島塩屋町　世并屋茂兵衛　1-72-1-2オ9
甘古　安芸広島京松町　和泉屋所平　1-72-1-2オ3

因幡

南嶺　因州鳥取　糸屋平兵衛　1-72-2-1オ6
村之　○　同国（因州）鳥取藩中　荒木新右衛門　1-72-2-1オ7
無城　○　鳥取（藩中）　兌籟之子　1-72-2-1オ12
兌籟　○　因州鳥取藩中　前島源太兵衛　1-72-2-1オ13
志朗　○　因州鳥取藩中　落合四郎兵衛　1-72-2-1ウ2
季諾　同（因州）鳥取　茗荷屋平九郎　1-72-2-1ウ3
鶏童　○　同（因州）鳥取藩中　1-72-2-1ウ4
如流　○　同（因州）鳥取藩中　1-72-2-1ウ5

出雲

東溟　雲州島田　行脚　八千房門　1-72-1-1オ10
完穂　雲州島田　1-72-2-1ウ7

龍尾　同国（雲州）松江　1-72-2-1ウ8
鷺白　△　雲州サカタ　矢田佐右衛門　1-72-2-1ウ9
香台　同（雲州）母里　1-72-2-1ウ10
亀水　同（雲州）同所（母里）　1-72-2-1ウ11
亮曠　△　雲州母里　西村階蔵　1-72-2-1ウ12

伯耆

草台　△　伯州米子　宮永太三郎　1-72-2-1オ4
大眉　伯州米子　1-72-2-1ウ6

伊予

燕二　△　いよ小林村　西山燕二　1-72-1-1ウ7
燕二　△　画　伊予小はやし　燕二　1-72-1-1ウ9
茶籟　△　同（伊予）国立川銅山　役人　鈴木武平　1-72-1-1ウ10
栖村　△　伊予立川銅山　手代　飯田杢兵衛　1-72-1-1ウ12
器権　△　いよ立川銅山　手代　今沢宇兵衛　1-72-1-1ウ14
葵笠　伊予松山河原町　岡田屋吉蔵　1-72-1-1ウ16
柴人　△　同（伊予）国立川銅山　手代元〆　北脇次右衛門　1-72-1-1ウ17
水哉　△　予州立川銅山　手代　池田松兵衛　1-72-1-2オ2
雲翠　△　いよ立川銅山　役人　大村文太　1-72-1-2オ4
橘江　△　同（伊予）国今治領津倉島　庄官　池田閑四郎　1-72-1-2オ5

映門	○	予州小松藩　長谷部仲右衛門	1-72-1-2オ11
菊甫女	○	（予州小松藩）長谷部仲右衛門内室	1-72-1-2オ13
鶯居	○	同（伊予）国松山藩 奥平弾正	1-72-1-2オ12
九虹		同（伊予）国松山城下今町川ばた	
		渋柿庵　海老屋藤助	1-72-1-2オ14

讃岐

葛彦	○	讃州高松天神町 藩　佐久間東馬	1-72-1-1オ12
茂椎		讃州丸亀富屋町善照寺地内角	
		菊壺	1-72-1-1ウ3
今是	△	同（讃州丸亀）和田浜	
		藤村熊蔵	1-72-1-1ウ4
朴端	△	讃州高松在笠居安徳	
		高橋宇兵衛　隠居	1-72-1-1ウ11
竹彦	○	讃州高松　藩 秋山与五右衛門	1-72-1-2オ6
佛朔			1-72-2-1オ2

阿波

応吏		阿州徳島富田大道	
		閑日庵　鴎里更	1-72-1-2オ8
竹叟	△	阿波撫養（ムヤ）高島　益冨久左衛門	1-72-1-2オ10

尾張

而后		尾州名古屋益屋町 銭屋喜兵衛	1-72-3-3ウ1

伊勢

文外	△	勢州山田一ノ木　松本東平	1-72-3-1オ3
南雅	△	伊勢山田下中ノ郷　内田佐次右衛門	1-72-3-1ウ9
		蕉巣	

伊賀

介立	△	勢州津茶屋町　馬島露元	
		千鳥庵	1-72-3-3ウ3
菊所	△	伊勢山田田中　池上清守	1-72-3-4オ1
養瓜		伊賀上野本町　新堂屋喜兵衛	1-72-4-1ウ1

筑前

未央（ビヨウ）		筑前福岡西新町　敦賀屋吉助	1-72-1-2ウ14
砂童		同（筑前）国福間松原　田鶴庵	1-72-1-2ウ15
南更		同所（筑前福間松原）	
		井筒屋権六	1-72-1-2ウ16
雨堂	△	同（筑前）福岡鳥飼　岡部兵吉	1-72-1-3オ1
金陵	△	筑前夜須郡甘木四日町	
		合谷四郎右衛門	1-72-1-3オ2
東合		同（筑前夜須郡甘木四日）町	
		かしはや惣七	1-72-1-3オ3

筑後

和戎	△	筑後久留米高島	
		鹿毛佐金次　隠居	1-72-1-3オ4
慶五	△	同（筑後）国久留米城下田町	
		三枝甚兵衛	1-72-1-3オ5
山布留		同（筑後）国福島紺屋町	
		橘雪庵	1-72-1-3オ6

肥前

岱雲		肥前長崎今駕町　芭蕉館	1-72-1-2オ17
甫伯		長崎紙屋町　橙庵　菰守宥主	
		松寿軒随柳	1-72-1-2ウ7

石狂　同所（長崎）新石灰町　1-72-1-2ウ8
悠々　○　福地苟庵　1-72-1-2ウ9
眉山　○　肥前大村木端　藩　川原元次　1-72-1-2ウ10
寸長　同（肥前大村）藩　朝長周平　1-72-1-2ウ11
春圃　同（肥前）彼杵（ソノキ）　五樹園　1-72-1-2ウ12
之同　△　同所（肥前彼杵）　1-72-1-2ウ13
同（肥前）国川棚在宅
広田作兵衛

豊前

木父　○　豊前小倉馬借町　藩　1-72-1-1ウ15
妹尾利右衛門
馬渓　豊前中津　画家　田中保　1-72-1-2ウ5

豊後

呉笠　豊後杵築城下　沢屋完平　1-72-1-1オ3
如泡　豊後杵築城下　藤屋仁兵衛　1-72-1-1ウ1
沙明　豊後杵築城下　冬木屋宇右衛門　1-72-1-1ウ5
雪児　△　豊後杵築谷町　渡辺半兵衛　1-72-1-1ウ8
榛園　○　豊後杵築藩　増田万太　1-72-1-1ウ13
伍尺　豊後別府中町　藤屋儀八郎　1-72-1-2オ1
菊人　豊後杵築城下新町
楠屋為右衛門　1-72-1-2オ15
素共　豊後杵築城下　佐渡屋重左衛門　1-72-1-2ウ1
歩丈　同所（豊後杵築）新町
若屋謙助　1-72-1-2ウ2
春和　△　同所（豊後杵築）佐野玄盟　1-72-1-2ウ3
富門　同（豊後杵築）谷町　糀屋惣助　1-72-1-2ウ4

下総

松丘　豊後頭成　和泉屋重助　1-72-1-2ウ6
幻芝　下総香取郡利根川押砂　風斎　又風露坊
御文音所　両国柳橋平右衛門町
伊勢屋三郎右衛門　1-72-1-3オ8
桐雨　○　下総左原　伊能彦作　1-72-3-6オ4

江戸

丁知　○　下谷御成道　井上筑後守家来
山室周助　1-72-1-3オ9

資料五　吟風俳諧交友録 地域別俳人数一覧

地域	国・地域	人数	備考
近畿	大坂	41	泉州伯多（太）藩（渡辺氏・譜代）
〃	近江	40	仁正寺藩（市橋氏・外様）
〃	京	18	
〃	南山城	12	
〃	丹波	14	亀山藩（松平氏・譜代）
〃	播磨	7	明石藩（松平氏・譜代）
〃	伊勢	3	
〃	但馬	2	
〃	伊賀	1	
北陸	加賀	1	
〃	越後	1	
中国	伯耆	2	
〃	美作	1	
〃	安芸	1	
〃	因幡	8	鳥取藩（池田氏・外様）
〃	備前	4	
〃	出雲	7	
中部	尾張	1	
四国	伊予	13	小松藩（一柳氏・外様）
〃	讃岐	6	高松藩（松平氏・譜代）
〃	阿波	2	
九州	豊後	12	杵築藩（松平氏・譜代）
〃	肥前	8	大村藩（大村氏・外様）
〃	筑前	6	
〃	筑後	3	
〃	豊前	2	小倉藩（小笠原氏・譜代）
関東	下総	1	旧稲葉氏
〃	江戸	1	

※畑家俳諧資料（1-72-1.2.3.4.5、1-39-6）により作成
※計222人、重複は数に入れない

付表Ⅱ　淀藩士連中と京俳壇

	淀藩士	墓所	京俳壇	備考
1	集除元・吐鳳 8寛政年	東運寺		富原氏。宝暦10・6・30生、天保9・5・27卒。医師。魚之市四軒屋住。
2	紙A懐初懐・定雅頃雅寛政	社中	おはら	畑氏。宝暦5・6・3生、文政11・6・6卒。高島五番町住。
3	紙B懐初懐・定雅頃雅寛政	社中	おはら	支雪点「六々行」入。
4	紙C懐初懐・定雅頃雅寛政			玄々居。支雪点「六々行」入。
5	行時四時・梅室6文化年			一藁席。支雪点「六々行」入。
6	紙懐春懐・定雅頃雅8文化年			白雪窓。淀藩中（文化10）
7	紙真葛草真葛・定雅10文化年			
8	紙真葛草真葛・定雅11文化年			
9	紙真葛草真葛・定雅13文化年			
10	行時四時・梅室1文政年			
11	紙懐春懐真葛・定雅2文政年			
12	物摺堂俳仙未詳刊年			
13	養供花供・蒼虬4天保年			
14	集信芳信・呉明5天保年			
15	摺枚一画う狗迫			
16	枚摺画一清横暉山			
17	養供花供・蒼虬5天保年			
18	集毎年毎・杜鵞7天保年			
19	集毎年毎・杜鵞8天保年			
19	りもごと尼梅園8天保年			
20	養供花供・朝陽10天保年			
21	集々逐々・万籟11天保年			
22	集梅百梅・万籟11天保年			
23	養供花供・九起13天保年			
24	きふはぶな・岱1弘化年	城南		
25	養供花供・九起1弘化年			
26	養供花供・九起3弘化年			
27	帖雨時・蟻園（岳鳳）			
1	支雪	東運寺		
2	竹楼	高福寺		
3	吟風	高福寺		
4	琴浦			
6	巵言			
7	南溟			
8	蓬室			
9	舎南			
10	逸江			
11	筠圃（浦）			
12	荷風			
13	碓乎			
14	芝園			
15	如遊（徐幽）			
16	諷々			
17	負米			
18	以十			
19	琴所			
20	之由			
21	南窓	妙教寺		淀藩中（文化13）
22	柳江	妙教寺		山口氏。医師。高島六番町住。
23	掬水	妙教寺		石川氏。医師。9月19日卒。高島七番町住。
24	剛地（池）	東運寺	在東都	上月氏。
25	鳳水	東運寺		田崎氏。天明3・11・26生、弘化1・12・16卒。口魚之市住。
26	士常			淀藩中（文政2）
27	桂舟			淀藩中（文化10）
27	軽舟	東運寺		間島氏。養璞（百梅集）。医師。高島六番町住。
28	大之	東運寺		石山氏。医師。富田町住。
29	抱琴堂			淀藩中（文化8）
30	赤水	東運寺		堀氏。堀玄珠か、安政4年71歳、吟風と同年か。富田町住。
31	鷹巣			淀藩中（文化10）
32	一坡			淀藩中（文化11）
33	兎哉（斎）	東運寺		今村氏。魚之市与力町住。
34	其友	妙教寺		井上氏。
35	三千丸	東運寺		稲葉氏。
36	鑑水	東運寺		岡氏。
37	雪川	妙教寺		上田従之介（百梅集）。口魚之市住。
38	源良	東運寺		上月氏。
39	素琴			小長谷氏。
40	雲峰	東運寺		竹岡氏。天明4・11・1生、天保14・9・18卒。稲葉候医員。口魚之市住。
41	友之	妙教寺		林氏。
42	魚仏（物）	妙教寺		藤枝氏。
43	鴻池（地）			
44	和六	東運寺		池田氏。吟風義父
45	魚眼			

	地域	京俳人名	士分	交友録記載事項〈畑家俳諧資料 1-72-1・2・3・4・5・1-39-6〉	淀 支雪	淀 吟風	淀 軽舟	淀 素琴	1 京 蒼虬	2 帛美	3 貨僕	4 杜鵑	5 朝陽	6 萬籟	7 九起	8 並隆	9 杜蓼	10 梅通	11 南渓	12 岱年	13 芹舎	14 金菜	15 若雅	16 乙雅	17 梅園尼	18 以都美	19 言来	20 五猪	21 也然	22 南 山城 丈翠	23 岳鳳	24 萬南	25 器之	26 半山	27 竹渓	28 梅丘	29 松甫	30 一海	31 可調	32 下雪	33 馬羊	
	〃	蒼虬・春懐紙		文化8年 定雅	〈淀藩士〉				○																																		
2	〃	春懐紙・定雅		文化10年 推定	○	○				○																																	
3	〃	紙真葛草・定雅		文化11年 推定	○				○	○																																	
4	〃	紙真葛草・定雅		文化13年 定	○					○	○																																
5	〃	懐紙真葛春・定雅		文政2年 定	○					○	○																																
6	〃	堂摺物・定俳仙		刊年未 定	○	○																																					
7	〃	花供養・蒼虬		天保4年 蒼	○	○			○	○	○		○	○		○	○	○	○		○	○	○							○													
8	〃	芳信集・呉明		天保5年 呉	○	○			○	○			○	○		○	○	○	○	○	○	○	○							○	○													
9	〃	花供養・蒼虬		天保5年 蒼	○				○	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○						○													
10	〃	年毎集・杜鵑		天保7年 杜		○			○	○			○			○	○	○	○		○	○								○	○													
11	〃	年毎集・杜鵑		天保8年 杜		○			○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								○	○													
12	〃	もりとしご・梅園尼		天保8年 梅	○	○			○			○	○	○											○																			
13	〃	花供養・朝陽	〈故人〉	天保10年 朝		○			○	○			○		○		○	○	○	○	○									○														
14	〃	一枚摺・画		狗追う		○			○			○	○																		○													
15	〃	逐々集・万籟		天保11年 万			○						〈故人〉	○																													
16	〃	百梅集・万籟		天保11年 万		○	○							○																													
17	〃	花供養・九起		天保13年 九				○	○	○		○		○	○			○	○	○										○													
18	〃	ぶきはなふ・岱年		弘化1年 岱		○			〈故人〉			○		〈故人〉	○			○		○										○													
19	〃	花供養・九起		弘化1年 九		○	○			○		○			○		○	○		○			○							○	○													
20	〃	花供養・九起		弘化3年 九			○			○		○			○		○	○		○	○		○							○	○													
21	〃	一枚摺・画		横山清		○									○		○	○		○											○	○	○											
22	〃	時雨帖・（岳鳳）		蟻園		○				○					○			○	○	○											○	○		○										

△士分の可能性有　★交友録に記載はないが交流の認められる者　〈　〉私注　・俳書は淀藩士連中入集に限る・京俳人は交友録にある総て

第四章　淀藩士連中と芭蕉顕彰俳諧

淀藩士連中は、松尾芭蕉を敬慕していた。近世後期の俳諧の多くが「芭蕉」を軸にして展開しているが、この俳諧の総称を私に芭蕉顕彰俳諧と称する。「芭蕉」とは、実在した芭蕉および、その存在から派生した総てを言う。注目する点は、芭蕉の年譜事項、行動、作品などが、近世後期の俳諧の中で、それぞれの俳諧師によってそれぞれの位置付けが異なるものの、芭蕉を抜きにしては考えられないということである。「芭蕉」を具体的な形をとるものを手掛かりに考えると、次のものがる。

一、芭蕉に所縁のある地や物の継承。例えば、京嵯峨の落柿舎、大坂の花屋庵、近江の義仲寺、幻住庵、洛東芭蕉堂の芭蕉所持の木魚、義仲寺の芭蕉所持の杖など。

一、芭蕉に因む俳号、庵号などを付ける。

一、芭蕉もしくは、芭蕉の門弟からの系統を唱える。

一、芭蕉を神格化する。

一、俳諧を論ずる時に芭蕉の言説や句を援用する。

一、芭蕉を追善する。例えば、追善俳諧興行、追善句集の刊行、芭蕉庵（堂）の建造、句碑の建立、芭蕉像の所持など。

芭蕉の追慕は、芭蕉没後からまもなく始まるが、芭蕉没後の百回忌前後に、五升庵蝶夢の芭蕉研究と復興活動がある。田中道雄氏は、これを蕉風復興運動と称し、具体的な動きを芭蕉顕彰事業という（『芭蕉復興運動と蕪村』二〇〇〇年、岩波書店刊）。この運動の後の近世後期が、芭蕉の復興から顕彰へと展開した芭蕉顕彰俳諧の時期と考えている。

蝶夢は、芭蕉の俳諧の本質を究明したいという方向性をもって、芭蕉の伝記を明らかにすべく『芭蕉翁絵詞伝』を纏め、芭蕉の句を集め、またその周辺の句を集めて『類題発句集』『新類題発句集』などを編んで刊行し、『奥の細道』を再刊して広め、芭蕉追善の場としての墨直し会、義仲寺時雨会を主催し、芭蕉句碑の建立を援助し、追善俳諧を催し、記念の俳諧集を刊行するなどの芭蕉追善の形を具体的に提示した。また、幻住庵の再興に力を尽くし、落柿舎の再興をなす井上重厚を援助した。これら芭蕉追慕の姿勢は真摯で、趣意に賛同する人々の勧進によって支えられた。

洛東芭蕉堂の闌更は、蝶夢の芭蕉顕彰事業を受けて、京俳壇において芭蕉顕彰を展開した。闌更は加賀の人であるが、各地を遊歴の後、京に定住する。新参の闌更は、蝶夢の俳諧に親しく接し、洛東双林寺の蝶夢主催の墨直し会、蝶夢後援の義仲寺時雨会などに参会した。蝶夢のこれらの事業をつぶさに観察し、その形式、人脈の多くを取り込み、天明七年に芭蕉堂を開く。具体的には、蝶夢主催の墨直し会や時雨会に倣い、その不足を補ったと考えているが、最も効果的だったのが、芭蕉の正当会の一〇月一二日の開催を月命日の三月一二日にしたことである。このため、募集句の中心が時雨の句から春、桜の句になった。言い換えれば、時雨会は最も真摯で直接的な芭蕉追善であるが、花供養会は芭蕉を追善する気持ちを持つが間接的な追善でよいものとなったのである。そして、春、桜の句の陽気さが広く受容され、新しい俳諧人口の参集を容易にした。時代の要請を受けた「芭蕉」の誕生である。「芭蕉」が京都に限らず広く、より多くの人々に受け入れられるためには、時代と社会が要求した新しい人々、つまり前時代では俳諧作者でも、読者でもなかった人々の参加が必要だったのである。これらの人々は、作句にあっての目当てを求めて、地元の俳諧師の指導に始まり、全国に展開する場に活動を広げたのである。洛東芭蕉堂は、これらの人々を取り込み、芭蕉追善の記念集『花供養』などに入集、全国に披露、という流れを作り出した。そして、芭蕉堂は、これらの人々の入句料によって支えられた。入句料は誰に対しても同額で、明示されているが、これこそが人集めの秘訣であろう。ここで留意されるのが、自由な投句といいながらも、地

方における師の存在があることである。また、芭蕉堂の門人となる者もいる。なお、安価な投句料で句を広く求め、景品を出す近世後期の月並点取り、雑俳とは異なる。「芭蕉」の存在を意識して句作りをする姿勢と、景品目当ての作句とでは異なる。また、師弟関係も必要としない。

蝶夢にあっては、闌更のこれらの動きを、京、近江に限らずより多くの人々に芭蕉とその俳諧を広めたいという意向を汲むものとして受け入れたろう。なぜなら、蝶夢の真摯な芭蕉の顕彰は、門閥に拘らず門を大きく開くが、より多くの人々に親しまれるということが課題であったから。果たして、芭蕉堂の花供養会は、京に限らず全国に展開していった。蝶夢が関わった墨直し会は、宝永八年に各務支考より始まり、安政四年迄の営みが知られるが、参会者は美濃派に偏った傾向にあり、甚だ少人数である。また、時雨会は、宝暦一三年以降に蝶夢の援助で盛んになり、西国を中心に展開するが、天保五年で一応の終息をみる。一方、闌更の花供養会は、天明六年からと後発ながら、明治二年まで継承され、全国に展開する。特に、年刊追善句集『花供養』五四冊は平均四七丁、『時雨会』集六四冊は平均一九丁で、単純平均ながら二倍以上の開きがある。花供養会は、貞門俳諧の優位の京にあって、京から全国に向けて「芭蕉」を発信するという快挙なのである。その仕掛けの詳細については、拙稿「芭蕉堂歴世の俳諧と花供養」（私家版）参照。

ここでは、芭蕉顕彰俳諧の特徴を明らかにし、文学史の中に位置づけるのが課題であり、その一つとして淀藩士連中の俳諧を考察する。

第一節　淀藩士連中の芭蕉顕彰

―芭蕉像の遷座―

淀藩士連中は、芭蕉像を持ち、交替で祀っていた。淀城に隣接し、連中が俳諧興行をしばしば催していた上池楼で、また島崎の御茶屋で、吟風の蓑虫庵でとその時々に芭蕉像を祀り、俳諧興行を催していた。芭蕉像の形態は未詳。

資料①の堀赤水「松は松」短冊は、上池楼から蓑虫庵への遷座をいう。赤水は、吟風と同年代の淀藩士連中である。蓑虫庵は吟風邸である。

資料①　上池楼の蕉翁像みの虫庵に遷坐

松は松又涼しかろ竹の月　赤水　（図版は第一章第六節29頁資料E）

資料②「正月廿六日付吟風宛支雪書簡」（1-39-1-3）

芭蕉像を吟風から支雪へ戻す書簡である。縦一六・五糎、横一〇五・八糎。

華墨拝見仕候。如仰／余寒退兼候得共／弥御安泰被成御坐／奉恐寿候。然ば先年／御宿被下候蕉翁象（ママ）／今日御返し被下、慥に／御預申し候。不計最早／三年に相成申候。永々／逗留にて御世話と／奉存候。滞留中ホ句／短冊をも為御見／被下寛々拝見仕候上／返上可申上候。其上、／美敷煎餅沢山／被下別て御肴迄御添／被下候て何共痛入／申候。月と梅仮居の永と／不好之趣御尤奉存候。／又々御普請出来／梁も丈夫に相成ば／雪の日など同伴仕／罷出可申候。野子も／未だ余寒おそれ出／不申候に付、御不沙汰／仕罷在候。少々暖気に趣／候て罷出、御厚礼申上候／心得に御座候。御使待居／候に付、至急早々御請／申上候。御推覧可被下候。／取急早々已上。

正月廿六日　　支雪

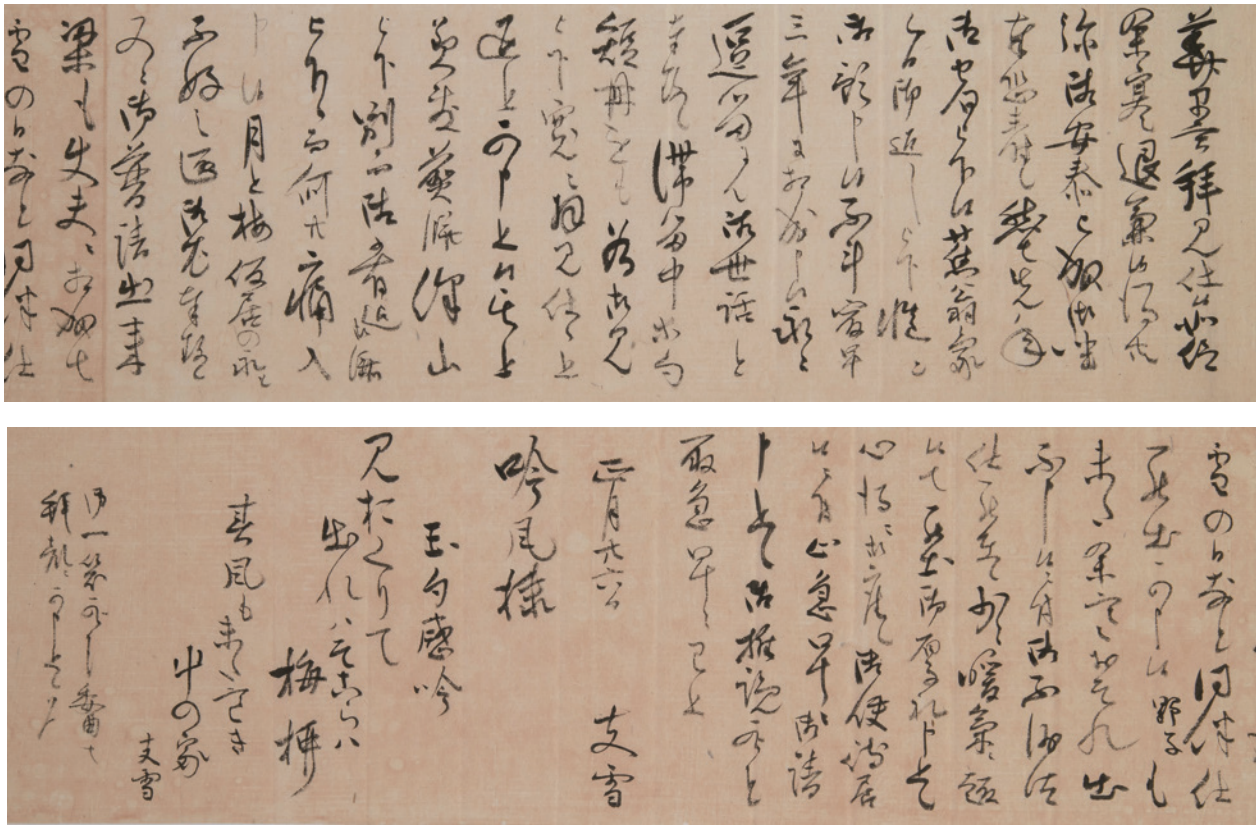
吟風様

玉句感吟

見おくりて出ればそこらは梅柳　／　春風も未だ寒き草の家　支雪

御一笑可被下候。委曲は　／　拝顔に可申上候。以上。

資料②

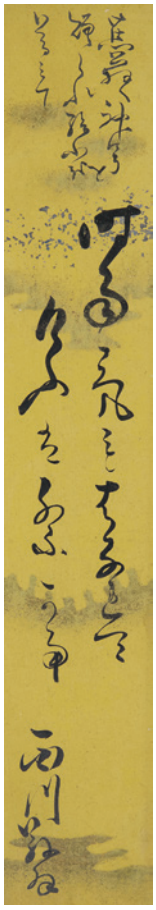


右の傍線部の記述によれば、「蕉翁象」が吟風の所に「三年」の間「永々逗留」し、吟風が「世話」をしていたが、この度、支雪に「返し」たという。支雪は、淀藩士連中の宗匠格であり、芭蕉像を「預申し候」というに相応しい。先の資料①と②からは、淀藩士連中の芭蕉像が巡回していることが知られる。

次は、芭蕉を敬慕する様子の一端で、「芭蕉神号」短冊（2-23-8-13）をみる。

資料③　蕉翁へ神号を贈くれ給ふを尊みて

時雨気もはなれてけふは祭かな　西川翁拝



芭蕉に神号が贈られるのは、次の通りである。

○寛政五年―芭蕉百回忌に、神祇白川家から「桃青霊神」の神号が贈られる。なお、同年、二条家から「正風宗師」が追号されている。

○文化三年―朝廷から「飛音明神」の神号が贈られる。（明治書院『俳句講座』1、市橋鐸「天保俳諧史」）。この神号の出どころは明確にしないが、芭蕉句「古池や蛙飛び込む水の音」によるものである。同句は、近世後期に様々な影響を与えた芭蕉顕彰俳諧の象徴的な句の一つであり、この句に因む神号は偶像化された芭蕉を象徴している。

○天保一四年―芭蕉百五十回忌に、二条家の斡旋で神祇官領家の吉田家から「花本大明神」の神号が贈られる。なお、二条家には、二条家俳諧宗匠と花の本宗匠の称号がある。

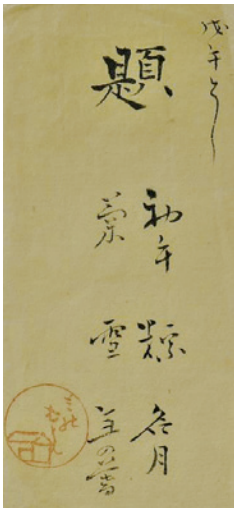
資料③の短冊は、天保一四年のことである。俳諧に関心の高い淀藩士連中、折しも芭蕉百五十回忌にめぐりあい、芭蕉に神号が贈られたというのは興味をひいたことであろう。芭蕉忌の追善句として詠まれている。

また、「安政五年芭蕉忌俳諧之連歌」がある。第二章第六節参照。

第二節　蓑虫庵吟風と芭蕉顕彰俳諧

―田川鳳朗との対面―

支雪、竹楼の後を継いで淀藩士連中を牽引する吟風は、庵号を蓑虫庵とする。この号の由縁は、伊賀上野の服部土芳が蓑虫庵を開き、芭蕉がしばしば訪れたことによる。吟風は、左の自ら出した兼題（2–17–8）や自作の一枚摺などに「みのむし」の仮名丸印や「蓑虫」の漢字角印（畑家蔵）を使用している。

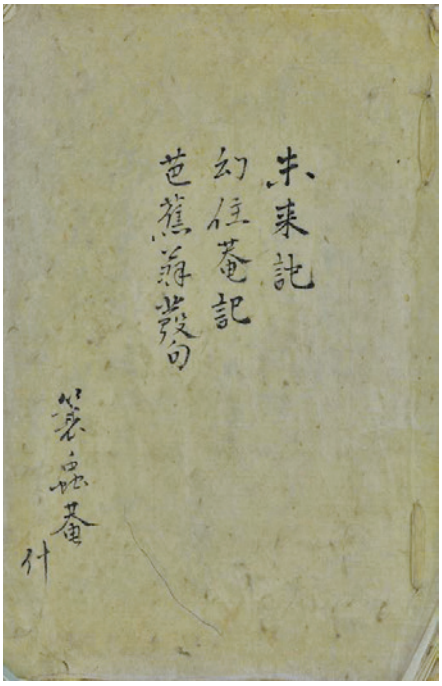


また、吟風は連中を招いて俳諧興行をしていたが、そこは「蓑虫の軒」と呼ばれた蓑虫庵である。「おし気なく」短冊（2–23–8–14）に左のごとくある。

先梢〳〵は時雨にも、ふ／雲にからむまた弥生の山を／花に寝ほけていつしか／ほと、ぎすも過たりとて／猶風月を頼みに／蓑虫の軒に暫く取つき／這入ぬ

おし気なく鶯きかせ庵のはた　西川拝

ところで、吟風は芭蕉の著作やその周辺の資料を所持している。芭蕉の著作としては、左の「『未来記』『幻住庵記』『芭蕉翁発句』」（1–34）がある。



縦二五・〇糎、横一七・三糎。写本一冊。「蓑虫庵什」物とし、大切にしている様子が覗われる。『未来記』は、「両の手に桃と桜や草の餅」の芭蕉句を立句とする歌仙一巻である。『幻住庵記』は、刊本『芭蕉翁真跡　幻住庵記』（2–13）もあり、最も興味を示した俳文である。連句、俳文、発句を網羅しており、研究的な一面が窺える。

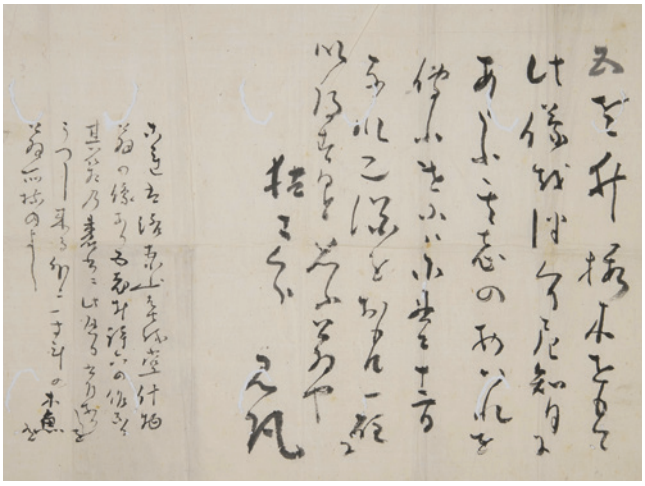
また、俳諧のしるべであったろうものに『金蘭集』（2–3・4）がある。『金蘭集』は上下二冊の刊本で、芭蕉の連句を集めた書であることは周知のところである。畑家本は、北溟序、甘井校、加州成田家蔵板、文化十年刊、書肆は浦井徳右衛門、野田治兵衛、野田嘉助、橘仙堂善兵衛の四軒版である。「澱藩中　畑吟風所持　印　印」とする。なお、同書の版権は蒼虬の成田家にある。吟風は蒼虬と親しく俳諧に交わり、多くの吟風宛蒼虬書簡もある。『金蘭集』には連句の出典などを記す朱の書入れがあり、芭蕉の作品そのものを知ろうとする研究的な姿勢がみられる。これは芭蕉顕彰俳諧の一つの形である。

ところで、吟風自作の矢立細工一式の中に、高さ四糎程の芭蕉像がある。矢立の入れ物の表は「椎」、裏は「先たのむ」の文字が刻まれている。芭蕉句「先たのむ椎の木もあり夏木立」によるものである。中には『未来記』の自作の豆本や筆・硯、印・印肉もある。このような芭蕉を慕った遊び心も楽しい。

吟風は、洛東の芭蕉堂主蒼虬、朝陽、九起と親しく交際しているが、芭蕉堂にある許六刻という芭蕉像の見風筆箱書きを臨模している。許六刻芭蕉像のことは『拾遺 都名所図会』（天明七年九月刊）に載り、広く周知されていた。なお、この像と箱書きは現存している。

○芭蕉堂蔵許六刻芭蕉像見風筆箱書きの写し（1—112—3）

縦二五・〇糎、横三三・五糎。



臨模の後に吟風の補筆がある。

これは洛東山はせを堂什物

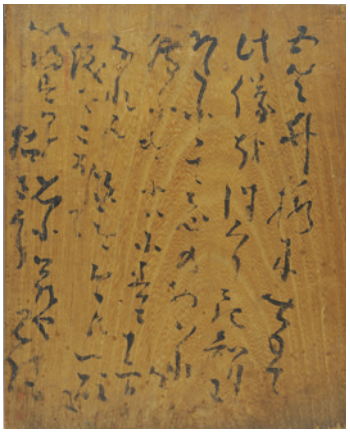
翁の像あり。五老井許六の作なり。

其箱の裏書に此通り書付ありしを

うつし来る。外に一寸計の木魚有。

翁所持のよし。

〈参考〉芭蕉堂蔵芭蕉像箱書

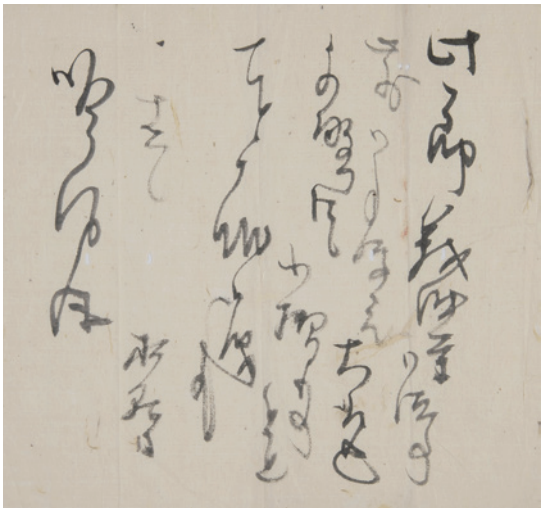


芭蕉を顕彰する様相はさまざまであるが、芭蕉堂初世の闌更が仕掛けた一連の芭蕉顕彰は、『拾遺 都名所図会』という出版を利用したところに時代の影響がみられるが、後々まで影響が大きく、芭蕉の神格化に通じるものがある。芭蕉に傾倒する吟風にとっても、芭蕉に繋がるものは存在価値が大きいのである。

さらに、近江膳所の義仲寺にも足を延ばしている。吟風の俳諧交友録Ⅲに

「閑斎　江州粟津　義仲寺」（第三章資料二、78頁下段）の記載があり、閑斎が義仲寺看守であった文政三年以降のことである。また、義仲寺の年刊追善句集『時雨会』は、天保五年に一応の終刊を迎えており、吟風はこれに入集していないことから、義仲寺に赴くのはそれ以降であろう。さらに、杜鷲が、左に示すごとく吟風宛杜鷲書簡で傍線部「義仲寺御法事」を伝えているが、時雨忌のことである。吟風が杜鷲の『年毎集』に入集しているのは天保七、八年である。吟風は勤のために大津辺りに出向くことがあり、折にふれて義仲寺に立ち寄っていたのではないかと思われる。

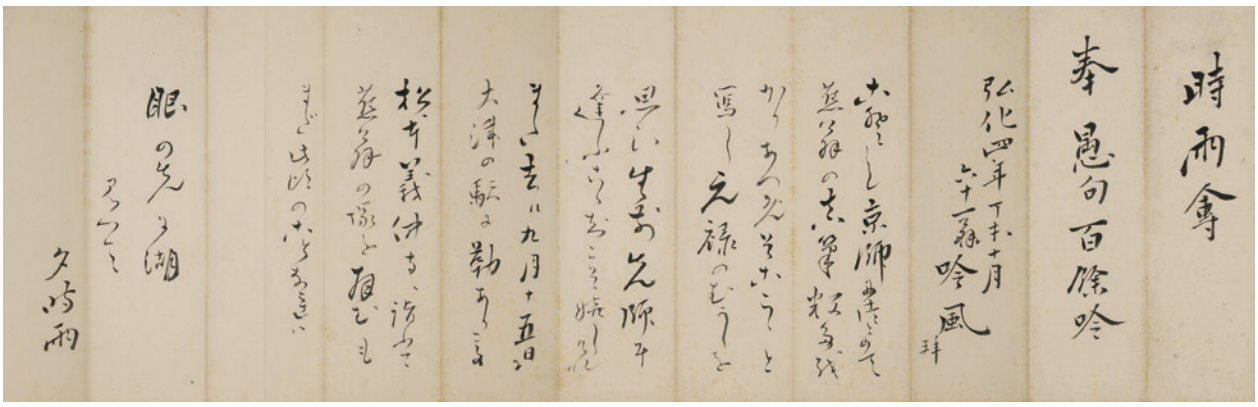
○吟風宛杜鷲書簡（1–53–10）。縦一六・三糎、横一七・八糎。



此節義仲寺御法事
前、御手伝にて大取込
千畳仕候。小摺もの進上
可申候。御作御洩可被下候。
十月一日　　杜鷲
吟風様

弘化四年、吟風が六一歳の折、時雨会に「奉　愚句百余吟」として時雨の句ばかりの百句余を奉納している。折帖一冊。ここでは一部を掲載する。下図は、冒頭の詞により、勤めのために大津まで出向いた時、義仲寺に立ち寄りこれを奉納していることが知られる部分である。

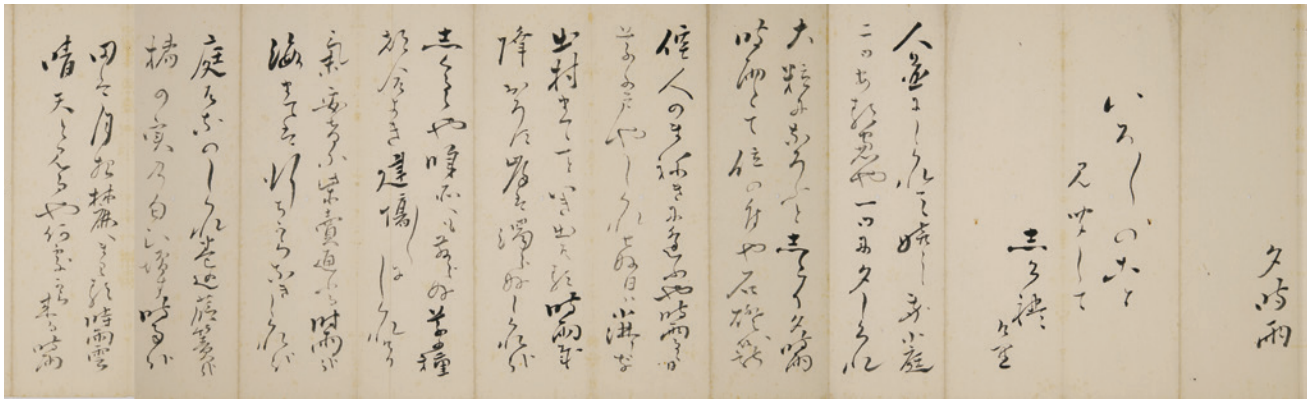
○奉　愚句百余吟（1–5–19）。縦一九・〇糎、横五・五糎。



時雨会
奉　愚句百余吟
弘化四年丁未十月
六十一翁吟風拝

ことし京師につとめて
蕉翁の真筆数多を
かりあつめそこゝと
写し元禄のむかしを
思ひ、生前先師に
逢ふこゝちこそうれしけれ。
また去ル九月十五日に
大津の駅に勤ありて
松本義仲寺へ詣ふて
蕉翁の塚を拝むも
まだ此頃のことなれば

眼の先に湖
見へて
夕時雨



いろ〳〵のこと
見聞して
しぐれけり

人並にしぐれて嬉し我小庭
二つある窓や一つに夕しぐれ
大粒になろふとしたり夕時雨
時雨とて位の付や石灯籠
侘人のまねきに逢ふや時雨るゝ日
草の戸やしぐれせぬ日は小淋しき
出村まで一といき出たる時雨哉
降おろす岸は濁らぬしぐれ哉
しぐるゝや余所へも散らぬ草の種
都合よき建場〳〵にしぐれけり
気安げに柴売通ふる時雨哉
海までは行ちからなきしぐれ哉
庭はなのしぐれ巻込葭簀哉
橘の実の匂ひ増す時雨哉
田は月夜麓へまわる時雨雲
晴天と見るや何処から来る時雨

（以下略）

因みに、吟風は、大坂の花屋庵鼎左、五春荘井眉、井資、井左、八千房一肖、大坂住時代の桜井梅室らとの交流がある。第三章資料二の俳諧交友録参照。彼らは、「芭蕉」に傾倒する連中であるが、特に、花屋庵は、芭蕉の没した花屋裏にあって、芭蕉終焉の地を守った。これも芭蕉顕彰俳諧の一様態である。

その他、畑家には、芭蕉や蕉門の短冊、其角の元禄一五年一二月二〇日付文鱗宛書簡など芭蕉関連資料は多い。このように「芭蕉」に傾倒する吟風であるが、その契機を知る資料がある。それは、大坂滞留中に京へ出向いた田川鳳朗に出会い、鳳朗と江戸の宗匠の句に触れ、蕉風一色となっていることを知り得た文書である。この対面の労をとったのは、大坂の一肖である。以下にその書簡と、対面の書留を示す。

一肖は、八千房（四世）淡叟。別号、駝岳。津民、また小森氏。寛政四（一七九二）生、弘化三（一八四六）年六月一五日没、享年五五。日向の人、後大坂住。尚々書にある傍線部c『枯野集』を編むが、管見の限りでは、文政八、一一年、天保二、三年の四冊がある。なお、八千房は松木淡々を祖とする。畑家に蔵する『俳諧伝書記聞』は、芭蕉と淡々の言説を収録している。第二章第一節参照。

鳳朗は、田川、また厳島氏。宝暦一二（一七六二）年生、弘化二（一八四五）一一月二八日没、享年八四。別号、鶯笠、自然堂など。肥後熊本藩士であったが、寛政一〇年致仕。後、江戸住。大坂にいた時期については、未詳であるが、鳳朗の上方滞在をみると以下のごとくである。鳳朗の年譜事項については、金田房子編「鳳朗略年譜」を参照した（金田房子・玉城司編『鳳朗と一茶、その時代』二〇二〇年、新典社刊）。

(1) 文政一二年からしばらく大坂に遊び、天保の初めには江戸に帰る。
(2) 天保七年三月に阿波方面へ遊歴して後、京嵯峨天龍寺中南芳院に泊まる。
(3) 天保一四年の芭蕉一五〇回忌に、二条家より花の本宗匠を蒙り、俳諧興行を執行する。

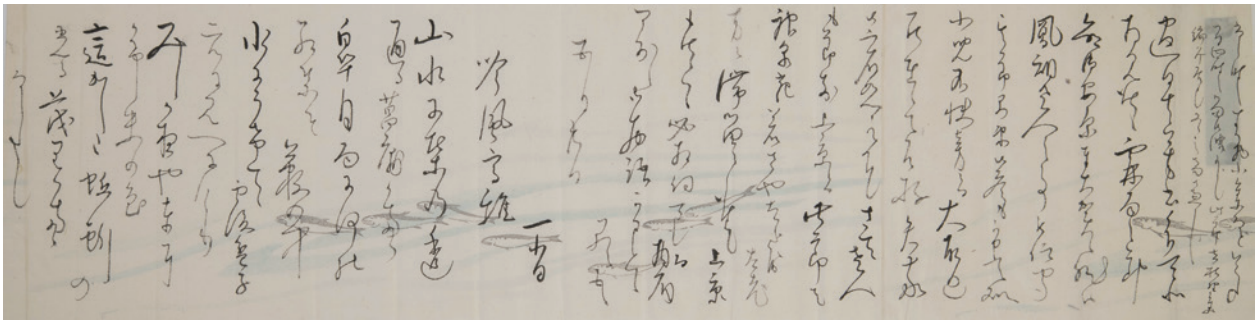
一肖書簡は傍線部a「鳳朗老人」とあるから、鳳朗と改号した天保三年四月以降である。また、五月朔日付吟風宛朝陽書簡（1-20-37）に「鳳朗老人」の上京を知らせるが、朝陽は天保一一年に没するので、それ以前のことである。従って、天保三から一一年のこととなり、同七年が適当である。吟風が五〇歳のことである。そして、傍線部bのごとく、「節前上京」とあり、端午の節句前に京へ上ったのである。先の朝陽の書簡によれば、五月一日には在京で、木屋町に滞在している。対面の場所は、「神泉苑若さや太郎兵衛太老方に滞留」の神泉苑。太老は鈴木氏、江戸の人、天保七年に『更科七部集』を編む。天保五年から七年の万籟編『逐々集』に連句や発句が多出しており、この頃は京住であったと推察される。さらに続けて「必相伺可申候」と対面を強く促す。

吟風と鳳朗が出会い、その折の様子を知るものとして、吟風が書留めた一枚「江戸座宗匠出吟」がある。同資料には、白眼台、仏外、是来、景山、田喜庵（護物）、雪中庵（嵐雪系）、太白堂（桃隣系）、小蓑庵（碓嶺）、北元の句が書き留められている。江戸における蕉門宗匠である。それに続けて鳳朗の句を示し、芭蕉傾倒の契機に言及する。

「江戸座宗匠出吟」の傍線部dの「旅宿」は、一肖の書簡から神泉苑若狭屋太老方であると知られる。そして、傍線部c「江戸座の宗匠連の体を試ん」と江戸の宗匠の力量を探るのであるが、すっかり得心して、この時から吟風は傍線部e「専ら芭（蕉）風」に傾倒することになるのである。このことは、吟風が藩士間のみに留まらず、市井の俳諧に目配りをし、影響を受けていたことを示している。なお、吟風のいう「江戸座」は、京、大坂に対する江戸の宗匠という意味であろう。吟風が「江戸座」に言及した資料は他に知らない。

以上に考察したごとく、吟風は鳳朗との対面を契機として「蕉風」に傾倒していくが、それ以前から俳仙堂、芭蕉堂などの「芭蕉」に繋がる市井の俳諧にも関わっていた。また、淀藩士連中でも同様な状況であり、近世後期の「芭蕉」の影響力が知られた。これを総称して私に芭蕉顕彰俳諧という。

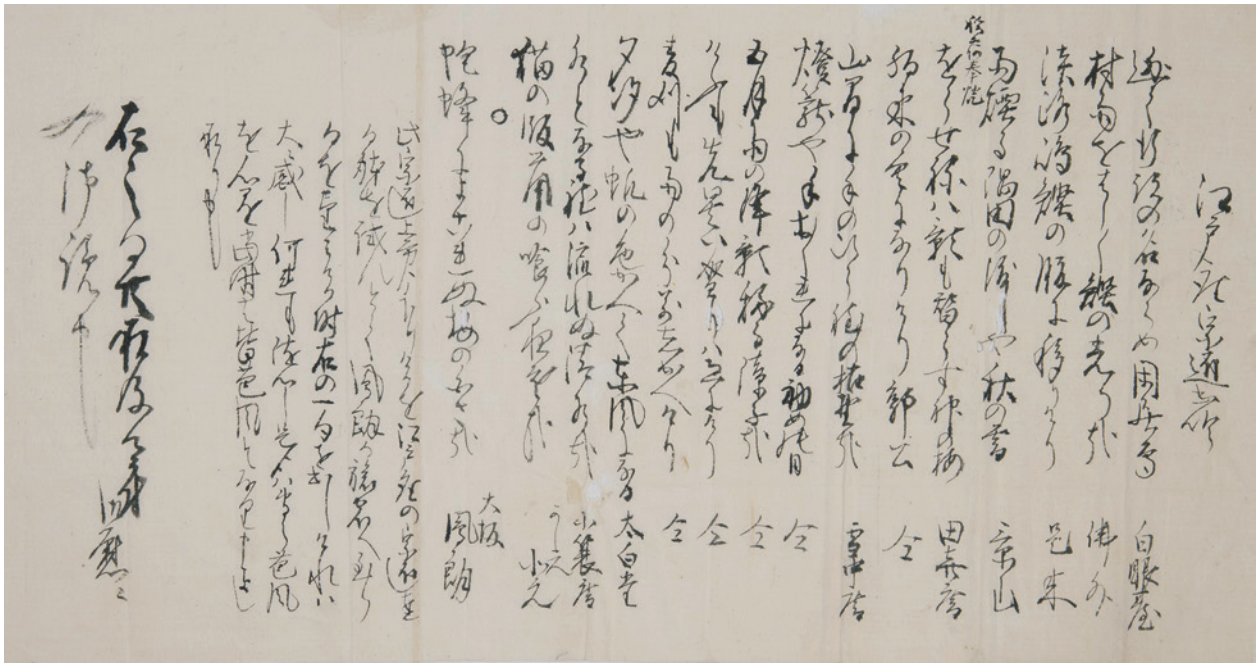
○「五月六日付吟風宛一肖書簡」（1-47-2）。縦一五・八糎、横六二・八糎。



尚〳〵時のすり物小集などいたし申候
間、四時の御句御洩可被下候。此節は枯野集
編み居申候。冬の御句御恵可被下候。
過日は芳書被下忝
拝見仕候。霖雨之節
愈御安康奉大賀候。然ば
a 鳳朗老人の事被仰聞
其節早速御答も可申上候処
小児不快旁にて大取込
罷在候て反抔失敬
御寛恕可被下候。さて、b 老人
も節前上京候て此節は
神泉苑若さや太郎兵衛太老
方に滞留に御座候。上京
も仕候て必相伺可申候て拝眉
可致候。御物語可申上候。
早々屯首
五月六日
一肖

吟風高雅
山水に葉の透
通る菖蒲かな
皐月雨に何の
紅葉ぞ薮の中
水にうきて覆盆子
二つに見へにけり
みじか夜や東に
かけし末の色
這出した蚯蚓の
光る茂りかな
など申し候。

○「江戸座宗匠出吟」（1―138―6）。縦一六・四糎、横三一・二糎。



江戸座宗匠出吟

逃て行後の名ならめ閑古鳥　白眼台
村雨をはじく鰹の光り哉　仏外
淡路島鰹の腹に移りけり　是来
雨煙る隅田の渡しや秋の暮　景山
稲荷奉灯
をらせねば影も替らず神の梅　田喜庵
約束の空になりけり郭公　仝
山間に手のひら程の枯野哉　雪中庵
灯籠や手おくれになる初めの日　仝
五月雨の降影移る障子哉　仝
けふも先暑い盛りは過にけり　仝
麦刈も雨の分別しかへけり　仝
夕汐や帆の色かへて東風になる　太白堂
水となる程は流れぬ清水哉　小蓑庵
猫の飯鼠の喰ふ夜寒哉　かし元北元

○

虻蜂によごれぬ梅の白さ哉　大坂鳳朗

此宗匠上方より下りけるをc江戸座の宗匠連／句体を試んとて／d鳳朗が旅宿へ至り／句を望みける時、右の一句を出しければ／大に感じ何れも随心し、e是よりは専ら芭風（ママ）を心懸、当時は皆芭（ママ）風となり申すよし／承り申候。

右の句共承及次第御慰ミ／入御覧申候。

改訂 畑忠良家俳諧資料　分類目録

凡例

一　本目録は、畑忠良家俳諧資料目録のうちの分類目録を、私に改訂したものである。包み紙のみ、欠番等は適宜省く。
　なお、全資料の目録（番号順目録と分類目録）と画像資料は、畑文書を読む会との協力によって作成したものがあり、長岡京市教育委員会生涯学習課文化財係において閲覧できる。

一　資料番号は、畑文書を読む会によって付されたものである。

一　分類は、俳書、書簡、俳諧一紙物（俳諧興行懐紙、人名録など数枚を綴ったものを若干含む）に大別する。

一　配列は、俳書と俳書以外の書簡等に分類し、俳書以外のそれはさらに次のように分類する。
　・淀藩士・諸国藩士・芭蕉堂・俳仙堂・各地域の俳人

一　成立年については、未詳としたものの多くが、吟風没年の安政六年一二月一三日以前であるが、特に記さない。

一　刊・写・直　は、それぞれ刊本・写本・直筆を現す。

一　〔　〕は私に注記したものである。

目次

俳書　1～11
淀藩士書簡等　1～139
諸国藩士書簡等　140～198
芭蕉堂書簡等　199～308
俳仙堂書簡等　309～333
各地域書簡等　334～745

改訂 畑忠良家俳諧資料分類目録

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
俳書										
1	俳書	2-2-	寛政８年	1796	除元集（外題）竹楼・支雪等入集。絵入。	吐鳳	—	17.0×23.0	刊	
2	俳書	21-59-	天保８年春	1837	等新古母里（としごもり）外題。蒼虬、万籟、朝陽等入集。「丁酉冬」奥。	梅園尼	—	19.0×13.0	刊	吟風「隣のとひつゝく雨の若葉かな」入集。折本一冊。
3	俳書	2-3-	文化３年春	1806	金蘭集上（外題）、みちのく南部北溟序、南無庵補浣花井甘井校。	万子	—	12.8×19.5	刊	
4	俳書	2-4-	文化10年	1813	金蘭集下（外題）、加州成田家蔵板。皇都蕉門書肆浦井徳衛門他刊	万子	—	12.8×19.5	刊	
5	俳書	1-37	嘉永５年６月	1851	掌中安紀乃年謝梅（掌中秋の寝覚）外題、名所・歌枕の付け合い書。刊記「文化十四丁丑十二月刻成／嘉永五壬子六月再刻京都書林　銭屋惣四郎・岡田屋嘉七／江戸書林須原屋茂兵衛・山城屋佐兵衛／大坂書林　河内屋新治郎・敦賀屋九兵衛」。	美波留大人（序文　藤原好故・藤原春吻・藤原以那遠・藤原有声）	—	19.6×6.0	刊	折本一冊。
6	俳書	2-17-20	未詳		芭蕉堂月並九月の部・産霊舎二鳥撰夏の部。芭蕉堂九起秀吟集・執事見山。芭蕉堂月並柱刻「酉秋四～七」。二鳥撰柱刻「夏之一～二」。	九起他	—	19.0×12.5	刊	夏の部に吟風１句あり
7	俳書	2-13	未詳		芭蕉翁真跡幻住庵記	芭蕉	—	18.2×25.0	刊	一冊。八丁。
8	俳書	1-32	未詳		蓑虫庵記・素堂蓑虫の説他	芭蕉	—	12.3×33.9	写	仮綴全７紙。最終丁は破損多大。
9	俳書	1-34	未詳		未来記・幻住庵記・芭蕉翁発句集	芭蕉	—	25.0×17.3	写	一冊。「蓑虫庵什」とする。
10	俳書	2-15	文化九年春	1812	俳諧伝書記聞	未詳	—	23.0×15.5	写	養和堂蔵書の写し。一冊。墨付19丁。表紙、鶴二羽の絵入。
11	俳書	2-19	未詳		発句集わすれ草、貞徳他発句	—	—	19.9×13.0	写	一冊。
淀藩士										
1	書簡	1-12-1-	未詳		「冬の梅」など発句５句朱長点付	吟風	俳仙堂	18.0×35.1	直	畑数馬、天明７年７月26日生、安政６年12月13日没。俳仙堂は朝陽。往復書簡
2	書簡	1-12-2-	未詳		「夜はむらに」等発句５句朱長点付	吟風	俳仙堂	21.5×27.0	直	往復書簡
3	書簡	1-12-3-	未詳		「十筋程」等発句５句　朱長点、「俳仙校」の朱筆あり。	吟風	俳仙堂	16.5×47.0	直	往復書簡
4	書簡	1-12-4-	未詳		「うち庭を」等発句６句朱長点付。「有節君へよろしく」の依頼文あり。	吟風	俳仙堂	18.0×44.0	直	往復書簡。
5	書簡	1-12-5-	未詳		「水鳥の」等発句４句　墨長点付	吟風	俳仙堂	25.5×35.0	直	往復書簡
6	書簡	1-12-6-	未詳		「暑がりの」等発句６句長点付	吟風	俳仙堂	16.5×40.0	直	往復書簡
7	書簡	1-12-40	未詳		「霜きえる」等発句３句朱長点付	吟風	未詳	16.2×32.9	直	往復書簡
8	書簡	1-12-42	未詳		「行としも」等発句７句評点付	吟風	未詳	16.7×42.0	直	往復書簡
9	書簡	1-12-47	未詳		「名も知らぬ」等発句３句評点付	吟風	未詳	16.3×19.8	直	往復書簡
10	書簡	1-12-56	未詳		「夜はむらに」等発句12句評点付。「北野百梅奉額御撰御加入可被下候　吟風」	吟風（畑数馬）	〔万籟〕	25.0×33.8	直	往復書簡
11	書簡	1-13-9	２月16日		不幸の罪	数馬（吟風）	衞更(江翠)	16.4×17.0	直	包物添
12	俳諧	1-5-19-	弘化４年10月	1847	時雨会奉納愚句百余吟	吟風	—	19.0×5.5	直	形状良
13	俳諧	1-8-	未詳		「大雪や名は」句稿	吟風	—	34.0×25.0	直	
14	俳諧	1-12-	未詳		「吟風発句　朱点蒼虬」表書のみ	吟風	—	16.6×4.5	直	小短冊
15	俳諧	1-12-7-	未詳		「十筋程」等発句９句	吟風	—	16.5×48.0	直	
16	俳諧	1-12-8-	未詳		「葉隠れの」等発句８句	吟風	—	16.5×47.0	直	
17	俳諧	1-12-9-	未詳		「二日見ぬ」等発句７句	吟風	—	16.5×46.5	直	
18	俳諧	1-12-10-	未詳		「雲うごき」等発句12句	吟風	—	16.0×59.0	直	
19	俳諧	1-12-11-	未詳		「本箱の」等発句６句	吟風	—	16.5×29.0	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
20	俳諧	1-12-12-	未詳		「人の来て」等発句７句	吟風	—	16.5×35.5	直	
21	俳諧	1-12-13-	未詳		「ちろついて」等発句６句	吟風	—	17.5×37.5	直	
22	俳諧	1-12-14-	未詳		「つつしまず」等発句14句（下書）	吟風	—	17.0×81.0	直	
23	俳諧	1-12-15-	未詳		「三日月は」等発句８句	吟風	—	16.5×41.5	直	
24	俳諧	1-12-16-	未詳		「炭竈の」等発句７句	吟風	—	16.5×22.5	直	
25	俳諧	1-12-17-	未詳		「枝前の」等発句５句	吟風	—	16.0×29.5	直	
26	俳諧	1-12-18-	未詳		「菊いろいろ」等発句６句	吟風	—	17.0×33.0	直	
27	俳諧	1-12-19-	未詳		「葉隠れの」等発句７句	吟風	—	17.0×43.0	直	
28	俳諧	1-12-20-	未詳		「行灯に」等発句５句	吟風	—	16.5×20.0	直	
29	俳諧	1-12-21-	未詳		「老たれば」等発句10句	吟風	—	16.0×40.5	直	
30	俳諧	1-12-22-	未詳		「あまる程」等発句５句	吟風	—	16.0×30.0	直	
31	俳諧	1-12-23-	未詳		「跡先を」等発句５句	吟風	—	16.0×20.5	直	
32	俳諧	1-12-24-	未詳		雨の辞句文	吟風	—	16.5×76.0	直	
33	俳諧	1-12-25-	未詳		「ゆうべには青山を詠め」句文	吟風	—	16.0×30.0	直	
34	俳諧	1-12-27-	未詳		「今宵の月は室壁のうちに」句文	吟風	—	16.5×45.0	直	１-12-28の内容と同じ
35	俳諧	1-12-28-	未詳		「今宵の月は室壁のうちに」句文	吟風	—	16.5×45.0	直	１-12-27の内容と同じ
36	俳諧	1-12-29-	未詳		「魂棚や」等発句一紙	吟風	—	16.0×66.0	直	
37	俳諧	1-12-30-	未詳		「紅樹の中に清光なる月は」句文	吟風	—	17.0×47.0	直	二色うち曇り用箋
38	俳諧	1-12-31-	未詳		「杉箸で」等発句一紙	吟風	—	16.5×21.5	直	天朱引刷り用箋
39	俳諧	1-12-32	未詳		「見て置や」等発句一紙	吟風	—	16.0×40.0	直	
40	俳諧	1-12-33	未詳		「足元に」等発句一紙	吟風	—	16.2×22.4	直	
41	俳諧	1-12-35	未詳		「百味にも」等発句一紙	吟風	—	16.8×36.9	直	
42	俳諧	1-12-41	未詳		「雨乞の」等発句一紙（下書き）	吟風	—	16.1×37.7	直	
43	俳諧	1-12-43	未詳		「足元に」等発句一紙　（下書き）	吟風	—	16.7×21.1	直	
44	俳諧	1-12-44	未詳		「鶯や」等発句一紙	吟風	—	24.8×34.0	直	
45	俳諧	1-12-45	未詳		「浦浪の」等発句一紙	吟風	—	24.0×31.3	直	
46	俳諧	1-12-46	未詳		「眠り眠り」等発句一紙	吟風	—	16.2×21.2	直	
47	俳諧	1-12-48	未詳		「水にさす」等発句一紙	吟風	—	16.9×23.0	直	
48	俳諧	1-12-49	未詳		「つつがなく」等発句一紙	吟風	—	16.8×54.4	直	
49	俳諧	1-12-50	未詳		「引場よき」等発句一紙（下書き）	吟風	—	16.8×40.0	直	
50	俳諧	1-12-52	未詳		「摘まるるも」句一紙	吟風	—	16.1×32.3	直	
51	俳諧	1-12-53	未詳		「よきつれや」等発句一紙	吟風	—	14.9×29.0	直	
52	俳諧	1-12-54	未詳		「元日や」等発句一紙	吟風	—	16.8×32.0	直	天朱引刷り用箋
53	俳諧	1-12-55	未詳		吟風書前文３句	吟風		16.0×63.0	直	
54	俳諧	1-12-57	未詳		鉢叩き句文	吟風	—	16.0×54.0	直	
55	俳諧	1-12-34	未詳		「気障りも」句文	吟風樵者	—	16.2×50.0	直	
56	俳諧	1-12-37	未詳		「見返れば」等発句一紙	吟風	—	17.0×20.3	直	彩色画用箋
57	俳諧	1-12-38	未詳		井眉庵宗匠評発句10句	吟風	—	16.9×44.2	直	彩色画用箋
58	俳諧	1-13-23	未詳		俳諧一紙	吟風	—	36.0×49.3	直	
59	俳諧	1-13-29	未詳		元旦句一紙	吟風	—	16.5×57.3	直	
60	俳諧	1-13-30	未詳		「秋の野にあわれ」俳文。八太治部右衛門に送る添え書きあり。弄月舎樵夫吟風の署名。	吟風	—	16.8×81.2	直	
61	俳諧	1-26-	未詳		鉢叩き自画賛	吟風	—	33.5×24.5	直	
62	俳諧	1-39-2-9	未詳		前田氏の前栽の菊を褒める文	吟風樵者	—	20.0×48.0	直	虫損・生印あり
63	俳諧	1-39-2-12	未詳		剛池雅伯追悼句文	吟風	—	27.5×61.0	直	
64	俳諧	1-39-5	未詳		春の句稿	吟風	—	43.0×16.5	直	
65	俳諧	1-39-12	未詳		淀俳人之像	吟風	—	25.0×34.0	直	
66	俳諧	2-17-14	未詳		芭蕉門人十名の名前。其角、嵐雪、去来、丈草、許六、野坡、杉風、支考、北枝、越人。	吟風	—	17×9.5	直	
67	俳諧	1-138-6	〔天保６、７年頃〕		江戸座宗匠の発句書き上げ。大坂滞在の鳳朗と京にて対面。八千房一肖の仲介（１-47-２一肖書簡）による。鳳朗・白眼台・仏外・是来・景山・田喜庵・雪中庵・太白堂・小蓑庵・北元。また、鳳朗に端午の競馬の句などがある（１-111-39）。	吟風	—	16.4×31.2	直	「鳳朗」に改号は天保３年６月。鳳朗の上方滞留は天保６、７年頃。一肖書簡は５月６日付。

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
68	俳諧	2-17-23	天保10年春	1839	已亥春　年賀一枚摺	吟風	—	13.5×10	刊	
69	俳諧	1-39-29	未詳		「ちとせふる」年賀一紙	吟風	—	17.0×6.5	直	印付
70	俳諧	1-39-27	安政５年春	1858	戊午年春三才の吟「晴天に」。発句３句。同句は二枚あり、押印は異なる。	吟風	—	16.0×7.0	直	
71	俳諧	1-39-28	安政５年春	1858	戊午年春三才の吟「更行や」。発句３句。同句は二枚あり、押印は無し。	吟風	—	16.0×7.5	直	
72	俳諧	2-17-11	安政５年春	1858	戊午春の吟一紙	吟風	—	17× 9	直	
73	俳諧	1-39-32	安政５年春	1858	戊午歳　月並	吟風	—	17.0×7.5	直	２-17-21-５～８に同じ
74	俳諧	2-17-21-5	安政５年	1858	戊午歳月並二句一紙。大述庵１句小云斎１句	吟風	—	17.0×8.8	直	吟風の瓢印あり
75	俳諧	2-17-21-6	安政５年	1858	戊午とし二句一紙。大述庵山人１句小云斎樵者１句	吟風	—	16.5×10.4	直	吟風の印なし
76	俳諧	2-17-21-7	安政５年	1858	戊午歳月並二句一紙。大述庵山人１句小云斎樵者１句	吟風	—	16.5×13.8	直	吟風の瓢印あり
77	俳諧	2-17-21-8	安政５年	1858	戊午歳月並二句一紙。大述庵山人１句小云斎樵夫１句	吟風	—	16.3×14.5	直	吟風の印なし
78	俳諧	1-13-10-2	未詳		「元日や」句文草稿	簑虫庵吟風	—	16.5×23.0	直	
79	俳諧	2-17-34-1～4	安政３年春	1856	丙辰歳旦春興歳暮の句文４枚	吟風	—	17×13	刊	吟風の自作摺物
80	俳諧	2-17-8	安政５年	1858	戊午とし六題、募句ちらし	みのむし（吟風）	—	16.7×7.5	直	「みのむし」印あり
81	俳諧	2-17-21-3	安政２年春	1855	乙卯歳暮歳旦春興。「信州一茶の調を学びて　乙卯春　みのむし庵主人」。	みのむし庵（吟風）	—	13.5×6.6	直	２-17-21-４・２-17-39-５に同じ。
82	俳諧	2-17-21-4	安政２年春	1855	乙卯歳暮歳旦春興。「信州一茶の調を学びて　乙卯春　みのむし庵主人」。	みのむし庵（吟風）	—	13.5×6.6	直	２-17-21-３・２-17-39-５に同じ。
83	俳諧	2-17-39-5	安政２年春	1855	乙卯歳暮歳旦春興。「信州一茶の調を学びて　乙卯春　みのむし庵主人」。	みのむし庵（吟風）	—	13.5×7.5	直	２-17-21-３・４に同じ。
84	俳諧	1-12-58	未詳		しぐれ会奉納句文	みのむし庵吟風	—	16.0×75.0	直	
85	俳諧	1-12-26	未詳		「瓢の家のあるじ」句文	簑虫庵吟風	—	16.0×37.0	直	
86	俳諧	1-72-1	未詳		「雪　句帖人銘」万籟、岳鳳他	吟風	—	12.0×32.0	直	「雪　名家句集」（２-８）の人名録。
87	俳諧	1-72-2	未詳		「月　乾巻句帖人名」京東山芭蕉堂朝陽他	吟風	—	24.0×32.8	直	人名録。冒頭に「芭蕉堂朝陽」とあるところから、天保９年10月９日以降の成立。
88	俳諧	1-72-3	未詳		蕉夢他人名録。井眉・桐雨・梅通他	吟風	—	12.0×34.0	直	人名録
89	俳諧	1-72-4	未詳		舟柴、裡風、也然他人名録	吟風	—	24.0×34.0	直	人名録　・舟柴は泉州伯多（方）藩士、林太仲。別号、二木庵。　・裡風は、泉州伯多（方）藩家老、今井弥市衛門。
90	俳諧	1-72-5	未詳		近在発句師名前。岳鳳、岱年他	吟風	—	24.0×39.9	直	人名録
91	俳諧	1-39-6	未詳		大坂俳人住所録（花屋庵、梅室他５人）	吟風	—	16.0×25.0	直	人名録
92	俳諧	2-22-4	未詳		「南窓翁の墓に詣でて」短冊	吟風	—	短冊	直	
93	俳諧	2-22-5	未詳		「亀山渓水君の還暦を賀す」短冊	吟風	—	短冊	直	
94	俳諧	2-23-8	未詳		吟風、赤水、支雪、三千丸、和六、西川翁、南窓、呉明、志宇、也然、旭翁、野楊、秋山、はせを（以下写）其角、野坡、昌房、涼菟、蘭雪、越人、その女、洒堂、乙州、正秀、尚白、千那、桃隣、荷兮、嵐蘭、荊口他の俳句短冊51枚	吟風他	—	短冊	直	
95	書簡	1-13-20	天保15年３月１日	1834	詩歌連俳の誘いと拙詩	稲葉正誼	吟風	25.0×34.5	直	正誼は、15代（淀藩11代）、天保13年に家督を継ぎ、17歳。嘉永元年没、享年22。
96	書簡	1-39-1-1	未詳		簑虫庵のこと、吟風作茶道具、文具のこと。	支雪	吟風	15.7×37.0	直	富原支雪、宝暦10生、天保９没。淀藩医。
97	書簡	1-39-1-2	12月11日		選句依頼	富原支雪	畑数馬	15.7×67.0	直	別紙追伸あり。虫損。
98	書簡	1-39-1-3	１月26日		礼状	支雪	吟風	16.5×105.8	直	
99	書簡	1-39-1-4	２月13日		応募句の詠草料一朱添	支雪	吟風	16.5×89.0	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
100	書簡	1-39-1-5	天保３年12月15日	1832	銀子入り書状「臘月十五日当賀」とあり、年内立春、天保三年にあたる。	支雪	吟風	16.5×50.0	直	虫損
101	書簡	1-39-1-6	５月28日		礼状	支雪	吟風	16.5×52.0	直	
102	俳諧	1-39-33	文政６年春	1823	癸未春東都に春を迎て	支雪	—	16.0×4.0	刊	
103	俳諧	1-39-1-7	文化９年冬	1812	支雪句・吟風句各一句	支雪・吟風	—	16.0×60.0	直	
104	俳諧	2-11-2	未詳		酔梅居士他春句摺物	支雪・吟風他	—	38.0×51.5	刊	松川龍椿画、一枚彩色摺り
105	俳諧	1-9-1-	未詳		「題二月並」会案内。発起、松風。吟風、広知撰募句ちらし	吟風他撰	—	12.5×17.0	直	良
106	俳諧	1-138-3	未詳		「水鶏鳴」八吟連句。天外・支雪・如斎・其友・軽舟・掬水・吟風・其郷	天外・支雪・吟風他	—	12.7×26.2	直	
107	俳諧	2-17-30	未詳		「うからうから」年賀一枚摺	支雪・月戸・吟風他	—	19×25.5	刊	紺紙に白文字
108	俳諧	2-18	未詳		六々行。支雪点、竹楼高点八吟歌仙	琢雲居支雪評	—	16.5×256,0	直	支雪点印あり
109	書簡	1-39-2-7	安政６年12月13日以降	1859	「脱ぎ捨し」追悼句文。吟風の臨終の様子が述べられている	石川掬水	吟風霊前	24.5×61.0	直	淀藩医。
110	書簡	1-39-17-1	12月６日		近来呼出不仕発句添削・入集依頼	石山大之	吟風	16.5×29.0	直	淀藩医。
111	書簡	1-39-18	未詳		吟風百詠草評書状、発句10句添え	堀赤水	吟風	15.0×42.0	直	すすき図刷用箋
112	俳諧	1-39-10	未詳		「大方の」発句一紙	赤水	—	16.0×35.0	直	
113	俳諧	2-7	未詳		赤水撰秀吟抜粋、半丁毎に１人１句。吟風は巻末。	赤水	—	15.8×22.6	直	一冊。
114	俳諧	1-39-11	未詳		「咲ながら」発句一紙	赤水	—	15.5×34.0	直	
115	書簡	1-47-3	５日		冊料送付のこと	堀玄珠	畑数馬	16.2×38.2	直	
116	書簡	1-56	未詳		句料添え選句依頼状、吟風の写し。玄露翁追薦、岱年・祭魚撰の発句（20句）評依頼。	淀藩士雪兎	岱年・祭魚	16.8×104.0	直	・岱年は、花守氏、森氏とも。寛政10年生、嘉永５年１月12日没。讃岐丸亀の人、後京住。 ・祭魚は、北川（喜多川）氏。明治６没。京都の人。二世枯魚堂。
117	俳諧	2-17-6	未詳		「佐保姫や」発句一紙	嘯窓閑人	—	10.4×12.2	直	刷用箋
118	俳諧	2-17-38	嘉永元年	1848	戊申　一枚摺	吟風・雪兎・嘯窓	—	17.5×11.8	刊	吟風の自作摺物
119	書簡	1-39-24	文化12年春	1815	乙亥春の淀姫社社参の吟	淀藩諷々	〔吟風〕	10.5×14.0	刊	
120	書簡	1-39-2-4	安政７年２月20日	1860	吟風の追悼の包紙	池田和六	吟風霊前	24.0×32.4	直	吟風の義父。
121	書簡	1-39-2-5	安政７年２月20日	1860	「梅さいた」追悼句文	池田和六	吟風霊前	16.7×42.0	直	
122	書簡	1-39-15	安政６年12月	1859	吟風追悼句入り書状	池田和六	蓑虫庵（吟風）	17.0×56.0	直	
123	書簡	1-39-2-6	安政６年12月13日以降	1959	「連もなき」吟風追悼５句、文	稲葉赫水	吟風霊前	16.7×40.0	直	
124	俳諧	1-39-30	安政５年春	1858	戊午年春「松風の」歳旦。赫水印付。発句３句	赫水	—	17.0×7.0	直	
125	俳諧	1-39-31	文久１年春	1861	辛酉春「一と品を」歳旦。赫水印付。発句３句	赫水	—	16.0×9.0	直	吟風没後。
126	俳諧	2-17-22	子春		三白画年賀一枚摺。亀図入り。	間島軽舟	—	9.5×18	刊	
127	俳諧	1-39-13	未詳		災後望月句一紙	軽舟	—	16.0×57.0	直	
128	俳諧	2-17-49	未詳		嵐山吟行１枚摺。廣年画堇図入り。袋「花の空」（19.0×6.0）。素琴・百之・白水・朝陽。	素琴他	—	19.0×25.1	刊	
129	書簡	1-39-23	天保３年閏11月20日	1832	俳人仲間に新春句会の御題を決めて通知した「回状」	吟風、支雪他淀藩連中	淀連中他	16.5×106.0	直	回状によって成った春興（１-39-14）あり
130	俳諧	1-39-14	天保４年春	1833	癸巳春興一紙。淀藩中27人・京都俳人４人の発句。とせ・呉明・蒼虬・榛堂。	淀連中他	—	27.0×42.0	直	「回状」（１-39-23）によって成った春興。１-39-20と同筆、同様式。
131	俳諧	1-39-20	天保５年夏推定		「夕立や」夏興一紙。淀藩中21人・他俳人３人の発句。呉明・井眉・蒼虬。	淀連中他	—	27.0×42.0	直	１-39-14と同筆、同様式
132	俳諧	2-17-31	天保13年	1842	壬寅のとし一枚摺	吟風・掬水・素琴・万籟・梅室他	—	19.0×25.5	刊	飾り罫線紙。
133	俳諧	2-27	文政７年	1824	文政７年８月奉納額写。八月並。額様式付。其友・吟風・支雪・大之・軽舟・掬水・赤水他。	淀藩連中	—	24.0×49.0	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
134	俳諧	2-16-3	文政８年11月	1825	俳諧の連歌「出と崎は」の巻。蒼虬他十二吟歌仙（執筆含）。端作「文政八丙年霜月興行」。蒼虬・吟風・軽舟・赤水・掬水・其友・支雪・蘓山・鳳水・光山・鶯斎・執筆。	吟風・淀藩連中・蒼虬他	—	18.3×42.5	直	
135	俳諧	2-16-2	文政11年９月17日	1828	俳諧の連歌「こぼれんと」の巻。故竹楼発句脇起十五吟百韻（執筆含）。端作「文政十一戊子年九月十七日於吟風亭興行」。吟風・支雪・南窓・柳江・士常・軽舟・鳳水・大之・掬水・芹渚・赤水・其友・筠圃・剛池・執筆。	吟風他淀藩連中	—	18.5×50.1	直	竹楼は文政11年６月６日没。
136	俳諧	2-16-1	文政12年３月19日	1829	俳諧の連歌「天も花を」の巻。支雪他十吟歌仙（執筆含）。端作「于時文政十二丑年三月十九日於島崎御茶屋興行」。支雪・柳江・剛池・赤水・吟風・鳳水・其友・掬水・大之・執筆。	吟風他淀藩連中	—	18.5×50.0	直	
137	俳諧	2-16-4	安政５年10月12日	1858	俳諧の連歌「しぐるるや」の巻。芭蕉発句脇起二十三吟歌仙。端作「安政五年十月十二日於蓑虫庵興行」。吟風・掬水・二考・梅洲・文枝・桃里・一志・米山・鴻地・淇水・梅山・馬山・中和・芦斎・赫水・袖浦・野遊・春遊・採桑・魚洋・一瓢・魚眼・車軸。	吟風他淀藩連中	—	17.0×46.0	直	時雨忌追善。入句数・抜句表（２-29）の連中が多い。
138	俳諧	2-29	未詳		入句数・抜句表。入句に従って蝶の緑印を押すもの。掬水、鴻地、赫水、魚眼、梅冽、鷹巣他。	淀藩連中	—	36.0×49.0		「安政五年十月十二日於蓑虫庵興行」（２-16-４）の連中が多い。虫損多
139	俳諧	1-136-2	未詳		「今更に」脇起歌仙未完。亡人月下・楳丘・掬水・其友・吟風・魚眼・曲水他。	亡人月下・楳丘・掬水・其友・吟風他	—	25.0×34.0	直	
諸国藩士										
140	書簡	1-38-1	４月24日		「未得拝眉候へども」書状	軽森野楊	畑吟風	15.4×72.5	直	亀山藩士。軽森氏。名、代右衛門。法名、円寿。別号、老々庵。半月亭。安永元年生、天保10年６月27日没、享年68。俳諧は亀岡藩士の神門全瓦門。亀岡誓願寺葬。文政13年、天保９年『平安人物志』「風流」出。
141	書簡	1-38-2	天保６年８月23日	1835	「当月八日之尊書拝見」発句入り書状。八月十二日、江州坂本蔦雨の父于当追福のことあり。端裏「御家中畑吟風様　亀山軽森野楊」。	軽森野楊	畑吟風	15.3×92.5	直	于当没年は、文政12年12月12日。追福は、七回忌天保６年８月12日、於来迎寺。追善集『浮巣集』に吟風「隣のとひつゝく雨の若葉かな」、支雪「人目には我もけしきよ雪の笠」入句。
142	書簡	1-38-3	５月４日		「弥生下旬之尊書拝見」発句入り書状。短冊大延引のこと。端裏「吟風君」。	野楊	吟風	16.0×94.0	直	
143	書簡	1-38-4	閏７月22日		「去十七日之芳翰」発句入り書状	野楊	吟風	16.9×99.4	直	天保６年・安政元年閏７月
144	書簡	1-38-5	７月25日		「秋暑難迎候処」発句入り書状	野楊	吟風	16.9×71.2	直	
145	書簡	1-38-6	４月13日		「両度之花翰相達」発句入り書状。嵐山吟遊のこと。	野楊	吟風	16.0×95.3	直	
146	書簡	1-38-7	11月24日		「両度之尊書追々に相達」発句入り書状。別紙追伸あり。	野楊	吟風	16.5×159.0	直	
147	書簡	1-38-8	１月22日		「花翰着拝見仕候」発句入り書状。大村春圃、九華のことなど。	野楊	吟風	16.5×130.5	直	
148	書簡	1-38-9	11月14日		「一書呈上仕候向寒之節」発句入り書状。大村春圃らと三吟のこと。	野楊	吟風	16.7×88.0	直	
149	書簡	1-38-10	10月10日		「前月十二日之芳翰」発句入り書状	野楊	吟風	15.4×106.0	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
150	書簡	1-38-11	２月12日		「七日御認之花章相達」発句入り書状。吟風亭逗留の礼、文殊堂額揮毫の依頼。	野楊	吟風	16.8×148.7	直	
151	書簡	1-38-12	２月７日		「一書呈上仕候春寒難迎候」発句入り書状。梅室門人芭蕉堂可大、九華のこと。	野楊	吟風	16.2×87.6	直	
152	書簡	1-38-13	天保８年１月21日	1837	「旧臘十九日」発句入り書状。五月より足病のこと。	野楊	吟風	16.7×162.5	直	「亀山　野楊」貼紙。西尾武陵宛野楊書簡に足病みのこと、両書簡中と同じ二句あり。また、書簡中の吟風句「藪にすれ屑家すれる小舟」が、天保８年刊、杜鶯編『年毎集』に「藪にすれ屑家にすれる梅の花」と出る。このことから天保８年の書簡とした。
153	書簡	1-38-14	７月６日		「尊翰辱拝見仕候」発句入り書状。馬足、岳鳳のこと。	野楊	吟風	15.2×155.7	直	「丹波亀山藩中　軽森太右衛門　野楊」貼紙
154	書簡	1-38-15	１月９日		「鳳暦之御慶千里向風」発句入り年賀書状。端裏「吟風様」。	野楊	吟風	17.7×98.9	直	「丹波亀山　軽森野楊」貼紙
155	俳諧	1-13-25	未詳		野橋立記	庵主野道人（野楊）	—	29.3×61.0	直	
156	俳諧	2-17-47	未詳		両吟「投出して」世吉	野楊・雀翁		15×43.5	刊	
157	書簡	1-12-59	未詳		冠付け・発句　吟風評点付	馬足	吟風	15.0×28.0	直	往復書簡。馬足は亀山藩士矢代郡平。
158	書簡	1-38-35	７月21日		「残暑愈御安下候而御起居」発句入り書状	馬足	吟風	16.5×91.5	直	「丹波亀山藩中　屋代郡平馬足」貼紙
159	書簡	1-38-36	后７月22日		「尊書忝兎角」発句入り書状。端裏「風様」。	矢代郡平（馬足）	吟風	16.3×95.0	直	天保六年・安政元年閏７月。
160	書簡	1-38-37	９月10日		「先月十二日の尊書忝拝見仕候」発句入り書状。端裏「畑様」。	馬足	吟風	16.5×98.5	直	「丹波　馬足」貼紙。木目刷り用箋。
161	書簡	1-38-38	４月７日		「其后は」発句入り書状	馬足	吟風	16.6×88.3	直	
162	書簡	1-38-39	12月５日		「尊書拝見如命甚寒御座候」発句入り書状。岳鳳句集のこと	馬足	畑吟風	16.6×89.6	直	木目刷り用箋
163	書簡	1-38-40	５月２日		「未得御意兎角不揃」発句入り書状。野楊とともに訪問すること。岳鳳との俳諧興行のこと。	馬足	吟風	16.2×58.3	直	
164	書簡	1-38-16	１月20日		「梅柳之佳賀目出度申収候」発句入り書状	湧瀧	吟風	16.3×40.3	直	「丹波亀山藩中　小川隈右衛門　湧瀧」貼紙。桜図刷り用箋。
165	書簡	1-68-1	初春		刷物送付と発句７句	九皐社中蓬陽・青白	吟風	15.3×72.8	直	蓬陽は、尾州藩士前嶋丹下。
166	書簡	1-68-2	正月		刷物送付と発句５句	九皐社蓬陽・茂斎・鶴雄	吟風	15.8×36.8	直	薄青紙
167	書簡	1-126-1	８月15日		「仲秋望」句入リ書状	蓬陽	吟風	15.7×50.0	直	「尾州様御内前嶋丹下蓬陽」の貼紙有り
168	書簡	1-126-2	８月15日		１-126-１の封筒　「淀五番町畑数馬様　吟風雅君」。	前嶋丹下蓬陽	吟風	20.1×26.3	直	
169	書簡	1-126-3	４月２日		句評の依頼状。	ヲハリ蓬陽	吟風	15.3×33.7	直	包紙「よど吟風雅伯　ヲハリ蓬陽」付。同紙裏「尾張名古屋蓬陽様」。
170	書簡	1-58-1	１月８日		末尾に加賀梅室他の発句あり。	柳絲	吟風	15.4×118.2	直	貼紙「京西古屋舗内　砂川健次郎　柳絲」。京町奉行与力。天保９年『平安人物志』「文人画」「文雅」出。梅室は嘉永５年没。
171	書簡	1-58-2	４月28日		摺物送付。端裏「吟風様京西古屋敷内　砂川健次郎柳絲」。	柳絲	吟風	16.0×76.5	直	
172	書簡	1-58-3	10月30日		「毎一芳墨被成下辱」書状。端裏「京町奉行与力　砂川柳絲」。	柳絲	吟風	15.8×104.3	直	
173	書簡	1-58-4	閏月13日		「薄暑相成申候」句入書状	柳絲	吟風	17.5×50.3	直	天保９年閏４月、弘化３年閏５月、嘉永２年閏４月。
174	書簡	1-58-5	７月29日		「先日は華翰」句入書状	柳絲	吟風	17.5×117.0	直	
175	書簡	1-58-6	５月29日		摺り物の礼状	柳絲	吟風	15.0×75.5	直	
176	書簡	1-58-7	〔冬〕		「寒冷弥増」書状	〔柳絲〕	吟風	15.5×未詳	直	虫損甚だしく、折りたたんだまま癒着していて開かれない。

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
177	書簡	1-58-8	２月５日		礼状。端裏「数馬様　健次郎」。	柳絲	吟風	15.4×79.5	直	
178	書簡	1-58 - 9	10月５日		「華表辱拝誦仕候」句入書状	柳絲	吟風	15.4×97.0	直	
179	書簡	1-58-10	３月23日		摺り物出句依頼	柳絲	吟風	16.5×55.5	直	舟と島の図入り便箋
180	書簡	1-58-12	１月15日		「梅柳之御慶」句入書状	柳絲	吟風	17.2×56.5	直	
181	俳諧	1-58-11	未詳		「ささ柳」他発句一紙	柳絲	—	16.5×18.0	直	
182	書簡	1-125-1	新春		軽舟・掬水・赤水を誘い、一席催すこと	蘭秀	吟風	16.5×53.0	直	
183	書簡	1-125-2	未詳		「別紙に申げ候」書状。屋敷内に俳諧流行のこと。四季吟入り。	蘭秀	吟風	16.5×53.7	直	
184	書簡	1-130	８月６日		「いまだ不得御意も」句入リ書状	村岡如柳	吟風	17.1×66.0	直	料紙は富士山に三保松原図。如柳は金蘭集上巻42丁に入句。
185	書簡	1-17-3	年未詳正月13日		「梅柳之御慶千里同風」発句入り年賀書状	如柳	吟風	17.0×65.5	直	
186	書簡	1-39-22	安政６年12月	1859	吟風追善吟一紙	双鶴	〔吟風〕	16.5×16.5	直	風景入り刷用箋
187	書簡	1-111-37	４月７日		枯魚堂のこと	西村均	畑数馬	16.3×53.0	直	枯魚堂は梅價、祭魚は二世。
188	書簡	1-13-8	16日		珍味礼状	未詳	薩摩少将内伊地知壮之丞他	16.6×57.0	直	
189	書簡	1-111-42	２月20日		李台追善書状	西本権六夢中　江添傳車跡	畑吟風	16.6×79.3	直	
190	俳諧	1-132-3	未詳		「上り餌を」等発句一紙	礫川	—	16.6×23.7	直	「江戸　礫川」貼紙。端裏（後筆）「兄は本多日向守弟小石川南町本多大学」。
191	俳諧	1-132-1	未詳		「蠅うちに」句等一紙	礫川	—	24.0×25.0	直	
192	書簡	1-16-1	11月５日		芭蕉忌のこと	江戸島崎清介（玄味）	吟風	15.5×136.0	直	貼紙「江戸島崎清介　玄味」。
193	書簡	1-16-3-1	11月５日		「弘人様当月二日」句入リ書状。芭蕉忌のこと	玄味	吟風	16.5×84.0	直	
194	書簡	1-16-4	３月25日		「其後は打絶申訳も無」句入り書状	玄味	吟風	19.2×54.5	直	
195	書簡	1-16-5	１月11日		雪中庵他のこと	玄味	吟風	18.2×100.5	直	
196	書簡	1-17-3-2	８月12日		其角の月の句ことなどの書状	玄味	吟風	16.0×163.5	直	
197	俳諧	1-16-2	未詳		発句・表六句独吟歌仙	玄味	—	18.0×37.0	直	
198	俳諧	1-137-7	〔秋〕		「来た道は」等秋句一紙	玄味	—	16.0×23.5	直	
芭蕉堂										
199	書簡	1-4-1-	３月18日		３月28日米寿の祝賀会案内	台塔庵（蒼虬）	吟風	15.9×56.6	直	成田氏。南無庵、無庵。宝暦10（11とも）年生、天保13年３月13日没、享年83。下川原住。寛政11年から天保５年まで花供養会を主催。文化８年、二条家俳諧宗匠。文政５、13年、天保９年『平安人物志』「文雅」出。
200	書簡	1-4-11-	６月16日		句会評のことなど	蒼虬	吟風	16.5×35.5	直	
201	書簡	1-4-12-	２月９日		発句入り年始状	蒼虬	吟風	16.5×40.5	直	
202	書簡	1-5-1-	９月15日		礼状	蒼虬	吟風	16.5×30.5	直	
203	書簡	1-5-14-	５月７日		４月24日の返礼、評料受取状。花供養への加入依頼。	蒼虬	吟風	16.5×49.2	直	吟風は天保４、５年『花供養』に入集。
204	書簡	1-5-15-	６月17日		花供養入集句の受け取り	蒼虬	吟風	16.5×18.6	直	吟風は天保４、５年『花供養』に入集。
205	書簡	1-5-7-	７月22日		花供養出句の礼	蒼虬	吟風	16.2×37.2	直	吟風は天保４、５年『花供養』に入集。色用箋
206	書簡	1-5-12-	天保４年11月21日	1833	花供養18冊、１両２朱	蒼虬	吟風	16.6×24.5	直	天保４年『花供養』の淀藩士連中の入集と符合。
207	書簡	1-5-8-	５月22日		芭蕉堂葺き替えのこと	蒼虬	吟風・赤水	16.4×75.5	直	朱印あり、色用箋。
208	書簡	1-5-13-	２月16日		「新暦の御慶」刷物の礼状	蒼虬	畑吟風	16.4×40.3	直	
209	書簡	1-6-	３月18日		海老の礼。３月20日出の包紙あり。	蒼虬	畑数馬	16.0×41.0	直	虫損
210	書簡	1-25-	４月３日		「其後は」書状	蒼虬	吟風	162×42.8	直	「芭蕉堂蒼虬」貼紙
211	俳諧	1-4-13-	未詳		「時雨―や一隅動く池の水」句等一紙	蒼虬	—	16.5×22.0	直	
212	俳諧	1-4-3-	未詳		「たつたいま生た処なりかきつばた」句等一紙	蒼虬	—	16.0×13.5	直	
213	俳諧	1-5-10-	未詳		「きくひと葉提て告る家萩やしき」句等一紙	蒼虬	—	16.1×25.8	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
214	俳諧	1-5-11-	未詳		「いざよいにしばらくのぞく木の間かな」句等一紙	蒼虬	—	16.0×13.7	直	
215	俳諧	1-5-16-	未詳		「淡雪や」句等一紙	蒼虬	—	16.4×16.7	直	
216	俳諧	1-5-17-	未詳		「美しい手で銭をよむ花見かな」句等一紙	蒼虬	—	16.3×24.5	直	
217	俳諧	1-5-6-	未詳		「みちてくる汐や三つ四つ梅の花」句等一紙	蒼虬	—	16.6×17.5	直	
218	俳諧	1-4-14-	未詳		「雲やけの残りてみねのはつしぐれ」句等一紙	蒼虬・有節	—	16.5×45.5	直	有節は明治５年没。
219	俳諧	1-4-2-	未詳		「朝かけや」句等一紙	蒼虬・梅石	—	16.2×76.8	直	
220	俳諧	1-4-6-	未詳		「若水や扇に払ふ井戸の蓋」句等	蒼虬・素芯（梅室）	—	16.5×31.5	直	
221	俳諧	1-4-8-	未詳		「嬉しげにあげる羽ぶりや初雲雀」句等一紙	蒼虬・素芯（梅室）	—	16.5×40.0	直	
222	俳諧	1-39-21	未詳		はせを堂花供養連句一紙。脇句蒼虬の主催。俳諧37名38句	蒼虬他	—	25.0×46.0	直	
223	俳諧	2-11-1	未詳		南瞑画、四季吟一枚彩色摺	蒼虬・月峰・吟風・支雪他	—	40.0×52.5	刊	
224	書簡	1-116-1	６月16日		「追い追いつさに相成申候」書状	枝月	吟風	16.4×58.0	直	「はせを堂尼枝月」の貼紙有。
225	書簡	1-116-2	天保14年１月15日	1843	蒼虬の追善集出来	枝月	吟風	16.4×48.0	直	蒼虬は天保13年３月13日没。同年６月成立『夏かわづ』に吟風句入集。
226	書簡	1-116-3	２月17日		鮒の礼、海老の催促。	枝月	吟風	16.8×36.0	直	
227	書簡	1-116-7	天保13年６月15日	1842	蒼虬追善集。記載住所「京新町通二条上ル丁俵屋六兵衛　梅通方」。	対塔庵枝月	吟風	16×42.0	直	
228	俳諧	1-116-4	未詳		「小もどりを」等一紙	枝月	—	16.8×23.5	直	
229	俳諧	1-116-5	未詳		「初秋や」等一紙	枝月	—	16.0×21.5	直	
230	俳諧	1-116-6	未詳		「愛らしい」等一紙	枝月	—	16.4×16.4	直	
231	書簡	1-20-1	７月６日		「愈御平安珍重奉存候」発句入り書状	朝陽	吟風	16.2×37.3	直	北村氏。近江の出。別号榛堂・俳仙堂。富小路姉小路北住。天保４年、朝陽に改名。天保９年10月９日、芭蕉堂相続。天保10・11年『花供養』主催。天保11年９月９日没。天保９年『平安人物志』出。執事は、はるみ（春躬）。
232	書簡	1-20-2	12月８日		年回忌法要の俳席のこと	朝陽	吟風	17.4×45.1	直	封に朱印を使用。
233	書簡	1-20-3	閏月５日		俳諧評依頼の返書。端裏「畑吟風様　　俳仙草」	俳仙（朝陽）	畑吟風	17.4×33.4	直	
234	書簡	1-20-4	１月23日		年始状。摺り物の送付。端裏「吟風様　朝陽」。	朝陽	吟風	16.3×33.5	直	
235	書簡	1-20-5	天保３年３月９日		春興の摺り物の送付。定雅七回忌のこと。	榛堂	吟風	18.2×22.5	直	榛堂は朝陽の前号。定雅は文政６年12月12日没、７回忌は天保３年。
236	書簡	1-20-7	４月17日		蒼虬発句３句入り。	朝陽	吟風	18.3×39.0	直	
237	書簡	1-20-8	閏月３日		「残暑愈御安康」発句入り書状	朝陽	吟風	17.3×38.5	直	天保６年閏７月（残暑）か。虫損多。
238	書簡	1-20-14	２月29日		「御書翰忝候」書状	朝陽	吟風	15.9×36.5	直	
239	書簡	1-20-15	８月19日		「過日御芳情忝早一御礼」発句入り書状	朝陽	吟風	18.5×39.0	直	端裏に宛名あり
240	書簡	1-20-16	11月20日		「向寒之砌御安康」発句入り書状	朝陽	吟風	17.7×30.4	直	
241	書簡	1-20-17	５月22日		「向暑之砌愈御荘栄」発句入り書状	朝陽	吟風	17.8×56.6	直	文末の「支雪老」は天保９年３月27日没、それ以前の成立。端裏に宛名あり。
242	書簡	1-20-19	正月はじめ		「梅柳之佳気申上候」発句入り書状	朝陽	吟風	18.1×52.3	直	
243	書簡	1-20-20	６月９日		「迎暑之砌愈御安康」書状	朝陽	吟風	17.8×44.3	直	
244	書簡	1-20-21	２月27日		「愈御安康」発句入り書状	朝陽	吟風	18.0×26.0	直	
245	書簡	1-20-22	４月２日		摺り物礼状	朝陽	吟風	17.5×27.5	直	
246	書簡	1-20-23	１月吉日		「鶏旦之佳」発句入り書状。端裏書「畑大人」	朝陽	吟風	16.5×57.5	直	
247	書簡	1-20-24	３月１日		月並摺り物送付。端裏書「畑様行」。	朝陽	吟風	16.5×31.0	直	
248	書簡	1-20-25	11月20日		「過日は花帖忝候」発句入り書状	朝陽	吟風	17.5×53.0	直	
249	書簡	1-20-26	２月22日		摺り物送付。端裏書「吟風様」。	朝陽	吟風	16.5×47.5	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
250	書簡	1-20-27	7月2日		発句入り暑中見舞い状。月並摺り物送付。端裏書「吟風様」。	朝陽	吟風	18.0×50.5	直	
251	書簡	1-20-28	3月7日		摺り物代金落手のこと	朝陽	吟風	18.0×58.5	直	
252	書簡	1-20-29	5月29日		「益御安康に御座奉南山候」書状	朝陽	吟風	18.0×31.5	直	
253	書簡	1-20-30	7月10日		「其后は相絶御無音」書状。端裏書「畑様行」	俳仙朝陽	吟風	17.5×41.0	直	
254	書簡	1-20-31	7月1日		芭蕉堂よりの月並案内	朝陽	吟風	18.0×35.5	直	
255	書簡	1-20-32	1月		「鶴亀の慶賀」書状	朝陽	畑吟風	18.0×56.0	直	
256	書簡	1-20-33	12月22日		月並案内・呉明米子に越年のこと。端裏書「吟風様」。	朝陽	吟風	18.0×42.5	直	
257	書簡	1-20-34	11月8日		例年の春興。端裏書「吟風様」。	朝陽	吟風	18.0×33.5	直	
258	書簡	1-20-35	2月4日		俳諧摺り物出来、俳諧の分二百疋。端裏書「吟風様」。	朝陽	吟風	18.0×45.5	直	
259	書簡	1-20-36	8月1日		「愈御平安珍重」書状。端裏書「吟風様」。	朝陽	吟風	18.0×28.5	直	
260	書簡	1-20-37	天保7年5月1日	1836	「愈御安全珍重」書状。鳳朗の上京を知らせる。端裏書「吟風様」。	朝陽	吟風	18.0×40.0	直	鳳朗年譜より天保7年と推定。
261	書簡	1-20-38-1	天保9年9月6日	1838	「愈御平安珍重」書状。千崖の臨終を知らせる。	朝陽	吟風	18.0×45.0	直	千崖は天保9年5月11日没。
262	書簡	1-20-40	4月8日		「愈御平安珍重」書状。月並呈上。端裏書「吟風様」。	朝陽	吟風	18.0×32.0	直	追伸の「支雪老」は天保9年3月27日没、それ以前の成立。
263	書簡	1-87	天保9年10月3日	1838	芭蕉堂を朝陽が継ぎ、双林寺閑阿弥にて披露の案内。俳仙堂は蔦雨が継承し披露する。	朝陽	吟風・軽舟・赤水・其友・凌雨。	16.2×70.0	直	「朝陽はせを開キ案内」貼紙。朝陽が『花供養』を主催したのは天保10年からなので、天保9年と推定。同年10月9日相続。
264	書簡	1-111-13-1	9月中		摺り物落手のこと。呉明集冊のこと。	朝陽	吟風	17.7×41.4	直	
265	書簡	1-20-9	3月19日		江戸一具、尾張沙鷗らの嵐山即興。	〔朝陽〕	〔吟風〕	17.3×28.5	直	・一具は、高梨氏。愚春。嘉永6年11月17日没、享年72。出羽の人、江戸住、深川霊岸寺に葬る。乙二門。（俳諧新撰年表）　・沙鷗は、森本氏。名、寛。通称、治右衛門。別号、帯川。天明2年生、天保14年9月2日没、享年61。尾張の人。（同）。天保5年『花供養』に一具、沙鷗、李曠、ヒタチ野巣が入集。
266	俳諧	1-20-11	未詳		「庭先の」等発句一紙	朝陽	—	19.8×19.0	直	
267	俳諧	1-20-12	未詳		「しらむ夜の」等発句一紙	朝陽	—	17.5×37.5	直	
268	俳諧	1-20-13	未詳		「鴨居から」等発句一紙	朝陽	—	15.5×32.5	直	
269	俳諧	1-20-38-2	未詳		「ささ付ける」等発句一紙	朝陽	—	18.0×18.0	直	
270	俳諧	1-20-6	未詳		「夜と昼の」等発句一紙	朝陽	—	18.3×35.5	直	
271	俳諧	1-20-39	未詳		「峰―の」等発句一紙	朝陽	—	18.0×54.0	直	
272	俳諧	2-5-	未詳		月並諸国発句抜章（点帖）	芭蕉堂朝陽撰	—	17.0×24.0	直	
273	書簡	1-73-1	7月13日		「秋暑難凌候処」書状端裏「吟風上」。	九起	吟風	16×29.5	直	北村氏。朝陽の息。朝陽堂。天保12年から嘉永3年まで『花供養』を主催。文化5生、明治15年3月没、75歳。万寿庵中住。嘉永5年、慶応3年『平安人物志』出。
274	書簡	1-73-4	9月4日		「秋寒時下益」発句入り書状	九起	吟風	16.3×42.3	直	「はせを堂九起」貼紙。前号、呉明。天保―嘉永頃
275	書簡	1-73-5	9月5日		「秋冷之節」書状	九起	吟風	17.5×54.9	直	
276	書簡	1-73-6	10月9日		「なお明十日翁忌」書状	九起	吟風	16.7×55.8	直	
277	書簡	1-73-7	6月10日		未開封書状。宛先表「淀御家中　畑吟風様　九起」。宛先裏「6月10日　拾玉園様より」。住所印「京堺町四条上ル町　朝陽堂九起」。	九起	吟風		直	
278	書簡	1-73-8	6月2日		「過日は御芳翰」書状	九起	吟風	15.9×74.7	直	
279	書簡	1-73-10	4月4日		「薄暑の節愈」書状	九起	吟風	17.5×81.5	直	
280	書簡	1-73-11	7月1日		「前日は久―」書状	九起	吟風	15.9×51.8	直	
281	書簡	1-73-12	10月3日		「向寒節」書状	九起	吟風	16.4×66.8	直	
282	書簡	1-73-13	3月20日		笠岡の一亭の上京のこと	九起	吟風	16.0×59.8	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
283	書簡	1-73-14	4月9日		「其後弥御安康」書状。住所印「東山八坂升屋町形屋九起」。	呉明更九起	吟風	16.1×82.3	直	「九起」は天保10年『花供養』以後。
284	書簡	1-19-3	秋		「秋冷益一安康」書状。書中「父朝陽」とあり。	呉明	吟風	16.5×42.0	直	九起。
285	書簡	1-19-10	5月		「薄暑の節愈清閑」書状	呉明	吟風	16.8×38.7	直	九起か。
286	俳諧	1-73-15	未詳		「鶯や」等発句一紙	九起	—	16.6×48.4	直	天保—嘉永頃
287	俳諧	1-73-2	未詳		「淋しきに」等発句一紙	九起	—	16.5×39.5	直	天保—嘉永頃
288	俳諧	1-73-3	未詳		「垣の内」等発句一紙	九起	—	20.5×41.3	直	天保—嘉永頃
289	俳諧	1-73-9	未詳		「松風や」等発句二紙	九起	—	16.4×8.9／16.4×13.4	直	天保—嘉永頃
290	俳諧	1-137-2	未詳		「蓬莱の」等発句一紙	九起・岱年・梅室・嘯恵	—	20.1×21.0	直	
291	俳諧	1-136-9	未詳		「下かげの」句等一紙	九起・砺山	—	15.5×32.0	直	砺山は、義仲寺無名庵十二世、文久2年没。
292	書簡	1-111-17	4月2日		呉明集冊への加入依頼。『芳信集』のこと。	呉明	吟風	16.4×42.4	直	糸井文庫本『芳信集』に「呉明 馬尺」（洒竹本は呉明）とあり、九起とは別人、筆跡も異なる。本紙に追加の一紙貼り付け有（16.5×4.5）。
293	書簡	1-19-2	6月28日		6月9日付け書状の返書。集冊5冊分代金。	呉明	吟風	16.5×70.5	直	
294	書簡	1-19-4	1月25日		「梅柳慶賀」書状。書中「野楊、春圃」あり。	呉明	吟風	16.5×73.5	直	
295	書簡	1-19-5	1月2日		年始状。米子にて越年	呉明	吟風	16.0×40.0	直	
296	書簡	1-19-7	7月10日		「此間貴墨辱致拝見」書状	呉明	吟風	15.8×71.0	直	
297	書簡	1-19-8	5月20日		「再度の芳書致拝見候」書状	呉明	吟風	16.0×53.4	直	
298	書簡	1-19-9	4月7日		「過日には出京」書状	呉明	吟風	18.0×91.0	直	朝陽句有、ちぎれ有
299	書簡	1-19-12	未詳		「日中に」追伸書状	呉明	吟風	16.5×42.5	直	
300	俳諧	1-19-1	未詳		「咲く花に」句等一紙	呉明	—	18.0×34.5	直	
301	俳諧	1-19-6	未詳		「今ひらく」等発句一紙	呉明	—	16.7×18.5	直	吟風写し
302	俳諧	1-19-11	未詳		「柳見る」句等発句一紙	呉明・榛堂（朝陽）	—	16.3×19.5	直	
303	書簡	1-5-3-	10月		例年の翁忌の案内	勝錦	吟風	16.8×78.2	直	朝陽の次男、九起の弟か。
304	書簡	1-66-1	3月　3日		西国行脚のこと	勝錦	吟風	15.5×55.5	直	肩書は芭蕉堂。天保—安政頃。
305	書簡	1-66-2	5月14日		九州行脚のこと	勝錦	吟風	15.3×91.2	直	
306	俳諧	1-4-4-	未詳		「腥き包丁提て梅貫ひ」句等一紙	千崖・蒼虬・榛堂（朝陽）・梅室	—	18.0×55.0	直	・千崖は、簗瀬氏。越中富山の人。天保9年5月11日没。天保元年から天保9年まで芭蕉堂三世、ただし『花供養』は天保3年のみ。
307	俳諧	1-111-31	未詳		「引すつて」等発句一紙	千崖	—	16.4×17.4	直	
308	俳諧	1-111-21	未詳		雪の峰みやこ狭しと見たる哉等発句一紙	公成	—	16.7×20.5	直	河村氏。別号、百古。長州の人。後、嘉永4年より芭蕉堂五世。慶応4年没。慶応3年『平安人物志』出。
俳仙堂										
309	俳諧	1-136-7	未詳		「泥鰍髭あり」両吟半歌仙。定雅の真葛双紙を祝す	草阜・定雅	—	16.0×40.0	直	定雅は、西村氏。諧仙堂。椿花亭。延享元年生、文政9年没、享年83。文政5年『平安人物志』「文雅 俳」出。
310	書簡	1-139-1	3月9日		月並案内	俳仙内室	吟風	17.9×59.2	直	
311	俳諧	2-17-54	未詳		「此筆を」1枚摺。未章画彩色急須図入り。袋「ゆめかまことか」（9.5×5.1）。	俳仙		9.8×5.0	刊	
312	俳諧	1-20-10	未詳		「元日や」句など年賀一紙	俳仙（朝陽）	—	25.0×34.8	直	朝陽の俳仙堂は天保9年10月9日以前（1-87朝陽書簡）。
313	俳諧	1-20-18	未詳		「花はねて」等発句一紙	俳仙堂（朝陽）	—	16.1×55.0	直	
314	俳諧	2-17-19	天保6年1月・2月	1835	「天保六未年正月・二月並俳仙堂宗匠代評蔦雨」丁摺。朝陽の代りに蔦雨が評す。「毎月十日迄に御出草可被下候」。俳仙堂蔵版。発句24句中3句吟風。	朝陽・蔦雨他	—	24.5×34.5	刊	天保9年10月9日、俳仙堂は朝陽から蔦雨に継承される（1-87朝陽書簡）。
315	書簡	1-9-2-	9月27日		月並・刷物出吟の依頼	蔦雨	吟風	17.5×75.0	直	近江坂本の人。三津川氏。名弥右衛門。寛政8年生、文久2年閏8月28日没、享年67。父于当、息木雞。

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
316	書簡	1-10-1-	天保12年２月28日	1841	月並の出詠、坂本へ引取ること	蔦雨	吟風	17.0×70.0	直	天保10・11年俳仙堂主。天保12年以降坂本住（花供養）。
317	書簡	1-10-2-	天保６年10月17日	1835	開庵の摺物	蔦雨	吟風	16.0×37.0	直	天保６年１月24日40歳で家政を譲り、剃髪して彩緑庵に退隠。
318	書簡	1-10-3-	天保６年10月26日	1835	句集出版のこと	蔦雨	吟風	15.0×45.0	直	天保６年刊『浮巣集』、吟風「隣のとひつゝく雨の若葉かな」、支雪「人目には我もけしきよ雪の笠」入句。
319	書簡	1-10-4-	１月26日		新年挨拶	蔦雨	吟風	1.05×58.0	直	
320	書簡	1-10-5-	天保10年２月３日	1839	俳仙堂初会、滞りなく済。	蔦雨	吟風	19.0×45.0	直	朝陽からの相続は、天保９年10月９日。
321	書簡	1-113	１月14日		「梅柳之御慶目出度申納候」句入り書状	蔦雨	吟風	16.6×36.0	直	
322	書簡	1-74-1	１月		「新祷之御慶」書状	西邨はるみ	畑吟風	15.0×43.0	直	俳仙堂知事（１-74-２）
323	書簡	1-74-2	２月28日		出詠依頼状。端裏「淀御藩中　畑数馬様　俳仙堂知事西村春躬」、「任見払」。	西村春躬	畑数馬	18.0×28.0	直	
324	書簡	1-74-3	５月30日		「暑気愈御安清奉寿候」発句入り書状	西邨春躬	畑吟風	16.0×58.0	直	
325	書簡	1-74-4	10月11日		「益御安栄奉寿候」発句入り書状	春躬	吟風	15.5×41.0	直	
326	書簡	1-74-5	８月７日		「朝夕は冷一敷」発句入り書状	はるみ	吟風	17.5×71.0	直	
327	書簡	1-74-6	８月26日		「前通の花帖難有拝誦」発句入り書状	春躬	吟風	16.1×49.7	直	
328	書簡	1-74-7	６月28日		「其后は益疎遠相過」発句入り書状	はるみ	吟風	16.2×42.8	直	
329	書簡	1-74-8	12月11日		「厳寒難凌候処」発句入り書状	はるみ	畑吟風	16.5×28.2	直	
330	書簡	1-74-9	１月９日		「梅柳之御慶」書状	はるみ	吟風	18.5×43.3	直	
331	書簡	1-111-30-5	11月24日		摺り物送付	春躬	〔吟風〕	17.9×23.0	直	
332	俳諧	2-26	未詳		俳仙堂月並摺物。吟風・支雪・士常・其友入集。俳句募集の広告付き。	灌園蕪骨	—	34.0×16.5	刊	
333	俳諧	1-136-3	未詳		句稿	九起・俳仙堂岱美	—	25.0×33.0	直	岱美住所「寺町高辻上ルいせ町隠居」。
各地域										
334	俳諧	2-8-	天保頃		「雪　名家句集」。俳句集落款有。半丁毎に１人１句。「庚子（天保11）夏　呉笠」／「己亥（天保10）初夏花屋主人鼎左」などの年記あり。二冊合綴。	万籟他	—	19.7×16.5	直	人名録1-72-1「雪　句帖人銘」がある。
335	俳諧	2-9-	未詳		「花　諸国名家句集」。漢詩１含、半丁毎に１人１句。	北鵠他	—	19.7×13.3	直	
336	俳諧	2-10-	未詳		「諸国名家句集」。絵入、半丁毎に１人１句、落款有。一冊	淡叟老人他	—	20.0×17.0	直	淡叟は八千坊一肖。
337	書簡	1-52-1	12月22日		百梅集加入のこと。端裏「吟風大人　花神老夫」。	万籟	吟風	16.3×58.9	直	荒木氏。別号花神窓。丹後宮津の油屋、掛屋職。天保初期に京都で立机。下立売室町西住。安永８年生、天保13年没。天保９年『平安人物志』出。天保12年閏１月20日、『百梅集』を北野天満宮へ奉納、成立は前年。
338	書簡	1-52-2	12月27日		端裏「吟風様　花神」。伊勢方面に旅行。	万籟	吟風	15.3×25.6	直	
339	書簡	1-63-1	10月５日		「以来御疎遠打過候」句入書状。端裏「ヨド吟風様花神万籟」（十月五日付）。山陰、伊賀、伊勢へ旅行。	万籟	吟風	15.5×29.5	直	
340	書簡	1-63-3	天保12年閏１月５日	1841	「正月廿八日貴墨拝見」句入り書状。発句２句。百梅集延引のこと。	万籟	吟風	16.0×35.1	直	
341	書簡	1-63-4	１月５日		「御慶めでたく申収候」句入書状。発句３句。百梅集加入３名のこと。	万籟	吟風	15.6×24.5	直	虫損多。
342	書簡	1-63-5	９月５日		「愈御清福奉賀候」句入書状。発句２句。百梅集に軽舟、鴻地の加入、雪川はみせ消ち。	万籟	吟風	15.1×28.6	直	
343	書簡	1-63-6	４月23日		「薄暑愈御清福」句入書状。発句３句。饗応の礼状。	万籟	吟風	15.6×30.3	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
344	書簡	1-63-7	１月14日		「十一日の貴書拝見」書状。雪川の百梅集加入、鴻地は差し替え。	万籟	吟風	16.3×32.5	直	
345	書簡	1-63-8	12月25日		「月之世話敷」句入書状。伏見岳鳳のこと。	万籟	吟風	16.3×28.8	直	
346	書簡	1-77-4	９月24日		梅園尼の浪花出立のこと。発句３添。	万籟	吟風	23.5×31.6	直	
347	書簡	1-128	１月29日		「一書」句入リ書状。摺物の送付のこと。	荒木万籟	吟風	16.0×42.8	直	
348	書簡	1-137-10	天保12年閏１月23日	1841	万籟の春興を送付のこと。『百梅集』「当月廿日」奉納のこと、並びに、追加五十梅の企画のこと。「閏正月廿三日」の日付より、天保12年とする。	花神（万籟）	吟風	16.0×40.0	直	『百梅集』の奉納は天保12年閏１月20日、成立は前年。
349	書簡	1-139-2	天保11年８月24日	1840	『百梅集』入集代、金百五拾疋のこと。万籟の摺物の締切に間に合わず、吟風、軽舟、雪川、鴻地の詠草返却。吟風、軽舟、鴻地の入集摺物を来月（９月）送付のこと。	花神（万籟）	吟風	15.5×35.0	直	北鵠の代筆。1-38-27の北鵠書簡と同日の成立。北鵠書簡に『逐々集』のことがあり、天保11年冬奥の『逐々集』に淀藩士軽舟、鴻池、嘯窓が入集していることから、北鵠書簡は天保11年の成立とされる。よって、当該書簡も同じ成立。
350	俳諧	1-4-5-	未詳		「日の内の雲は晴て雲の月」句等一紙	万籟・蒼虬・朝陽	—	16×50.5	直	天保11年９月９日、朝陽没以前。
351	俳諧	1-4-10-	未詳		「うつろより雨けふとして初ざくら」句等一紙	万籟	—	16.5×22.0	直	海棠の刷物用箋
352	俳諧	1-63-2	未詳		「松明の」句等一紙	万籟	—	16.5×46.0	直	
353	俳諧	1-63-9	未詳		「畑うちの」句等一紙	万籟	—	16.7×20.7	直	風景図入用箋
354	俳諧	1-111-30-4	未詳		「雪の鶴」等句一紙万籟７句・北⊠７句	万籟・北鵠	—	16.4×34.5	直	
355	俳諧	1-136-10	未詳		「竹の子や」句等一紙。万籟・平山・岱年・九起等。	万籟等	—	16.0×40.3	直	
356	俳諧	1-138-11	未詳		「松明の」表六句万籟、吟風、,幻芝、明朗、素玉、一弛	万籟他。	—	16.3×46.5	直	
357	書簡	1-38-26	10月１日		「寒冷相催候処弥」発句入り書状。万籟発句入り。万籟門の北鵠は在庵とする。	北鵠	吟風	15.5×48.3	直	「丹波　北鵠」の貼紙有。丹波山国の人。万籟門。
358	書簡	1-38-27	天保11年８月24日	1840	「廿二日付貴墨昨廿三日夜至来」発句入り書状。逐々集・百梅集加入のこと	北鵠	吟風	15.5×41.5	直	1-139-2の万籟書簡は北鵠の代筆で、当該書簡と同日の成立。当該書簡に『逐々集』のことがあり、天保11年冬奥の『逐々集』に淀藩士軽舟、鴻池、嘯窓が入集していることから、当該書簡は天保11年の成立とする。また、「百梅集是九月末迄ニ出来為致度」とあり、『百梅集』は同年に成立。
359	書簡	1-38-28	12月５日		摺物送付、春興集加入の依頼	北鵠	吟風	15,2×41.9	直	端裏「淀　吟」
360	書簡	1-38-29	12月６日		「其後御無音甚寒之節」発句入り書状	北鵠	吟風	16.0×62,2	直	
361	俳諧	1-111-30-1	未詳		「菜の花や」等発句一紙	北鵠	—	16.2×21.4	直	
362	俳諧	1-111-30-2	未詳		「しののめに」等発句一紙	北鵠	—	16.6×33.7	直	
363	俳諧	1-111-30-3	未詳		「濁り出て」等発句一紙	北鵠	—	24.8×15.4	直	余白に発句２句の書付あり
364	書簡	1-53-1	４月15日		「来る廿一日浪華　浪華荠庵三回忌」	杜鵞	吟風	17.3×53.8	直	北村氏。貼紙「北村庵杜鵞」。大坂堂島生、後京都住。麩屋町四条南住。嘉永５年没。嘉永５年『平安人物志』出。
365	書簡	1-53-2	12月25日		「廿二日同認貴墨今廿五日相達」句入書状	杜鵞	吟風	16.2×57.0	直	
366	書簡	1-53-5	５月12日		５月23日双林寺句会案内	杜鵞	吟風	17.5×55.5	直	
367	書簡	1-53-6	３月20日		４月３日より10日間の大祥会案内	杜鵞	吟風	16.6×75.3	直	
368	書簡	1-53-7	３月15日		「益御清福奉賀候」句入詫び状	杜鵞	吟風	17.3×81.2	直	菊花二色刷用箋（11-53-4に同じ）
369	書簡	1-53-8	10月10日		「例のとし毎集」加入、『年毎集』送付。	杜鵞	吟風	16.4×19.0	直	年毎集は、天保３．６（浮葉集）７～14、弘化１～３、嘉永元年がある。吟風は天保７．８年入集。当書簡は天保８年と推定。

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
370	書簡	1-53-9	11月25日		とし毎集加入、『年毎集』送付。	杜鵞	吟風	16.5×39.0	直	吟風は天保７．８年入集。当書簡は天保７年と推定。
371	書簡	1-53-10	10月１日		「此節義仲寺御法事」、小摺物送付状	杜鵞	吟風	16.3×17.8	直	時雨会の刊行は天保５年迄、吟風入集無く、これ以降。
372	書簡	1-53-11	７月20日		大水の見舞状	杜鵞	吟風	15.7×41.3	直	京都の洪水は、弘化３．５、嘉永１．８、嘉永５．７.21、安政４．７．１（京都歴史災害研究６号）
373	書簡	1-53-12	２月29日		「正月十一日御認貴墨」、伊賀梅見のため返事の遅れた詫状	杜鵞	吟風	16.2×51.7	直	
374	書簡	1-53-13	７月８日		「弥御清福奉賀候」句入書状	杜鵞	吟風	15.8×57.1	直	
375	俳諧	1-53-3	未詳		「立秋や」句等一紙	杜鵞	—	16.4×24.0	直	
376	俳諧	1-53-4	未詳		「埃ひとつ」等春夏句一紙	杜鵞	—	17.3×47.0	直	菊花二色刷用箋
377	俳諧	1-104	未詳		「玄関で」句等一紙。17.5×5.5の封筒付き「御堀内五番丁畑数馬様　池長清右衛門」。	杜鵞	—	16.5×19.6	直	
378	書簡	1-76-1	３月22日		「花鳥之佳候」書状。端裏「吟風君」。	五獅子	吟風	16.0×54.0	直	別号は葡萄、仏朔。文政９、13年 二条家俳諧宗匠。致仕後、五獅子。天保14年12月５日没。讃岐小豆島の人。
379	書簡	1-76-6	９月24日		「凄涼相催候処」発句入り書状。端裏「吟風雅主梧右五獅子」	五獅子	吟風	15.9×66.8	直	
380	書簡	1-76-7	11月９日		句集編纂に当って、序文・新人名簿の依頼	五獅子	吟風	16.2×60.0	直	
381	書簡	1-76-8	12月13日		「過日はじめて」書状。端裏「吟風高雅　五獅子」	五獅子	吟風	16.0×59.5	直	
382	書簡	1-76-9	12月19日		「霜雪降中不相替朗越」書状	五獅子	吟風	16.0×38.0	直	
383	書簡	1-76-4	未詳		副書　山寺などへの吹挙のこと	記載なし	〔吟風〕	16.0×62.0	直	五獅子か
384	書簡	1-76-5	７月４日		「炎威尋常ならず候処」発句入り書状。端裏「吟風雅貴梧右　朔」。	仏朔	吟風	16.2×42.4	直	仏朔は五獅子の前号
385	俳諧	1-76-10	未詳		「咲としも」等発句一紙	五獅子	—	17.6×27.8	直	
386	俳諧	1-76-2	未詳		「釣舟や」等発句一紙	五獅子	—	16.5×43.4	直	
387	俳諧	1-76-3	未詳		「什物の」等発句一紙	五獅子	—	14.5×39.0	直	
388	書簡	1-22-1	１月８日		「御慶」書状	也然	吟風	16.5×76.0	直	林氏、また新居氏。別号、美田、十花亭、秋声庵。京住。烏丸仏光寺住。「新居也然」貼紙。嘉永５年『平安人物志』出。
389	書簡	1-22-2	６月22日		「大暑之節愈清賀」書状。封筒表「淀御藩中畑数馬様新居也然」・裏「六月廿三日出　淀京都」。	也然	数馬（吟風）	16.2×108.5	直	
390	書簡	1-22-3	９月４日		「八月晦日出之御書当月三日」書状	也然	吟風	16.0×110.6	直	
391	書簡	1-22-4	11月５日		「厳寒之節益御清栄」書状	也然	吟風	16.3×72.0	直	
392	書簡	1-22-5	１月13日		摺物一枚送付の書状	也然	吟風	16.5×67.7	直	
393	書簡	1-22-6	３月24日		当月末帰庵仕候書状	也然	嗌風（吟風）	16.3×125.6	直	
394	書簡	1-22-7	８月20日		「其後」書状	美田（也然）	吟風	16.6×92.2	直	
395	書簡	1-22-8	１月７日		「御慶」書状	美田（也然）	畑（吟風）	16.5×100.8	直	
396	書簡	1-22-9	６月18日		「度―貴書忝拝見」書状	也然	吟風	16.7×80.0	直	
397	書簡	1-28-	４月10日		改名の刷物一枚「也然更名十花亭美田」（11.9×3.9）。端裏「畑翁」。封筒表「淀御藩中畑数馬様　林美田」・裏「四月十八日出　淀京都」。	林美田（也然）	吟風	16.5×54.0	直	
398	俳諧	1-134	未詳		「蓬莱の」句等発句一紙	也然	—	16.5×29.0	直	
399	俳諧	1-136-5	未詳		「禅寺や」句等一紙	美田（林也然）・烏岬・淡節・梅通・露泉・知風	—	16.0×29.5	直	
400	俳諧	2-17-44	未詳		あらし山にて吟詠	也然・含英・大賀		13×16.5	刊	桜の花びら押し型用箋

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
401	書簡	1-86-1	10月21日		「此間は発句入り書状さし上候」発句入り書状。1-86-15書簡に「飴一つ」句の言及有り。端裏「畑数馬様　岳鳳」。	岳鳳	畑数馬	17.0×58.5	直	古雅屋清右衛門。別号、蟻園。安政３年「玉骨」に改名。また、安政３年還暦より、寛政８年生。伏見土橋住。嘉永５年『平安人物志』出。
402	書簡	1-86-2	７月18日		「天保類題集」二編の出句依頼。	蟻園（岳鳳）	吟風	15.5×100.5	直	花頭窓と紅葉の絵入り刷り用箋
403	書簡	1-86-3	９月５日		「浪華より帰るに」発句入り書状	岳鳳	吟風	16.0×41.5	直	
404	書簡	1-86-4-1	２月12日		摺物の送付、月戸・双鶴伝言のこと	岳鳳	吟風	17.2×47.5	直	
405	書簡	1-86-4-2	７月16日		亀山より届物のこと	岳鳳	吟風	16.2×55.5	直	
406	書簡	1-86-5	夏		「当夏はひがし山も」発句入り書状。鳳朗の在京を知らせる。素芯（梅室）、蒼虬句有。	岳鳳	吟風	16.4×57.5	直	鳳朗の在京は、天保期。二条家俳諧宗匠、蒼虬は文化８年、鳳朗は天保14年（花の本二世）、梅室は嘉永４年（花の本三世）。
407	書簡	1-86-6	秋		「今日は草花御見物に御遊行」秋句入り書状。七部集注入り写本の拝借申し入れ有り。	岳鳳	吟風	15.8×43.8	直	
408	書簡	1-86-7	閏月10日		「秋暑甚敷候処」発句入り書状	岳鳳	畑吟風	16.0×47.7	直	文政７年閏７月、天保６年閏７月、天保14年閏９月、安政元年閏７月。
409	書簡	1-86-8	３月１日		「其后は御不音に打過候」発句入り書状	岳鳳	吟風	16.2×59.0	直	沢蟹図彩色刷り用箋
410	書簡	1-86-9	６月22日		「そののちは御不音に罷過候」発句入り書状	岳鳳	吟風	11.5×97.0	直	端裏「畑氏」
411	書簡	1-86-10	３月１日		「雨風のあらきひまより初桜とは」発句入り書状	岳鳳	畑吟風	16.2×53.5	直	
412	書簡	1-86-11	２月16日		「其后は御不音に罷過候春寒」発句入り書状	岳鳳	吟風	15.3×59.5	直	
413	書簡	1-86-12	５月10日		句の加入依頼。端裏「吟風様」。	岳鳳	畑吟風	16.5×83.5	直	
414	書簡	1-86-13	３月14日		「兎角不順に御座候処」発句入り書状	岳鳳	吟風	16.7×55.5	直	
415	書簡	1-86-14	５月19日		「向暑之砌愈御清安」発句入り書状	岳鳳	畑吟風	16.7×55.7	直	墨流し用箋
416	書簡	1-86-15	10月１日		「御芳書忝拝見仕候梅園帰りにも」発句入り書状。1-86-1書簡の「飴一つ」句を誉める。	岳鳳	吟風	16.0×45.0	直	
417	書簡	1-86-19	２月23日		「其後はうち絶御無音に罷過候」発句入り書状	岳鳳	畑吟風	15.6×61.5	直	
418	書簡	1-86-25	安政３年１月５日	1856	「梅柳之」発句入り年賀状	岳鳳更玉骨	吟風	16.0×35.5	直	安政３年３月『花供養』以後は玉骨とする。
419	書簡	1-86-24-1	安政３年１月20日	1856	年賀状。還暦の摺物の入句依頼。「あらたになれる内裡を拝して」とある。	岳鳳更玉骨	吟風	16.0×55.0	直	安政３年還暦より、寛政８年生。内裏再建は、安政２年11月のこと。
420	書簡	1-86-24-3	２月８日		「逐一春和相催候処」発句入り書状	岳鳳	畑吟風	17.0×43.5	直	天朱引刷り用箋
421	書簡	1-86-26	10月15日		摺物の送付。借用の書冊を写しているが出来かねている。	岳鳳	吟風	16.0×35.5	直	
422	書簡	1-86-31	11月13日		「舌代　寒冷之刻愈御安泰」書状。八幡元三堂奉額、自庵月並納会のこと	蟻園（岳鳳）	畑吟風	36.0×48.0	直	懐紙一枚（二つ折り）。「伏見土橋古雅屋清右衛門　蟻園岳鳳」貼紙。
423	書簡	1-137-9	７月19日		「その後は存外御不音に罷過候」書状	蟻園（岳鳳）	畑吟風	16,5×66.0	直	
424	俳諧	1-86-16	未詳		「市の灯」等発句一紙	岳鳳	—	16. ×37.0	直	伏見の宗匠。別号、蟻園、玉骨（安政３年）。
425	俳諧	1-86-17	未詳		「稲づまの」等発句一紙	岳鳳	—	16.5×32.2	直	
426	俳諧	1-86-18	未詳		「寝るまでの」等発句一紙	岳鳳	—	16.5×33.0	直	
427	俳諧	1-86-20	未詳		「夜嵐の」等発句一紙	岳鳳	—	15.8×29.7	直	
428	俳諧	1-86-21	未詳		「昼からは」等発句一紙	岳鳳	—	28.0×20.5	直	
429	俳諧	1-86-22	未詳		「四方山の」等発句一紙	岳鳳	—	16.8×45.8	直	
430	俳諧	1-86-23	未詳		「放下師に」等発句一紙	岳鳳	—	14.5×42.9	直	
431	俳諧	1-86-24-2	未詳		「生洲場や」等発句一紙	岳鳳	—	14.5×22.0	直	
432	俳諧	1-86-27	未詳		「おくり出て」等発句一紙	岳鳳	—	16.2×35.0	直	
433	俳諧	1-86-28	未詳		「鳥も人も」等発句一紙。岳鳳４句、素芯３句。	岳鳳・素芯	—	16.5×51.8	直	
434	俳諧	1-86-29	未詳		「布子から」等発句一紙	岳鳳	—	15.3×22.5	直	刷毛目刷り用箋

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
435	俳諧	1-86-30	未詳		「落ざまに」等発句一紙	岳鳳	—	16.0×38.5	直	
436	俳諧	2-17-56	未詳		「梅林遊行」一枚摺。袋「梅林遊行　蟻園」（23.0×7.6）。	岳鳳（蟻園）・九起・梅室他		23.0×7.6	刊	
437	書簡	1-139-3	8月29日		菓子礼状。蟻園門梅嵓（巌）挨拶文	梅嵓	吟風	15.5×92.0	直	梅巌、下村氏。号、菊園。伏見京町住。嘉永5年『平安人物志』出。
438	俳諧	1-54-3	未詳		「夜しぐれや」他句一紙	梅石		16.2×22.0	直	
439	俳諧	1-85	未詳		「卯の花や」句等一紙	梅石	—	16.5×44.0	直	
440	書簡	1-57-1	9月尽		展観案内状、展観ちらし（7.8×2.7）8枚入り。端書「畑吟風様　有国」。	有国	畑吟風	16.5×25.6	直	浦井氏。名、五一郎、隆屋。通称、徳右衛門。号、諧仙堂。貼紙「中立売堀川　浦井五一郎　有国」。文政5、13年、天保9年『平安人物志』「文雅」出。
441	書簡	1-137-3	6月29日		「御芳翰拝見候」書状	有国	畑（吟風）	16.5×31.0	直	
442	俳諧	1-27-	未詳		諧仙堂古筆目録	諧仙堂		34.5×48.0	刊	有国。
443	書簡	1-62-1・2	9月1日		八月付け「秋冷愈御清雅」句入見舞状。9月1日付け封筒表「城南淀御藩中　畑数馬様」（17.0×4.7）。	雨翠	畑吟風	16.0×56.3	直	封筒に「洛祇園石壇前南側拾華園雨翠」印あり。
444	書簡	1-61-3	4月8日		俳諧発句楳唫集募句ちらし（刷物16.3×13.6）二枚入り。拾華園雨翠主催、投草所洛祇園町石段下北側造花師源三郎。4月8日付け封筒（17.4×5.0）あり。	雨翠	畑吟風	16.5×26.4	直	
445	書簡	1-62-3	6月4日		巻料のこと	雨翠	畑吟風	16.7×51.6	直	青色模様入り（玉龍）用箋
446	書簡	1-62-5	3月27日		天満宮奉納句合催のこと	雨翠	畑吟風	17.0×62.0	直	青色玉龍用箋
447	書簡	1-62-6	6月晦日		「五月二日発之華国」句入肴礼状	雨翠	畑吟風	17.0×68.0	直	
448	書簡	1-62-7	11月		12月10日締め切り丁摺発句合の募集。	雨翠	諸君	16.3×27.0	直	紙面左下に雨翠の朱印有。
449	書簡	1-62-8	11月		月次発句合案内	雨翠	吟風	16.5×28.2	直	
450	書簡	1-62-9	6月4日		「愈御清雅奉寿候」句入書状	雨翠	吟風	15.6×50.0	直	
451	俳諧	1-62-4	未詳		御菩薩池他発句一紙	雨翠	—	14.6×30.0	直	
452	書簡	1-127	8月11日		引越の挨拶、摺物送付。朱印「皇都柳馬場四条下ル此春園」。	可久	吟風	16.4×44.2	直	
453	俳諧	2-17-50-1	丑年8月		丑の年仲秋開庵祝2枚摺	芹舎・可久		19.1×8.1	刊	・芹舎は、八木氏、また種山氏。伴水園。文化2生、明治23没、享年87。山城国八条御所内村の人。四条東洞院西住。元治元年、二条家俳諧宗匠（花の本）。嘉永5年、慶応3年『平安人物志』出。
454	書簡	1-129	2月15日		「十日の芳墨」句入リ書状	虚白	吟風	16.4×70.1	直	「東福寺虚白」の貼紙あり
455	書簡	1-111-18	1月17日		年始状。宛名「淀家中畑数馬様　東六条森雨新」。同裏「正月七日」。封筒付き。	森信濃	畑数馬	16.5×83.5	直	彩色草花・発句入り封筒。
456	書簡	1-122	2月末		九起の文台開き	柳鶴庵梅眠	吟風	15.6×48.3	直	「京師梅眠」貼紙、虫損あり
457	書簡	1-82	10月1日		句集編纂のための入句依頼	一海	吟風	16.5×33.5	直	「八幡谷端」の貼紙有、別紙に「八幡谷畑町　上田周蔵」とも有り。1-72-5「近在発句師名前」に出。
458	書簡	1-60-2	3月2日		「未不奉御尊顔」発句入り書状	田宮喜平二（半山）	吟風	17.3×90.8	直	「普賢寺　田宮喜平二　半山」貼紙。南山城の人。流水に千鳥図刷り用箋。
459	書簡	1-38-30	8月26日		「未得拝顔候得ども」発句入り書状。端裏「吟風様」。	九華	吟風	17.7×58.0	直	「丹波亀山　九華」貼紙。天朱引刷り用箋。奥田氏（新選俳諧年表）。通称、善太良（百梅集）。
460	書簡	1-38-31	11月29日		「厳寒之則先以」発句入り書状	九華	吟風	16.0×111.5	直	
461	書簡	1-38-32	2月13日		「雲緘」発句入り書状	九華	吟風	16.1×117.5	直	
462	書簡	1-38-33	5月12日		「暑気之節御座候処」発句入り書状。端裏「吟風様」。	九華	蓑虫吟風	17.3×92.0	直	「丹波亀山　九華」貼紙。玉龍の刷用箋。
463	書簡	1-38-34	12月10日		「一翰呈啓仕候時下」発句入り書状	九華	吟風	16.8×86.4	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
464	書簡	1-38-17	12月10日		「未得高眉候得共奉呈一書」発句入り摺物送付書状	蕉夢	吟風	16.0×48.6	直	丹波篠村、栗山甚之進。「丹波　蕉夢」貼紙。五日庵（俳諧新撰年表）。
465	書簡	1-38-18	1月11日		「梅柳之慶賀目出度奉存候」発句入り書状	大櫻	吟風	17.6×56.3	直	「丹波　大櫻」貼紙
466	書簡	1-38-19	11月15日		「追―寒気増仕候」発句入り書状	大櫻	吟風	16.8×38.6	直	
467	書簡	1-89	7月18日		訪庵や品―の礼状	ひさごや	蓑虫庵（吟風）	15.0×66.0	直	「大津　百之」貼紙
468	俳諧	2-17-21-1	未詳		「書初の」句一紙。瓢の屋の朱印あり	百之	―	7.3×4.8	直	
469	俳諧	2-17-39-4	未詳		「山かこの」句一紙	百之	―	7×9	直	印二個あり
470	書簡	1-47-2	5月6日		鳳朗上京の情報を伝え、対面を促す。京神泉苑若狭屋の太老方へ滞在。対面の折、吟風による江戸座宗匠の発句書き上げ（1-138-6）、また、鳳朗に端午の競馬の句などがある（1-111-39）。	八千房一肖	吟風	15.8×62.8	直	鳳朗に改号は天保3年6月。・一肖は、八千房（四世）淡叟。別号、駝岳（三世）。津民、小森氏。寛政4生、弘化3年6月15日没。日向の人、大坂布屋町住。天保8年『続浪華郷友録』、嘉永元年『浪花当時人名録』出。鮎の色刷り用箋・太老は鈴木氏、東都の人。天保7年刊『更科七部集』編。天保5年から7年の万籟編『逐々集』に連句や発句が多出。
471	書簡	1-14-1	11月21日		「芳書拝見」句入返書。副書。	井眉	吟風	76.0×29.0	直	岡氏。五春荘。宝暦10生、天保8年8月没、享年78。大坂周防町住。天保8年『続浪華郷友録』出。
472	書簡	1-14-2	6月28日		「酷暑の砌」句入書状、「副書申述候」	井眉	吟風	16.5×36.8	直	
473	書簡	1-14-3	未詳		「副書」書状。短冊染筆の礼状。文中「四月十五日」。	〔井眉〕	吟風	16.2×30.1	直	
474	書簡	1-14-4	9月16日		伊賀のこと。別書送付のこと。	井眉	吟風	16.2×37.0	直	日付「卯月」を「九月」に訂正。
475	書簡	1-14-5-1	4月18日		「副書申述候」書状、句入リ返書。端裏「吟風様　井眉」。	井眉	吟風	17.0×23.0	直	梅文様刷用箋。
476	書簡	1-14-5-2	5月1日		月並み依頼	井眉	吟風	18.3×445	直	
477	書簡	1-14-5-3	2月2日		句入り書状	井眉	吟風	17.2×39.7	直	中損多。打ち曇り刷用箋。
478	書簡	1-14-7-1	9月28日		摺り物・月並みなど奉額句入り書状。	井眉	吟風	17.0×400.0	直	打ち曇り刷用箋。
479	書簡	1-14-7-2	4月13日		「芳書拝見忝」書状	井眉	吟風	17.0×44.7	直	朱色蔓刷用箋
480	書簡	1-14-8	3月28日		「芳書拝見」書状	井眉	吟風	16.0×55.5	直	
481	書簡	1-14-9	2月28日		奉額、月並	井眉	吟風	15.0×46.0	直	海老・雀図刷用箋。
482	書簡	1-48-2	10月4日		刷物の送付	五春荘	吟風	16.5×17.5	直	
483	書簡	1-59-1	3月10日		月並・摺物送付の書状。梅室が京都へ移ること。	井資	吟風	16.7×46.0	直	・井資は、西氏。井眉庵、五春荘を継ぐ。大坂の人。・梅室は嘉永5年没。
484	書簡	1-48-3	天保10年8月	1839	井眉三回忌追善集のこと	五春荘（井資）	吟風	16.0×41.0	直	井眉は天保8年8月29日没。封筒付き。
485	書簡	1-59-2	天保8年12月13日	1837	井眉「当八月死去」を知らせ、追善集加入を依頼。井庵にてとあり、五春荘を継ぐ。	五春荘井資	吟風	16.5×44.4	直	天保8年8月没。天保9年追善集『もとのしづく』、吟風「菊の香やあいたい人が又ふゆる」入集。天朱引刷り用箋。
486	俳諧	1-59-4	未詳		「誉られに」等発句一紙	井資	―	16.4×22.2	直	
487	書簡	1-14-6	12月2日		歳旦句の依頼。俳号の変更。摺り物送付。	井眉庵（井資）		18.3×405	直	井眉は天保8年8月29日没、それ以後。
488	書簡	1-59-3	1月28日		眉山の摺物のこと	井資	吟風	16.4×52.5	直	
489	書簡	1-48-1	5月21日		眉山立机披露の刷物	五春荘（井資）	吟風	16.3×45.5	直	
490	書簡	1-47-4	5月		眉山立机披露の刷物。文通所伊勢屋文造の印あり。	眉山	吟風	16.5×22.5	直	眉山は、松本氏。釈文蔵。別号、井圃庵。井眉門。大坂の人。宝珠の色刷り封筒付。松竹梅の刷用箋。
491	俳諧	1-136-8	未詳		「梅にさす」句等一紙。眉山・可大・鼎左・鶯宿・林曹等。	眉山等	―	17.5×33	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
492	書簡	1-45-1	閏５月28日		春の句書状	花屋庵鼎左	吟風	16.2×57.8	直	閏５月は、弘化３年、安政４年。 ・鼎左は、藤井氏。名、曹。字、子譲。号、花屋庵。奇淵（三世）。享和２年生、明治２年没、享年68。備後の人、後大坂安堂寺町御堂筋西に住んで花屋庵を守る。天保８年『続浪華郷友録』、嘉永元年『浪花当時人名録』出。
493	書簡	1-45-3	３月５日		軸のこと	花屋庵鼎左	吟風	16.0×73.6	直	鼎の図の刷用箋
494	書簡	1-111-34	５月12日		「久―の貴書拝見」書状	花屋	吟風	16.0×43.4	直	
495	俳諧	1-45-2	未詳		「さぎ長や」発句一紙	花屋庵鼎左	―	15.8×50.5	直	
496	俳諧	1-45-4	未詳		「雪解けに」発句一紙	花屋庵鼎左	―	16.0×31.5	直	
497	俳諧	1-138-2	未詳		「梅が香や」等発句一紙	林曹	―	16.0×23.4	直	井高氏、また比良城氏。文久元年没。淡路島生まれ、後大坂御霊筋道修町角住。梅室門。安政３年、二条家俳諧宗匠（花の本四世）。天保８年『続浪華郷友録』、嘉永元年『浪花当時人名録』出。
498	俳諧	1-137-1	未詳		「春風や」等発句一紙。林曹・有節・文海・公成・九起・雨翠・梅通。	林曹他。	―	16.5×16.0	直	梅室は嘉永５年没。
499	俳諧	1-4-9-	未詳		「一二寸清水もふえてけさの秋」句等一紙	林曹・蒼虬・有節・可大	―	16.8×31.5	直	
500	書簡	1-17-2	３月20日		「愈御壮安奉寿候」書状。端裏「吟風雅公　自楽」。	自楽	吟風	17.0×23.0	直	貼紙「大坂土佐堀　助松屋忠兵衛自楽」。井呉庵、大坂船町（1-72-3）。虫損多。
501	俳諧	1-23-1	未詳		「時雨るや」等発句一紙	梅室	―	16.5×34.5	直	桜井氏。通称、治郎作。初号、雪雄。剃髪して素芯（信）、方円居（斎）。明和６年11月27日生、嘉永５年10月１日没、享年84。加賀金沢の人、研刀を以て加賀藩に伺候。寛政２年、槐庵を継ぐ。文化元年、隠居して京移住。東洞院仏光寺住。文政３年、大坂移住。文政９年、江戸で剃髪。天保10年、再び大坂。大坂平野町に住む（1-39-6）。嘉永４年、二条家俳諧宗匠（花の本）。嘉永５年『平安人物志』出。
502	俳諧	1-23-2	未詳		「いささかな」等発句一紙	梅室	―	16.5×32.5	直	
503	俳諧	1-23-3	未詳		元旦の和歌・俳句各一	梅室	―	19.7×18.5	直	
504	俳諧	1-23-5	未詳		「初鶏や」等発句一紙	梅室	―	16.5×37.0	直	
505	俳諧	1-23-6	未詳		「万才に」等発句一紙	梅室	―	25.0×32.8	直	
506	俳諧	1-23-7	未詳		「たつ鶴の」等発句一紙	梅室	―	17.0×27.0	直	破損大
507	俳諧	1-23-11	未詳		「一処」等発句一紙	梅室	―	25.0×35.0	直	
508	俳諧	1-23-12	未詳		「爰も旅」等発句一紙	梅室	―	16.5×29.0	直	
509	俳諧	1-23-13	未詳		「誉らるる」等発句一紙	梅室	―	16.4×17.6	直	
510	俳諧	1-23-14	未詳		「浜松の」等発句一紙	梅室・茶岡・五中・芹舎	―	16.0×96.7	直	芹舎は明治23年没。
511	俳諧	1-4-7-	未詳		「卯の花や」句等一紙。両吟表六句・発句４句	梅室・蒼虬	―	16.5×39.0	直	
512	俳諧	1-13-7	未詳		伊賀上野瓢竹庵	梅室・二石	―	16.6×37.0	直	
513	俳諧	1-136-4	未詳		「元旦を」句等一紙。梅室、三千彦、成美、蒼虬、奇淵、升六。	梅室他。	―	24.0×34.0	直	
514	俳諧	1-138-7	未詳		「色梅の」等発句一紙。梅室、鳳朗、史千、弥帰、由誓、丁知	梅室他。	―	16.5×31.0	直	・丁知は、下谷御成道、井上筑後守家来、山室周助。江戸の俳人多し
515	俳諧	1-138-9	未詳		「野屋敷や」等発句一紙	梅室・素瓦・林曹・砺山	―	16.3×33.5	直	
516	俳諧	1-138-10	未詳		「虎杖の」等発句一紙。梅室、九起、梅通・芹舎、石外、天遊、丈翠。	梅室他。	―	16.1×152.0	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
517	俳諧	2-17-37	弘化４年１月	1847	丁未初春　一枚摺。梅室・芹舎・祭魚・若雅他	梅室他	—	19×25.5	刊	緑天引刷り用箋。
518	俳諧	1-23-10	未詳		「あはせ着て」等発句一紙	雪雄（梅室）	—	16.5×20.5	直	
519	俳諧	1-3-4-	未詳		「夜もすがら雨を聞きしに今朝の露」句等一紙	素芯（梅室）・俳仙堂	—	16.3×26.1	直	文政９年、江戸で剃髪、素芯。
520	俳諧	1-5-2-	未詳		「鳥さしの手早くはつす一葉かな」句等一紙	素芯・蒼虬	—	25.1×30.0	直	
521	俳諧	1-111-11	未詳		「落葉火や」等発句一紙。素芯（梅室）２句・蒼虬３句・杜若３句	素芯・蒼虬・杜若	—	16.4×35.5	直	
522	俳諧	1-138-4	未詳		「先たのむ」芭蕉句発、脇素芯・第三蒼虬。	素芯・蒼虬・梅室	—	16.5×15.0	直	1-138-8の句のみが同じ。
523	俳諧	1-138-8	未詳		「先たのむ」芭蕉発句、脇梅室、第三蒼虬。	梅室・蒼虬・素芯	—	16.4×20.4	直	1-138-4の句のみが同じ。
524	俳諧	1-106	未詳		「時雨にも」句等一紙	梅通	—	7.7×16.3	直	堤氏。称、六兵衛。寛政９年生、元治元年没、享年68。新町夷川南住。文久２年、二条家俳諧宗匠（花の本）。嘉永５年『平安人物志』出。
525	俳諧	1-5-9-	天保13年秋	1842	「雪ひとつ飛としたり炬燵あけ」句一紙	五升庵日左	—	16.8×33.5	直	
526	俳諧	1-57-3	未詳		「年月の」句等一紙。奈良を詠んだ句６句	五升庵　日左	—	16.5×56.0	直	
527	書簡	1-61-1	２月６日		「其後は打絶」句入書状	古鏡	吟風	16.7×84.2	直	後貼紙「河州津田村　前川傾三郎　古鏡」。河内国津田村庄屋、前川近三郎（1-72-5）
528	書簡	1-137-8	１月		「梅柳之徳」年賀状	古鏡	畑吟風	16.0×36.5	直	
529	俳諧	1-61-2	未詳		「吟風大人の始めて草庵ぇ入らせ給ふに」発句一紙	古鏡	—		直	青色竹図入り
530	書簡	1-111-16	"往５月24日 復５月28日		往復書状包み紙。「摂州茨木　木綿屋藤右衛門様」「古鳳君　淀家中畑数馬吟風」。裏「五月廿四日出賃銭済」。	古鳳	畑数馬 吟風	24.8×34.0	直	
531	書簡	1-51-1	11月８日		「其後御文音無御座」句入書状。封筒（17.0×4.6）「畑吟風様　水音霞村」。	霞村	吟風	16.2×60.8	直	入江氏。通称、甚六。明治８年５月25日没。別号、水音室。梅室門。父、重兵衛。木綿問屋。（播磨の俳人たち）。貼紙「播州高砂今市入江重兵衛」。
532	書簡	1-51-2	７月23日		双林寺芭蕉堂のこと	霞村	吟風	16.0×55.7	直	貼紙「播州高砂今市　入江重兵衛　霞村」。
533	書簡	1-71-1	10月22日		句評依頼	睡翁	吟風	77.5×17.7	直	「伊勢御師睡翁」貼紙。
534	書簡	1-71-7	10月24日		「是よりも不申上候得ば」書状	睡翁	吟風	39.4×33.7	直	懐紙二つ折
535	書簡	1-71-6	〔12月〕		「今年は残少」書状。端裏「唫風君　睡翁」。宛名包み紙「淀御城内大坂口　畑数馬様梧右　山田岡本町山内文鳴」。別紙発句一枚「春夏秋冬吟　睡翁」。	睡翁	吟風	22.6×31.5（包み紙）／16.3×31.0（書状、発句一紙）	直	計３枚。
536	俳諧	1-71-3	〔冬〕		「旧冬に」句文一紙	睡翁	吟風	18.2×22.0	直	絵入り刷り用箋
537	俳諧	1-71-4	〔冬〕		「園の雪」句他一紙	睡翁	吟風	18.2×21.7	直	絵入り刷り用箋、1-71-2と同。
538	書簡	1-71-5	１月６日		摺物送付、支雪、軽舟のこと。端裏「淀」。	睡翁	唫(吟)風	18.2×79.5	直	
539	俳諧	1-71-2	〔新年〕		「餅搗や」等発句一紙	睡翁	吟風	21.7×18.1	直	絵入り刷り用箋、1-71-4と同。
540	書簡	1-55	５月17日		吟風の燕子花の句を誉めたもの。包み紙「畑数馬様卓池」、朱印あり。	卓池	吟風	16.5×49.5／24.5×34.5（包み紙）	直	貼紙「三州岡崎　鶴田与三右衛門　卓池」。士朗門。紺屋。明和５年生、弘化３年８月11日没、79歳。
541	書簡	1-111-38	３月13日		「未得御意候得共」句入リ書状、摺り物送付。	適斎	吟風	16.5×47.7	直	本紙貼紙「所ハ名古屋清水八王子宮より東江三町入北側　中杉字ヲサヅカ書状更取所本町　風月堂適斎」。
542	俳諧	1-75-2	未詳		「有年坂にて」発句一紙。「一亭史也　備中笠岡洲崎片家大八郎　採芝生長三郎右衛門」の添え書きあり。	採芝	—	16.0×26.2	直	史也
543	書簡	1-75-1	11月24日		「一別己来益御平安」書状	史也	吟風	15.6×66.2	直	「備中　史也」貼紙。

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
544	書簡	1-75-3	3月3日		馳走の礼状。醍醐帝の御陵を拝しての句など	史也	吟風	25.0×32.0	直	
545	書簡	1-88-1	3月7日		彦根在庵とあり。追伸、集冊花鳥文庫に加入のこと。その文音住所は京都彦根屋敷、四条堺町、彦根上新屋敷とする。	一枝	吟風	11.5×104.0	直	「米子　一枝」貼紙。
546	書簡	1-88-2	11月12日		「其后は御無音」発句入り書状。追伸、彦根上新屋敷に滞在。春季摺物催しのこと。	一枝	吟風	10.8×81.0	直	
547	書簡	1-65-1	3月　6日		諸国風子の句帖認めのこと	幻芝	吟風	15.2×42.5	直	風斎、また風露坊。下総香取郡利根川押砂。文通所、江戸両国柳橋。
548	俳諧	1-65-2	未詳		「寝る頃に」句等春、夏句一紙。	幻芝	—	16.5×35.5	直	
549	俳諧	1-65-3	（夏）		「三夜さめて」句等発句一紙。	幻芝	—	16.5×20.8	直	
550	書簡	1-38-20	7月7日		摺物料南鐐一片御恵投のこと	蘓山	吟風	16.2×29.3	直	文政8年霜月俳諧之連歌に一座する（2-16-3）。
551	書簡	1-38-21	1月10日		「新春之御慶同風目出度申納候」発句入り書状	蘓山	吟風	16.7×81.0	直	
552	書簡	1-38-25	1月10日		「梅柳之慶賀めで度申納」発句入り書状	蘓山	吟風、月戸、潤雫	16.6×45.1	直	
553	俳諧	1-38-22	未詳		「しぐるるや」等発句一紙	蘓山	—	16.7×68.7	直	
554	俳諧	1-38-23	〔新春〕		試筆発句一紙	蘓山	—	16.8×35.8	直	
555	俳諧	1-38-24	〔夏〕		「寺町を」等発句一紙	蘓山	—	16.6×18.3	直	
556	書簡	1-39-2-1	安政6年12月13日以降	1859	吟風の葬儀追悼の包紙	嘯叟	吟風霊前	22.7×29.5	直	別号、つれづれ庵。
557	書簡	1-39-2-2	安政6年12月13日以降	1859	「うしろ影」追悼句	嘯叟	吟風霊前	35.7×5.6	直	三つ折短冊
558	俳諧	1-39-2-3	未詳		寒中見舞吟一紙	嘯叟	—	12.5×17.5	直	
559	俳諧	2-17-45	未詳		暑中御見舞書状。「有明も」句他	嘯叟		12×16.2	直	
560	俳諧	2-17-52	未詳		「菖蒲の剪たて」独吟歌仙一巻	嘯叟	—	16.3×8.0	直	粘葉装一冊
561	俳諧	2-17-5	未詳		百韻「花の杖」ひとりごと独吟	つれづれ庵嘯叟	—	17.0×8.0	直	印「つれ〻〳〵葬」。粘葉装一冊
562	俳諧	2-17-7	未詳		「けさきかす」発句一紙	嘯叟閑人つれづれ庵	—	8.5×11.8	直	印「つれ〻〳〵葬」。刷用箋
563	俳諧	2-17-9	未詳		「寒けれど」発句一紙	嘯叟閑人つれづれ庵	—	12.8×12.6	直	印「つれ〻〳〵葬」。刷用箋
564	書簡	1-121	5月		剃髪草庵披露の集冊	梅曦	吟風	15.6×38.7	直	
565	書簡	1-69-1	正月末		年賀の刷物と上京の予定	梅園・悟雪	畑　吟風	16.3×83.0	直	
566	俳諧	1-69-2	未詳		「手おるより」句等発句一紙	梅園	—	16.5×26.4	直	
567	俳諧	1-69-3	未詳		「障るまで」句等発句一紙	梅園	—	16.3×27.8	直	
568	俳諧	1-69-4	未詳		「咲てから」句等発句一紙	梅園	—	24.0×30.8	直	
569	書簡	1-78	1月20日		「梅柳之御吉慶御同風芽出度」発句入り年始状	梅塵	吟風	15.0×74.5	直	
570	書簡	1-110	8月5日		「以愚状」書状	梅南	〔吟風〕	16.2×56.5	直	色用箋
571	俳諧	2-17-21-2	未詳		蛍図一枚摺	梅南・鶯語	—	11×5.5	刊	
572	俳諧	1月11日	未詳		「つぼみから」句等一紙	鶯語	—	16.0×50.0	直	三宅氏。号、知行。伏見阿波橋西住。嘉永5年、慶応3年『平安人物志』出。
573	書簡	1-111-10	安政6年12月	1859	「吟風翁のみまかりをおしみて」追悼歌	英翁	〔吟風〕	16.6×16.5	直	吟風は安政6年12月13日没。
574	書簡	1-133	未詳		書状	胡孤（金子友雄）	未詳		直	未開封
575	書簡	1-80-1	12月27日		馳走礼状	大椿	吟風	15.5×63.3	直	
576	俳諧	1-80-2	未詳		「白水に」句等冬、春句一紙	大椿	—	16.5×43.3	直	
577	書簡	1-91	9月11日		「未御文音も不申上候」句入り書状	風華	吟風	16.0×85.0	直	
578	書簡	1-112-2	3月27日		挨拶状	亀布	畑数馬	16.5×72.5	直	
579	書簡	1-137-5	8月13日		「久一之」書状	月楚	吟風	16.5×52.0	直	
580	書簡	1-124	1月29日		耕春に改名の知らせ。発句入り。	耕春	吟風	16.7×57.5	直	
581	書簡	1-135	未詳		句合、句集加入のこと	公鳳	吟風	16.0×66.0	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
582	書簡	1-86-32	6月15日		美茶の礼状	公鳳	畑唫（吟）風	17.5×93.0	直	
583	書簡	1-86-33	5月18日		句評辞退の詫状。	公鳳	吟風	16.0×93.0	直	
584	書簡	1-38-0	1月24日		封筒のみ、表「畑数馬様雅用　如鶴」・裏「正月廿四日　谷尾にて認」。	如鶴	畑数馬	17.9×4.5	直	蝶図刷り封筒
585	書簡	1-137-4	1月29日		「梅柳野山之気色面白」書状	如鶴	畑吟風	16.5×62.0	直	
586	書簡	1-90	正月		年賀状（摺り物）。端裏「吟風様　米人」。	米人	吟風	11.5×24.5	刊	朱鶴図刷り用箋。
587	俳諧	2-17-51	天保7年春	1836	丙申春興一枚摺	米人・三奈		20.0×6.9	刊	
588	書簡	1-50	未詳		吟風の宴に連なる礼	左良	吟風	16.5×46.5	直	撫子の色刷り用箋
589	書簡	1-1-	3月11日		花供養など	素玉	吟風	17.5×54.5	直	
590	俳諧	1-64	未詳		「中高に」句等一紙	素玉	—	16.3×49.4	直	
591	書簡	1-47-5	未詳		「吟風宗匠」宛書状	月日	吟風	16.5×55.2	直	
592	書簡	1-67-1	9月15日		句集に入集のこと	南峨	吟風	17.8×76.0	直	
593	俳諧	1-67-2	未詳		「鶯啼や」句等発句一紙	南峨	—	16.6×30.3	直	
594	俳諧	1-67-3	3月24日		「この花の」句等発句一紙	南峨	—	25.0×34.5	直	
595	書簡	1-114	6月15日		「一筆奉啓上候」書状	西其寿	田常之助	16.0×105.0	直	書中「吟風先生」の言及有。
596	書簡	1-70	季冬15日		摺物送付のこと	鶏洲	吟風	16.0×38.0	直	
597	書簡	1-96	10月26日		摺物送付のこと	納所木村後家蘭斎	吟風	16.2×78.0	直	虫損あり
598	書簡	1-92-1	7月26日		「時節柄残暑」書状	捨推	吟風	16.5×48.5	直	貼紙に「捨推」。
599	書簡	1-84	8月29日		句評依頼	桃成	吟風	16.0×37.0	直	
600	書簡	1-79-1	6月25日		「御尊書難有拝見仕候」書状	若雅	畑吟風	15.9×57.3	直	「蕪汁庵若雅」貼紙。京堀川通今出川上ル西へ入山名町住（1-72-3）。
601	書簡	1-79-2-3	2月		早春の摺物の催	蕪汁庵	吟風	16.0×75.0	直	
602	書簡	1-79-3	7月7日		「七夕御祝詞目出度奉賀候」書状	蕪汁庵若雅	蓑虫庵吟風	16.2×78.0	直	
603	書簡	1-79-4	11月16日		鴨の句秀吟のこと	若雅	蓑虫庵吟風	16.1×99.6	直	
604	俳諧	1-79-2-4	未詳		付け句一紙	若雅	—	16.3×33.8	直	「蕪汁庵若雅」貼紙。
605	俳諧	1-79-2-1	未詳		「知り顔で」句等発句一紙	若雅	—	16.0×43.0	直	
606	俳諧	1-79-2-2	未詳		「つもりより」句等発句一紙	若雅	—	16.0×28.0	直	
607	書簡	1-77-1	9月21日		大坂蔵屋敷出向案内発句八句添	春圃	唫（吟）風	17.3×94.3	直	「大村　春圃」貼紙。肥前大村彼杵の人。
608	書簡	1-77-2	5月晦日		3月上京4月下旬帰庵発句4添	春圃	吟風	16.3×62.0	直	
609	書簡	1-77-3	3月3日		旅中発句五句添	春圃	吟風	15.8×65.3	直	
610	書簡	1-3-3-	8月4日		書状	其涛	吟風	16.5×100.3	直	大坂京橋組西東内其涛
611	俳諧	1-111-2	未詳		「聞て寝た」等発句一紙	芹舎	—	16.2×30.8	直	八木氏。文化2生、明治23没、享年86。山城国八条の人。元治元年、二条家俳諧宗匠（花の本）。
612	俳諧	1-118	未詳		「鶯や」等一紙	梅價	—	17.5×37.3	直	西本願寺の医師。喜多川氏。枯魚堂。安永二生、天保一四没。
613	俳諧	1-111-27	未詳		天の川かかりてたかし庵の松等発句一紙	祭魚	—	15.6×37.2	直	北川（喜多川）氏。二世枯魚堂。明治六没。京都の人。四条高倉西住。嘉永5年、慶応3年『平安人物志』出。
614	俳諧	1-47-1	未詳		「往還を」発句一紙	岱年	—	16.6. ×42.2	直	花守氏、森氏とも。無時庵。寛政10年生、嘉永5年1月12日没。讃岐丸亀の人、後京住。嘉永5年『平安人物志』出。
615	俳諧	2-17-17	嘉永4年	1851	年賀一枚摺。松陰画日の出図入り。	岱年・九起・橘庭	—	12.5×12.5	刊	
616	俳諧	1-138-1	未詳		「見たことは」等発句一紙。岱年6句、百古5句	岱年・百古（公成）	—	16.0×41.5	直	
617	俳諧	1-17-1	未詳		「五月雨に」等発句一紙	杜蓼	—	16.0×26.5	直	寺島氏。通称、島屋幸助。別号、南椿舎。寛政3年生、安政4年6月21日没、享年67。京都の人。京四条麩屋町西入、また四条富小路東住。
618	俳諧	1-111-24	未詳		池にうく椿や風に行もどり等発句一紙	丈翠	—	17.2×25.3	直	大八木氏。通称、幾右衛門。号、梅塢堂。安政3年没。山城国嵯峨材木町、また室町仏光寺南住。落柿舎六世。松図墨刷り用箋

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
619	俳諧	2-17-32	亥の春		亥の春一枚摺。半歌仙・発句	丈翠・杜鵞他	—	9.5×24.5	刊	杜鵞は嘉永５年没。
620	俳諧	1-100	未詳		「そ―くれた」句等一紙	普賢寺老波	—	17.5×31.0	直	山城国普賢寺村の人。
621	俳諧	1-47-6	未詳		「すぢかいに」発句一紙	武陵	—	18.2×35.4	直	西尾氏。名、呉四郎、邦直。号、杜蔭。丹波大山の人。酒造業、庄屋職、篠山藩の御用達。明和３年生、天保九年没、享年73。文政13年、天保９年『平安人物志』「風流」出。
622	俳諧	2-12	未詳		横山清暉画、一枚摺。タジマ一橋・嘯窓・九起・軽舟・吟風他。	但馬一橋・吟風他	—	42.7×56.5	刊	彩色刷り
623	俳諧	2-17-26-1	未詳		年賀俳諧一枚摺。青雲居・岱年・禾明・百之・米友・蕙逸他。柏園画彩色梅図入り	青雲居他	—	20×22	刊	・岱年は、花守氏、森氏とも。寛政10年生、嘉永５年１月12日没。讃岐丸亀の人、後京住。 ・米友（よねとも）は、沢氏、名は宗得。書肆、五車堂沢宗治郎。別号、真々居。寛政２年生、明治３年２月27日没、享年80。名古屋生、大津住。 ・蕙逸は、山田氏。寛政９（８とも）年６月15日生、慶応３年６月５日没、享年72。大津の人。通称、麹屋弥兵衛。
624	俳諧	1-111-22	未詳		「次の間へ」等発句一紙	曽夢	—	25.0×34.0	直	
625	俳諧	1-46-1	未詳		「しぐれ年」発句一紙	卓丈	—	16.5×31.5	直	大橋氏。別号、十丈園。加賀金沢の人。梅室門。文久元年10月４日没。（俳諧新撰年表）
626	俳諧	1-46-2	未詳		「元旦の」発句一紙。災の後の月見。発句８句	卓丈	—	16.3×48.2	直	
627	俳諧	1-46-3	未詳		「頂に」発句一紙	卓丈	—	16.0×19.3	直	
628	俳諧	1-111-23	未詳		奉扇会句等一紙	卓丈	—	15.8×25.0	直	
629	俳諧	1-54-4	未詳		「女子には」他句一紙	逸江		16.6×20.0	直	後筆端裏「越中　逸江」。
630	俳諧	1-111-39	天保頃		「鞍馬をも懸越しそうな競馬哉」等発句５一紙。	鳳朗	—	24.0×20.5	直	・鳳朗は、田川氏。宝暦12年生、弘化２年没、享年84。熊本の人、後に江戸住。弘化２年没。天保13年、二条家俳諧宗匠（花の本宗匠）。鳳朗に改号は天保３年６月。八千房一肖の５月６日付書簡（1-47-2）によれば、端午の節前に大坂から京都に遊歴、この時に吟風と対面。その折に、吟風による江戸座宗匠の発句書き上げ（1-138-6）と、鳳朗の当該発句あり。
631	俳諧	1-23-8	未詳		「けふとしる」等発句一紙	鳳朗・杜若・梅室	—	17.0×30.5	直	
632	俳諧	1-131	未詳		「万薬の」句等一紙。田毎庵瑞枝（浅草茅町にて）・永井左京鳧染（江戸鈴木町にて）	田毎庵瑞枝・永井左京鳧染	—	17.0×42.0	直	
633	俳諧	1-111-40	未詳		「くれかかる」等発句一紙	岱雲	—	16.5×38.7	直	端裏（後筆）「長崎　岱雲」。
634	俳諧	1-103	未詳		「年よりに」発句等一紙	旭翁	—	24.5×34.0	直	
635	俳諧	2-17-29	文久元年春	1861	辛酉春　一枚摺。「二はしら花雨庵梓」袋付（19.0×6.4）。	芦舟・漁藻他	—	19×25.5	刊	海草の押し絵に銀箔散しの用箋。
636	俳諧	1-117	未詳		「あてにした」等一紙	阿鳥	—	16.0×27.5	直	
637	俳諧	1-49	未詳		「散あき」発句一紙	雨喬	—	15.0×29.0	直	
638	俳諧	1-57-5	未詳		「出かけから」句等一紙	蟻卵	—	18.5×30.5	直	
639	俳諧	1-54-5	未詳		「常に見ぬ」他句一紙	石外		16.2×25.6	直	別号、落柿舎。
640	俳諧	2-17-46	安政元年春	1854	甲寅春　年賀状。灯の中に句他。彩色橙図入り。	一帆		12.7×８	刊	
641	俳諧	2-17-39-1	安政５年春	1858	戊午歳旦	馬山	—	12×8.3	直	印二個あり
642	俳諧	1-136-6	未詳		「元旦や」句等一紙。梅笠・鳳朗・一具・禾木・卓池・得蕪等。	梅笠等	—	23.0×26.0	直	
643	俳諧	2-17-25	文化２年春	1805	「むつき13日の夜」句文	鳳尾他	—	39×53	刊	懐紙二つ折の半分のみに記載。
644	俳諧	1-115	未詳		「夜のはしの」等一紙	乙良	—	16.5×31.0	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
645	俳諧	1-111-3	未詳		「牛も尾を」等発句一紙	楓千	—	16.6×39.0	直	
646	俳諧	1-111-15	未詳		「竹に月団扇出す夜となりにけり」等発句一紙	霞洋	—	16.7×37.8	直	
647	俳諧	1-111-7	未詳		「うぐひすに」等発句一紙	可大	—	16.4×23.0	直	栗の本。播磨の人。卓池門。（俳諧新撰年表）
648	俳諧	1-111-33	未詳		竹の子は竹になりけり五月雨等発句一紙	かてふ	—	16.8×37.2	直	
649	俳諧	1-60-1	未詳		「初秋や」等発句一紙	下方	—	16.0×57.8	直	
650	俳諧	1-111-5	未詳		「拭てとる」等発句一紙	烏谷	—	16.0×27.0	直	
651	俳諧	1-111-6	未詳		「遣り羽子の」等発句一紙	烏谷	—	16.5×33.5	直	
652	俳諧	2-23-6	未詳		「秋かぜや」画賛一紙	烏谷、也然句・雪岳画	—	139.5×30.5	直	
653	俳諧	1-17-3-1	未詳		「組直す」等発句一紙	烏岬	—	16.0×36.8	直	
654	俳諧	1-109	未詳		「見限て」句等一紙	木鶏	—	16.3×25.6	直	
655	俳諧	1-102	未詳		「盛り上る」発句等一紙	九價	—	24.0×32.7	直	
656	俳諧	1-93	未詳		「今朝の秋」句等一紙	清雨	—	25.0×33.5	直	
657	俳諧	1-5-18-	未詳		「すみだ川の末大はしの南は」句文	玄果	—	18.0×31.9	直	
658	俳諧	2-17-26-2	酉の春		年賀俳諧１枚摺。百年画彩色熨斗図入り	芦水、しらん、鴻地、まき女他	—	20×24	刊	2-17-28に同じ。虫損あり
659	俳諧	2-17-28	酉の春		年賀俳諧１枚摺。百年画彩色熨斗図入り。「はつ日かげ」袋付（19.0×6.5）。	芦水、しらん、鴻地、まき女他	—	19.0×25.5	刊	2-17-26-2に同じ。住所印「諸摺物所　京界町四条上ル　近江屋又七」。
660	俳諧	2-17-18	とらのはる		「うちからも」年賀状。竹図入り。	五雀	—	20×13.5	刊	
661	俳諧	2-17-33	安政１年８月	1854	甲寅仲秋一枚摺。如升・心月・波平・百里・梅笠。盛美画彩色秋草図入り	如升他。	—	14×22.5	刊	
662	俳諧	2-17-42	文久１年	1861	辛酉年賀	米山		16.5×10.5	直	吟風没後。「安政五年十月十二日於蓑虫庵興行」（2-16-4）に出座。
663	俳諧	2-17-39-8	亥春		亥の春一枚摺	里暁	—	13×11.5	刊	うち曇り用箋。
664	俳諧	1-5-4-	天保10年春	1839	問ふ人に答て曰く古希の春祝俳諧	如風	—	31.8×36.7	直	朱印あり
665	俳諧	1-5-5-	１月		歳旦句一紙	如風	—	15.5×23.3	直	朱印あり
666	俳諧	1-15-	文政４年	1807	文政四辛巳改正俳諧士角力番付	白黒山人	—	48.0×33.0	刊	大黒屋文吉浅草竹門刊
667	俳諧	1-95	未詳		「冬椿」句等一紙	寸為翁・梅價・蒼虬	—	16.7×10.0	直	
668	俳諧	1-120	未詳		「はつ雁や」等発句一紙	専阿	—	16.5×33.3	直	京の人。
669	俳諧	1-54-6	未詳		「鶯の」他句一紙	双梧		16.6×54.2	直	
670	俳諧	2-17-48	天保11年春	1840	庚子春興一枚摺。東南画擬宝珠図入り。	素友	—	9.9×13.0	刊	袋「松囃子」（9.9×4.9）。
671	俳諧	2-17-39-6	未詳		初日の出他発句。彩色熨斗図入り。	炊茶翁旭水	—	16.5×11.5	直	
672	俳諧	2-17-27	酉の春		酉の春一枚摺。鶏の絵入り。	田鶴・八千坊他	—	20×13.5	刊	「老松　田鶴」袋付（20×７）。袋割印あり
673	俳諧	1-57-2	未詳		「実生へせし」句等一紙	淡節	—	16.0×20.2	直	内海氏、また桜井氏。相応軒。伊予松山の人。六角岩上西住。文化７年生、明治７年６月16日没、享年65。天保９、10年頃上京。明治５年、帰郷。慶応３年『平安人物志』出。
674	俳諧	2-17-53	戌の初春		戌の初春「はつごよみ」一枚摺。百年画（印「三万立千年」）彩色犬図入り。	漁藻・春海・淡節	—	12.5×6.8	刊	袋「はつごよみ」（12.0×6.5）。
675	俳諧	1-3-1-	未詳		「稲つまや渡ったやみの橋すごし」句等一紙	兆二	—	16.5×44.2	直	
676	俳諧	1-39-9	未詳		八朔絵行器句文	露関・除鬼・文竹	—	16.0×36.5	直	
677	俳諧	1-39-16	未詳		「ゆつくりと」等発句一紙	とせ	—	15.5×27.0	直	朱天引き刷用箋
678	俳諧	1-111-14	未詳		「庭掃か」等発句一紙	友雄	—	16.5×26.8	直	
679	俳諧	1-86-34	未詳		「草にまで」等発句一紙	鳥岳	—	14.6×33.5	直	熊井氏。鳥息庵。麩屋町錦小路南住。慶応３年『平安人物志』出。
680	俳諧	2-17-41	未詳		「両の手に」歳旦吟。「御加増のふち米をよろこんで」云々。	斜月	—	18×24	直	印二個あり
681	俳諧	1-39-2-8	未詳		「高く来て」発句一紙	西疇	—	16.7×33.5	直	

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
682	俳諧	1-138-12	未詳		「しほらしや」等発句51、三枚。西月・蒼虬・曾夢・節之・瓶山・梅石・素芯・洲鴎・而后・梅価・朝侍・鳳朗・梅室・暑明他。	西月・蒼虬・鳳朗・梅室他	—	24.4×34.5	直	
683	俳諧	1-23-9	未詳		「良夜清」歌・句一紙	西月・素芯雪雄（梅室）	—	24.5×15.0	直	
684	俳諧	1-83	未詳		「間にあはぬ」句等一紙	二鳥	—	16.4×37.3	直	
685	俳諧	1-111-36	未詳		「荒磯や」等発句一紙	野鶴	—	16.5×32.8	直	
686	俳諧	1-21-	未詳		青瓢自画賛	春雅	—	30.0×26.0	直	春雅印三箇
687	俳諧	2-17-39-7	未詳		「うりものに」句等秋興	晴江、林坡、也然	—	15×6.5	刊	金天引用箋
688	俳諧	1-7-	未詳		「陶渕明は五斗」連句一紙	万里	—	25.0×35.0	直	
689	俳諧	1-111-41	未詳		梅散りて雨もたのしき二月かな等発句一紙	日浅園松和	—	16.8×47.4	直	天朱引刷り用箋
690	俳諧	1-94	未詳		「誰も来ぬ」句等一紙	百城	—	15.3×21.2	直	
691	俳諧	1-111-19	未詳		「咲立て」等発句一紙	古洗	—	16.5×33.4	直	端裏（後筆）「南部　古洗」。
692	俳諧	1-111-25	未詳		夕刻は樹のかげも小さき蝉の声等発句一紙	文海	—	16.5×24.8	直	熊井氏。大草園。四条高倉東住。慶応３年『平安人物志』出。
693	俳諧	2-17-3	未詳		幻住庵記草稿伝来写し	文頂	—	16.7×49.5	直	
694	俳諧	1-3-2-	未詳		「あら海や」句等一紙	升悉	—	16.5×32.7	直	
695	俳諧	1-111-32	未詳		「一家内」等発句一紙	まや	—	17.8×24.5	直	
696	俳諧	1-57-4	未詳		「ことことと」句等一紙	分来	—	16.2×28.6	直	
697	俳諧	1-112-3	未詳		芭蕉堂の芭蕉像箱書きの写し	（見風）吟風写	—	25.0×33.5	直	
698	俳諧	2-17-39-3	未の春		未の春　年賀	南柿舎魚眼	—	8×18	直	
699	俳諧	1-105	未詳		「嗅合ふて」句等一紙	明き郎	—	16.0×30.7	直	
700	俳諧	2-17-50-2	未詳		「あけぼのを」句他小短冊	明良		19.1×3.4	刊	
701	俳諧	2-17-40	寅の春		寅の春興一枚摺	弄花如亭	—	16×9	刊	大乗の朱印あり
702	俳諧	1-111-43	未詳		やぶごしに蔵もつ家やももの花等発句一紙	柳叟	—	16.2×20.5	直	
703	俳諧	1-111-12	未詳		「弁天と」等発句一紙	柳壺	—	16.0×23.3	直	
704	俳諧	1-23-4	未詳		「何なりと」等発句一紙	有節・天遊・九起・梅室	—	16.7×50.3	直	梅室は嘉永５年没。有節は明治５年没。九起は明治15年没。
705	俳諧	1-111-26	未詳		やねこすもおよそみとせやさし柳等発句一紙	有節	—	16.6×31.5	直	沢氏。別号、五仲庵。文化２年生、明治５年没。信州上田の人、後京住。東洞院四条北、また下川原住。蒼虬門。嘉永５年、慶応３年『平安人物志』出。
706	俳諧	1-111-28	未詳		「鶯や」等発句一紙	有節	—	16.5×23.0	直	
707	俳諧	1-111-29	未詳		「行鶯の」等月４句	有節	—	16.5×21.2	直	
708	俳諧	2-17-39-2	天保６年春	1835	乙未春歳旦	喜雀	—	9.7×12.8	直	緑天引刷り用箋
709	俳諧	1-111-20	未詳		春の雪ゆきにならずにしまひけり等発句一紙	羅斎	—	16.2×17.5	直	
710	俳諧	1-111-8	未詳		「鳥影の」等発句一紙	羅斎	—	16.8×17.5	直	
711	俳諧	1-108	未詳		「た―さくら」句等一紙	路雪	—	16.4×25.4	直	
712	俳諧	1-81	未詳		「田の中に」句等一紙	路雪	—	17.3×30.8	直	紅葉図刷り用箋
713	俳諧	2-17-55	天保11年春	1840	庚子春一枚摺。彩色梅図入り。	若松	—	13.0×13.5	刊	袋付（13.0×5.2）。
714	俳諧	1-111-4	未詳		「秋の風」等発句一紙	吾乙	—	16.2×28.4	直	
715	俳諧	1-30-	未詳		吟風・皿山・雲彦画賛	吟風・皿山・雲彦	—	24.5×34.5	刊	
716	俳諧	2-17-15	未詳		あとの月句一枚摺。	九起・呉明他	—	12.5×13.5	刊	緑色飾り罫線。
717	俳諧	1-111-1	未詳		「邂逅に」等発句一紙。端裏を切り貼り「六角通堀川東入　前川又吉　轡角」。	轡角	—	15.6×32.6	直	
718	俳諧	1-107	未詳		「秋たつや」句等一紙	桜屋老人・専阿	—	16.2×44.5	直	
719	俳諧	1-92-2	未詳		「水音に」句等一紙	捨推	—	24.8×33.5	直	貼紙に「捨推」。
720	俳諧	1-13-15	未詳		「橋こへて」等発句・狂歌	石堂	—	16.0×52.5	直	
721	俳諧	2-17-16	天保10年３月	1839	已亥晩春　花神窓一枚摺。彩色文鱗画入り。	吐翠等	—	13×17.5	刊	
722	俳諧	1-138-5	未詳		「初明や」等発句一紙。白欧、鶯室、大年、井左、眉年。	白欧他。	—	16.6×31.5	直	井左は、浅野氏。芙蓉庵。井眉門。立花通五丁目住。大坂の人。嘉永元年『浪花当時人名録』出。

番号	分類	資料番号	年　月　日	西暦	内　　容	差出人（編著者）	受取人	法　量	刊写直	備　考
723	俳諧	2-11-0	未詳		「四季的」袋。表に「阿川不擇庵」印有	阿川不擇庵	—	18.8×14.5	刊	
724	俳諧	1-111-13-2	未詳		「和らかな」「松に吹風の障らぬ牡丹かな」等発句一紙	蒼山	—	25.3×34.6	直	
725	俳諧	2-14	嘉永４年	1851	思風主催俳諧刷物一枚	得斎（筆耕）	—	39.2×55.0	刊	流水の二色刷物。淀藩士連中の入集はなく、俳友からの送付摺物。丹波九華、江戸丁知などの入集がある。
726	俳諧	1-54-2	未詳		「松かげの」他句一紙	一得		16.9×41.5	直	柳図刷色紙
727	俳諧	2-6-	明治42　年10月２日	1909	国風冠句集月並第８回目抜粋壱百余章。点帖一冊。	二寿軒狂窓野夫（朝参會）	—	16.9×23.5	直	八丁。破れ損失。
728	俳諧	1-112-1	未詳		「はんじ物」二種。草花発句６句、肴の名連句22句。評点入り。	未詳	—	16.5×70.5	直	
729	俳諧	1-112-6	未詳		空也踊り念仏ちらし。12月13日の事始めの茶筅売り、絵入。	未詳	—	33.5×24.5	直	
730	俳諧	1-13-17	安政３年１月７日	1856	年始初題　春の発句	未詳	—	16.5×48.8	直	
731	俳諧	1-137-6	未詳		「翁は俳諧一家の祖なり」俳文	未詳	—	6.2×43.5	直	
732	俳諧	2-17-1	未詳		連歌俳諧の説	未詳	—	17.3×83.0	直	
733	俳諧	1-43	未詳		三ヶ津見立馬番付。俳諧師狂言見立	未詳	—	24.0×32.0	刊	
734	俳諧	1-29-	未詳		俳諧名家角觝組。行司　みち彦。勧進元　仏外、平砂、湖十。板元　栄寿堂。	未詳	—	47.0×31.0	刊	
735	俳諧	2-17-13	安政５年春	1858	戊午春東気亭	東気亭	—	15×11	直	虫損甚し
736	俳諧	2-23-7	未詳		「名月や池をめぐりて夜もすがら」芭蕉句小短冊。桜花朱印・「雪窓」緑印を押す。	芭蕉	—	10.5×3.5	直	240枚（16枚×15束）同一
737	俳諧	1-13-11	未詳		硯箱下賜記念興行。銘「春のひかり」	重厚・泰渓・嘯山他	—	15.5×176.7	直	・井上重厚は落柿舎二世、義仲寺看守、寛政５年に二条家俳諧宗匠を蒙るも俳席は無し。文化元年没。 ・山本泰渓は参河守平順親、落柿舎三世。文化７年没。 ・三宅嘯山は、享和元年没。京の人。
738	俳諧	1-18	未詳		芭蕉翁肖像の一枚刷、義仲寺の製作。空白部に芭蕉句をスタンプするものと推測。義仲寺参詣の記念。	八僊觀百川	—	46.5×17.0	刊	宝暦２年没。彭城氏。画家、俳諧師。
739	書簡	1-16-3-2	未詳		芭蕉翁法要のこと	記載なし	記載なし	16.5×18.0	直	1-16-3-②は1-16-3-①に挟み込み
740	書簡	1-57-6	未詳		埋れ木硯箱の銘の一文を乞うもの。摺り物の送付。	記載なし	記載なし	15.5×41.5	直	墨流し梅花型押色刷用箋。前後が切れているか。
741	書簡	1-99	８月13日		「一両日はよき」書状	記載なし	記載なし	25.7×109	直	
742	書簡	1-119	未詳		「副書　巳年より月並相揃候」書状	記載なし	記載なし	16.2×33.5	直	
743	書簡	1-13-6	未詳		発句12句。末尾に「御高評可被下候」とある。	記載なし	記載なし	32.0×45.0	直	
744	書簡	1-39-17-2	未詳		「もの中翁堂」の摺物袋	記載なし	記載なし	12.4×4.4	刊	
745	書簡	1-97	未詳		「国方は余程」断簡	記載なし	記載なし	16.5×24.1	直	破れ

おわりに

本冊では、近世後期の淀藩士連中の俳諧の様相を探り、京俳壇との関わりをみるなかで、「芭蕉」に傾倒する吟風らの活動を考察した。連中の年譜事項は、関係者各位の好意的な協力により、知り得る限りを記したが、未だ充分とは言い難い。しかし、今後は菩提寺や後裔などの環境が刻々と変化し、調査がますます困難になると予想されるので、現時点での書き留めには意義があると考えている。

まず、支雪、竹楼が牽引する第一期（寛政期から文政前期）では、点印を多用する高点付句の影響である「六々行」歌仙一巻があった。高点付句は、淡々の影響が大きく、享保期以降の近世後期の京俳壇で隆盛であった。その淡々の「言説」と芭蕉の言説を含む伝書『俳諧伝書記聞』（文化九年養和の写し）の所蔵があり、京俳壇の影響を受けた淀藩士連中の俳諧が知られた。『俳諧伝書記聞』は、宝暦九年の刊本、芭蕉伝書とされる『俳諧三部書』（『俳諧之秘記』とも）と類似した内容を多く含んでいる。また、「芭蕉―其角―淡々（元禄一四年）―竿秋（宝暦六年）」へと伝授された写本「俳諧秘記」とも近似する。

支雪、吟風が牽引する第二期以降（文政後期から天保初期）の俳諧では、洛東俳仙堂、芭蕉堂との交流を深め、次第に吟風の牽引力が大きくなっていく。吟風は「芭蕉」に繋がる杜鵞の『年毎集』、万籟の俳諧など京俳壇の連中へと交際を広げていった。さらに、京にとどまらず、近隣諸地域や藩士としての活動の延長線上にある西国を中心とした諸国にも俳諧を展開していった。

吟風が牽引する第三期（天保前期から安政期）にあっては、天保七年頃の鳳朗との対面を契機として、専ら「芭蕉」に傾倒する様子が知られた。また、藩内の新しい連中を取り込み、俳諧活動を晩年まで継続していた様子も窺えた。

ところで、近世後期の京俳壇は、「芭蕉」を軸として展開するが、淀藩士連中もまた例外ではなかった。彼らは独自の活動に加えて、京俳壇の高点付句の影響を受け、さらには京俳壇の連中と連動して「芭蕉」俳諧へと傾倒していく。一例として、藩内に芭蕉像を持つ、芭蕉追善の俳諧興行を催す、義仲寺に句を奉納する、芭蕉追善集『花供養』に入集するなどの動きが確認された。芭蕉やその作品に直接的に寄り添うだけではなく、偶像化された「芭蕉」を取り込みながら俳諧活動をすすめるのは、芭蕉顕彰俳諧の一態様であるといえる。

芭蕉顕彰俳諧とは、近世後期京都俳壇にあって、芭蕉を軸とした俳諧の総称である。ここでいう近世後期は、主として寛政五年の芭蕉百回忌前後以降のことと考えている。その特徴を捉えると、最初に、芭蕉の作品や足跡に寄り添い、人となりを顕彰するものがある。五升庵蝶夢が終生をかけて実現した蕉風復興運動とそれを受けた芭蕉顕彰事業である。これを受けて次には、芭蕉を尊ぶことを前提としながら、芭蕉を象徴として門人の獲得、俳壇経営の一つとするものにまで拡大したものがあるが、その最初は洛東の芭蕉堂の開庵と花供養会の執行を行なった高桑闌更であろう。その背景には、近世後期の俳諧作者の社会的地位の向上と、俳諧人口の爆発的な増加がある。近世後期の社会的安定がもたらした教育の普及、出版技術の発展、経済活動の隆盛などによって、これまでに作者でも読者でもなかった人々が、新たに作者となり読者となる場を求めた。その器として適していたものの一つが俳諧である。特に、時間と経済的な関係から発句が好まれ、後の近代俳句誕生の伏線となっている。自らの知識的な充足感と、社会的承認としての矜持的な充足感とを満たすことが求められた。社会的地位の高まった俳諧師の存在と、二条家から追号されて俳諧の宗匠となる「芭蕉」、京都吉田神社から神号の贈られた「芭蕉」、これらは新しい俳諧人口の後ろ盾として、はなはだ有効であったろう。

淀藩士連中の俳諧は、京俳壇で隆盛であった高点付句から蕉風へと展開した。いずれにしても「芭蕉」の俳諧は底流しており、これらは芭蕉顕彰俳諧の一態様であるといえる。

図版出典一覧

〔通番〕	〔章－節〕	〔名称・備考〕	〔畑家資料番号等〕
1	表紙	竹楼・吟風一幅	畑家蔵
2	はじめに	天保十五年稲葉正誼書簡写し	1-13-20
3	第一章第一節	赫水　戊午年始状	1-39-30
4		赫水　辛酉年始状	1-39-31
5		赫水　吟風追善句	1-39-2-6
6		掬水「枯るゝほど」短冊	畑家蔵屏風
7		掬水「澄わたる」短冊	畑家蔵屏風
8		掬水　吟風追悼文	1-39-2-7
9		其友「時雨会や」短冊	畑家蔵屏風
10		軽舟『百梅集』	糸井文庫
11		軽舟「子春」年始摺物	2-17-22
12		雪川『百梅集』	糸井文庫
13		大之「あらさびし」短冊	2-23-8-9
14		南窓「一雫」短冊	2-23-8-17
15		南窓「東山」短冊	2-23-8-18
16		三千丸「野に山に」短冊	2-23-8-8
17		三千丸「啼かけて」短冊	畑家蔵屏風
18		友之「勇ましき」短冊	畑家蔵屏風
19		和六「船引の」短冊	2-23-8-11
20		和六「一木の」短冊	2-23-8-12a
21		和六「温石を」短冊	畑家蔵屏風
22		和六「吹きつて」短冊	畑家蔵屏風
23		和六「ひと曇り」短冊	畑家蔵屏風
24	第一章第二節	竹楼墓	竹内千代子撮影
25		竹楼・吟風一幅	畑家蔵
26		吟風墓	竹内千代子撮影
27		吟風短冊―軽舟居士追悼―	2-23-8-2
28		吟風短冊―南窓翁墓参―	2-22-4
29		吟風『百梅集』	糸井文庫
30		吟風万籟往復書簡	1-12-56
31		蓑虫庵吟風宛支雪書簡	1-39-1-1
32		吟風自摺　安政三年春興	2-17-34-1
33		淀俳人之像	1-39-12
34		吟風「霜梅」和歌短冊	2-22-1
35	第一章第三節	支雪墓	竹内千代子撮影
36		支雪「まちかねし」短冊	2-23-8-6
37		支雪「日は日とて」短冊	畑家蔵屏風
38		支雪「はら〳〵と」短冊	2-23-8-7
39	第一章第四節	鳳水墓	竹内千代子撮影
40	第一章第五節	雲峰墓	竹内千代子撮影
	第一章第六節		
41		資料A　赤水点帖「抜章」	2-7
42		資料B　吟風・赤水宛蒼虬書簡	1-5-8
43		資料C　赤水発句「大方の」他	1-39-10
44		資料D　赤水発句「咲ながら」他	1-39-11
45		資料E　赤水「松は松」短冊	
		―上池楼の蕉翁像みの虫庵に遷座―	2-23-8-5
46		資料F　赤水「かくまでに」短冊	2-23-8-51
47		資料G　赤水「枯かぬる」短冊	畑家蔵屏風

48 第二章第一節 「六々行」歌仙一巻印譜 2-18
49 『俳諧伝書記聞』（表紙） 2-15
50 資料Ⅰ 「六々行」歌仙一巻 2-18
51 第二章第二節 振り鬮札 畑家蔵
52 淀城周辺図
53 資料Ⅱ 「廻状」 1-39-23
54 資料Ⅲ 天保四癸巳 春興 ―「廻状」を受けての春興― 1-39-14
55 資料Ⅳ 淀藩中 夏興（天保五年推定） 1-39-20
56 資料Ⅴ 文政七年月々発句合奉額写 2-27
57 資料Ⅵ 松川龍椿画一枚摺 2-11-2
58 資料Ⅶ 秀句採点表 2-29
59 第二章第三節 文政 八年 霜月俳諧の連歌 2-16-3
60 第二章第四節 文政一一年 竹楼追善俳諧の連歌 2-16-2
61 第二章第五節 文政一二年 於島崎御茶屋俳諧の連歌 2-16-1
62 第二章第六節 安政 五年 芭蕉忌俳諧の連歌 ―芭蕉発句の脇起歌仙― 2-16-4
63 第三章第一節 吐鳳『除元集』（寛政八）抄録 2-2
64 第三章第二節 俳仙堂月並摺物（蕪骨） 2-26
65 天保六年俳仙堂月並 朝陽（蔦雨） 2-17-19
66 第三章第三節 朝陽書簡「口演」―芭蕉堂相続― 1-87
67 蒼虬書簡「覚」―花供養料― 1-5-12
68 第三章第四節 杜鵞書簡A ―例の『年毎集』加入― 1-53-8
69 杜鵞書簡B ―『年毎集』加入― 1-53-9
70 第三章第五節 万籟書簡A ―北野奉額― 1-137-10
71 万籟書簡B（北鵠代筆） 1-139-2

72 天保一四年『花供養』ちらし 糸井文庫
73 北鵠書簡C ―『逐々集』加入― 1-38-27
74 資料一 狗追う画一枚摺 2-11-1
75 横山清暉画一枚摺 2-12
76 資料二 俳諧交友録「雪」 1-72-1
77 俳諧交友録「月」 1-72-2
78 俳諧交友録「焦夢」他 1-72-3
79 俳諧交友録「舟柴」他 1-72-4
80 俳諧交友録「近在発句師」 1-72-5
81 俳諧交友録「花屋庵」他 1-39-6
82 第四章第一節 正月廿六日付吟風宛支雪書簡 ―蕉翁像預かり― 1-39-1-3
83 西川翁「芭蕉神号」短冊 2-23-8-13
84 第四章第二節 吟風兼題「みのむし」印 2-17-8
85 「蓑虫庵」印 畑家蔵
86 西川「おし気なく」短冊 2-23-8-14
87 未来記他（表紙） 1-34
88 吟風自作の矢立細工と芭蕉像 畑家蔵
89 芭蕉堂蔵芭蕉像箱書き写し 1-112-3
90 芭蕉堂蔵芭蕉像箱書き 芭蕉堂蔵
91 杜鵞書簡 ―義仲寺法事のこと― 1-53-10
92 義仲寺時雨会奉納句（抄） 1-5-19
93 五月六日付吟風宛一肖書簡 1-47-2
94 江戸座宗匠出吟 ―鳳朗との対面― 1-138-6
95 裏表紙 淀俳人之像 1-39-12

付記

一　本冊は、科学研究費助成事業・基盤研究（C）「近世後期京都の芭蕉顕彰俳諧の研究」（課題番号 20K00353）の成果の一部である。

一　立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 国際共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際研究拠点」 共同研究課題「花供養と近世後期京都俳諧の研究」（代表：竹内千代子）の一部である。なお、成果の一部はWEB公開中である。
URL：https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/hanakuyo/index.html

一　資料調査にあたっては、高福寺、東運寺、妙教寺、故松井遠妙氏、伊藤太氏、田崎英男氏、舞鶴市郷土資料館糸井文庫のご高配を得ました。記して深謝申し上げます。

一　畑忠良家俳諧資料は、長岡京市生涯学習課において、畑家文書を読む会編「畑家俳諧文書目録」と写真撮影資料とが閲覧できる。この目録等の作成は、長岡京市生涯学習課、畑家文書を読む会の佐藤兼司氏、片山秀雄氏、吉村純男氏をはじめとした会員諸氏の協力のもとに完成しました。記して感謝申し上げます。

一　本冊を成すにあたっては、資料所蔵者である畑忠良氏の学恩を賜りました。記して御礼申し上げます。

淀藩士連中と芭蕉顕彰俳諧考
――畑吟風俳諧資料と京俳壇――

発行日　令和四年二月一日
編・著　竹内千代子（立命館大学（非）講師）
印　刷　株式会社 昭英社
〒六〇〇―八二一九
京都市下京区五条通河原町西入本塩竈町五五八
電話　〇七五―三五一―一八一一

淀俳人之像
鼻の高い立派なお下手

俳諧の事

一 まけおしみがつよく

一 しらぬといふが心外

一 習ふ事はきらい

一 ついに俳諧した事なく

一 一廉しつた気で

一 我流で一句も役たゝず

一 なんにもしらず口をきゝ

一 一生涯しらず仕廻

一 つぶて発句計りして

一 天狗に直に成鼻を臨〳〵高くし

一 昔よりの上手の腹もさぐらず

一 風流の道に疎く

一 俳諧の事はちよつともしらず

一 証文の出しそゝくれ今更

習ふ事はづかしく

表　紙：畑家蔵 竹楼・吟風一幅
裏表紙：畑家蔵 淀俳人之像